OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒンディー語の重層的統語構造
Author(s)	西岡, 美樹
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3187665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博士論文（2000年度）

ヒンディー語の重層的統語構造

大阪外国語大学大学院言語社会研究科
言語社会専攻

西岡美樹

①

博士論文

ヒンディー語の重層的統語構造

言語社会研究科　言語社会専攻

西岡　美樹

2000年12月

謝　辞

本論文を執筆するにあたり、以下の先生方には多大の御指導と御支援を賜った。ここに記し、感謝の意を述べたい。

主指導教官の溝上富夫先生には、ヒンディー語ならびに南アジア諸言語について御教示いただいた。

副指導教官の近藤達夫先生には、言語学の御指導をいただいた。

副指導教官の高橋明先生には、ヒンディー語の御指導をいただいた。

外国人教師の Dr. Arun Chaturvedi には、ネイティブ・スピーカーとして、ヒンディー語の御指導をいただいた。

また、昨年度定年退官を迎えられた、大阪外国語大学名誉教授である古賀勝郎先生には、長きにわたり、現代ヒンディー語および中期ヒンディー語について御教授いただいた。同じく、昨年度で任期を終えられた前外国人教師である Dr. Ashwani Kumar Srivastava にも、博士後期課程の２年間、ヒンディー語の御教示と共に、様々な言語資料も提供していただいた。この他、歴代の外国人教師の先生方にも、ヒンディー語に関し大変御世話になった。ここに、改めて感謝申し上げる次第である。

本論文は、諸先生方の御訓導によりに完成に至ったものである。御訓導を活かすよう努めたつもりであるが、不備，誤り等があれば、その責任は、一切、筆者に帰するものである。

ヒンディー語転写法
(The Transliteration of Characters in Hindi)

以下に、ヒンディー語の文字であるデーヴァナーガリー文字（*Devanāgarī*）の転写法を記す。母音については、母音単独の文字と、子音に結合する際の文字を挙げておく。また、子音の文字には、デフォルトの母音 [a] を含むものとする。子音の２列目と４列目にみられる/h/は、有気音 [ʰ] を指す。

母音													
अ	a	इ	ि	i	उ	ु	u	ऋ	ृ	r̥	ए	े	e	ओ	ो	o
आ	ा	ā	ई	ी	ī	ऊ	ू	ū	ॠ	ॄ	r̥̄	ऐ	ै	ai	औ	ौ	au

子音												
क	ka	ख	kha	ग	ga	घ	gha	ङ	ṅa
च	ca	छ	cha	ज	ja	झ	jha	ञ	ña
ट	ṭa	ठ	ṭha	ड	ḍa	ढ	ḍha	ण	ṇa
त	ta	थ	tha	द	da	ध	dha	न	na
प	pa	फ	pha	ब	ba	भ	bha	म	ma

半母音								歯擦音						気息音	
य	ya	र	ra	ल	la	व	va[1]	श	śa	ष	ṣa	स	sa	ह	ha

区別符号				
アヌスヴァーラ		チャンドラビンドゥ		ヴィサルガ
ं	ṃ[2]	ँ	m̐[3]	ः ḥ

補足子音															
क़	qa	ख़	xa	ग़	ga[4]	ज़	za	ड़	ṛa	ढ़	ṛha	फ़	fa

[1] これは、しばしば/w/ [w] になる。本論では、一貫して/v/と表記する。

[2] この符号は、上記『子音』の最後列にある鼻子音 ' ṅ, ñ, ṇ, n, m ' を包括するものである。また、これは鼻母音の符号も兼ねることもあるが、それは、鼻母音自体が母音＋鼻子音で構成されているためである。本論文では、音声学的に鼻母音であっても、正書法に則り、この鼻子音符号を使用することを断っておく。

[3] この符号は、鼻母音を表わす。(例：ā, ī, ū, ū̃)

[4] この補足子音については、ヒンディー語では、通常の子音 ' g ' と同じ発音になることが多いので、本論文では区別しない。

ヒンディー語の翻字形態

本論文における、文字表記と発音が一致しないものについての、転写の際の取り決めを、以下に記す。

I 「語末の -a について」

◎ 転写の際、CV#／CCV#／CCCV# の時、語末の母音 -a は、発音上、落ちるので転写しない。

◎ 子音要素を持つ ‘ -ya ’, ‘ -v(w)a ’ 等の半母音も同様に、語末の母音’ -a ’ は転写しない。（例：manuṣya = manuṣy , rāṣṭrīya = rāṣṭrīy）

1. 二音節語

＃ C V C V ＃ 型［第一母音が短母音］

（例：dama → dam, phira → phir, dhuna → dhun, ṛiṇa → ṛiṇ
taya → tay, śiva → śiv）

＃ C V: C V ＃ 型［第一母音が長母音］

（例：kāma → kām
khīra → khīr
dhūma → dhūm
meza → mez, caina → cain
moha → moh, mauna → maun
rāya → rāy, jīva → jīv）

2. 三音節語

＃ C V C V C V ＃ 型［第一母音が短母音］

・短母音から成る三音節語で、語末が -a の場合、#CVCVCV# から #CVCVC# になる。なお、第二音節も -a- の場合、第二母音にアクセントが来るので、第二音節の -a- は保持される。

（例：kamala → kamal ［kɑmál］
śahara → śahar ［ʃɜhǽr］
samaya → samay ［sɑmáɪ］）

・第二子音に -h- が入ると、第一，第二母音が変化する。

＃ C V: C V C V ＃ 型［第一母音が長母音］

（例：pāvana → pāvan ［pá:van］）

＃ C V C V: C V ＃ 型［第二母音が長母音］

（例：kamāla → kamāl ［kʌmá:l］）

Ⅱ 「語末が長母音の際の語中の -a- について」

1. 二音節語

＃ C V C V: ＃ 型

・ 語末が長母音の二音節語 #CVCV:# の場合、第一音節の -a はシュワーにはならない。

（例：bhalā → bhalā，baje → baje）

2. 三音節語

＃ C V C V C V: ＃ 型

・ この場合は、第二音節がシュワーになるので -a が欠落する。

（例：pichalā→ pichlā，pahalā→ pahlā）

＃ C V: C V C V: ＃ 型

・ この場合も、第二音節がシュワーになるので -a が欠落する。

（例：nevalā→ nevlā，kāmanā→ kāmnā）

なお、慣用的にインド式ローマ字転写法によって転写される固有名詞等については、そのまま記述する。

略号

英語

Ablative	=	Abl
Absolutive	=	Abs
Accusative	=	Acc
Adjective	=	A
Adverbial Phrase / Equivalent	=	Ad
Comment	=	C
Copula	=	Cop
Dative	=	Dat
Ergative	=	Erg
Infinitive	=	Inf
Instrumental	=	Inst
Locative	=	Loc
Locative Postposition/Preposition	=	LPp
Negative	=	Neg
Nominative	=	Nom
Noun	=	N
Object	=	O
Oblique	=	Obl
Postposition/Preposition	=	Pp
Predicate Adjective	=	PredA
Predicate Noun	=	PredN
Subject	=	S
Theme	=	T
Verb	=	V

日本語

仮定法	=	仮
完了分詞	=	完了
斜格形	=	斜
同格接続詞	=	同格詞
複数形	=	複
不定詞	=	不定
未完了分詞	=	未完了
命令法	=	命令
与格	=	与

～～ ～～ ～～ ～～ 目 次 ～～ ～～ ～～ ～～

謝 辞 i

転 写 法 ii

翻字形態 iii

略 語 v

序 論 ヒンディー語 — 伝統文法から言語学的分析へ — 1

第1章 分析の前提 6

1.1 品詞 6

1.1.1 名詞 7

1.1.1.1 代名詞 9

1.1.1.1.1 人称代名詞 10

1.1.1.1.2 不定代名詞 11

1.1.1.1.3 疑問代名詞・指示代名詞・関係詞 13

1.1.1.1.4 数量代名詞 15

1.1.1.1.4.1 基数詞と序数詞 15

1.1.1.1.4.2 集合数詞 16

1.1.2 形容詞 16

1.1.3 動詞 17

1.1.3.1 自動詞，他動詞の定義と類型 17

1.1.3.2 ヒンディー語の動詞体系および時制・相・法 21

1.1.4 後置詞 24

1.1.5 接続詞 25

1.2 ヒンディー語の構造的特徴 26

1.2.1 語順 26

1.2.2 文法関係と格標示 27

1.3 核と演算子 31

第2章 単文構造 40

2.1 名詞述語文 40
2.2 形容詞述語文 43
2.3 動詞述語文 44
2.3.1 自動詞 45
2.3.2 他動詞 52
第3章 名詞修飾構造 57
3.1 名詞句の統語構造的類型 58
3.1.1 代名詞＋名詞 58
3.1.2 名詞＋名詞 58
3.1.2.1 二語並列型 59
3.1.2.2 ハイフネーション型 59
3.1.2.3 一体型 60
3.1.3 名詞（Dependent）＋ 後置詞 ＋ 名詞（Head） 60
3.1.3.1 名詞 ＋ 属格後置詞 ＋ 普通名詞 60
3.1.3.2 名詞 ＋ 属格後置詞 ＋ 動詞派生名詞 62
3.1.3.3 名詞 ＋ 属格後置詞 ＋ 後置詞句 ＋ 動詞派生名詞 63
3.1.3.4 後置詞句 ＋ 属格後置詞 ＋ 名詞 64
3.1.3.5 後置詞句 ＋ 名詞 65
3.1.4 形容詞＋名詞 69
3.1.5 分詞（非定形）＋名詞 69
3.1.6 不定詞（非定形）＋属格後置詞＋名詞 71
3.1.7 関係詞節型 72
3.1.8 同格接続詞節型 74
3.2 名詞句の統語構造分析 75
3.2.1 前置修飾型 75
3.2.2 後置修飾句 84
3.3 名詞修飾構造における重層性 89
第4章 複文構造 91
4.1 定形節型（TYPE I） 91

4.1.1 等位接続構造 91
4.1.2 従属接続構造 93
4.1.3 同格節派生構造 95
4.1.3.1 主語節型 95
4.1.3.2 述語名詞節型 96
4.1.3.3 目的語節型 97
4.2 非定形節型（TYPE II） 98
4.2.1 主語節型 100
4.2.2 述語名詞節型 103
4.2.3 目的語節型 103
4.2.4 斜格語節型 104
第5章 述語複合（1）—— 名詞編 —— 114
5.1 名詞編入型 115
5.1.1 半名詞編入型（＝『数学の勉強をする』型） 116
5.1.2 名詞編入型（＝『数学を勉強する』型） 122
5.2 述語複合型 129
第6章 述語複合（2）—— 形容詞編 —— 136
6.1 動詞＋形容詞型（述語複合型） 136
6.2 形容詞＋動詞型「する，やる，なる」（述語複合型） 143
第7章 述語複合（3）—— 動詞編 —— 153
7.1 複合動詞 156
7.2 動詞複合（述語複合型） 158
7.2.1 動詞複合の類型 158
7.2.2 語幹＋接辞 161
7.2.3 語幹＋本動詞 162
7.2.4 不定詞＋本動詞 193
7.2.5 未完了分詞＋本動詞 201
7.2.6 完了分詞＋本動詞 209
7.2.7 語幹 ‘ -kar ’＋本動詞 223

第8章　使役構文 236
8.1 接辞型使役構文 236
8.1.1 自動詞 236
8.1.2 他動詞 239
8.2 動詞複合型使役構文 249
第9章　談話機能に関わる文法要素 255
9.1 ヒンディー語における談話機能を持つ語群 255
9.2 ヒンディー語の‘ hī’, ‘ bhī’, ‘ to’および‘ tak’ 256
9.2.1 談話機能の用例観察 256
9.2.1.1 語レベルでの付加 256
9.2.1.2 句レベルでの付加 259
9.2.1.3 節レベルでの付加 261
9.2.1.4 文レベルでの付加 261
9.2.2 統語構造からみた小詞の付加範囲 262
9.3 与格後置詞‘ ko’の談話機能 263
9.3.1 談話機能的な側面の定説および私見 263
9.3.2 用例の観察と分析 265
9.3.2.1 与格名詞句 265
9.3.2.2 与格構文 266
9.3.2.3 目的語につく‘ ko’ 268
9.3.2.4 主語に付く‘ ko’ 270
9.3.2.5 斜格名詞句における‘ ko’ 272
9.3.3 考察 276
9.3.4 提言 281
第10章　ヒンディー語構造の重層性 282
結　論　まとめ 291
引用文献 296
参考文献 297

ヒンディー語の重層的統語構造

序　論　ヒンディー語　―　伝統文法から言語学的分析へ　―

Hindi というインドを代表するヒンディー語は、日本語では、しばしば、ヒンズー語もしくはインド語と呼ばれる。前者は Hindu というヒンズー教徒もしくはインド人からの流用だが、実際の発音は［hindu:］であり［hindzu: / hinzu:］ではない。現在でもヒンズー語と呼ばれることがあるが、正しくは、言葉の場合は Hindi［hindi:］であり、ヒンディー、もしくは（言葉であることを明確にして）ヒンディー語となる。後者のインド語というのは、なんとも曖昧な言葉である。というのは、インドには言語があまたあるからである。公用語も以前の 16 から 18 に増えており、その中には、英国統治時代の名残で、以前から英語も含まれているのである。したがって、インド語といえばどれを指すか不明確になるのである。

公用語がいくつもあるインドであるが、別に一国に系統の全く違う言語がひしめき合っているわけではない。日本に置き換えてみれば、東京弁，関西弁，鹿児島弁，琉球弁，東北弁などの方言が、一国内に一言語として独立して存在するようなものである。日本語の方言に関しては、弁というだけあって話し言葉での差に限られる。書き言葉の方は、幸いなことに、現在では教育が統一され、標準日本語を共通語としており、今では出身が違うと意志疎通ができない、もしくは意志疎通しにくいということはない。一方のインドは、各々の言葉が専用の文字を持っていたり、文学作品を持っていることから話し言葉にとどまらず、独立した一言語として昇格し易い傾向にある。

ただし、これは言語そのものの持つ要素であり、インドに公用語がたくさんあり、なお増える傾向にあるのは、これとは別に人種・宗教・政治等の要素が複雑に絡み合っているためである。このような特殊な要素が絡み合った言語事情を背景にしているので、ヒンディー語自体、公用語の１つであっても、国語としての地位を与えられているものではない。しかし、ヒンディー語は、まぎれもなく北インドのリンガ・フランカであり、昨今の映像メディアの普及も手伝って、現在では、及ぼす影響はインド全域にわたるものと考えられる。実際、人口比率からみれば、話者の総数が世界第三位を誇る言語に数えられるぐらいである。

このように、話者総数が世界的にも多いヒンディー語は、インドの国語ではないにしても、北インドのみならず、ほぼインド全域で通じる共通語としての地位があるわけである。しかし、日本語の共通語である標準日本語のように、標準ヒンディー語を統一して教育し

ていないこともあり、一言でヒンディー語といっても指し示す実体は様々である。狭義では、首都のデリー周辺で話されているカリー・ボーリー方言が母体となったものを指す。広義には、周辺の方言も含む。デカン高原を中心に、以北の地域がヒンディー語圏であるが、東部ヒンディー語方言（Awadhī, Baghelī, Chattīsgaṛhī 等。総称：Pūrvī Hiṃdī），西部ヒンディー語方言（Braj bhāṣā, Kannaujī, Buṃdelī 等。総称：Paścimī Hiṃdī），南部ヒンディー語方言（総称：Dakkhiṇī Hiṃdī），北部（高地）ヒンディー語方言（総称：Pahāṛī）の他、南西部のラージャスターン州で話される諸方言（Jaypurī, Mārwāṛī 等。総称：Rājasthānī），反対の南東部のビハール州で話される諸方言（Bhojpurī, Maithilī 等。総称：Bihārī）等が含まれる。これらの中にも、実際は方言レベルのものから、一言語としてみることのできるものと様々である。また、元々同じ言語から枝分かれしたその他の言語とも言語接触をし、ピジンと化すものまで現われている。

このように、地域的には広い使用域を持つヒンディー語ではあるが、それだけバリエーションも豊富であり、その中で、国語としての地位がない標準語の（狭義の）ヒンディー語は、規範文法を記述することを第一義とする傾向にあり、インド本国の文法家である Kāmtāprasād Guru, Kiśorīdās Vājpeyī による文法書は、伝統文法の流れを汲んだ規範文法の側面が強く、他の文法書も、『標準ヒンディー語』,『理想的なヒンディー語』,『正しいヒンディー語』という名で、半ば教育的配慮の上に書かれたものが多い。しかし、これは我々の国語文法によく似たものであり、母語話者を対象にした書かれ方をしている。例えば、日本語では口語において「して・いる」を縮約して「してる」というが、正式には「している」であるという説明が上記の規範文法の呈するものである。さらに、これらに対し進行や完了を表わすという説明がなされると、母語として使い勝手を知っている者にとっては、その使い方を確固たるものにするだけなので問題ない。では、母語としない者に対してはどうか。例えば、日本語の動詞の『て』形＋「いる」が進行もしくは完了の意味を表わすという具合に、セットでおぼえてしまうとしよう。言語能力を高める、すなわち読解する場合には、これで何も問題はない。その動詞複合形式を元に、進行や完了の意味に訳せばよいからである。問題は、言語運用能力を高める、すなわちその語を使って文を生成する場合である。それぞれがセットになると、あるいは共通項があるものも、個々の語の持つ本来の意味は無視され、抽象的な進行・完了という概念を指標にして文を作り出す可能性が高くなる。例えば、英語の進行形 'be + ～ing' および受身 'be + p.p.' は、$\chi+\alpha$，$\chi+\beta$ と論理的に置き換えて考えてみる。実際、意味がそれぞれ違うのは、α（未

完了）およびβ（完了）の作用によるもので、共通項のχではない。この共通項χは単に存在を表わしているだけである。χ+αは、未完了の状態にいることが転じて進行の意味に使用されているのであって、χ+αだから進行の意になるのではない[1] のだが、これをセットにした形式だけをおぼえやすいため、語に当たるχ，α，βの個々の本来の意味がなおざりになるわけである。

母語ならば、これらの論理構造を無意識で習得しているので、(故意の場合は除いて) 使い誤ることはない。しかし、母語としない者にとっては、まずは、語の持つ本来の意味を理解した上で、論理形式を明確にし、そこから生成される意味に至るまでを理解する必要があるのである。

もちろん、規範文法の中にも、教育的配慮に関係なく、記述文法として書かれているものもある。現代ヒンディー語を文法書としてまとめたS.H.Kellog（1875）の *Grammar of Hindi Language* がそれである。外国人によるものなので、かなり客観的記述になっているのだが、やはり、言語を線状に捉えたもので、サンスクリット文法を母体にした伝統文法の区分けを軸にし、語の並びによる一次元で記述したものとなっている。したがって、背後にある論理という奥行きを持った二次元，三次元の深さには至らない。その理由は、先も述べたように、母語であればこれらはすでに取得済みのものであり、敢えて意識化する必要はない。また、言語能力に重点を置いた外国語学習の言語記述ならば、そもそも二次元，三次元の軸、つまり論理規則という奥行きは必要とされないのである。

従来の構造言語学においては、文法は記号（語）の体系であるとされていた。つまり、語の形態に着目したものであり、単語の列により線を成す統語論に止まる一次元的なものである。後にこの構造言語学に対峙したN.Chomskyは、文法は言語能力を記述し、それは規則の体系であると唱えている。言語を表層構造(Surface Structure)と深層構造(Deep Structure）に分け、奥行きをみようとしたわけである。コンピュータを例に取ると、表層がソフト・ウェアであり、深層が背後で表層の事物を動かすプログラミング言語であるともいえよう。筆者が意図する論理形式（層）もまた、語を動かすためのプログラミング言語に近いものと考えていただきたい。

本論文は、このプログラミング言語にも似た論理形式の層を解明しながら、ヒンディー語の文法を客観的に記述することを試みたものである。ここでは「層」がテーマになるが、

---

[1] 現に、英語の親類語に当たるドイツ語には、進行を表わす動詞の複合形式はなく、進行の意に対しても現在単純形を使用する。ドイツ人は英語が達者だといわれるが、この複合形に対しては、よく間違うようである。

先の表層・深層の「層」と全く同じではない。実際、この「層」という言葉は、分野を問わず多岐にわたって使用されているものである。元々この言葉自体第一義で『重なること。重なり。』を表わすが、これに対応する英語をみると、‘ layer, stratum ’の二語がある。後者の‘ stratum ’は、日本語で言えば地質学で用いられる「地層」を指すものであり、前者の‘ layer ’（＜‘ lay ’）が、「積み，重ね」という多岐にわたって使用可能な一般的語彙である。

先の N.Chomsky を開祖とする変形生成文法の中でも、統語構造を表層構造，深層構造の２つに分け、構造の分析対象にしてきている。しかしながら、層という用語は日本語訳に際して、表層・深層構造を二項対立的に捉えた場合に、「表」と「深」が階層的に位置するものと捉えられた結果、発生した層という対立概念である。実際、表層に充てられている‘ surface ’は表面という意味で使用される。この「表面」に対し、「深面」という対語が日本語にはない。つまり、これは、‘ layer, stratum ’を訳したものではなく、概念流用である。

このように、ヒエラルキーの関係にあるものを「重層（的）」と呼ぶことが多いが、言語に対してこれを当てはめやすいのは、歴史的な言語変化を研究する通時研究である。歴史的に変化してきた言語の音韻や形態を堆積してきた地層にならい模したものとして考えることができる。

共時研究ではどうか。地域言語学においては、C.Masica（1991）が、この『層』(layer) という言葉をすでに使用している。氏は、南アジアの諸言語において格標示に使用される３つの形態、屈折語尾，後置詞，さらには後置詞と他の語の複合形をそれぞれ、Layer Ⅰ，LayerⅡ，LayerⅢという区分けをしている。つまり、氏は、形態レベルで、南アジアの諸言語の中でみられる格標示の層を示しているのである。押し広げていうならば、形態という層においてさらに層が細分化されているわけである。

本論文では、語を操作する論理形式という層に焦点を当てて、一見、語のストリングにもみえる統語構造を分析し、機能（文法関係）の重層性を解明していく。第１章で、品詞を定義し、ヒンディー語の構造的な特徴を捉えながら、分析に必要な概念および単文のパターンを設定する。第２章から具体的な例を挙げながら、単文，名詞修飾構造，複文の順に統語構造を観察していく。

ここまでが、本論文における前半である。以下後半では、動詞を大きく取り上げ、第５章，第６章，第７章では、述語複合についてその統語構造および文法関係の重層性を観察・

分析する。また、第８章では、接辞を持つヒンディー語の使役と、同じく使役の接辞を持つ日本語の使役を、統語構造分析に基づき、論理展開の共通性を探る。次の第９章では、前章までの文文法の枠を越え、談話文法に関連する文要素が成す談話層について、ヒンディー語の談話文法要素を挙げながら、特に話題となる与格後置詞のことについて議論する。第 10 章では、総論として、本論文の最大のテーマである統語構造の重層性について、観察された層を具体的に述べる。

なお、本論文では、例文および脚注を論文全体で通し番号にせず、章ごとに打ってある。各例文を参照の際は、章を明記することにする。

第１章　分析の前提

1.1　品詞

単文を作る際、すなわち命題を叙述する際に必要とする品詞の枠組みを設定する。名詞，形容詞，動詞，後置詞，接続詞がそれである。このうち、名詞，形容詞，動詞は文にはならなくても、各々が独立した意味を持ち合わせている語であり、単体で表現できるので、自由形式となる。この３つが文生成の必要条件となる要素である。

後置詞（語順類型によっては前置詞）は、膠着要素の強い言語に見られる品詞である。これは、通常、格標示という文法機能を負っており、名詞に付加され名詞句を成してはじめて表現できるので、拘束形式である。日本語では格助詞，副助詞がこれに相当する。接続詞は、語と語，句と句，文と文を並列関係もしくは従属関係の元に置き、互いをつなぐものである。語，句，文を複合するものなので、単文生成には必ずしも必要としないが、語や句を、手間を省きコンパクトに言いまとめるためや、複文を構成する際に必要となる。日本語には、接続助詞がある。

ところで、自由形式の名詞，形容詞，動詞には、下位範疇化できる品詞がある。名詞については人称代名詞や疑問代名詞などの代名詞である。これは文字通り名詞に代替される要素である。動詞には助動詞という、動詞なしでは表現できない半ば拘束形式化した品詞がある。

一般に普及している副詞という品詞があるが、これらの構成成分は、往々にして名詞や形容詞を核にし、後置詞か形態素である接辞を付加するものである。場合によっては、後置詞がゼロになることもある。すなわち、副詞というのは、上記の品詞のように実体が明らかなものではなく、語と語もしくは形態素を組み合わせたもので、文をオプションとして修飾する修飾語もしくは修飾句のことを指している。

名詞	＞	代名詞（人称代名詞，不定代名詞，疑問代名詞，数量代名詞など） 副詞　（名詞＋後置詞，名詞＋ゼロ後置詞，名詞＋接辞）
形容詞	＞	副詞　（形容詞＋接辞，形容詞の斜格形，形容詞の直格形）
動詞	＞	助動詞 副詞　（未完了分詞，完了分詞の斜格形）

例えば、「ところで」という場合、「ところ」は名詞でそれに格助詞である「で」が付いて修飾句を形成する。ヒンディー語も同じように‘ āzādī se ’「自由に」という場合、

名詞 ‘ āzādī ’「自由」に後置詞 ‘ se ’ を付加した形で修飾する。和語の「ゆっくり」も「ゆっくりする」,「ゆっくり行く」のように動詞を修飾するということで副詞と考えられるが、「ゆっくりでいいね。」,「ゆっくりにしたら。」のように「で」や「に」の格助詞を伴うので、本来名詞であり、格助詞がゼロの場合、「ゆっくり」という形で、修飾語的に使用されるのである。このように、いわゆる副詞と呼ばれるものは、形態・統語の点からみれば、語に別の文法要素が付加されるか、語自体が屈折しているかのどちらかで、文全体においてはオプションの修飾語もしくは修飾句を形成する。したがって、本論文では語として確立した品詞とは認定せず、それぞれの品詞の枠組み内で処理する。

実際、下位範疇にある品詞は言語によりさまざまである。本論文では、必要に応じて当言語と日本語との対照分析も行う。そのため、各言語に特有の品詞は折に触れ設定する。

では、次節から、本論文で扱う言語の品詞を概観する。

1.1.1 名詞

以下に、単独名詞を表にして挙げる。

直格形

	単数	複数
男性名詞	bāl : [髪 ; 単数]	bāl : [髪 ; 複数]
	beṭā : [息子 ; 単数]	beṭe : [息子 ; 複数]
		prāṇ : [命 ; 複数扱い]
女性名詞	pustak : [本 ; 単数]	pustakeṃ : [本 ; 複数]
	beṭī : [娘 ; 単数]	beṭiyāṁ : [娘 ; 複数]

ヒンディー語には名詞に性と数の区別がある。しかしながら、性の形態上の区別は大体のものはあっても、ロシア語などにみられる語末音韻は性区別の弁別素性にはならない。語彙の出自について言及すると、ヒンディー語における語彙の出自の系統は、大まかに２つに分かれる。１つはヒンディー語の祖語に当たるサンスクリット系と、もう１つは歴史的な背景により入ってきたペルシャ語やアラビア語からの外来語系である。それぞれ、別の文法体系を持った言語の語彙が入り乱れた結果、語末音韻という単純な手がかりでは収

拾がつかなくなったものと推察される。[1]

数の形態上の区別は、語尾屈折もしくは複数の接尾辞付加でその違いを明らかにする。形態上の区別のない男性名詞で子音語尾の‘ bāl ’「髪」、語尾屈折を起こす男性名詞‘ -ā ’語尾の‘ beṭā ’「息子」、そして、女性名詞の‘ -ī ’語尾の場合とそれ以外の語尾の接辞パターンを代表例として挙げてある。また、名詞全体の数としては若干であるが、常に複数扱いされるものとして男性名詞‘ prāṇ ’「命」を例に挙げた。

なお、定性（definiteness）・不定性（indefiniteness）については、ヒンディー語では、シンハラ語のようにそれらを示す接辞付加はなく、また英語のような定冠詞・不定冠詞もない。名詞自体が同時に漠然とした不定性を具現しているのである。

また、昨今、性を持たない英語から語彙を輸入することが多くなっているヒンディー語では、その輸入した語の性を２つの条件により認定する。［Kailāścaṃdra Bhaṭiyā（1967）］１つは音韻によるものである。先にも若干述べたが、往々にして‘ -ī ’語尾の名詞は女性名詞であることが多いので、英語の‘ company ’, ‘ taxi ’, ‘ diary ’のように‘ -ī ’語尾で終わるものは、女性名詞として組み込まれる。もう１つの条件は意味である。語の所記（signifié）に相当する事物もしくは概念がヒンディー語内にも語彙として存在していれば、その語の性を継承する。例えば、‘ book ’, ‘ congress ’, ‘ speed ’などの語彙は、それらに当たる名詞‘ pustak / kitāb ’, ‘ sabhā ’, ‘ gati, raftār ’（すべて女性名詞）がヒンディー語に存在しているので、自動的に性を継承し、女性名詞として使用される。また、‘ -ing ’の付いた動名詞もまた、女性名詞とされる。［Vī. Rā. Jagannāthan（1981）］それに関連して、動詞の語幹がそのまま名詞になっているもの（‘ samajhnā ’「動詞：理解する」＞‘samajh ’「女性名詞：理解」, ‘ socnā ’「動詞：考える」＞‘soc ’「女性名詞：考え」, ‘ pakaṛnā ’「動詞：捕まえる」＞‘ pakaṛ ’「女性名詞:捕獲」など）の性を継承し、英語の動詞（‘ start ’, ‘ press ’, ‘ demand ’など）を名詞として使用する。

この２つの条件の優先順位は、場合に応じて入れ替わる。新しい語彙が入る時、概念が伴わない状態で音声や文字などの能記を先に受信すれば、音韻条件が先に適合されるのはいうまでもない。しかし、能記と所記が同時に認識された場合、ヒンディー語側の所記を

---

[1] この現象はちょうど日本語の大和ことばと漢語の区別が、ものによっては現代語では徐々にし難くなってきているのに似ている。また、語彙だけ輸入し、それに輸入相手の言葉の文法を適応し、独自の形態素を付加するようになると、出自は分かっていても、外来語という意識は薄まり、出自も知らない人は平気で自分のところの文法体系に組み込むため、さらに複雑化してしまったものと考えられる。

検索し、それに相当する能記の性その他の情報を継承し、ヒンディー語内に適応するのである。

もう1つ、形態の上で、大きな特徴がある。それは、直格（Direct Case, Dir）と斜格（Oblique Case, Obl）の区別である。これは、インド・ヨーロッパ語における、主格，呼格，対格とそれ以外の格（道具格，与格，奪格等）を区別する枠組みだが、ヒンディー語においては、どの格標示であれ、後置詞を付ける場合の形態と付けない場合の形態が違うだけなので、分かり易く後置詞格と呼んでもよいであろう。したがって、本論文では、必要な場合は斜格を後置詞格と読み替えることにする。参考までに、先の名詞を斜格、つまり後置詞格にしたものを以下に挙げる。例では後置詞には与格の‘ ko ’を使用する。

斜格形（後置詞格形）

	単数	複数
男性名詞	bāl ko：[髪；単数]	bāloṃ ko：[髪；複数]
	beṭe ko：[息子；単数]	beṭoṃ ko：[息子；複数]
		prāṇoṃ ko：[命；複数扱い]
女性名詞	pustak ko：[本；単数]	pustakoṃ ko：[本；複数]
	beṭī ko：[娘；単数]	beṭiyoṃ ko：[娘；複数]

表を見比べて分かるように、変化するのは、単数の場合、‘ -ā ’語尾の男性名詞のみで、残りは変化しない。[2] 例には挙げてないが、‘ -ā ’語尾の女性名詞も変化しない。複数の場合は、基本的に‘ -oṃ ’語尾を付加する。母音語尾のものは、語尾の母音を外して‘ -oṃ ’語尾を付加する。

1.1.1.1 代名詞

ここでは、名詞に代替される代名詞を概観する。代名詞の種類として人称，不定代名詞，疑問代名詞・指示代名詞・関係詞，数量代名詞を挙げる。数と定・不定の要素は、談話文

[2] 例外として親族名称の‘ -ā ’語尾で終わるもの（例：‘ dādā ’「父方の祖父」，‘ nānā ’「母方の祖父」）や‘ rājā ’「王様」は不変化である。‘ -ā ’語尾で終わる固有名詞も固定したものなので、変化させる必要はない。

法の視点から分析する際に必要になる要素なので、特に細分化して記述する。

1.1.1.1.1　人称代名詞

ヒンディー語の人称代名詞は、単数・複数の違いのみで、性による区別はない。実際の性の区別は基本的に動詞が負うが、それでも、動詞が他動詞になると過去形には能格性が働くので、未来形，現在形にしか明示されない。以下にヒンディー語の人称代名詞を挙げる。

直格型

	単数		複数	
1人称	maiṃ		ham	
2人称	tū		tum, āp	
3人称	(近称)	(遠称)	(近称)	(遠称)
	yah	vah	ye	ve

斜格型

	単数		複数	
1人称	mujh		ham	
2人称	tujh		tum(tumh), āp	
3人称	(近称)	(遠称)	(近称)	(遠称)
	is	us	in(inh)	un(unh)

まず、直格型について説明するが、2人称複数には、2つの語がある。‘ tum ’は「君」と日本語で呼べるような間柄の相手に使用し、‘ āp ’はそれほど親しくない相手に使用する。‘ tū ’は、‘ tum ’以上に親しい間柄の相手に使用される。また、その逆で相手をののしる時にも使用される。3人称は、発話者に近いところにいる第三者を近称の代名詞で、反対に発話者に遠いところにいる第三者を遠称の代名詞で使い分ける。これらの斜格形も表に挙げたが、一人称単数の場合、2つ存在する。基本的には、‘ mujh ’が斜格形であるが、能格の後置詞（1.1.4　後置詞を参照。）が付くときだけは、直格のままである。

ここで、使用法について若干説明する。ヒンディー語の1人称，2人称複数形を単数使用することがしばしばあり、それは、尊敬，丁寧等々の働きを持つものであるとされる。これにはいろいろな俗説もあるが、1人称の場合は、日本語でもたとえ自分が言う場合で

あっても、複数意識が働いた場合は、「わたしたち」や「われわれ」という具合に使用することは多々ある。

もっとも問題にされるのは２人称複数形の単数使用である。これは、インド・ヨーロッパ語族のラテン系，ゲルマン系，スラブ系の言語に見られ、通常、対象人物との心理的な距離が反映される。場合によってさまざまだが、迂言的に尊敬を表したり、丁寧さを表したりする。

ヒンディー語の３人称は、指示代名詞（後述）と一致する。日本語でも指示代名詞を人称代名詞として使用されているのが観察される。例えば「あれは昔から気の強い子であった。」がそうである。しかし、現代語としてはあまり使用されない。

	単数		複数	
１人称	わたし		わたしたち／わたしら	
２人称	あなた		あなたたち／あなたら	
３人称	男性	女性	男性	女性
	かれ	かのじょ	かれら かれたち	かのじょら かのじょたち

日本語は人称代名詞の多い言語といわれるが、ここではその中でも標準語とされるものを挙げている。複数は膠着語尾「ら／たち」である。ヒンディー語の３人称代名詞は指示代名詞と一致するが、日本語の指示代名詞「これ／それ／あれ」と人称代名詞「かれ／かのじょ」は、現代語では独立した語となっている。[3]

1.1.1.1.2　不定代名詞

次に、不定代名詞の例を挙げる。先に挙げた単独名詞の漠然性とは違い、さまざまな不定の意味合いを持った代名詞群である。代名詞も名詞と同じく斜格を持つが、まずはデフォルトの直格で例を挙げる。

---

[3] それでも語の出自としては相関性があるものと推察される。実際、古語では「あの人」を「かの人」と言っていた。音韻的には‘k’の脱落したものと考えられる。「かれ」＞「あれ」，「かのおんな」＞「かのじょ（彼女）」の公式は考えられる。その「かれ」が３人称・男性・単数を表すものとなり、指示代名詞機能を「あれ」に譲ったという仮説が成り立つ。

直格型

だれか，なにか	少し	たくさん
koī	kuch	bahut

ヒンディー語では、人に対する「だれか」と物に対する「なにか」は、同じ ‘ koī ’ という語で表わす。この代名詞の斜格形は ‘ kisī ’ である。次の欄の ‘ kuch ’ は、漠然とした少量もしくは少数を、それに対して多量もしくは多数を表わすのが、最後の欄に掲載した ‘ bahut ’ である。これらには、形容詞的に名詞を修飾する機能もある。代名詞の名詞修飾機能を持つものを、属格型とし、以下に掲載する。

属格型

どれかの	少しの	たくさんの	いくつかの
koī	kuch	bahut[4]	kaī

先の３つについては、直格型と形態が同じである。属格型の最終欄に挙げた ‘ kaī ’ は、不定の個数を意味する。これは代名詞としても使用されるが、‘ kaī log ’「数人」, ‘ kaī bār ’「数回」のように、名詞を修飾するが多いので、ここで掲載した。これ以外でも、ほぼ属格（すなわち形容詞的なもの）専用のものとして、‘ sab ’「すべての」や ‘ dūsrā / aur ’「別の（他の）」等もある。

このような属格機能を持つ代名詞を形容詞的に名詞に修飾させると、以下のようになる。名詞の例として、‘ pustak(eṃ) ’「本」を使用する。

〔単数〕

［何らかの］	［すべての］	［別の］	［どれかの］
koī pustak	har pustak	dūsrī pustak	koī ek pustak
	harek pustak	anya pustak	koī-sī pustak
	pratyek pustak	??anyatar pustak	??anyatam pustak

〔複数〕

koī pustakeṃ	sab pustakeṃ	dūsrī pustakeṃ
kuch pustakeṃ[5]		anya pustakeṃ
kaī pustakeṃ		

[4] これ以外にも、多量・多数を表わすものとして、‘ adhik ’, ‘ anek ’, ‘ zyādā ’ がある。また、この ‘ bahut ’ に接辞 ‘ -sā ’「のような」を付加した、‘ bahut-sā ’ という複合形のものもある。

[5] ‘ kuch ’ に ‘ ek ’ を付加した ‘ kuch ek ’（‘ kuchek ’）という形もある。

一列目が、「本」という集合から、任意のもの（単数であれ複数であれ）を指す表現になる。二列目が、「本」という集合全体を指す表現になる。単数名詞に使用される ‘ har ’ は、日本語の「それぞれの，おのおのの」（漢語では「毎」や「各」）という意味から、集合全体を指すものとなる。それに対して、複数名詞に使用される ‘ sab ’ は、日本語の「すべての」に当たる、集合全体を指すものになる。三列目は、任意の本以外の本を指す場合の不定代名詞群である。ここでは、先に挙げた ‘ dūsrī ’「別の（他の）」と共に、同義の ‘ anya ’ も掲載した。最終列は、任意の本のうちのどれか１つを指す場合の表現であり、一列目の ‘ koī ’ と ‘ ek ’「1」もしくは接辞 ‘ -sā ’「のような」を複合して使用する。

なお、[別の] の中に挙げた ‘ anyatar ’ と［どれかの］の ‘ anyatam ’（‘ anya ’ に比較級の接辞 ‘ -tar ’，最上級の接辞 ‘ -tam ’ を付加したもの）は、サンスクリットからの借用語彙[6] である。この２つは辞書には掲載されているが、現代ではあまり使われないようである。また、この数量に関連してもう１つ、少量もしくは少数を表わす形容詞 ‘ kam ’ があるが、‘ kam pustakeṃ ’ のように、名詞を修飾することがあまりない。

1.1.1.1.3　疑問代名詞・指示代名詞・関係詞

日本語と同様、「だれ，なに，いつ，どこ，どう，どうして」のような疑問代名詞をここで挙げておく。これらの疑問代名詞に対し、形態的に関連する指示代名詞，関係詞を平行して挙げる。日本語の指示代名詞「これ，それ，あれ」は３項だが、ヒンディー語は２項しかない。２項のうち相対的に近いものを指す場合を近称詞，遠いものを指す場合を遠称詞と呼ぶ。[7]

---

[6] ヒンディー語学ではタトサマ語彙（tatsam）と呼ばれる。原義は「そのままのもの」で、概して初期インド・アーリア諸語、ヒンディー語の場合は特にサンスクリットからの借用語を示す。これに対し、タドバヴァ語彙（tadbhava）は、「それが起源のもの」で、元の形から音韻変化を起こしたものを指す。

[7] ヒンディー語のこのダイクシス（直示）は、２項しかない。これは、通常、話し手を基点とした対象の遠近を表すものだが、会話等のやりとりでは、聞き手が基点になる場合も出てくる。その場合、話し手と聞き手の２つの基点が同時に存在することになり、さらに対象までの遠近がそれぞれ生じるため、ダイクシスの当てはめ方が複雑化する。

直格型

	だれ	なに	どれ
疑問詞	kaun	kyā	kaun-sā
近称詞	yah	yah	yah
遠称詞	vah	vah	vah
関係詞	jo	jo	jo

ここに挙げた直格型の近称詞，遠称詞が指示代名詞となる。ヒンディー語では、人に対する疑問詞「だれ」と物に対する疑問詞「なに」には異なる語があるが、それに応答する指示代名詞として、これらの近称詞，遠称詞を使用する。人を表す場合の日本語の「彼」，「彼女」は説明上便宜的な使用であり、実際はダイクシスに当たる言語形式「これ」，「あれ」で照応しているわけである。[8]

また、これらは、後述の関係節，同格節の相関辞として使用される。択一の「どれ」は、一語ではなく、最前列の ‘ kaun ’ に「のような」という意味を持つ接辞 ‘ -sā ’ を複合した形となっている。

次は上記の語の属格型を概観する。属格は名詞を形容詞的に修飾するものである。

属格型（名詞修飾語型）

	だれの		なんの		どの	どんな	どれだけの
	単数	複数	単数	複数			
疑問詞	kis kā	kin kā	kis kā	kin kā	kaun-sā	kaisā	kitnā
近称詞	is kā	in kā	is ka	in kā		aisā	itnā
遠称詞	us kā	un ka	us kā	un kā		vaisā, taisā[9]	utnā
関係詞	jis[10] kā	jin kā	jis kā	jin kā		jaisā	jitnā

属格は日本語も格助詞「の」を使用し複合形で表すが、ヒンディー語も同じである。しかし、英語の ‘ who ’ は ‘ whose ’ という属格形を保持しており、‘ what ’ は名詞に直接属格としてかかる。ヒンディー語では、最後列から二番目の「どんな」と最後列の「どれだけの」のみが一語の形容詞として独立している。このうち最後列の「どれだけの」

---

[8] 日本語の「彼」，「彼女」（おそらく英語の伝統文法の ‘ he ’，‘ she ’ に当てたものからのメタ言語化と思われる。）でこのダイクシスを説明すると、日本語の用法まで持ちこむことになる。日本語の「彼」，「彼女」は、基本的にその場にいない第三者を表す場合に使用する。しかしながら、ヒンディー語のこのダイクシスは、遠近を軸にしているだけなので、第三者の存在の有無には左右されない。説明の際は、その点に注意する必要がある。

[9] サンスクリットの ‘ tat ’ に端を発するダイクシス（直示）を含むこの形は、現代ではイディオム化した句に使われる。

[10] これは、関係詞 ‘ jo ’ の斜格形（後置詞格）である。

は「どれだけ，これだけ，それだけ，あれだけ」という漠然とした量を表わす名詞としても使用される。「どの」については、先の直格型で述べたように、接辞 ‘ -sā ’ は、「のような」に当たり、形容詞変化する。先の直格型の「どれ」は、これを名詞的に使用したものである。

斜格名詞型（文修飾語型）

	どこ	いつ	なぜ	どのように	どちらに
疑問詞	kahām̐	kab	kyoṃ	kaise	kidhar
近称詞	yahām̐	ab	yoṃ	aise	idhar
遠称詞	vahām̐	tab	voṃ, tyoṃ	vaise, taise	udhar
関係詞	jahām̐	jab	jyoṃ	jaise	jidhar

この欄に挙げたのはいわゆる副詞で処理される疑問代名詞とそれに関連する指示代名詞である。すべて後置詞がゼロ格の斜格名詞となっている。

1.1.1.1.4　数量代名詞

1.1.1.1.4.1　基数詞と序数詞

基数詞・序数詞に関しては、１から５までを例に挙げる。

	1	2	3	4	5
基数詞	ek	do	tīn	cār	pām̐c
序数詞	pahalā	dūsrā	tīsrā	cauthā	pām̐cvām̐

序数詞の５以降は基数詞に序数詞の接辞 ‘ -vām̐ ’ を付加する生産的な形ばかりなので、ここでは省略する。

この基数詞，序数詞は形容詞的に名詞にかかる機能を持つ。例として １ と２を挙げておく。

		単数	複数
［基数詞］		ek pustak	do pustakeṃ
［序数詞］	1	pahlī pustak	pahlī pustakeṃ
	2	dūsrī pustak	dūsrī pustakeṃ

基数詞の中には、慣用的になったためか、複数であるはずなのにもはや複数形でなく単数形を用いる固定例がある。例えば、‘ cār din kī zindagī ’「4日の命（＝薄命）」の‘ din ’は、本来、複数斜格‘ dinoṃ ’となるはずのところが単数のままである。

序数詞の2は、「2番目の」という意味と「他の，別の」という意味がある。後者が副次的に生成された意味のようである。

1.1.1.1.4.2 集合数詞

次に数字を使った集合数詞の例を挙げる。形態は基数詞の複数・斜格形である。

［集合数詞］

donoṃ pustakeṃ：2冊の本（まるごと）
tīnoṃ pustakeṃ：3冊の本（まるごと）
cāroṃ pustakeṃ：4冊の本（まるごと）
pām̃coṃ pustakeṃ：5冊の本（まるごと）

chahoṃ ：具体例なし
sātoṃ vacan：7つの結婚の誓い
āṭhoṃ pahar：8パハル（＝24時間）
dasoṃ diśā：10の方向

2から10までの集合数詞で、6の具体例および集合数詞9の形式そのものが今のところ見つかっていない。実際、この中でよく耳にするのは2から5までである。7，8，10はあまり耳にはしないが、慣用句と化した語句には現在でも使用されている。

次は十の位より上の集合数詞である。

	20	100	1,000	100,000	10,000,000
基数詞	bīs	saikṛā	hazār	lākh	karoṛ
集合数詞	bīsiyoṃ	saikṛoṃ	hazāroṃ	lākhoṃ	karoṛoṃ

形の上では基数詞に‘ -oṃ ’語尾[11]の付加という、上に挙げたものと変わりないが、これらには集合的な意味よりも、その位に応じた数（日本語の数百，数千，数万等々）を表わしている。

[11] 先に述べたが、この接尾辞は名詞の複数・斜格語尾でもある。

1.1.2 形容詞

先の名詞の下位範疇にある代名詞群には、名詞を修飾するための属格変化を持つものもあり、また、名詞を直接修飾しているものあったが、それらはあくまで代名詞に名詞を修飾する用法があるというだけであり、純粋な形容詞とはいえない。ここで挙げる形容詞は、それらとは違って形容詞以外には分類できないもので、往々にして叙述的なものである。

muśkil pustak : 難しい本　　śarmīlī laṛkī : 恥ずかしがりやの少女
aslī qabr　　: 本物の墓　　galat javāb : 間違った答え

ヒンディー語の形容詞の中で‘ -ā ’語尾のものは、基本的に被修飾語である名詞の性・数・格に応じて屈折する。しかし、アラビア・ペルシャ出自の形容詞（例：‘ zyādā ’, ‘ baṛhiyā ’, ‘ ziṃdā ’）は、‘ -ā ’語尾でも変化しない。ただし、出自をもはや意識しない人々は、変化させることもある。

1.1.3 動詞

1.1.3.1 自動詞，他動詞の定義と類型

ここでは、本稿での文法体系の枠組みを説明する。まずは、本論文での自動詞，他動詞の区別を以下に挙げる。

［自動詞］

体１つあれば実現できる行為を示す。

［他動詞］

少なくとも１つの対象（Object）を要求する。それがないと実現不可能である。

以上の区別を現実世界に鑑みた言語上の公理として分析する。この枠組みは公理として設定するため、自動詞，他動詞区別の術として一般に行われる能動態から受動態への変形等の統語処理には依存しない。

これらを公理として設定する理由は、歴史言語学上の伝統文法の枠組みと共時的研究の上での枠組みとの矛盾回避にある。一般的に自動詞であると考えられている「行く」とい

う動詞は、ラテン語・古代ギリシャ語・サンスクリット語では、目的地を表す名詞の格が対格になるため他動詞であると考えられているが、これは事象の叙述（すなわち命題の部分）の中で、目的語が対格をとることが往々にして他動詞に多いからである。これを素直に適応すると、たとえば、日本語の「橋を渡る」,「道を歩く」,「空を飛ぶ」等々、明らかに自動詞と考えられる動詞が一般に対格といわれる「を」格要求するという理由から、他動詞である（もしくは元は他動詞だった）ということになる。日本語の場合、目的地（もしくは移動の対象）を「を」格で標示する自動詞が比較的多いので、日本語の動詞はヒンディー語学よりかなり議論されている。日本語学者の鈴木（1972）は、「『を』格の自動詞と組み合わされる動詞でも、『を』が出発点や人，ものがうつりうごく場所を表す場合には、その動詞は他動詞ではなく、移動を示す自動詞である。」と述べており、他動詞定義を直接受動文が生成可能なものとしている三上（1972）は、その「「空ガ飛バレタ」という表現を認める人は「ヲ飛ブ」を他動詞とされたらよかろう。」と述べている。[角田 1990：68－69] 他動詞認定する手法はさておき、日本語でこれらの動詞が一概に他動詞とは認定されていないのは共通である。

日本語の「を」格を取る自動詞について議論するのが本論文の目的ではないのでここまでにしておくとして、このように表面的な格標示に依拠した自動詞，他動詞の区別からは普遍性が生まれない。現に日本語の場合「を」格を取るから他動詞であるとは言えないし、かといって「を」格を取る自動詞であると断言するにはそれ相応の論証がなくては、一応の納得も得られない。ヒンディー語についても、対格を要求するから他動詞であるとは言えない。少なくとも、共時研究のそれと通時研究のそれとは必ずしも一致しないからである。[12]

統語的な文法関係（すなわち日本語の「空」の文法関係。ここでは移動の対象）と表層および深層の格標示（すなわち「を」格）の区別なしに、伝統文法の枠組みをそのまま継

---

[12] 筆者の推察するところでは、ヒンディー語の伝統文法での用語と日本語の対訳がニュアンスのずれを起こしているのではないか。日本語の自動詞に対応する ‘ akarmak kriyā ’ は原義が「目的語のない動詞」であり、他動詞の ‘ sakarmak kriyā ’ は「目的語付きの動詞」である。その目的語が往々にして対格を取る。すなわち、伝統文法では目的語が付くか否かの形を基本にして動詞の定義をしているのである。ところが、日本語の自動詞，他動詞は文字どおり「自ずと動く動詞」と「他を必要とする動詞」というにとどまっており、あくまで動詞本来の大概念的なもので、目的語の有無まで細かく定義していない。合理的に形式上で区別している伝統文法と大概念で抽象的に区別している日本語とでは、ニュアンスの差が出て当然であるし、まかり間違えば共時的対照研究の弊害になる。本稿では後者の大概念の枠組みに従う。というのは、前者の場合、個別言語内での文法関係と格標示の統一に落ち着いてしまうからである。文法関係と格標示の方法は言語によって変わってくるので、通言語的な普遍性追求には不都合だからである。

承し、自動詞，他動詞の区別の指標にするのは、共時的研究の上では混乱の元になるので、本稿では上記したように、大概念的な公理として扱う。[13]

これらを前提に、ここからヒンディー語の自動詞，他動詞の形態を観察する。ヒンディー語の動詞に付く接辞には、‘ -ā- ’と‘ -vā- ’がある。これらを付加した場合、ある種の派生形が生じる。この２つのうち、後者が使役接辞になる。接辞を付けた場合の意味により、使役 1，使役２とも呼ばれるが、これは他動詞に付加される場合に限られる。日本語では古くには使役接辞がいくつか存在した。「す」，「さす」，「しむ」，「せる」，「させる」等である。接辞「しむ」は、おそらく現代語ではほとんど使うことはないであろう。しかし、その他は使用可能である。例えば、「泣く（自）＞泣かす，泣かせる」，「流れる（自）＞流さす，流させる」，「食べる（他）＞食べさす，食べさせる」，「書く（他）＞書かす，書かせる」，「飲む（他）＞飲ます，飲ませる」のように、「す／さす」と「せる／させる」が、動詞の活用により相補分布的に現われる。以下に、これらをまとめて表に挙げる。

	自動詞	他動詞	－す	－さす	－せる	－させる
行く（五段）	行く	φ	行かす	φ	行かせる	φ
来る（カ変）	来る	φ	φ	来さす	φ	来させる
なる	なる	φ	ならす	φ	ならせる	φ
泣く（五段）	泣く	φ	泣かす	φ	泣かせる	φ
切れる（五段）	切れる	切る	切らす	φ	切らせる	φ
流れる（一段）	流れる	流す	φ	流れさす	φ	流れさせる
破れる（一段）	破れる	破る	φ	破れさす	φ	破れさせる
書く（五段）	φ	書く	書かす	φ	書かせる	書かさせる
飲む（五段）	φ	飲む	飲ます	φ	飲ませる	飲まさせる
食べる（一段）	φ	食べる	φ	食べさす	φ	食べさせる
する（サ変）	φ	する	さす	φ	させる	φ

日本語の接辞には、受身・尊敬・可能・自発を表わす「－れる／－られる」，使役を表わす「－せる／－させる」がある。一方のヒンディー語は、使役の接辞はあるが、受身は動詞の完了形と‘ jānā ’「行く」を複合して表わす。

以下に自動詞派生のものと他動詞派生のもの、さらには自動詞，他動詞を両方持つもの

---

[13] 問題は自動詞がなぜ対格をとるかであるが、これについては Halliday (1967 a, b)などが議論している Transitivity についてまず議論する必要があるので、ここではそこまで踏み込まないでおく。

の例を挙げる。この自動詞，他動詞を両方持つもの、すなわち自動詞，他動詞の対応を持つものには、互いが異形のものと同形のものがある。その他の音韻変化，音韻交替の詳細は省略する。

	自動詞	他動詞	-ā- 接辞形	-vā- 接辞形
行く	jānā	ϕ	ϕ	ϕ
なる	honā	ϕ	ϕ	ϕ
走る	dauṛnā	ϕ	dauṛānā	dauṛvānā
逃げる	bhāgnā	ϕ	bhagānā	bhagvānā
作られる	bannā	ϕ	banānā	banvānā
助かる	bacnā	ϕ	bacānā	bacvānā
する	ϕ	karnā	karānā (俗)	karvānā
言う	ϕ	kahnā	kah(al)ānā	kah(al)vānā
書く	ϕ	likhnā	likhānā	likhvānā
食べる	ϕ	khānā	khilānā	khilvānā
与える	ϕ	denā	dilānā	dilvānā
取る	ϕ	lenā	?	livānā
投げる	ϕ	pheṃknā	phiṃkānā	phiṃkvānā
話す	ϕ	bolnā	bulānā	bulvānā
死ぬ	marnā	mārnā	marānā (俗)	marvānā
降りる	utarnā	utārnā	utarānā	utarvānā
開く	khulnā	kholnā	khulānā	khulvānā
忘れる	bhūlnā	bhūlnā	bhulānā	bhulvānā
変わる	badalnā	badalnā	badalānā	badalvānā
勝つ	jītnā	jītnā	jit(l)ānā	jitvānā

自動詞に‘ -ā ’接辞を付加すると他動詞化され、他動詞に‘ -ā ’接辞を付加すると、ヒンディー語学でいわれる使役 1 になる。

上に挙げた例のうち、意味変化を起こしているものが多々ある。まず、派生形を持たない自動詞について代表例を挙げる。「行く」に使役接辞を付加した「行か＋せる」は、ヒンディー語では、おそらく音韻の関係で生成できない。したがって、意味からの補充形「送る」が使用され、「人をどこかへ送る」＝「人をどこかへ行かせる」という具合に意味転換させて使用する。

ヒンディー語の動詞についてもう 1 つ特記しておくべきことは、他動詞が過去形の場合に能格性を帯びてくることである。その場合、能格の後置詞（1.1.4　後置詞の節を参照）を付けた能格構文になる。しかし、先に挙げた例のうち、‘ bolnā ’は、行為者に能格後置詞を付けないので自動詞とされていた。しかし、実際には、特に口語表現において能格後置詞を付けることが多い。この動詞は、変化形に焦点を当てると、自他対応型の「開く」

‘ khulnā ＞ kholnā ＞ khulānā ＞ khulvānā ’ と同じ型である。‘ *bulnā ’ という形こそ今のところ存在しないが、本籍自体は他動詞であったものと推察される。そのため、現代の口語表現において、自動詞意識から他動詞意識へ変わりつつあり、言葉の揺れが観察されるのであろう。[14]

1.1.3.2 ヒンディー語の動詞体系および時制・相・法

動詞の形態には文を終わらせることのできる定形と文を終わらせることのできない非定形が存在する。ヒンディー語では、前者は単純未来形，単純過去形および命令形で、後者は語幹（語根√に同じ），未完了分詞（√＋‘ -tā / -tī / -te ’），完了分詞（√＋‘ -(y)ā / -ī / -e / -iṃ ’），不定詞（√＋‘ -nā / -nī / -ne ’）である。日本語の定形は、現在時制の「走る」か過去時制の「走った」および命令形であり、非定形は、動詞や形容詞と接続する連用形「走り」か過去時制の「走った」を、動詞や形容詞と接続するために連用形にした「て」形や仮定形（いわゆる「ば」形と「たら」形等）がある。この他にも日本語には否定や推量の助詞を付加するための未然形，仮定を表わす已然形，名詞を修飾する時の連体形（例えば「動く車」）が存在する。

時制（tense）に目を移すと、ヒンディー語の一般動詞には未来時制，過去時制を表わす単純形があるが、現在時制については、「未完了分詞＋コピュラ現在形」という複合形に依存しており、単純形は存在しない。[15] 日本語の場合は、現在時制と過去時制しか単純形は存在しない。しかし、例えば、本来、現在時制である「動く」の形態が、未来を表わすのにも使用できる。ヒンディー語は、現在時制に用いられる複合形が、（近い）未来を表わすのにも使用されることもある。また、現代日本語での現在時制を表わす形式として、ヒンディー語と同じ「動いて（－て形）＋いる（コピュラ動詞）」のような複合形もある。（後節で詳しく述べる。）

相（aspect）については、未完了分詞と完了分詞の形態が持つ不完了相と完了相を挙げ

---

[14] このような、自動詞から他動詞へ、他動詞から自動詞への意識の推移は、自動詞，他動詞が同形である動詞を多く持つ言語（たとえば英語）にみられる現象である。

[15] 現代標準ヒンディー語の母体であるカリー・ボーリー方言と共に、西部ヒンディー語方言を代表するブラジ・バーシャー方言、これはヒンディー語の後期古典文学に使用されているが、そこにおいても、すでに、未完了形＋コピュラ動詞の複合形が現在時制を示すために使われている。ヒンディー語の出自はプラークリットであるが、卑語であったプラークリットに対する雅語として同時期に存在したサンスクリットの段階では、現在時制を表す単純形が存在した。したがって、プラークリットの段階では単純形が存在したものと推察されるが、実際、いつから複合形に依存し始めたのか不明である。

ることができる。伝統文法的な手法で動詞の意味するところを考えれば、継続相，習慣相などを設けることができるが、あくまで形態の点から分析を行う本論文では、形態が持つ不完了性・完了性のみを設ける。ヒンディー語では、現在時制を「未完了分詞＋コピュラ現在形」の複合形で代用することは先に述べた通りであるが、「完了分詞＋コピュラ動詞」の複合形も含めて、これらがなぜ継続，習慣等の意味を持ってくるかをここで説明する。

以下に、コピュラ動詞と複合した未完了分詞，完了分詞の例を挙げる。

(1) vah har roz gāidāi jātā hai.
彼 毎 日 外大 行く－未完了 コピュラ－現在
「彼は毎日外大に行っている。」

(2) vah har roz gāidāi jātā thā.
彼 毎 日 外大 行く－未完了 コピュラ－過去
「彼は毎日外大に行っていた。」

(3) vah har roz gāidāi jātā hogā.
彼 毎 日 外大 行く－未完了 コピュラ－未来
「彼は毎日外大に行っているだろう。」

（1），（2）をまず説明する。「行く」の未完了分詞が示すのは、「行く」という行為の不完了性である。その行為が不完了の状態にある、そして、「いる／ある」をコピュラが反映し、「現在もしくは過去において、そのような状態である／あった」ということを示しているのである。（3）は、コピュラ動詞が未来形になっている例である。その場合は、「不完了の状態にいる／あるだろう」という意味になる。これらをみても分かるように、ヒンディー語では、コピュラ動詞のみが現在・過去・未来の３つの時制を持つ。現在時制を表わす複合形は、実際は、「不完了の状態にいる／ある」ことを示しているだけで、単純形が存在しなくなった現在、コピュラ動詞の時制に依存して現在時制を表わしているに過ぎないのである。

この「不完了の状態にいる／ある」という複合形式が、文脈によるタイムスパンの長さで、「習慣」となる。しかし、あくまで使用法上の二義的な意味である。多くは、「毎日，最近，ここのところ，今，前は，去年は」等々の斜格名詞句（一般にいう副詞）と共起する。

もう１つの動詞形態である完了分詞とコピュラを組み合わせた場合、「行く」という行為を完了したものと認識するので、生成する意味が変わる。「行った」という行為が完了したことが、コピュラ動詞の「いる／ある」で「存在する／した」ことを示すのである。

(4) vah ab gāidāi gayā hai.
彼 今 外大 行く－完了 コピュラ－現在
「彼は今、外大に行っている。」

(5) vah us samay gāidāi gayā thā.
彼 その 時 外大 行く－完了 コピュラ－過去
「彼はその時、外大に行っていた。」

一方の日本語はどうか。現代日本語では「いる／ある」に連結する非定形の動詞形態は「て」形しかない。[16] したがって、不完了・完了を区別するそれぞれの形態はなく、どちらの相も同じ形で表わすことになる。

ここで共起している斜格名詞句は、「今，その時」であるが、このような共起する斜格名詞句を、どの形態を取るかの指標とすることも時には可能だが、対応が必ずしも一定しないので、絶対的な指標とはならない。日本語の「て」形と「いる／ある」は、不完了・完了どちらの場合にも使用するからである。

すなわち、日本語では、この形態が投射する時間的な幅が広いのである。例えば、「行っている」は、「現在習慣のように行っている」（現在不完了）[17]，「行ってそこに今存在している」（現在完了）の２つの場合に使用される。同様に、「行っていた」も「過去の時点で習慣のように行っていた」（過去不完了），「行ってそこに過去の時点で存在していた」（過去完了）の２つの場合に使用される。ちなみに、進行相と呼ばれるものも、日本語では基本的に「走っている」のように「て」形に「いる／ある」動詞を複合させて表わす。[18] ヒンディー語では、この進行相と呼ばれるものには、これとは違う別の複合形式

---

16 方言レベル（中国地方や九州北部辺り）であれば、例えば、「し」（<「する」）＋「おる／いる」という、動詞の連用形にコピュラ動詞が接続する形が残っている。

17 先の方言内であれば、「習慣として行っている／いた」場合には、未完了行為として認識するので、「行きおる／行っておる」（しばしば同化して「行きよる／行っとる」）になる。しかし、同時に「て」形の「行っておる」（しばしば「行っとる」）も使用されることがある。

18 同じく方言レベルでは、「走りおる」になる。英語の進行形‘ be 動詞＋-ing ’も、コピュラ動詞＋未完了分詞と考えることができる。しかし、英語は現在時制の単純形を持っているため、習慣等の現在時制は単純形で表わし、この複合形の方は、進行中の事象もしくは近未来の事象を表わすものに限定して使用している。

があるが、これについては、第７章で観察する。

文生成の段階でもっとも重要なことは、「行く」という行為が不完了であるか完了であるかと、その行為が未来に存在したのか、現在に存在したのか、過去に存在したのかを認識することである。動詞の形態が示すメカニズムを理解すれば、共起する二義的な斜格名詞は、おのずと選択されるのである。文脈によって流動する継続，習慣という意味を前面に出し過ぎると、学習者は日本語のその意味だけを汲み取る傾向にあるので、返って文脈にそぐわない文を生成し易くなることを付け加えておく。

最後に、法（mood）については、動詞の形態として存在する直説法（indicative mood），命令法（imperative mood），仮定法[19]（subjunctive mood）を設定する。

動詞の形態に基づき、これらの時制，相，法をパラダイムにして、章末に一括して掲載するので、随時参照されたい。

1.1.4　後置詞

日本語では「が，を，に，から，の，で，へ，まで」を格助詞と呼ぶが、ヒンディー語では後置詞と呼ばれる。人称代名詞や指示代名詞の与格屈折，属格屈折を除いて、名詞の屈折により格変化を表わすことがほとんどなくなった代わりに、後置詞が発達し、現在では、日本語に勝るとも劣らないぐらいの後置詞が観察される。以下に、これらの後置詞を日本語と対応させて概観する。

名詞形態	言語 / 格標示	ヒンディー語	日本語
直格	主格	ϕ	が
	対格	ϕ（しばしば ko ）	を
斜格	道具格	se , ne（能格専用）	で
	与格	ko	に
	奪格	se	から
	属格	kā	の
	位置格	meṃ ; par , ϕ	に，へ
	終点格	tak	まで

格のうち主格，対格には、後置詞による格標示はない。無標の場合、ゼロ格になる。ただし、目的語となる対格にはしばしば与格の後置詞が付く。（この機能の議論については

後章に譲る。）この２つが直格の名詞形態のものである。道具格以降、名詞形態が斜格になる。

ヒンディー語では、道具格と奪格には同じ後置詞を使用する。日本語の方では、与格と位置格が共に「に」になる。日本語の格助詞「に」の定義については、『存在し、動作し、作用する点を、時間的・空間的・心理的に「そこ」と指定するのが原義で、動作・作用の及び着く物・事・人を指定する。のち、下に来る語が存在など静的な意味の場合に用い、動作・作用など動的な意味の場合には「で」を用いるように分れる。』［広辞苑第四版］ということである。したがって、日本語の「に」格は、原義からすれば、物理的であれ心理的であれ位置を確定する格助詞であり、与格に当たる「私にくれる，あなたにあげる」の受益者・受動者の場合も原理としては位置を示すのである。一方、ヒンディー語の与格‘ ko ’は、受益者・受動者に付与される格であるが、対格にも付与されることがある。（これについては、第９章で議論する。）また、日本語の位置を表わす「に」格に関連して、先にヒンディー語の位置格について説明するが、ヒンディー語の位置格には、後置詞が３つある。‘ meṃ ’は「～の中で，～の中に」という位置感覚を表わし、‘ par ’は「～にくっついて，～の上に」という接触や付着を表わす。もう１つ、位置格にはφのゼロ格がある。このゼロ格の場合、日本語の「へ」に相当し、一点を示す位置格から分化し、二点間の移動を伴う方向格となる。

属格「の」に当たるヒンディー語は‘ kā ’である。後続の名詞にの性・数に一致し、‘ ke ’（男性複数形または斜格形）‘ kī ’（女性単数および複数形または斜格形）に変化する。

また、1.1.3 で述べたが、ヒンディー語では、能格構文の場合、動作主が能格になり、能格の後置詞‘ ne ’が付く。サンスクリットの道具格‘ -ena ’語尾が音位転換した上、能格として独立したもの［Kiśorīdās Vājpeyī（1957）］という説を支持し、ここでは道具格に記載した。もう１つ、ヒンディー語では、「～から…まで」という始点と終点を表わす場合、始点に奪格の‘ se ’を使い、終点には、‘ tak ’を使うため、終点格を設定する。

---

19 接続法に同じで、基本的に従属節内に現われる形。

1.1.5 接続詞

接続詞は２つのタイプに分類される。１つは等位接続詞、もう１つは従属接続詞である。以下に、ヒンディー語の接続詞を挙げる。

	等位接続詞
「そして」	aur／tathā／evaṃ
「また」	yā／athvā／ki
「しかし」	par／lekin／magar／paraṃtu／kiṃtu

	従属接続詞
「もし」	agar／yadi
「けれども」	yadyapi
「だから」	islie／ataḥ／so
「なぜなら」	kyoṃki／cūṁki
「ということ」	ki
「のように」	māno

ここで挙げた接続詞は、単純形のものである。複合形には（1.1.1.1.3　疑問代名詞を参照）関係詞やその相関辞を使った‘ jaise ki ’「のように」，‘ vaise to ’「けれども」，‘ vaise hī ’「そのように」などがあるが、同格節を導く同格接続詞‘ ki ’や談話文法機能を負った‘ to ’，‘ hī ’との複合は、純粋に接続詞であるとはいえないので、この範疇には挙げないでおく。（本論文ではこれらを小詞として扱う。）

上の表をみても分かるが、ヒンディー語では、他の接続詞に比べ、逆接接続詞の種類が多く存在する。それぞれ、アラビア・ペルシャ語出自の‘ lekin ’，ペルシャ語出自の‘ magar ’，サンスクリット出自の‘ kiṃtu, paraṃtu ’，プラークリット出自と推察される‘ par ’というよ具合で、出自が違う。使用はその場面により異なるが、話し言葉では‘ par ’や‘ lekin ’が比較的使用される。文語には、サンスクリット出自の‘ kiṃtu, paraṃtu ’も使用される。ペルシャ語出自の‘ magar ’は、ウルドゥー語に多く使用される。

1.2 ヒンディー語の構造的特徴

1.2.1 語順

Greenberg の語順類型に従うと、ヒンディー語は根本的には SOV 言語に属する。但し、

関係詞もしくは同格接続詞を使用する際には、SOV の O に相関辞を用い、補完部もしくは付加部を文後方に配置する。相関辞が消失することも多々あるので、見かけが本来の SOV とは異なり、SVO のようになることもある。

1.2.2 文法関係と格標示

文型を設定するにあたって、本論文で使用する文法関係とその概念を説明する。S, O, V は周知のごとくそれぞれ、主語（Subject），目的語（Object），動詞（Verb）である。

また、述語としての働きを持つ場合の名詞，形容詞を特に述語名詞（Predicate Noun, PredN），述語形容詞（Predicate Adjective, PredA）とする。もう 1 つ、当言語は Copula（繋辞）を持つ。この出自である動詞 ‘ honā ’ は本動詞の働きをする場合と文末の終助詞のような働きをする場合があるので、後者の場合を特に Copula（Cop）とする。このコピュラは終助詞的な機能と共に時制、すなわち、未来・現在・過去を表す機能も持つ。日本語学習の方で、日本語の「です」がコピュラ ‘ honā ’ や英語の ‘ be ’ 動詞に相当すると考えられるためか、初期段階で外国人が日本語で犯す誤りの中に「忙しい＋でした」というのがある。これは終助詞「です」に時制標示したもので、「学生＋です／でした」や「学生＋だ／だった」のように、日本語では述語名詞の場合のみ終助詞が時制表示機能を持つのを、述語品詞とは無関係にコピュラに時制表示をする言語の規則を過剰適応したものである。間違いはともかく、インド人が日本語を学習する際、日本語の言語形式を母語の品詞や文法関係，その格標示に無意識であれ、論理的に当てはめて考えていることは、事実である。

では、ヒンディー語の事象を述べる命題に現われる文法関係を、その格標示と共に公式化する。　まずは、なじみの深い英語などの SVO 言語の文法関係および格標示を概観する。なお SVO 言語でも SOV 言語でも、会話等の自然言語では語順も以下の公式に従わないこともあるが、それらについてはここでは排除して、ここでは一般的な叙述の場合の語順を挙げる。

［SVO 言語］

＜自動詞文＞

	S		V		OPTION
文法関係	主語	＋	述語	＋	斜格名詞
格標示	主格	＋	自動詞	＋	位置格
					方向格
					対格

自動詞の場合、基本的に必要条件である主語，述語の二語でことが足りる。「私は走る。」，「彼が歩く。」などからも分かるように、個々の事象を説明するには二語で済む。SVO 言語の場合、後方に OPTION（随意要素）として斜格名詞句、すなわち一般的にいう副詞句を付加し得るが、これは命題に直接影響しない。自動詞の場合の格標示は、主語が主格、述語が自動詞となり、OPTION として位置格，方向格、また、英語の場合現代では稀であろうが、古来のラテン語において、位置，方向を表す際、対格を取っていたので、同列に対格も挙げておいた。

次に他動詞の文法関係および格標示を見てみる。

＜他動詞文＞

	S		V		O		OPTION
文法関係	主語	＋	述語	＋	目的語	＋	斜格名詞
格標示	主格	＋	他動詞	＋	対格	＋	位置格
							方向格

他動詞の場合、主語が主格、述語が他動詞、目的語が対格となる。OPTION の部分は、先の自動詞のところで述べたように、随意に斜格名詞句を付加できるということである。上に挙げた他動詞は目的語を一語しか要求しない他動詞の場合であるが、英語では‘ give ’，‘ make ’などの二重目的語を要求する他動詞がある。以下にその文法関係と格標示を例示する。

	S		V		O		O		OPTION
文法関係 ：	主語	＋	述語	＋	目的語	＋	目的語	＋	斜格名詞
格標示 ：	主格	＋	他動詞	＋	与格	＋	対格	＋	位置格
									方向格

述語の直後にくる目的語が間接目的語であり、もう１つの目的語が直接目的語である。格標示としては間接目的語が与格、直接目的語が対格になる。もっとも、この２つの格には形態上の違いはない。

では、次は SOV 言語の文法関係を示す。

［SOV 言語］

＜自動詞文＞

	S		OPTION		V
文法関係 ：	主語	＋	斜格名詞	＋	述語
格標示 ：	主格	＋	位置格	＋	自動詞
			方向格		
			対格		

＜他動詞文＞

	S		OPTION		O		V
文法関係 ：	主語	＋	斜格名詞	＋	目的語	＋	述語
格標示 ：	主格	＋	位置格	＋	対格	＋	他動詞
			方向格				

もしくは、

	S		OPTION		O		O		V
文法関係 ：	主語	＋	斜格名詞	＋	目的語	＋	目的語	＋	述語
格標示 ：	主格	＋	位置格	＋	与格	＋	対格	＋	他動詞

日本語と同様、ヒンディー語も「～に…を」となるので、前者の目的語が間接目的語で、後者が直接目的語である。

自然言語を除いて、SVO 言語，SOV 言語共に、OPTION は、特に強調を置かない限りこのような配列になる。

ところで、述語となる品詞には、名詞，形容詞，動詞の 3 つがある。ヒンディー語の場合、名詞と形容詞にはコピュラが付くが、同じインド・アーリア諸語でも、ベンガル語のように、コピュラに当たるものがない言語もある。

本論文では、それぞれの格標示を、本論文では以下のようにメタ言語化する。

［名詞述語文］

1．	Nom	PredN	Cop	

［形容詞述語文］

2．	Nom	PredA	Cop	

［動詞述語文］

自動詞

3．	Nom		V		
3’．1．	Obl	LPp	Nom	V	
3’．2．	Obl	ko	Nom	V	

他動詞

4．	Nom			Acc		V		
4’．1．	Nom		Obl	ko		V		
4’．2．	Nom		Obl	ko		Acc		V
5．	Obl	Erg		Abs		V		
5’．1．	Obl	Erg	Obl	ko		V		
5’．2．	Obl	Erg	Obl	ko		Abs		V

まず、1だが、これは日本語の「僕は学生だ。」、英語の‘She is a student.’のような述部が名詞とコピュラ動詞（Copula,Cop）から成る文のことである。2の文型は、1の名詞の部分が形容詞に入れ替わったものである。名詞や形容詞とコピュラ動詞を合わせて動詞句(VP)とする立場もあるが、分析の便宜のため、この2つの文型を設定した。

次は、動詞述語文についてである。3’，4’，5’は、それぞれ、名詞の斜格形（Obl）

プラス後置詞（特に与格後置詞 ‘ ko ’）を伴う３，４，５の異形である。詳細にみると、３’．１は、OPTION として位置格後置詞（Locative Postposition, LPp）を持つ句が文頭に来る存在文であり、３’．２は、OPTION として与格後置詞 ‘ ko ’ を持つ句が文頭に来る、いわゆる与格構文である。４は、定形動詞が、不完了相（1.1.3.2 を参照。）の場合の文型である。一応、目的語を Accusative（Acc）で表したが、これは、文法関係を明らかにするためで、形自体は、Nominative（Nom）と同じである。これに対して、５は、定形動詞が他動詞・完了相の場合に、能格（Ergative, Erg）を取る文型である。1.1.3 の動詞のところでも少し述べたように、対格言語に属する日本語や英語とは違い、ヒンディー語は、対格言語・能格言語の両方の性質を併せもつ言語である。完了相（過去時制そのものとしても具現化している。）という指標によって能格性を帯びるのである。[20]

1.3 核と演算子

おおよそどの言語であれ、文は、核と演算子の部分に分けることができる。核とは、叙述に当たる名詞述語文の「S が PredN である」（例：「彼は学生である。」），形容詞述語文の「S が PredA である」（例：「花が美しい。」），動詞述語文の「S が V」（例：「彼が家に来る」）、また、「S が O を V」（例：「叔父さんが車を運転する。」）のような、真偽を定めた命題を示すものである。

一方、核に対する演算子は、命題へ何らかの作用を及ぼす作用素として付け加えるものである。これを、一般に、アスペクト（様相）やモダリティ（法）というわけだが、これについては学者によって意見もさまざまである。意味によるアスペクト（様相）やモダリティ（法）の分類については、当面置いておくとして、先に、物理的に演算子が付加される様を概観してみよう。

基本的に SOV 語順のヒンディー語では、以下のように、この演算子は命題の後に来ることになる。

核（nucleus）　＋　演算子（operator）
命題（事象の叙述）　＋　法（直説法，仮定法，命令法）

---

[20] 能格の後置詞は、道具格との関連が深いことは品詞の後置詞のところで述べた。つまり、発想として、これは、「S によって O がされた。」のように対象を主語にする構文で、中動態もしくは受動態の原理を引き継いだものと考えられる。

これに当てはめ、日本語の例を観察してみたい。まずは、命題を指す核である。動詞は自動詞を使い、デフォルトの時制は現在と過去、法は直説法を使用する。

［核］

サーカスが町に来る。　／　サーカスが町に来た。

現在・過去の時制を伴う命題に演算子を付けると、以下のようになる。

［核］＋［演算子 1］

サーカスが町に来て　＋　いる。　／　サーカスが町に来て　＋　いた。

サーカスが町に来て　＋　しまう。　／　サーカスが町に来て　＋　しまった。

ここでは、演算子の代表的なものとして、ヒンディー語のコピュラ動詞にも当たる「いる」と、終了や完了の意味を付け加える作用素となる動詞「しまう」を挙げた。演算子として「いる」使用すると、命題である「サーカスが町に来た」という状態に「ある」という意味になる。「いる」の代わりに「しまう」を演算子にすると、命題の状態に「至る，終わる」のようなニュアンスを付け加えるものになる。日本語のこれらの動詞は、「彼はそこにいた。」や「店をしまって、国に帰る」のように、本動詞としても使用される。ヒンディー語にも、本動詞としての使用と、補助動詞としての使用を持つ動詞群がある。

また、演算子は１つしか付加されないわけではない。これらの動詞を重ねることもできるのである。

［核］＋［演算子 1］＋［演算子 2］

サーカスが町に来て＋しまって＋いる。　／　サーカスが町に来てしまって＋いた。

この例は、演算子 1 として「しまう」，演算子 2 として「いる」を組み合わせたものである。論理的には、核となる命題が「終わった」状態に「ある」ということになる。この場合、「*サーカスが町に来ていてしまった。」のような、核となる命題が「存在した」状態に「終わる」という具合に、演算子を逆にすることはできない。論理的におかしな文に

なるのは明白である。存在に関わる命題は、実体の様相（終了や完了等）を表わす次元よりも優先されるためと考えられる。

次に、他動詞を使用した例も挙げておく。

［核］

父が手紙を書く。　／　父が手紙を書いた。

［核］＋［演算子 1］

父が手紙を書いて＋いる。　／　父が手紙を書いて＋いた。

父が手紙を書いて＋しまう。　／　父が手紙を書いて＋しまった。

［核］＋［演算子 1］＋［演算子 2］

父が手紙を書いて＋しまって＋いる。　／　父が手紙を書いて＋しまって＋いた。

このように、自動詞の場合と同じく、他動詞の場合も演算子を付加することができる。演算子は、物理的には核となる命題に無限に付け加えられるが、現実世界では、意味的な制約がかかるので、無限にというのにもおのずと制限がかかるのはいうまでもない。また、演算子の種類を考えると、先の演算子を２つ付加する場合も、自動詞同様、演算子 1 と演算子２を逆にすることはできない。つまり、演算子にもいくつかの段階があるということである。存在を表わす「いる」がある場合は、他の演算子がいくつあっても文の最後に来るが、「しまう」のような本動詞でもあり、補助動詞でもあるものもある。このような動詞は、文法化の過程にあるものと考えられ、補助動詞として使われることにより、元の本動詞としての意味が漠然としたものになっていくため、扱い難い項目になっている。これらが、（特に意味の分類から）アスペクトやモダリティとして分析される。ヒンディー語にも、このような補助動詞としても使用される動詞群があることは先にも述べたが、これについては章を改めて取り上げる。ただし、本論文では、その種のアスペクトやモダリティにとらわれず、基本的に演算子として取り扱う。

ところで、1.1.3.2 でも述べたように、日本語の動詞のデフォルト形は、現在時制と過去時制しかない。日本語ではコピュラ動詞にも相当する「いる／ある」さえ、現在時制と過去時制しかない。一方、ヒンディー語では、コピュラ動詞だけは、未来・現在・過去時

制の３つの時制に対して、それぞれ独立した形態を持っている。それ以外の動詞は未来時制と過去時制の形態しか持たない。現在時制の時、ヒンディー語では未完了分詞とコピュラ動詞の現在形との複合形で表わすことも先の節で述べたが、現在時制の場合のコピュラ動詞も、（現在時制の単純形がないため）現在としての時制を負わざるを得なくなっているが、根本的には演算子として付加されるものであり、この複合形自体が現在時制への流用と考えられる。

以下に、ヒンディー語と日本語について、時制，相，法を反映した動詞のパラダイム表を挙げておく。その前に、ヒンディー語のコピュラ動詞と日本語の相対語の対応も、同時に表にして挙げる。この節では動詞述語文のみについて言及しているが、日本語の場合、名詞述語文や形容詞述語文の場合には、別の語が使用されるので、平行して提示する。

	名詞述語文		形容詞述語文		動詞述語文	
	現在	過去	現在	過去	現在	過去
ヒンディー語	hūm̃ hai haiṃ ho	thā, thī thā, thī the, thīṃ the, thīṃ	hūm̃ hai haiṃ ho	thā, thī thā, thī the, thīṃ the, thīṃ	hūm̃ hai haiṃ ho	thā, thī thā, thī the, thīṃ the, thīṃ
日本語	だ	だった	φ	ーった (かり活用)	いる ある	いた あった

時制は、日本語にある現在時制と過去時制を基準にして挙げた。動詞述語文に使用される「いる」をコピュラ動詞に相当する語とし、パラダイム中で、複合形に使用する。日本語には動詞の未来形はないが、意志や推量を表わす助動詞「う／よう」［広辞苑第四版］を付加した形を複合未来形としてパラダイムに掲載した。

ヒンディー語の動詞パラダイム（1）［コピュラ動詞‘ honā ’］

定形													
直説法							仮定法						命令法
	単純形			複合形			単純形			複合形			単純形
		sg.	pl.					sg.	pl.				
未来時制	1	hoūm̐gā	hoṃge	不完了	hotā	hoūm̐gā hogā	1	hoūm̐	hoṃ	不完了	hotā	hoūm̐ ho	honā
					hote	hoge hoṃge					hote	ho hoṃ	
	2	hogā	hoge hoṃge	完了	huā	hoūm̐gā hogā	2	ho	ho hoṃ	完了	huā	hoūm̐ ho	ho
	3	hogā	hoṃge		hue	hoge hoṃge	3	ho	hoṃ		hue	ho hoṃ	hoio
	単純形			複合形			単純形			複合形			hoo
		sg.	pl.										
現在時制	1	hūm̐	haiṃ	不完了	hotā	hūm̐ hai	不完了	hotā		不完了			hoie
	2	hai	ho haiṃ		hote	ho haiṃ		hote					hoiegā
	3	hai	haiṃ	完了	huā	hūm̐ hai	完了			完了	huā	hotā	
					hue	ho haiṃ					hue	hote	
過去時制		sg.	pl.	不完了	hotā	thā							
	男性	thā	the		hote	the							
	女性	thī	thīṃ	完了	huā	thā							
					hue	the							

非定形								
語幹	不定詞		分詞					
単純形	単純形		複合形			単純形		
ho	名詞用法	honā	未完了	名詞用法	hotā	名詞用法	不完了	
							完了	
	形容詞用法	honā		形容詞用法	hotā	形容詞用法	不完了	
							完了	
	副詞用法	hone		副詞用法	hote	副詞用法	不完了	
							完了	
			完了	名詞用法	huā	名詞用法	不完了	hotā huā
							完了	
				形容詞用法	huā	形容詞用法	不完了	hotā huā
							完了	
				副詞用法	hue	副詞用法	不完了	hote hue
							完了	

ヒンディー語の動詞パラダイム（2）［動詞 ‘ karnā ’「する」］

定形															
直説法								仮定法							命令法
	単純形			複合形				単純形			複合形				単純形
未来時制		sg.	pl.	不完了	kartā	hoū̃gā			sg.	pl.	不完了	kartā	hoū̃		
	1	karū̃gā	kareṃge			hogā		1	karū̃	kareṃ			ho		
					karte	hoge						karte	ho		karnā
	2	karegā	karoge	完了	kiyā	hoge		2	kare	karo	完了	kiyā	hoū̃		kar
			kareṃge			hoṃge				kareṃ			ho		
	3	karegā	kareṃge		ki(y)e	hoṃge		3	kare	kareṃ		ki(y)e	ho		kario
													hoṃ		karo
現在時制	単純形			複合形				単純形			複合形				
				不完了	kartā	hū̃		不完了	kartā		不完了				kījī(y)e (karie)
						hai									
					karte	ho			karte						kījī(y)egā (kariegā)
						haiṃ									
				完了	kiyā	hai		完了			完了	kiyā	hotā		
					ki(y)e	haiṃ						ki(y)e	hote		
過去時制		sg.	pl.	不完了	kartā	thā									
	男性	kiyā	ki(y)e		karte	the									
	女性	kī	kīṃ	完了	kiyā	thā									
					ki(y)e	the									

非定形									
語幹	不定詞		分詞						
単純形	単純形		複合形			単純形			
kar	名詞用法	karnā	未完了	名詞用法	kartā	名詞用法	不完了		
							完了		
	形容詞用法	karnā		形容詞用法	kartā	形容詞用法	不完了		
							完了		
	副詞用法	karne		副詞用法	karte	副詞用法	不完了		
							完了		
			完了	名詞用法	kiyā	名詞用法	不完了	kartā huā	
							完了	kiyā huā	
				形容詞用法	kiyā	形容詞用法	不完了	kartā huā	
							完了	kiyā huā	
				副詞用法	ki(y)e	副詞用法	不完了	karte hue	
							完了	ki(y)e hue	

ヒンディー語の動詞パラダイム（3）［動詞‘ jānā ’「行く」］

定形													
直説法							仮定法						命令法
	単純形			複合形			単純形			複合形			単純形
		sg.	pl.					sg.	pl.				
未来時制	1	jāūm̐gā	jāeṃge	不完了	jātā	hoūm̐gā hogā	1	jāūm̐	jāeṃ	不完了	jātā	hoūm̐ ho	jānā jā jāio jāo jāie jāiegā
					jāte	hoge hoṃge					jāte	ho hoṃ	
	2	jāegā	jāoge jāeṃge	完了	gayā	hoūṃgā hogā	2	jāo	jāo jāeṃ	完了	gayā	hoūm̐ ho	
	3	jāegā	jāeṃge		ga(y)e	hoge hoṃge	3	jāe	jāeṃ		ga(y)e	ho hoṃ	
	単純形			複合形			単純形			複合形			
現在時制				不完了	jātā	hūm̐ hai	不完了	jātā		不完了			
					jāte	ho haiṃ		jāte					
				完了	gayā	hūm̐ hai	完了			完了	gayā	hotā	
					ga(y)e	ho haiṃ					ga(y)e	hote	
過去時制		sg.	pl.	不完了	jātā	thā							
	男性	gayā	ga(y)e		jāte	the							
	女性	ga(y)ī	ga(y)īṃ	完了	gayā	thā							
					ga(y)e	the							

非定形								
語幹	不定詞		分詞					
単純形	単純形		複合形			単純形		
jā	名詞用法	jānā	未完了	名詞用法	jātā	名詞用法	不完了	
							完了	
	形容詞用法	jānā		形容詞用法	jātā	形容詞用法	不完了	
							完了	
	副詞用法	jāne		副詞用法	jāte	副詞用法	不完了	
							完了	
			完了	名詞用法	gayā (jāyā)	名詞用法	不完了	jātā huā
							完了	gayā huā
				形容詞用法	gayā	形容詞用法	不完了	jātā huā
							完了	gayā huā
				副詞用法	ga(y)e	副詞用法	不完了	jāte hue
							完了	ga(y)e hue

日本語の動詞パラダイム（1）［五段活用「話す」］

終止形								非終止形
直説法				命令法				語幹
	単純形	複合形		単純形	複合形			単純形
未来時制		不完了	はなそ　う		不完了			はなさ はなし はなす はなせ はなそ
		完了	はなして　いよ　う [おろ]		完了			
現在時制	単純形	複合形		単純形	複合形			
	はなす	不完了	はなし　*いる [おる]	はなせ	不完了	はなし　*いろ [おれ]		
		完了	はなして　いる [おる]		完了	はなして　いろ [おれ]		
過去時制	はなした	不完了	はなし　*いた [おった]		不完了			
		完了	はなして　いた おった		完了			

非終止形									
分詞1（継続）			分詞2（仮定）			分詞3（並列）			
単純形	複合形		単純形	複合形		単純形	複合形		
はなし	不完了	はなし　*い [おり]	はなせば	不完了	はなし　*いれば [おれば]		不完了		
	完了	はなして　*い おり		完了	はなして　いれば おれば		完了		
はなして	不完了	はなし　*いて [おって]	はなしたら	不完了	はなし　*いたら [おったら]	はなしたり	不完了	はなし　*いたり [おったり]	
	完了	はなして　いて おって		完了	はなして　いたら おったら		完了	はなして　いたり おったり	

日本語の動詞パラダイム（2）［一段活用「食べる」］

終止形								非終止形
直説法				命令法				語幹
	単純形	複合形		単純形	複合形			単純形
未来時制		不完了	たべ　よう			不完了		たべ（たべる）
		完了	たべて　いよ　う［おろ］			完了		
	単純形	複合形		単純形	複合形			
現在時制	たべる	不完了	たべ　*いる［おる］	たべ（ろ）	不完了	たべ　*いろ［おれ］		
		完了	たべて　いる［おる］		完了	たべて　いろ［おれ］		
	たべた	不完了	たべ　*いた［おった］		不完了			
		完了	たべて　いた　おった		完了			

非終止形									
分詞1（継続）			分詞2（仮定）			分詞3（並列）			
単純形	複合形		単純形	複合形		単純形	複合形		
たべ	不完了	たべ　*い［おり］	たべれば	不完了	たべ　*いれば［おれば］		不完了		
	完了	たべて　*い　おり		完了	たべて　いれば　おれば		完了		
たべて	不完了	たべ　*いて［おり］	たべたら	不完了	たべ　*いたら［おったら］	たべたり	不完了	たべ　*いたら［おったら］	
	完了	たべて　いて　おって		完了	たべて　いたら　おったら		完了	たべて　いたり　おったり	

第2章　単文構造

前章の統語構造の公式に従い、ヒンディー語の単文の例を挙げる。まずは、名詞述語文について観察する。

2.1　名詞述語文

主語の S、述語名詞の PredN、およびコピュラ動詞から構成される例文をここで挙げる。

(1)　maiṃ　chātr　　hūm̐.
　　僕　　学生　コピュラー現在
　「僕は学生だ。」

(2)　maiṃ　gāīdāī　kā　chātr　　thā.
　　僕　　外大　　の　学生　コピュラー過去
　「僕は外大の学生だった。」

これらの文は、現在時制の「僕は学生だ。」と過去時制の「僕は学生だった。」である。日本語の名詞述語文の場合、コピュラの機能として、「です／ます」調と「だ」調がある。前者は丁寧さを表す特殊な機能を併せ持つ。命題を示すためには、丁寧さを冗長的要素なので、本論文では、必要がない限り、後者の「だ」調で記述する。

この、「僕は学生」というのは、「A＝B」が成り立つように PredN が主語の場合である。日本語では、目的語の「僕（の注文）はコーヒーだ。」や斜格名詞の「妹は（今）学校だ。」も PredN で表わされる。表面上は格助詞が付いていないので分かり難いが、この PredN は「僕≠コーヒー」や「妹≠学校」なのではなく、あくまで「コーヒーを」という対格であり、「学校に」という位置格なのである。道具格ならば、「俺はナイフでだ。」のように、名詞に「で」が付く場合と「おまえは、何でやる気だ。俺はナイフだぞ。」のように「で」を付けなくてもよい。属格は、「これは会社のだ。」のように「の」格がはっきり表示される。すなわち、日本語では、名詞が PredN になるものに、主格，目的格（直格），位置格（斜格）さらに道具格まで含まれるわけである。一方のヒンディー語は、上に挙げたように、主格のみである。対格の場合には、他動詞を伴わないで言うことはない。

斜格の中の位置格であっても、後置詞なしでは使用できない。

(3) *maiṃ Dillī hūm̐.
僕 デリー コピュラー現在
「僕はデリーです。」

(4) maiṃ Dillī meṃ hūm̐.
僕 デリー に コピュラー現在
「僕はデリーです。」

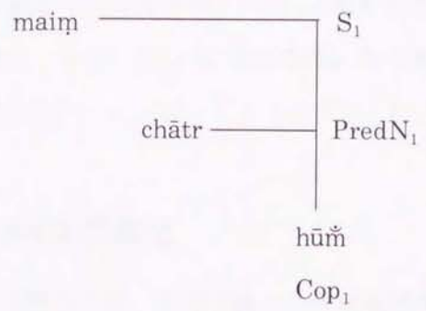
このように、ヒンディー語では、名詞そのものを PredN（Locative）として使用できないのである。「デリーにいる」という意味の「僕はデリーです。」では、必ず後置詞を付ける必要がある。この場合は、（4）のように位置を表わす ‘ meṃ ’ が付くことになる。

また、これに関連して、斜格に含まれる属格についても若干説明してしておく。PredN として属格が来る場合には、日本語もヒンディー語も属格後置詞を要する。日本語の「これは私のだ。」に当たる ‘ yah merā hai. ’ がその代表的なものである。これと同様に、（3）を属格の PredN にすると、適格な文になる。

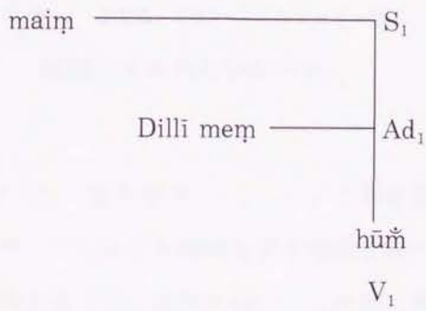
(5) maiṃ Dillī kā hūm̐.
僕 デリー の コピュラー現在
「僕はデリーの者です。」

こうなると、「僕」と「デリー」の間に属性が生じる。したがって、「僕はデリーの者である。」,「僕はデリーの出身である。」という意味に使用される。ヒンディー語は日本語に比べ、格関係を明示する傾向にあることがうかがえるが、詳細は次章で考察することにする。

この名詞述語文の構造図を以下に挙げて、それぞれの構造、および語の文法関係と格標示を観察してみる。まずは、典型的な自動詞を使用した（1）を構造図にして観察する。

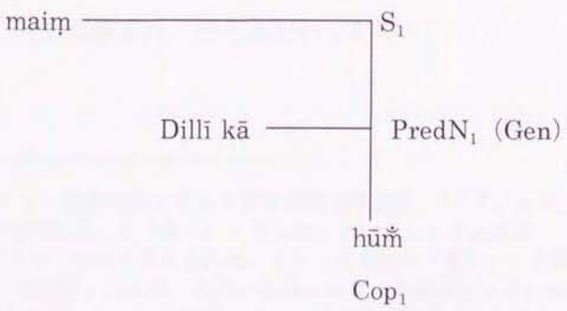


「私」が主語（S）として表示され、「学生」は述語名詞（PredN）、そして「だ」に当たるコピュラが Cop と表示される。ヒンディー語の PredN のデフォルト格は、主格（Nominative）である。したがって、（3）の非文は言えない。（3）に対し同じ意味になる（4）の場合は、構造図が少々異なる。



確かに構造自体は（3）と同じように見えるが、これは、後節のコピュラが存在を表わす動詞として働く自動詞文になるのである。

また、（5）は、名詞述語に属格の後置詞を伴う例である。



この場合のコピュラは、「だ」に相当するものになる。「これは私の（もの）だ。」,「世界は君の（もの）だ。」に当たる言い方である。これについては、次章の名詞修飾構造も参考にされたい。

2.2 形容詞述語文

ここで扱うのは、前節で扱った名詞述語文の名詞が形容詞に代わる、形容詞述語文である。述語としての形容詞は PredA になる。

(6) vah xūbsūrat hai.
彼女 美しい コピュラ－現在
「彼女は美しい。」

(7) vah bahut pyārā thā.
彼 とても かわいい コピュラ－過去
「彼はとてもかわいかった。」

（6）は、「彼女は美しい。」という形容詞の叙述文である。ヒンディー語ではコピュラが付くが、コピュラが時制を示す機能を持つからである。しかし、日本語の場合はコピュラに相当する「だ」は付かない。これは、形容詞の「－い」が現在時制の機能を併せ持つからである。また、（7）の過去時制の場合も、「だ」の過去形「だった」を付けることはない。[1]

日本語の形容詞の場合、通常、以下のようになる。

(8) このお菓子は、とてもおいしい。
このお菓子は、とてもおいしかった。

---

[1] ヒンディー語を母語とする者が日本語を学ぶ際、「です／ます」調から習うため、現在時制「美しいです」を過剰応用して「美しい＋でした」ということがあるが、これは母語の統語構造（形容詞＋コピュラ）の干渉が原因と考えられる。また、日本語の「美しい」と同義で「きれい」がよく使用されるが、「きれい（綺麗）」は本来、名詞の範疇にあり、形容詞化するためには「－な」という接辞を付ける。しかし、ともに同じ「－い」語尾なので、異分析の対象となっている。形容詞の過去時制の屈折形は、本来「い → かった」であるが、実際、日本語を母語とする者でさえ、口語では「きれい」に「－かった」語尾を付加し「きれいかった」ということがままある。

形容詞が述語となって過去形を作る場合、日本語では「おいしい」の語尾「－い」が屈折し、連用形の「－かっ」に変わった上、過去時制を示す接辞「た」が付加される。

「だ」と「です」をコピュラの位置に付加すると以下のようになる。

(9)　*このお菓子は、とてもおいしいだ。

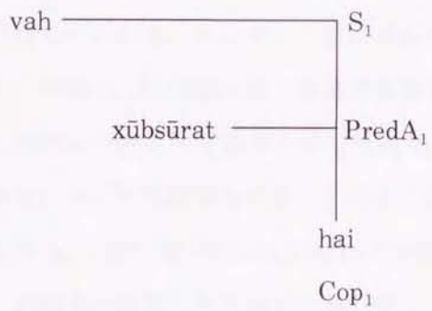
　　?このお菓子は、とてもおいしいだった。

(10)　このお菓子は、とてもおいしいです。

　　?このお菓子は、とてもおいしいでした。

「だ」を現在時制を表わすものに使用するのは、非文である。しかし、「です」の場合は非文にはならない。これは、「です」が時制を表すのではなく、丁寧さを表すモダリティの機能に使用されているからである。命題の部分は「このお菓子はおいしい／おいしかった」であり、オプションとして丁寧さのモダリティを付加しているのである。したがって、上記の命題「このお菓子はおいしい／おいしかった」に「です」を付けても、非文にならない。

形容詞述語文の典型的な構造図を以下に示しておく。



先の例文（6）を構造図にしてあるが、「彼（女）」が S で、「美しい」が PredA となる。日本語と違い、ヒンディー語の形容詞に時制を表示する機能はないため、コピュラに時制表示機能を負わせているわけである。

2.3　動詞述語文

ここでは、動詞を述語とする単文を観察する。動詞の種類により、自動詞，他動詞に分

けて、それぞれの例文を観察する。

2.3.1 自動詞

まずは、平叙文に自動詞が使用されている例を挙げる。

(11) maiṃ kal āp ke ghar āūm̃gā.
彼 明日 あなた の 家 来る－未来
「僕、明日お宅に行きますよ。」

(12) ab maiṃ caltā hūm̃.
今 私 進む－未完了 コピュラ－現在
「さあ、行こうかな。」

[Cācā Caudharī aur pāp śo : 33]

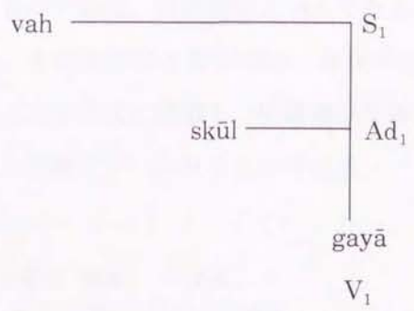
(13) vah skūl gayā.
彼 学校 行く－過去
「彼は学校に行った。」

(11) は、自動詞の未来形を使用した例である。日本語では、通常、話し手を起点にするので「行く」になる。ヒンディー語は英語と同じく、聞き手の側からみた行為になるので「来る」を使う。[2] (12) は、前章でも詳しく述べたが、現在複合時制の例である。ただし、この例は、次にすぐ取りかかる行為に対して使われているものである。「未完了の状態にある」という現在複合形を、このような、いわば近未来の行為に対して使用していることもある。(13) は「行った」という単純過去の例である。

以下に、自動詞を使用した平叙文の典型例として (13) の構造図を挙げる。

---

[2] 日本語でも、九州北部辺りの方言では、この場合「来る」を使用するようである。



この文では、「彼」が S、「学校」が斜格名詞となっているので、オプションの副詞修飾句（Adverbial phrase, Ad）になり、動詞は V として表示される。

次に、存在文の例を挙げる。

(14) kamre meṃ cār kursiyāṁ haiṃ.
部屋 に 4 椅子 コピュラー現在

「部屋に椅子が４つある。」

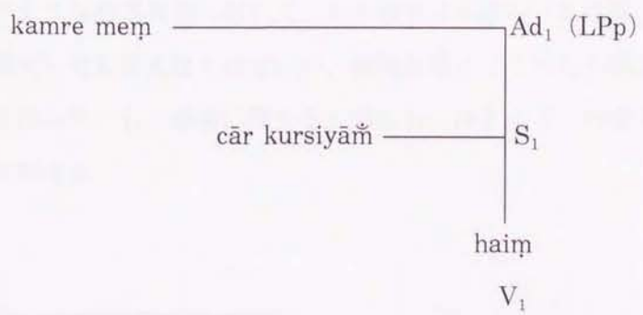
(15) Kiśtiyā meṃ kuch kamī thī kyā?
キシュティヤー に 少し 欠落 コピュラー過去 疑問辞

「キシュティヤーには、何か欠陥があったのか。」

［映画：Aṃkur］

(14) は、「～に S がある。」という純然たる存在文である。(15) は、同じ存在文だが、位置格に人が、主語に抽象名詞が使用されている。文末の疑問辞 kyā ' は、通常、文頭に現われるが、日本語の疑問を表わす終助詞「か」のように、文末にくることもある。

(14) を例に、存在文の構造図を観察してみる。

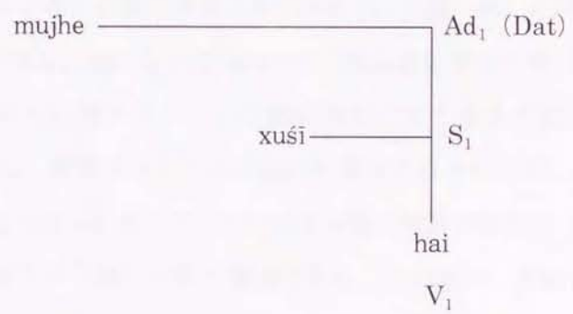


場所を表わす語は、文法関係上 Ad であるが、格は位置格標示となる。この Ad が文頭に置かれ、その後に S と V が来る。存在文なので、コピュラは動詞扱いになる。

また、この存在文に類似し、位置格が与格になり、抽象名詞が主語になる構文がある。いわゆる与格構文といわれるものである。

(16) mujhe xuśī hai.
私に 喜び コピュラー現在
「私は嬉しい。」

この与格構文は、抽象名詞として感情を表わすものを用いた例である。これは、論理的には、「私に嬉しさがある」となる。この「嬉しい」も含め、喜怒哀楽の感情表現の場合、ヒンディー語ではこの構文を取る。先の存在文とよく似たこの与格構文の構造図を以下に挙げる。



存在文と違う点は、位置が場所から人に変わる点である。文法関係上同じ Ad 扱いでも、場所を表わす語は位置格（LP p）だったのに対し、この場合は、与格（Dative, Dat）標示である。存在文と同じく、コピュラは動詞扱いになる。

このような感情表現に対して、文字通り日本語の「私は嬉しい／悲しい」のような形容詞述語文[3] でも言えなくはないが、感情表現にはこちらの構文が使用される傾向にある。喜怒哀楽以外でも、感情に関するものにも、ほとんどこの構文を用いる。代表的なものを以下に挙げる。

[3] この場合、「S＋PredA＋Cop」の ' maiṃ xuś hūṁ. ' になる。

(17) mujhe tujh se pyār hai.
私に おまえ に対して 愛 コピュラー現在
「僕は君が好きだ。」

(18) mujhe tum se mohabbat ho gaī.
私に 君 に対して 愛 なる一語幹 行く一過去
「僕は君に惚れてしまった。」

(19) mujhe tum se nafrat huī.
私に 君 に対して 嫌悪 なる一過去
「私、あんたが嫌になった。」

(17), (18) は、「愛」という抽象名詞を主語に立てている。(17) の方が、「私には君に対して愛がある」という存在を表わす与格構文であり、これが、日本語の「君が好きだ／君を愛している」の動詞表現に使用される。(18) は、存在文のコピュラ動詞が本動詞 ‘ honā ’「なる，生じる」に代わって「私に君に対して愛が生じる」となっている。日本語の「僕は君に惚れた」という動詞表現に当たるものになる。この例では、本動詞 ‘ honā ’ に、演算子として別の動詞が複合されているが、これについては第７章で扱うので、ここでは「しまった」という日本語の演算子を当てるにとどめておく。(19) は、抽象名詞が違うが (18) と同じ構造である。この場合、愛もしくは嫌悪の対象が ‘ se ’「に対して」で表示される。

ヒンディー語では、この与格構文を母体にし、感情を表わす抽象名詞のみならず、他の抽象名詞を主語として用いる。以下に挙げる、嗜好や記憶に関する表現もその１つである。

(20) mujhe kelā pasaṃd hai.
私に バナナ 好み コピュラー現在
「私はバナナが好きだ。」

(21) mujhe tārīx yād nahīṃ hai.
私に 日付 記憶 否定辞 コピュラー現在
「私は日付を覚えていない。」

[Prayog aur prayog : 259]

（20）が嗜好に関する表現である。ヒンディー語は与格構文を取るとはいえ、日本語の「A は B が好きだ。」もしくは「A は B が好みだ。」の表現と統語上ほぼ一致している。（21）は記憶に関する表現である。上の（20）の構造と同じだが、抽象名詞が「記憶」になっている。（20）は「B が好き」,「B が好み」のように、日本語でも、「B が PredN だ」という構造が成り立つ。しかし、（21）については、日本語では「*B が記憶だ」という具合に、「B が PredN だ」という構造は成り立たない。この場合、日本語では「A に B の記憶がある。」という具合に「B」と「記憶」を属格の「の」でつなぐか、「A は B が記憶にある」のように、「記憶」に格助詞「に」を付けて斜格名詞（格標示は位置格）にしてしまう必要がある。一方、ヒンディー語には、あたかも「B」が「記憶」と同格であるかのような「B が PredN だ」という形式も、属格後置詞で「B」と「記憶」をつなぐ形式もある。コピュラ動詞の代わりに本動詞 ‘ ānā ’「来る」が使用されている例にそれがみられる。

（22） āp ko yahāṁ kā khānā pasaṃd āyā?
あなた に ここ の 食べ物 好み 来る－過去
「あなたはここの食事、気に入りましたか。」

（23） mujhe ghar kī yād āyī.
私に 家 の 記憶 来る－過去
「私は家のことを思い出した。」

［Prayog aur prayog : 259］

（22）は、「好みが来る」ということになり、日本語の「気に入る」の表現に当たるものとなる。（23）は、「記憶が来る」ということから、日本語の「（自然に）思い出す」という動詞表現に当たるものになる。この例文中で、先に述べた対象と「記憶」という抽象名詞を属格でつないだ形式が観察される。（22）に使用されている抽象名詞 ‘ pasaṃd ’「好み」の場合、対象の名詞とこの抽象名詞が属格でつながれることはないが、（23）については、属格でつなぐ形式だけでなく、上の（22）と同じ「B が PredN だ」の形式も用いることができる。

ところで、「B が PredN だ」の PredN に抽象名詞が入る同じ構造であるにもかかわら

ず、「記憶」の場合には、属格でつながれるパターンと、あたかも同格のように並列するパターンが存在するのはなぜであろうか。先にも述べた通り、「好み」の場合、属格でつなぐことはないが、実際、「バナナの好み」というのは、日本語でもおかしな感を受ける。「私の好み」のように B が好みの行為者であれば問題ないが、好みの対象を属格で標示することはない。つまり、この場合、バナナと好みが属性を持った関係にはならず、あくまで B=A なのである。一方の「記憶」は、B という「記憶」ではあるが、B は実際、記憶の一部として存在する。したがって、包括関係にあり、属性が生じるため属格標示も可能なものと考えられる。また、同時にこれは、「B は PredN」の構造を持つが、日本語でも「B が記憶にある。」と同じで、この「記憶」という名詞は、斜格名詞、すなわち「B が PredN（Locative）」であると考えられる。抽象名詞は異なるが、以下の例を挙げる。

(24) itnī baṛī botal āp ke kis kām ātī hai?
こんな 大きい ビン あなた の 何の（斜） こと 来る－未完了 コピュラ－未来

「こんな大きなビンが、何の役に立つのですか。」

[Cācā Caudharī 7 : 28]

「B が A の役に立つ」という意味を表わす時、「B が A の仕事に来る」という言い方をするが、通常、この「仕事」に当たる ‘ kām ’ は、位置格の後置詞 ‘ meṃ ’ を伴う。この例文では、この後置詞はみられないが、斜格名詞であることは、修飾語の形態から見て取れる。これと同様の構造で、はっきり抽象名詞に後置詞を付けた例が、以下の例である。

(25) yah bāt merī samajh meṃ nahīṃ ā rahī.
この 話 私の 理解 に 否定辞 来る－語幹 いる－完了

「私にはこのことが分からない。」

ここでは、抽象名詞として ‘ samajh ’「理解」が使用されている。「B が A の理解に来ない。」ということから、「理解できない，分からない」という意味になる。ここでは、はっきり抽象名詞に後置詞が付加されている。これを、先の（21）のような構造にすると、抽象名詞から後置詞が外れてしまう。

(26) mujhe yah bāt samajh nahīṃ ā rahī.
私に この 話 理解 否定辞 来る－語幹 いる－完了
「私にはこのことが分からない。」

(26) の「この話」と「理解」は、見た目には「B が PredN だ」のようであるが、実質的には (25) が変形した[4] もので、PredN もゼロ格の斜格名詞 (Locative) と考えられるのである。(21) の「私には B が記憶にない／来ない」の「記憶」もこれらと同様に、PredN (Locative) であると推察される。

ところで、ここまでの例だけでも、動詞 ‘ ānā ’「来る」をよく使うことが分かる。ヒンディー語では、いろいろな意味を創出するのに使用される基本的な動詞になっているので、この動詞を使用した例をもう少し挙げておく。

(27) yadi tum abhyās karte rahe to agle olampik kheloṃ meṃ
もし 君 練習 する－未完了 いる－仮・過去 小詞 次の オリンピック 大会 に
golā pheṃkne meṃ zarūr pratham āoge.
ボール 投げる－不定 に きっと 一番 来る－未来
「もし練習を続けたら、オリンピックの砲丸投げできっと一番になれるぞ。」
[Cācā Caudharī 7 : 76]

(28) kām ko ṭālne kā ḍhaṃg tumheṃ xūb ātā hai?
こと を 避ける－不定 の 方法 君に 十分（に） 来る－未完了 コピュラー現在
「ことを避ける方法は、おまえ、十分に考えつくだろう。」

(29) āp ko hiṃdī ātī hai?
あなた に ヒンディー語 来る－未完了 コピュラー現在
「あなたはヒンディー語ができますか。」

---

[4] (24), (25) は共に、A に当たる人が抽象名詞と属格でつながれているが、(26) では、A だけが独立して与格標示され、抽象名詞がゼロ格の斜格名詞となる。

(27) は、「おまえが一番にくる」で「一番になる」、(28) は、「方法が君にくる」ことで、「方法を君が考えつく／思いつく」となる。(29) は (28) にも似ているが、「ヒンディー語が分かる／できる」という意味に使用される。このように、ヒンディー語の ‘ ānā ’「来る」は、という人の移動のみならず、ものや抽象名詞（前節、名詞の述語複合を参照。）にも使用され、さまざまな意味を作り出す。その他、「テレビに出る」,「熱が出る」も ‘ ānā ’ を使用する。また、若干、比喩的ではあるが日本語の「頭にくる／腹が立つ」のような怒りを表わすものとして、「怒りがくる」という表現をすることもある。[5]

最後に、存在文もしくは与格構文の類のものとして、以下のような例を挙げておく。

(30) āp kā svāgat hai.
あなた の 歓迎 コピュラー現在
「ようこそ。」

「あなたの歓迎がある。」ということから、「あなたを歓迎します。」つまり「ようこそ」に当たる表現になる。日本語のように、「歓迎する」という動詞を使用することなく、「抽象名詞が存在する」ということにより、日本語の動詞に当たる部分を表わすことが、ヒンディー語では多い。また、この文では、「あなたの歓迎」の部分が「あなたを歓迎すること」に当たり、属格の後置詞の部分が目的語を内包してしまう、いわば、文法関係の重層性が垣間見られる重要な点である。（これについては、次章の名詞修飾構造のところで詳細に議論する。）

2.3.2 他動詞

ここでは、他動詞が使用される例文を挙げる。他動詞の場合、未来時制, 現在時制 vs. 過去時制で構文を違えることに注意しながら例を観察する。

---

[5] ただし、いくつかある『怒り』という抽象名詞のうち ‘ gussā ’ のみがこの動詞をとる。この ‘ ānā ’ と共起する抽象名詞には、アラビア・ペルシャ系の単語が多い。（例：‘ buxār ’「熱」, ‘ yād ’, ‘ pasaṃd ’）

(31) maiṃ aur bhaiṃs kharīdūm̃gā.
私 もっと 水牛 買う－未来
「僕はもっと水牛を買うぞ。」

(32) tū in aṃḍoṃ kā kyā karegā?
彼 これらの 卵（複） の 何 する－未来
「おまえ、この卵をどうするつもりだ。」

[Cācā Caudharī 7 : 84]

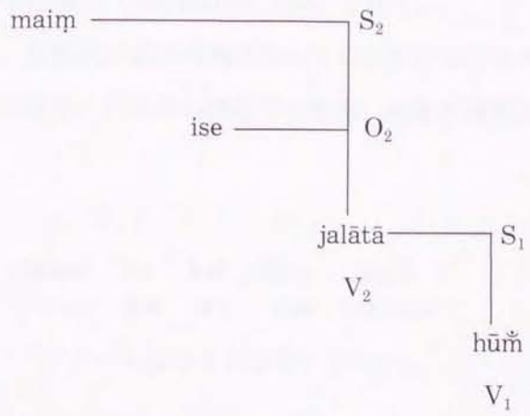
(33) maiṃ ise jalātā hūm̃.
私 これを 燃やす－未完了 コピュラ－現在
「私がそれに火を点ける。」

[Cācā Caudharī 7 : 32]

(34) maiṃ apnī bahan ko yah sāṛīi dūm̃gī.
私 自分の 姉（妹） に この サリー 与える－未来
「私は、妹にこのサリーをあげよう。」

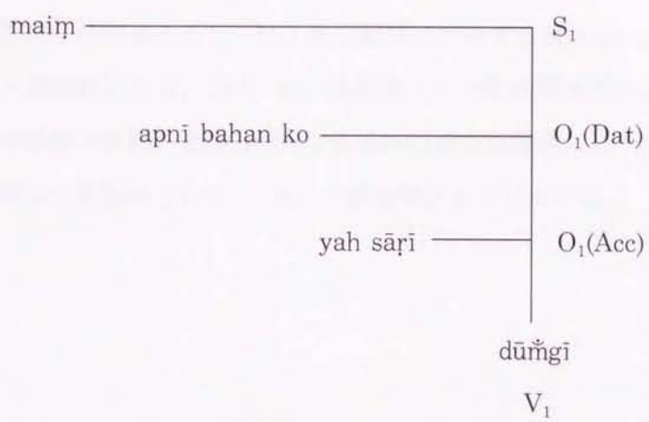
(31) は、他動詞の未来形を使用した例である。(32) も、同様である。これは、日本語の「～をどうする」という決まり文句になっている。文字通りは、「この卵の何をするつもりだ。」になっており、「卵」と「何か」が属性のあるものとして属格で結ばれている。文脈では、「この卵のオムレツを作るつもりだ」と答えるので、これも「卵」と「オムレツ」が属性のあるものとして属格でつながれる。一方、日本語では、「卵」を対格標示し、「どうする」となる。その答えとしては、「卵をオムレツにする」とするか、「卵」と「オムレツ」の格標示を変え、「卵でオムレツを作る」にもすることができる。(33) は、(11) の自動詞でも観察されたが、次にすぐ取りかかる行為に対して現在複合形が使われている例である。

この例文を、他動詞構文の代表として、以下に構造図化する。



この例文では、現在複合形を使用しているため、構造図全体は、たとえ単文であっても二層構造になる。第二層が、他動詞文の「S_2 O_2 V_2」の命題を表わす。V_2の形態が未完了分詞であることから、命題の行為は不完了なものになる。その命題全体が第一層で S_1 になり、コピュラ動詞の「いる」にかかる。これが、現在不完了を示すメカニズムである。「燃やす，点ける」という行為が未だ完了していないため、すぐ取りかかる行為、すなわち近い未来に対しても使用可能な理由がここにある。この未完了分詞＋コピュラ動詞を一括して動詞句とし、純粋な単文として処理することもできるが、本論文では、この種の複合形に関しては、語の持つ意味を重視し、層を分けて分析をする。

もう１つ、二重目的語を取る（34）の例文も、以下に構造図化する。



目的語が２つあるこの構文では、間接目的語が与格標示（Dative, Dat）され、直接目

的語が対格標示（Accusative, Acc）される。

次に、他動詞が過去時制になっている例を挙げるが、前章の分析の前提でも述べたように、この場合、行為者の格標示が能格、対象が絶対格になる、能格構文を形成するものになる。

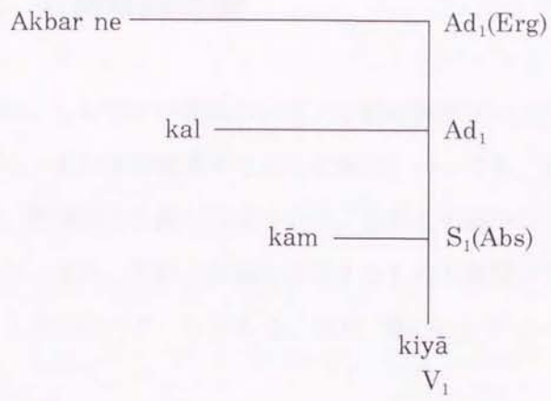
(35) Akbar ne kal kām kiyā.
アクバル 能格 昨日 仕事 する－過去
「アクバルは昨日仕事をしました。」

(36) Akbar ne kal is kitāb ko paṛhā.
アクバル 能格 昨日 この 本 を 読む－過去
「アクバルは昨日この本を読みました。」

(37) Vinod ne mujhe ek ām diyā.
ヴィノード 能格 私に 1 マンゴー 与える－過去
「ヴィノードは私にマンゴーを一個くれました。」

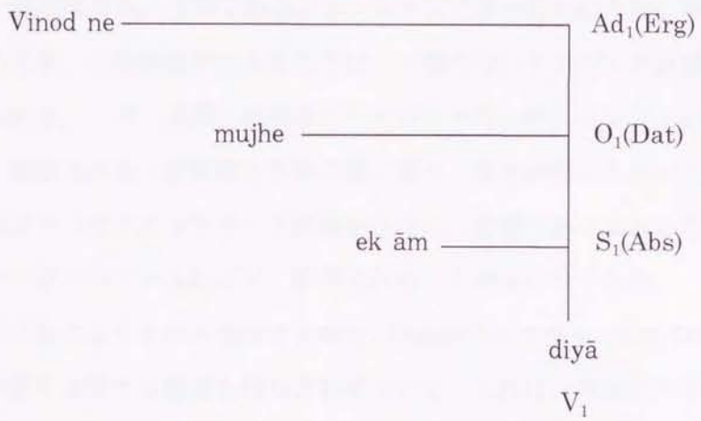
(35) が、通常の能格構文である。動詞の形態が一致を起こすのは、能格の方はなく、絶対格の目的語の方である。(36) は、絶対格になるはずの「本」に与格後置詞 ‘ ko ’ が付いている例である。論理的には目的語であり、構文上は絶対格であるはずの「この本」に与格後置詞を付加すると、その名詞に定性を加えるという。詳細は後章で議論するが、ここでは、主語以外に強調を置くためのものと解しておくことにする。直接目的語にこの与格後置詞が付加されると、性・数を動詞に付与する語がない。その場合は、デフォルトの男性・単数形になる。(37) は、目的語を２つ取る構文である。前者の間接目的語である人が与格標示され、直接目的語である物は絶対格標示になる。

能格構文の典型例として、(35) の構造図を以下に挙げる。



能格構文では、能格標示の「アクバル」が副詞修飾句（Ad）、絶対格標示の「仕事」が主語（S）になる。「昨日」はオプションであるが、斜格名詞の修飾語なのでAdになる。動詞の性・数は、主語である「仕事」によって付与される。

二重目的語を取る（38）の能格構文の構造図は以下のようになる。



二重の目的語を取る文が能格構文になると、行為者はAd、間接目的語，直接目的語はそれぞれ、OとSになる。動詞の形態は、主語の「マンゴー」に性・数一致する。

以上のように、ヒンディー語の単文を観察したが、構造図からも分かるように、ほぼ一層から構成される単層型のものである。これらを基盤に、複文もしくは名詞修飾構造が形成されるが、それらについては、これから詳しく観察していく。

第３章　名詞修飾構造

本章では、ヒンディー語において、名詞修飾がどのようなメカニズムで行われるかを観察していく。名詞修飾構造すなわち名詞句といっても、統語上では名詞と名詞を複合するものから、形容詞と名詞から成るもの，分詞と名詞から成るもの，また、定形節と名詞から成るもの、また、名詞と名詞を複合するものの異種として、名詞を属格後置詞でつなぐものという５つのパターンがある。SOV 型のヒンディー語では、通常、修飾語は名詞の前にくる。

名詞と名詞を複合するものとしては、複合語形成の一過程として捉え、次節で例を観察するに止める。本論文では、語形成のメカニズムまでは立ち入らない。

形容詞と名詞で構成されるパターンも、先の名詞の場合と同じく、名詞の前に置かれる。形容詞そのものではなく、不定代名詞のような、ある種の代名詞を形容詞的に使用したものもこの構造に含まれる。

形容詞的な働きをするものとして分詞があり、分詞で名詞を修飾するパターンもヒンディー語にはある。分詞である以上、元々文であったものを非定形節にして名詞を修飾させるのだが、この構造が出てきたのは、一説では、ドラヴィダ諸語の影響を受けたためともいわれる。一方、実際、使用率としてはより高いが、インド・ヨーロッパ語族の諸言語でよく観察される、定形節を名詞の後に置く、関係詞節がある。それを考えると、非定形節の構造が（たとえドラヴィダ諸語から受けた影響であったとしても）ヒンディー語では使い分けをされているわけで、駆逐されることがないのである。

定形節により名詞を修飾する場合、関係詞だけでなく、同格の接続詞を名詞の後に置き、定形節を後置する構造も持ち合わせている。これは、非定形の不定詞と属格後置詞，名詞の組み合わせと対応する。本論文では、定形節，非定形節を使用する構造をそれぞれ、Type Ⅰ，TypeⅡとして大きく区別する。

名詞複合の異種のパターンとして、属格の後置詞を使用した「A kā B」という構造がある。日本語の場合、「A の B」という属格後置詞を伴った接続のパターンは、A と B の属性のみならず、文法関係の重層性を反映する言語形式および構造である。「私の好きな人」，「神の思し召し」，「政府の批判」など、属格の「の」が併せ持つ文法関係は主語，目的語が埋め込まれる。他にも、例えば、日本語では「テーブルのコップ」，「デリーの学校」のように、ヘッドにかかる名詞が場所、すなわち位置を表す場合（本来は「テーブルにあ

るコップ」,「デリーにある学校」）でも「の」での代替が可能である。[1] 前章の単文構造のところでも触れたように、ヒンディー語も同様に主語と目的語を内包して属格後置詞を使う。目的語も含め、どの格までをこの属格後置詞で覆うか、後節で詳しく観察することになる。

3.1 名詞句の統語構造的類型

まずは、ヒンディー語の名詞修飾構造の例を、上に述べた類型に従いながら観察する。

3.1.1 代名詞＋名詞

代名詞の中には、形容詞的に名詞を修飾するものがある。第 1 章のところでも観察したが、不定代名詞を修飾させる「どれかの本」,「すべての本」,「あなたがた皆」、疑問代名詞を修飾させる「何の本」,「どんな娘」、指示代名詞を修飾させる「その本」,「あの男」、数量代名詞のうち、数詞を修飾させる「二冊の本」,「五頭の馬」や不定数量詞を修飾させる「数冊の本」,「数人」などである。

日本語の構造と照らし合わせると、疑問代名詞，指示代名詞の場合がヒンディー語と同じ修飾形式になる。不定代名詞もしくは数量代名詞のように、数に関わる代名詞の場合は、日本語は逆の構造を取ることがある。例えば「二冊の本」というところを「本二冊」,「本全部」という具合である。構造の分析は後節に譲るので、ここでは例を挙げるに止めておく。

3.1.2 名詞＋名詞

名詞の複合といっても、音声ではその区切りが明確にはならないが、文字に起こした場合、可視的に３つの段階に大別できる。まず、二語を独立した形で扱う二語並列型，完全な複合語を成すに至らないため、言語表記の補助符号，ハイフンを二語の間に挟むハイフネーション型，そして完全に一語と化した一体型である。ただし、ヒンディー語では正書法が不確定なため、この３つの段階はそれぞれの恣意的な選択に依存することもある。し

---

[1] 日本語は、被修飾語もしくは句を、この属格を表す格助詞「の」を付加してヘッドに当たる名詞を修飾させ得る。その場合、文法関係もしくは格標示の制約が比較的緩やかなため、逆にヒンディー語にする場合、意味のとおりにくい逸脱文を作り易くなる。

たがって、ここに挙げている例は近似的な範疇のものと考えていただきたい。

3.1.2.1 二語並列型

二語を並列させる型には、以下のような例が見られる。

sattū yagya	:	サットゥー供犠
dharm saṃkaṭ	:	教義の危機
sevā mārg	:	奉仕の道

これらは、属格後置詞を伴わない名詞の並列パターンである。２つ以上の名詞同士が概念の一体化を起こしつつある場合、属格後置詞を必要としなくなるのは通言語的に見られる現象である。日本語では、名詞について一語一語を独立した形で書くことはないので、この型はない。

3.1.2.2 ハイフネーション型

次に、ハイフンで二語をつないだ、ハイフネーション型の例を挙げる。

mātā-pitā	:	父母（母＋父）
pati-patnī	:	夫婦（夫＋妻）
tīr-kamān	:	弓矢（矢＋弓）
sahan-śakti	:	忍耐力（忍耐＋力）
subhadrā-haraṇ	:	スバドラー略奪（スバドラー＋略奪）
bharaṇ-poṣaṇ	:	養育（食べさせること＋育成）
khān-pān	:	生計（食べること＋飲むこと）
dekh-rekh	:	監督（見ること＋エコーワード）
khānā-pīnā	:	食事（食べること＋飲むこと）

ハイフネーション型は、第一名詞・第二名詞にくる名詞の意味により、同義語群，エコーワード群など下位分類できるが、現時点では語義もしくは意味の観点に立った下位分類を行ってないのでここでは明確に区分けしない。ここで特記すべきことは、意味を持たないエコーワード群が、二語並列型のように別々に書かれたり、下に示す一体型のように一体化してしまうことはない。全体的に見た時、ヒンディー語ではこのパターンの名詞の複合が多いようである。

3.1.2.3　一体型

niyambhaṅg	:	規則違反（niyam：規則＋bhaṅg：違反）
bailgāṛī	:	牛車（bail：雄牛＋gāṛī：車）
kulnām	:	苗字（kul：家族＋nām：名前）
yagyakuṇḍ	:	供儀を入れる窪み（yagya：供儀＋kuṇḍ：窪み）
dhūmrpān	:	喫煙（dhūmr：煙＋pān：吸うこと）
patrottar	:	返信（patr：手紙＋uttar：返事）

一体型は、概してヒンディー語の祖語であるサンスクリット出自のものが多い。連声規則（サンディー）により、２つの語を１つの語に一体化させることができるからである。これは、語彙同士が一体化して、個々の名詞の意味とは別のものを創造する操作である。日本語も比較的自由に漢字を音読みしてを熟語を形成するが、それによく似ている。しかし、一体型といえど、‘ bail-gāṛī ’, ‘ kul-nām ’, ‘ dhūmr-pān ’ のように、別々に書くことも多々あるので、一様に一体型であるとは言い切れない。

3.1.3　名詞（Dependent）＋　後置詞　＋　名詞（Head）

ここで扱うのは、名詞と名詞の間に後置詞を挿入する構造である。代表的な構造として、日本語でいう「B の A」という属格後置詞を挟んだもの（もしくは、B を含む所有代名詞とヘッド名詞 A）が挙げられよう。この構造において、ヘッドとなる名詞の出自により文法機能もしくは格の機能の重層性（後述）が観察される。

まずは、普通名詞をヘッドとして用いる例から観察する。

3.1.3.1　名詞　＋　属格後置詞　＋　普通名詞

sāhitya kī pustak	:	文学の本
dṛtarāṣtra kā moh	:	ドリタラーシュトラの愛情
rājbhavan kī śobhā	:	王宮の美しさ
kuch din(oṃ) (ke) bād	:	数日（の）後（斜格名詞）
merī pustak	:	私の本（所有代名詞＋名詞）
tumhārā kām	:	君の仕事（所有代名詞＋名詞）

これらのうち、最後の３つは所有代名詞の例である。なお、ここには挙げていないが、

所有代名詞は他に一人称複数，二人称単数に残っている。また、ヘッドが斜格名詞（4例目）の場合、日本語の「～の後（に）」，「～する矢先（に）」，「～の前（に）」と同じ構造であり、これら「後」，「矢先」，「前」もまた表層的には形態上、直格と区別がないが、実際は斜格と考えられる。ヒンディー語にもこのような構造をした斜格名詞句は数多く存在する。以下に若干例を挙げておく。

us	ke（se）	bāhar 外（斜格）	:	「その外に（それより外に）」
us	ke	aṃdar 内（斜格）	:	「その中に」
us	ke	hāth 手（斜格）	:	「彼の手で」
us	kī	jagah 場所（斜格）	:	「その代わり（に）」
us	ke	kāraṇ 理由（斜格）	:	「そのために，彼のせいで」
us	ke	pās 傍（斜格）	:	「その傍に」
us	ke	sāmne 面前（斜格）	:	「その目の前に」
us	kī	or / taraf 方向（斜格）	:	「その方に，彼の方に」
us	ke	kināre 岸（斜格）	:	「その端に」

ここに挙げた例の中でも、ゼロ格斜格名詞句になるものと後置詞を伴った名詞句になるものがある。‘ us kī jagah ’「その代わり」に使用されている場所という語彙の替わりにサンスクリット出自の‘ sthān ’を使用すると、‘ us ke sthān par ’となり、構造としては日本語の「その代わりに」のように、後置詞の‘ par ’を付けなければならなくなる。同様に、‘ us ke kāraṇ ’「そのため」も、語彙をアラビア語出自の‘ vajah ’に替えると、‘ us kī vajah se ’（しばしば‘ us vajah se ’ただし「そのため」の場合のみ。）という具合に後置詞‘ se ’「から／よって」を付ける。

また、斜格名詞の位置に斜格形容詞もくることがある。例えば、‘ us ke viruddh ’「彼に抗して」，‘ us ke āge ’「その前方に」，‘ us ke pīche ’「その後方に」，‘ us ke pahle ’「その前に」（‘ ke ’に代わり‘ se ’になることもある。日本語の「それより前」に同じ。）のような句が、それに当たる。

3.1.3.2 名詞 ＋ 属格後置詞 ＋ 動詞派生名詞

ここでは、前節のヘッド名詞が、普通名詞から抽象名詞も含めた動詞派生名詞に変わる例を扱う。構造は、先と同じく「B の A」の、属格後置詞を使用したものになる。

ヒンディー語では、この種の構造の例は枚挙にいとまがないが、いくつか取り上げて、以下に示す。

baccoṃ kī rakṣā	:	子供の守ること rakṣ-> rakṣā
pāṇḍavoṃ kī upekṣā	:	パーンダヴたちの無視 upekṣ-> upekṣā
pāṇḍavoṃ kā āgaman	:	パーンダヴたちの来訪 āgam-> āgamana> āgaman
dṛtarāṣṭra kī nindā	:	ドリタラーシュトラの非難 nind-> nindā
niyam kā pālan	:	規則を守ること pāl-> pālana> pālan
māṁ kī pratīkṣā	:	母を待つこと prati+īkṣ-> pratīkṣā
merī niṃdā	:	私（へ）の非難（所有代名詞＋動詞派生名詞）
āp kī jānkārī	:	あなたの知識，あなたが知ること

動詞派生名詞というからには出自の動詞を挙げる方が分かり易いので、サンスクリットの出自のものについては、動詞語根とそれから派生した名詞[2] を挙げてある。ヘッドが動詞派生名詞の場合、往々にして表層では属格が後続する名詞の深層の文法関係は目的語であり、格は対格である。もちろん、自動詞派生名詞である「来訪」の場合は目的語をもたないので自動的に主語になる。また、自動詞派生名詞ではなく、動詞の不定詞を名詞的に用いた ‘ us kā ronā ’「彼の泣く・こと／の」という具合にも使用される。ヒンディー語の属格後置詞 ‘ kā ’ の修飾部が負う文法関係は基本的には主語，目的語といえるが、「～に対する抵抗」のように別の格に及ぶ場合もある。また、最下段に挙げた「私の非難」の部分は、文脈からいえば「私に対する」だが、「私がする非難」にもなりえる。もっとも、この種の名詞句が文の一部を成す場合、曖昧性を回避させるには、後続の動詞に ‘ karnā ’「する」, ‘ honā ’「なる」を付ければよい。しかし、本来名詞句は自由形式であり、自然言語内で単独に出てきた場合、やはり曖昧性を残すし、事実、表層の属格後置詞が深層に別の文法関係および格を温存していること自体に疑いはないであろう。日本語にも、このような文法関係と格の二重機能を持つ例もあり、単独で出てきた場合、曖昧性が増す現象を観察できる。

---

[2] サンスクリット語彙の語末の短母音‘-a’は、ヒンディー語では消失する。

(1)　父の好きなところ：父が好きなところ，父の中の好きなところ
　　子供の作り方：子供が作る方法，子供を作る方法

［朝日新聞夕刊：1998.8.21］

（1）の一番目の例は、「お父さんの好きなところを絵の下に書いて」といわれ「競馬場」と書いた子の話である。深層の文法関係（格）が主語（主格）もしくは目的語（対格）のどちらかの例である。二番目の例は、テレビでいっていた『子供の（おもちゃの）作り方』を後者と勘違いした母親の談深層の文法関係（格）は、主語（主格）もしくは目的語（対格）と考えられる。笑い話として成立するのは、属格の「の」が、主語以外の文法関係を包括するからである。

また、動詞派生名詞がヘッドであるこの統語構造に関連して、以下の慣用化した形式斜格名詞句も挙げられよう。

(2)　us　　ke　　sahāre
　　それ　　の　　動詞派生名詞・斜格

「それにもたれて」

ヘッドが斜格名詞の例は、第1章でも述べているが、これも他動詞派生というだけで、同じである。

3.1.3.3　名詞　＋　属格後置詞　＋　後置詞句　＋　動詞派生名詞

ここで挙げるのは、前節で観察した「B の A」の構造に、後置詞句が挿入されているものである。例えば、英語の ‘ the destruction of the city by the enemy ’ のように、2つの前置詞句が名詞を直接修飾する言語もある。これは、‘ the city ’ が属格の ‘ of ’ によってヘッド名詞 ‘ the destruction ’ を修飾しており、同時に、‘ the enemy ’ が手段・媒介を表わす ‘ by ’ によってヘッド名詞を修飾してもいる。文法関係は ‘ of the city ’ の ‘ the city ’ が目的語であり、‘ by the enemy ’ ‘ the enemy ’ が主語になっている。属格以外の後置詞句を C とすると、英語の場合、「A of B + C」になるが、ヒ

ンディー語では、後置詞句自体が名詞を修飾するという修飾機能を基本的に持たないため、「B kā C A」という、C の後置詞句を名詞句内に含む構造を取る。また、日本語の場合は、「B の C の A」か、「C の B の A」という具合に、すべてに属格の「の」が付くため、C も A にかかることが明らかなので内包する必要はない。

この構造を持つものとして、以下に二例挙げておく。

(3) aṃgrezoṃ kā bhārat par rājya
英国 の インド 上に 統治

「英国のインドへの統治」

(4) merā us se sambaṃdh
私の 彼 に対する 関係

「私の彼との関係」

（3）では、外枠としての「英国（B）の統治（A）」に「インドへ（C）」という後置詞句を挿入し、「B の C A」という、文にも等しい句を形成させている。（4）も「私の関係」に「彼と（に対して）」を挿入し、「私の彼との関係」という句を形成する。

3.1.3.4 後置詞句 ＋ 属格後置詞 ＋ 名詞

ヒンディー語ではあまりみられることのないこの構造の例をわずかながら挙げておく。

(5) mez par kī pustak
机 上に の 本

「机の上の本」

(6) jhīl par kā sarāy
湖 上に の 宿

「湖畔の宿」

［ヒンディー語で歌う日本語の歌：78］

(7) *mez par pustak / *mez kī pustak
机 上に 本 机 の 本

日本語でも「机の上の本」と「の」を使うように、ヒンディー語でもいえないことはないが、あまりみかける構造ではない。日本語の場合は「上」が斜格名詞と考えられるが、ヒンディー語は、後置詞句そのものである。この場合、日本語もヒンディー語も属格後置詞に依存しなければならない。この場合、見た目が後置詞句の後置詞と属格後置詞の連続になる。属格後置詞以外と連続する例として、「～の中から」に当たる ‘ meṃ se ’「に＋から」や ‘ par se ’「上＋から」がある。ちなみに、日本語では「インドからの小包」や「私へのプレゼント」のように、後置詞句と属格後置詞が連続することは多々あるが、ヒンディー語では後置詞句の後置詞と属格後置詞以外の後置詞が連続することはほぼないものと考えられる。

（7）に不適格な句として挙げた構造は、１つ目が後置詞句＋名詞，２つ目が後置詞句の後置詞を消失した名詞＋名詞である。前者は、通常、ヒンディー語の名詞修飾構造では観察されない。文の中に組み込まれた場合なら可能ではあるが、名詞句としては成立しない。後者は名詞修飾構造としては成立していても、「机の上にある本」という意味合いは出てこない。「机」について書かれている、すなわちテーマが机になっている本の場合ならば、ありえる構造である。

また、前者については、前置詞句，後置詞句の差こそあるが、（先にも述べたように）英語（この場合 ‘ the book on the desk ’）のように前置詞句が直接名詞を修飾する言語もある。ヒンディー語の場合、名詞修飾構造に後置詞句が直接修飾することは基本的にはないが、場合によっては、その構造が見られる。次にそれをみていく。

3.1.3.5　後置詞句　＋　名詞

ヒンディー語でも、属格後置詞なしで直接ヘッドの名詞を修飾することがあるが、これらは、新聞，雑誌等の見出しにみられる名詞修飾構造である。以下にその例をいくつか挙げる。

(8)　alaṃkār se tātparya
　　比喩　より　意味

「比喩からの意味」＝「比喩より（から）意味」

(9)　Arjun　dvārā　bhagvān　kī　stuti
　　アルジュナ　よる　神　の　祝福

「アルジュナによる神に対する祝福」＝「アルジュナによる神の祝福」

（8），（9）は、道具格に当たる ‘ se ’ と ‘ (ke) dvārā ’ が直接名詞を修飾している例である。日本語では、この場合でも、「比喩からの」のように属格の格助詞を入れるか、「による」のように本来動詞である部分を連体形にしてはじめて名詞を修飾することができる。また、（9）は、ヘッドの名詞「祝福」に属格後置詞句「神の」が付加されている。この場合、「神」は対象である。

(10) saṃpādak ko patr
編集長 に 手紙
「編集長への手紙」＝「編集長に手紙」

(11) bhagvān ko dhanyavād
神 に 感謝
「神に感謝」＝「神に感謝」

(12) āp ko badhāī
あなた に おめでとう
「おめでとう」＝「あなたにおめでとう」

（10）は、与格後置詞 ‘ ko ’ を使用した名詞句である。日本語では、方向を示す格助詞「へ」を使った「編集長へ手紙」か、ある種の文のような要素を持つ句とする場合は、属格の格助詞を付けた「編集長への手紙」のように言う。(11)，(12) も（10）と同じ与格後置詞 ‘ ko ’ を使用した名詞句であるが、感謝やお祝いを伝える慣用的な言い方である。すなわち、句のようでありながらも、文のような働きをするものである。以下の (13) も、これらと同様、挨拶の文句となるものである。

(13) sabhī ko merā namaskār
皆（強調形） に 私の 挨拶
「皆様に私からご挨拶」＝「皆様に私の挨拶」

(11)，(12) と違うところは、(13) には、上の与格後置詞句以外に、別の属格後置詞句が付いているところである。ここの属格の部分は、「私が挨拶をすること」のように主

語の働きをする。

(14) arjun ko bhagvān kā ādeś aur use sāṃtvanā
アルジュナ に 神 の 命令 そして 彼に 慰め

「アルジュナへの神の命と彼への慰め」＝「アルジュナに神の命と彼に慰め」

[Śrīmadbhagavatgītā : 239]

(14) は、上の与格後置詞句以外に、別の属格後置詞句が付いている例である。ここの属格の部分は、「私が挨拶をすること」,「神が命令すること」のように主語に当たる。また、この属格の名詞句に与格後置詞句が割り込む場合もある。

(15) baṛī bahan kā choṭī bahan ko patr
大きい 姉妹 の 小さい 姉妹 に 手紙

「姉の妹への手紙」＝「姉の妹に手紙」

[Sarasvatī mānak hindī vyākaraṇ tathā racnā : 244]

こうなると、先の (3), (4) と同じ構造になる。唯一違うところは、ヘッド名詞が動詞派生の抽象名詞ではなく、普通名詞が使用されるところである。この場合は、平叙文の一部としては使用されない。これ自体が半ば文のようになっているからである。

この他にも、後置詞句をヘッド名詞に直接修飾させる構造があるので、例としていくつか挙げておく。

(16) bhakt ke lie anya vikalp
バクト の ため 他の 選択

「バクトにとっての他の選択」＝「バクトのため他の選択」

[Śrīmadbhagavatgītā : 180]

(17) kampyūṭar meṃ hiṃdī prayog
コンピュータ に ヒンディー語 使用

「コンピュータでのヒンディー語使用」＝「コンピュータでヒンディー語使用」

[Bhāṣā bhāratī : 3]

先の「編集長への」,「アルジュナへの」と同様、「バクトのための」,「コンピュータでの」にみられるように、日本語では属格後置詞「の」がヘッドの名詞を修飾するためには必要であるが、ヒンディー語では、新聞・雑誌や文書の見出しに、直接後置詞句を修飾させて使用しているのである。

さらに、後置詞句が２つヘッド名詞にかかる例もある。

(18) avkāś ke lie mukhyādhyāpak ko prārthnā-patr
休暇 の ため 主任 先生 に 請願 手紙
「休暇のため主任教官へ申し出の手紙」
[Sarasvatī mānak hindī vyākaraṇ tathā racnā : 247]

(19) pradhānācāry ko chātrvṛtti ke lie āvedan patr
主要な 教授 に 奨学金 の ため 申請 手紙
「学科主任への奨学金申請書」
[Sarasvatī mānak hindī vyākaraṇ tathā racnā : 248]

(18), (19) の名詞修飾構造は、‘ … ke lie ～ ko ’ か ‘ ～ ko … ke lie ’ と後置詞句が逆になっている。それぞれの後置詞句は、ヘッド名詞の「手紙」にかかっている。

もう１つ、後置詞句を３つ続ける例もある。これも見出しからの抜粋である。

(20) garmī kī chuṭṭiyoṃ meṃ nainītāl ghūmne ke lie mitr ko patr
夏 の 休暇 に(位置) ナエニータール 回る の ため 友人 に 手紙
「夏期休暇にナエニータールへ出かけるための友達への手紙」

(20) は最初の後置詞句「夏休暇に」が次の後置詞句「ナエニータールに出かけるため」にかかっているもので、それが一体を成し、「手紙」にかかる。同時に、最後の後置詞句「友人に」も手紙にかかる後置詞句になる。

このような、後置詞句をヘッド名詞に直接修飾させる構造は、見出し等に使用される事が多く、しばしば、これらは句でありながらも縮約的な文として働く構造に使用される。

日本語でも、見出し等にみられる「手紙からの抜粋」,「友人への手紙」のような、属格でつなぐ名詞修飾構造から、諺にみられる「棚からぼた餅」,「猫に小判」,「鬼に金棒」のような、直接後置詞句を修飾させる構造も、しばしば観察される。

3.1.4 形容詞＋名詞

第1章で述べたように、形容詞は、その本籍が形容詞以外には分類できないものである。往々にして叙述的なものになる。

ṭhaṇḍī havā：冷たい風	ādhā ghaṃṭā：半時間
bhārī sāmān：重い荷物	choṭā kamrā：小さな部屋

構造の分析は後節で行うので、例を挙げるに止める。

3.1.5 分詞（非定形）＋名詞

ここでは、動詞の非定形である未完了・完了の分詞が、修飾句として名詞にかかる例を挙げる。

(21) bahatī (huī) dariyā
流れる－未完了 コピュラ－完了 川
「流れる（流れている）川」

(22) mez par paṛī (huī) pustak
机 上に 横たわる－完了 コピュラ－完了 本
「机にある本」

(23) vahāṁ jāte samay
あそこ 行く－未完了 時（斜）
「あそこに行く時」

この構造は、日本語の動詞の連体形（終止形と同形，以下同じ）が名詞の前から修飾するものに相当する。(21) が未完了分詞、(22) が完了分詞のパターンになっている。それぞれ被修飾語である名詞の性・数・格により形容詞変化する。通常、この統語構造を取

るときにはヘッドの名詞と被修飾句である分詞には、命題関係が成り立つ。(23) は斜格名詞に未完了分詞がかかるパターンであるが、この例は、‘ vahāṁ jāne ke samay ’, ‘ vahāṁ jāne ke vaqt ’ のように、不定詞＋属格後置詞を斜格名詞『時』に修飾させる方がより一般的である。ヒンディー語の斜格名詞としては、この他にも、『後』,『ため(理由)』等があるが、やはり、不定詞斜格と属格を付加する構造になる。しかし、この名詞『時』の場合のみ、構造を２つ持つのである。日本語のこの『時』も『時に』となりえるので、斜格名詞であると考えられる。

先にも若干触れたが、この構造の修飾が可能なのは文の主語もしくは目的語（すなわち関係詞の ‘ jo ’ で修飾できるもののみ）に限られる。以下の例を見ていただきたい。

(24) us dukān par miṭhāiyāṁ bectā huā puruṣ
あの 店 で お菓子 売る−未完 コピュラ−完了 男
「あの店でお菓子を売っている男」

(25) us dukān par becī huī miṭhāī
あの 店 で 売る−完了 コピュラ−完了 お菓子
「あの店で売っている（＝売られている）お菓子」

(26) *miṭhāiyāṁ bectī huī dukān
お菓子 売る−未完 コピュラ−完了 店
「お菓子を売っている店」

日本語の場合は、上に挙げた名詞句（すなわち連体形の「売っている」）はすべて可能だが、ヒンディー語では (26) が非文[3] になる。例として挙げてはいないが『売る』を完了分詞（すなわち「売られている」）にしてもやはり非文のままである。これは、ヒンディー語の場合、叙述文に戻しても『店』が主語にも目的語にもなりえない（ここでは、場所を表わす）からである。すなわち、日本語をみる限り表層的には主語となりえる直格名詞[4] であっても、ヒンディー語の場合、深層の文法機能が斜格名詞句［Adverbial Phrase,

[3] この例は、日本語を母語とするヒンディー語学習者が、初期段階でよく起こす誤りである。日本語の動詞の連体形が、文法関係に関わらず、自由に名詞を修飾できるゆえである。

[4] 日本語の『店』も本来は斜格名詞であると考えられる。日本語では名詞そのものの形態上の区別がない上に、その格の痕跡を残す（例えば名詞そのものの屈折や後置詞付加など）指標もないため、文法関係の制約が弛緩し、(命題の成り立つ範囲で) 自由に修飾できるようになったのではないかと考えられる。

Ad］のままであり、深層にある（すなわち元の）文法関係および格（ここでは位置格）をトレースしているのである。したがって、この場合は、後節の関係詞を使った定形節による修飾に依存せざるを得なくなる。

3.1.6 不定詞（非定形）＋属格後置詞＋名詞

ここでは、不定詞を含む名詞修飾構造を観察する。

(27) pīne kā pānī
飲む－不定（斜） の 水
「飲み水」

(28) sone kī jagah
寝る－不定（斜） の 場所
「寝る場所」

(29) ［merā / mere］ (ghar se) nikalne kā avsar
私の （家 から） 出る－不定（斜） の 機会
「私の（家から）出る機会」

(30) ［us kī / us ke］ bhārat jāne kī icchā
彼（彼女）の インド 行く－不定（斜） の 望み
「私のインドへ行く望み」

日本語には名詞に直接かかる動詞の連体形があるが、ヒンディー語の場合は不定詞と名詞をつなげる場合は属格後置詞に依存する。[5] (27) は、「水」に修飾語として「飲む」を付け加えたものであり、(28) は、「場所」に「寝る」を付け加えたものである。

(29), (30) の名詞句は、不定詞の主語を属格標示して付加する構造である。[] 内の前者が『機会』もしくは『望み』のヘッド名詞にかかる形態であり、後者が『出る』もしくは『行く』の不定詞にかかる形態である。属格標示の主語が直格になるか斜格になるかは、焦点が不定詞側にあるか、ヘッド名詞側にあるかに依存している。

---

[5] 先にも挙げた「行く時」についても、ヒンディー語を母語とする者が日本語を習い立ての時、「私、行くの時」という具合に、属格の「の」を付けることが多々ある。日本語では、動詞の連体形が（文法関係の制約なしに）名詞にかかることを理解し難いためと考えられる。

また、ヒンディー語では、不定詞を属格後置詞でヘッドの名詞につなぐのに対し、日本語では動詞の連体形が直接名詞を修飾する。あえて日本語でも「の」を補うなら（27），（28）は、日本語の「（ため）の」になり、（29），（30）は「（というところ）の」になる。どちらも付加的な修飾句ではあるが、後者は同格的な意味になる。

ところで、この構造に関連して、ヘッドの名詞が斜格名詞になり、副詞的修飾句として使用されるものも、以下に挙げておく。

（31）［mere］ bhārat jāne ke samay
私の インド 行く－不定 の 時
「私がインドへ行く時」

（32）［mere］ pahuṁcne ke bād
私の 着く－不定 の 後
「私が着いた後」

（30），（31）は、斜格名詞として「時」，「後」を使用した例であるが、不定詞もこれらの斜格名詞も斜格なので、主語を付加する場合は、属格で標示する。

3.1.7 関係詞節型

先に少し述べた定形節である関係詞節の例をここで挙げる。まずは、関係代名詞の例文である。

（33）(vah) pustak jo mez par paṛī hai
その 本 関係詞 机 に 横たわる－完了 コピュラ－現在
「机の上にある本」

（34）(vah) khānā jo merī māṁ banātī hai
その 食べ物 関係詞 私の 母 作る－未完了 コピュラ－現在
「私の母が作る食事」

（33）は被修飾語の名詞「本」が、定形節内で主語の機能を果たしている例である。一方、（34）は、被修飾語の名詞「食べ物」が、定形節内で目的語の機能を果たしている

例である。ヒンディー語の関係詞による名詞句修飾構造は、インド・ヨーロッパ語族の言語にしばしばみられる、修飾する定形節が名詞の後に置かれる構造である。若干違うところは、ヒンディー語では、関係代名詞に呼応する相関辞 ‘ vah ’「その」があることである。しかし、これは、必ずしも必要なものではなく、しばしば省略される。

また、この関係詞による名詞修飾構造には、相関辞 ‘ vah ’ の位置に関係詞 ‘ jo ’ が出てくる異形の構造がある。以下に（32）の異形構造を例示する。

(35) jo pustak mez par paṛī hai
関係詞 本 机 に 横たわる－完了 コピュラ－現在

これは、句としてではなく、「机の上にある本を取ってください。」のような文の中に出てくる構造である。先の（33）のような相関辞を伴った修飾構造も無論、文中に使用される。違う構造を取る以上、何らかのニュアンスが変わるわけだが、これについては、後節の統語構造分析のところで詳しく観察する。

次に、ヘッドが定形節内で斜格名詞になる例を挙げる。一般に関係副詞といわれる例である。先の（26）で非文であった文を定形節に直したものが、以下に挙げた例である。

(36) (vah) dukān jis meṃ (= jahāṁ) miṭhāiyāṁ becī jātī haiṃ
（その） 店 関係詞 に （関係詞） お菓子 売る－完了 行く－未完了 コピュラ－現在

「お菓子を売っている店」

定形節では、「店でお菓子が売られている。」なので、「店」は、位置格の後置詞を伴った斜格名詞である。したがって、関係詞自体は斜格形になり、それに後置詞が付いた ‘ jis meṃ ’ もしくは、‘ jis par ’ になる。また、「店」は場所を表わすものなので、『場所』という名詞を内包した関係詞 ‘ jahāṁ ’ を使用することもできる。関係詞の種類は、第 1 章の代名詞の節で、相関辞との関連がある指示代名詞と共に挙げてあるので参照されたい。

先の分詞による名詞修飾構造とこの関係詞節による名詞修飾構造は、一見、非定形節の分詞を用いるか、関係詞を使用して定形節を用いるかという違いだけで相関的なもののよ

うだが、実際、非定形節の構造には、文法関係上の制約がかかっていることを留意しておかなければならない。また、全般的にみて、ヒンディー語では、文レベルのものを節とし、名詞を修飾させる場合、関係詞節を使用する方が多いのも事実である。これは、文法関係の制約がかかる非定形節の修飾構造より、関係詞を使用した定形節の修飾構造の方が、語の関係が曖昧にならず、使用範囲も広くなることも、理由の1つと考えられる。

3.1.8 同格接続詞節型

同格接続詞節も、関係詞節同様、名詞を後方から修飾する構造をとる。この場合も相関辞として‘ yah ’「この」を取る。

(37) (yah) khabar ki merī sahelī kī śādī huī
この 知らせ 同格接続詞 私の 友達 の 結婚 生じる一過去
「私の友達が結婚したという知らせ」

(38) (yah) sandesā ki vah kal yahāṁ āegā
この 知らせ 同格接続詞 彼 明日 ここ くる一未来
「彼が明日ここに来るという知らせ」

英語の‘the truth that…’の‘that’に当たる機能を持つ‘ki’の場合は、補完的な節を取る関係詞と違い、修飾部の定形節に完全な文がくる。日本語では、同格の場合「～するという知らせ」のように「という」[6]を補う。前節の不定詞を、属格後置詞を挿入して名詞を修飾させるところで、同格的な「という」を補うものがあることを述べた。(30)がそれに当たるが、これをこの同格接続詞節型構造にすると、以下のようになる。

(39) us kī iccha ki vah bhārat jāegā
彼 の 望み 同格接続詞 彼 インド 行く一未来
「彼がインドに行く（彼の）望み」

---

[6] この同格的に名詞に接続する「という」は、元々助詞「と」と「言う」（連体形）の複合形である。対するヒンディー語の‘ ki ’は、ペルシャ語の関係代名詞かつ接続詞の‘ ke ’である。ヒンディー語では、同格接続詞としての機能だけを保持している。

(39) のような、定形節の同格接続詞節を使用しても言えなくはないが、「望み」の主語と定形節内の主語が同じ場合は、不定詞の非定形節の構造を取る。

3.2 名詞句の統語構造分析

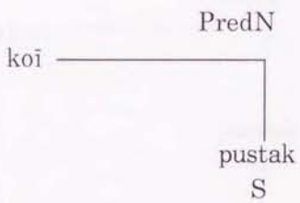
前節で挙げた統語構造の類型を基に、名詞句の構造を分析していく。句における Head（主要部），Modifier（修飾部）は広く認められた概念だが、その概念を適用し、前置修飾句と後置修飾句を設定する。

前置修飾型名詞句：[Modifier] [Head]
後置修飾型名詞句：[Head] [Modifier]

以下に、表層の文法関係と深層の文法関係を同時表示する構造図を示しながら各種の統語構造を分析していくが、構造図における記号は、あくまでも論理的な文法関係を示すものであることを先に断っておく。

3.2.1 前置修飾型

ヒンディー語は SOV 型言語なので、修飾句は前置型の方が圧倒的に多い。先に挙げた類型のうち代名詞群の不定代名詞，指示代名詞，疑問代名詞，数量代名詞を持つ名詞句を扱う。まずは、不定代名詞の例として、‘ koī pustak ’「何らかの本」を構造図化する。

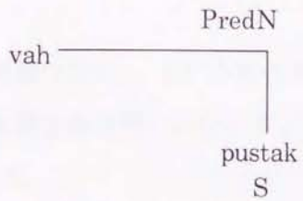


この場合、‘ koī ’「何らか」は、本来、代名詞なので述語名詞（PredN）になり、‘ pustak ’「本」が主語（S）になる。しかし、これらは、実際、以下のような平叙文にはできないので、論理上のラベルとなっている。

＊ pustak　　koī　　hai.「＊本は何らかだ。」
S　　PredN　Cop

日本語の方も通常、上のようにはいわないが、「本が何らかのものである。」という論理的な命題（＝主述関係）は成り立つ。ヒンディー語も同様に命題としては成り立つが、実際の文としては不適格になる。

次に、指示代名詞 ‘ vah ’ を含む ‘ vah pustak ’「その本」を構造図化する。

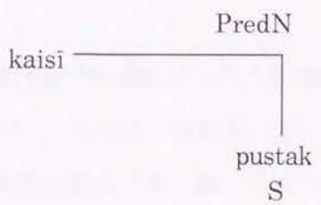


この場合は、論理上の文法関係が、実際の文の文法関係に反映される。

pustak　　vah　　hai.「本はそれだ。」
S　　PredN　Cop

日本語もこの指示代名詞を伴うものは、平叙文化が可能である。

次に、疑問代名詞の ‘ kaisā ’ を含む ‘ kaisī pustak ’「どんな本」を構造図化する。



?? pustak　　kaisī　　hai?「本はどんなだ。」
S　　PredN　Cop

この場合、命題自体は成り立つが、ヒンディー語ではその形状や評価を述べるに限られる。一方の日本語もやはり意味が曖昧である。しかし、S を「本」から人の「女の子」に

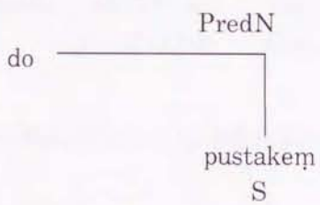
変えると、‘ kaisī laṛkī ’「どういう娘」となり、一般に使用される名詞句となる。

また、「本の種類」を問う場合は、ヒンディー語では、通常、‘ kaun-sī pustak ’「どの（ような）本」か‘ kis tarah kī pustak ’（文字通り「何の種類の本」）と聞くが、「なに」に当たる‘ kyā ’を複合した‘ kyā pustak ’とは言わない。これについて考察を加えてみる。

pustak　　kyā　　hai?「本は何か。」
S　　PredN　　Cop

この命題は、「本の種類は何か。」という特性を問うものというよりは、「本とは（そもそも）何か。」という大概念的な問いになってしまうので、ヒンディー語は、その種類を問う場合、不適格になる。[7]

次は、数量代名詞を含んだ句を例、‘ do pustakeṃ ’「二冊の本」に挙げる。



＊ pustakeṃ　　do　　haiṃ.「本が二冊だ。」
S　　PredN　　Cop

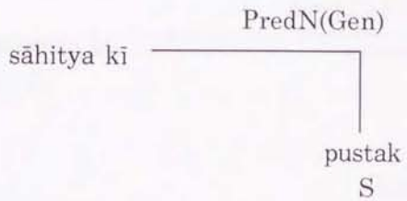
ヒンディー語では数詞を PredN にしたこの命題文は、中立文としては非文である。日本語では、「本が二冊だ。」または、格助詞「が」を落とした「本二冊だ。」もともにいえる。通常、日本語の数詞表現は「本二冊」,「車一台」という構造をとるが、属格後置詞を数詞に付加した「二冊の本」,「一台の車」という言い方もかなり使用される。

次に、名詞＋後置詞＋名詞の例を観察する。まず、「B kā A」のヘッド名詞「A」が普

[7] では、日本語でその種類を問う際の「何の本」がなぜ可能なのであろうか。一概にはいえないが、「何の種類の」の「種類の」の部分が「何の」に内包してしまった結果であると筆者は考えている。

通名詞の例を挙げる。

sāhitya kī pustak「文学の本」

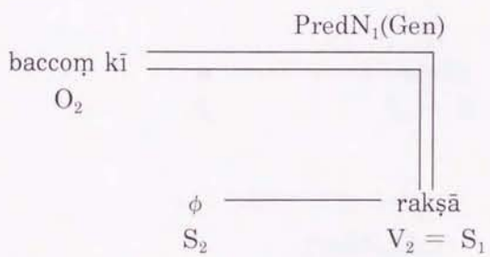


後置詞句は、斜格名詞句（OblN）として処理する。ここの後置詞句は、属格後置詞が付いたものである。無論、斜格であっても述語名詞にもなり得る。以下に例文を挙げておく。

yah pustak　sāhity　kī　hai.「この本は文学のだ。」
S　PredN(Obl)　Cop

次は、ヘッドの名詞が動詞派生による抽象名詞のものである。ここから文法関係が重層的になる。

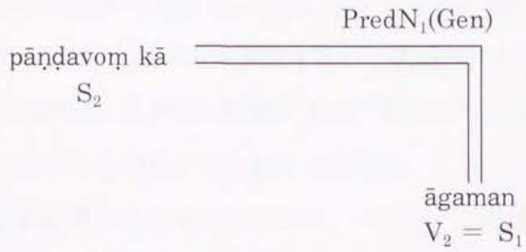
baccoṃ kī rakṣā「子供たちの保護」



一見、ヘッドが他動詞の動詞派生名詞に変わるだけで、先の句と構造図は同じようだが、深層に別の SOV 層ができる。斜格名詞は第二層で目的語であり、ヘッドが動詞になる。句内に主語はないが、この句全体が文に埋め込まれると、主語が補完される。（文に組み

込まれた例は、後章でいくつか観察されるので、折に触れて説明する。）

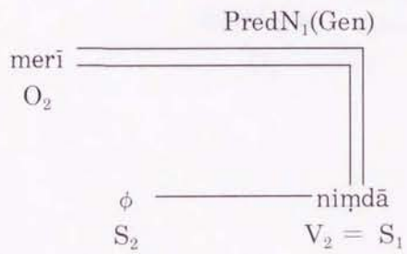
pāṇḍavoṃ kā āgaman「パーンダヴァたちの来訪」

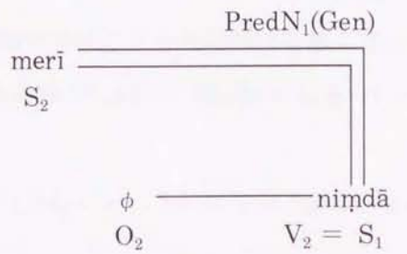


この名詞句は自動詞派生の名詞の例である。自動詞は、本来、目的語をもたないので、属格の深層部は主語にしかなりえない。

次は、「私の非難」という名詞句を例に挙げる。日本語では、「私の非難」といえば、通常「私がする非難」となる。「私を非難すること」になる場合は「私への非難」となり、方向格［Direction, Direc］の後置詞を挿入する。ヒンディー語の場合は、どちらもこの統語構造で表現しうる。

merī niṃdā 「私の非難」



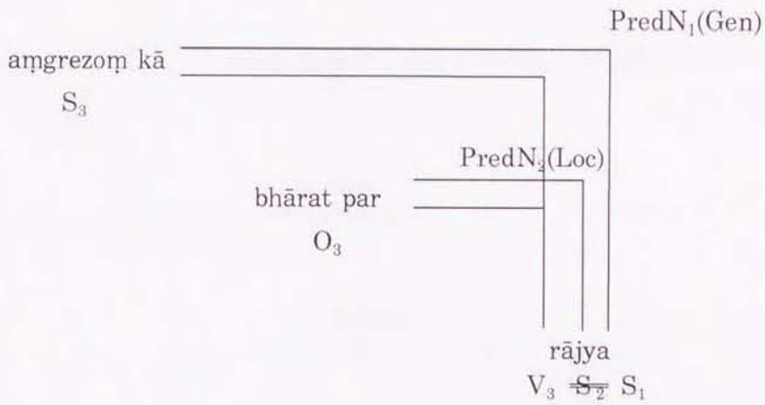


上の構造図は修飾部の文法関係が目的語で主語が空になっており、下の構造図は、修飾部が主語で目的語が空になっている。

ここで注目すべきことは、属格後置詞を含む修飾部（PredN）は、自動詞派生の場合、主語（S），他動詞派生の場合、主語（S）もしくは目的語（O）を包括することである。自動詞派生名詞は、主語のみを要求するので修飾部が主語になるのは議論の余地がないが、他動詞派生名詞は、日本語と同様、主語，目的語のどちらもありえる。しかし、意味解釈において、必ずしも曖昧になるわけではない。というのは、後続の動詞の特性や文脈によって文法関係が補完されるからである。つまり、この場合の名詞句は、不完全な補完名詞句の段階であるといえる。

このような不完全段階の名詞句が、文法関係を完全に補完した名詞句に発展する例がある。「B kā A」の構造に、別の後置詞句が挿入された「B kā C A」構造がそれである。

aṃgrezoṃ kā bhārat par rājya「英国のインドへの統治」



この構造において、「インドの上に」という斜格名詞句（具体的には後置詞句）が、名詞を修飾する場合、枠構造のごとく名詞句内に挿入されている。修飾部は主語の「英国」であるが、支配される対象（すなわち目的語）となる「インド」は、表層では位置格［Locative, Loc］となる。

この構造にコピュラが付くと、文になるのである。上記の名詞句も含めて、以下に例文を挙げる。

(40) aṃgrezoṃ kā bhārat par rājya thā.
英国 の インド 上に 統治 コピュラー過去

「英国はインドを統治していた。」

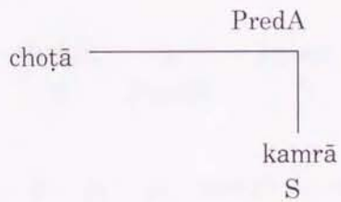
(41) droṇ kī arjun par viśeṣ kṛpā thī.
ドローナ の アルジュナ 上に 特別な 恩情 コピュラー過去

「ドローナはアルジュナに特に親切にしていた。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 16]

(40) は、「英国のインドへの統治があった。」、(41) は、「ドローナのアルジュナへの特別な親切があった。」となる。命題「英国のインドへの統治」,「ドローナのアルジュナへの特別な親切＝ドローナがアルジュナに親切にする（目をかける）こと」が、コピュラが示す過去の時点に存在した、すなわち、これは紛れもない存在文である。このような文型は、ヒンディー語では数多く見られる。[8] これが日本語では、文法関係を表層，深層で違えない表現の「ドローナはアルジュナへ（に）特別に親切にしていた。」になるのである。

次に、叙述形容詞を含む句、‘ choṭā kamrā ’「小さな部屋」を観察する。



kamrā choṭā hai. :「部屋が小さい。」
S PredA Cop

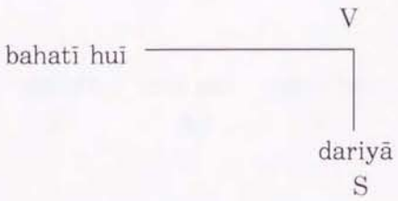
ここで挙げているのは、述語形容詞（PredA）の単層型の例である。叙述形容詞なので、文法機能そのままでのラベルで平叙文に直すことができる、単層的な構造である。

---

[8] この存在文としての構造が出てくるのは、「かつて、英国はインドを支配していたのだが、…。」のように、往々にして、話の導入部分である。

次に、分詞を含む名詞句を観察する。分詞には未完了分詞と完了分詞があることは、これまでに述べているが、先に未完了分詞を含むものを挙げる。

bahatī (huī) dariyā : 流れる川



現在分詞が直接名詞にかかる句である。( ) 内のコピュラの完了分詞は、しばしば省略されるが、これは、「流れる川」と「流れている川」の形態の違いとほぼ同じものと考えられる。これを命題文に戻すと以下のようになる。

dariyā　bahatī hai. :「川は流れる。」
S　V

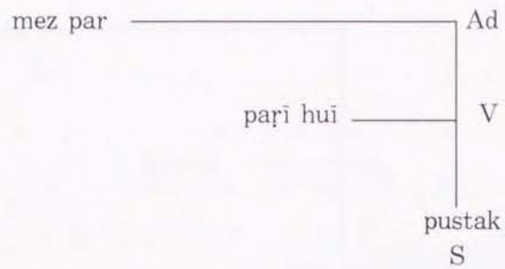
前節の 3.1.5 でも述べたが、この非定形節 Type II を定形節 Type I に変換できる。

dariyā　jo　bahatī hai. :「流れる川」
S　PredN　V

PredN になっている ‘ jo ’ は、関係詞（この場合は代名詞）である。関係詞についての詳細は、後節で述べることにして、この非定形節 Type II と定形節 Type I に相関関係があることだけ、特記しておく。

もう１つ、完了分詞の例を挙げる。

mez par paṛī (huī) pustak「机にある本」

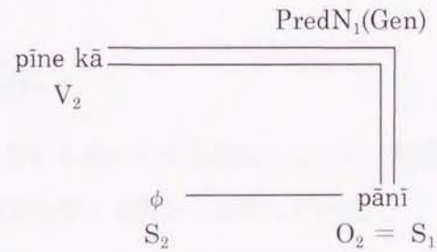


pustak　mez par　paṛī hai. :「本が机の上にある。」
S　Ad　V

分詞（V）がヘッドの名詞（S）を修飾する際、コピュラの完了分詞が後に続くが、しばしば省略される。先の未完了分詞の場合と同じく、「机の上にある本」か「机の上にある（状態にある）本」ほどの違いで、実質的な意味の差はない。

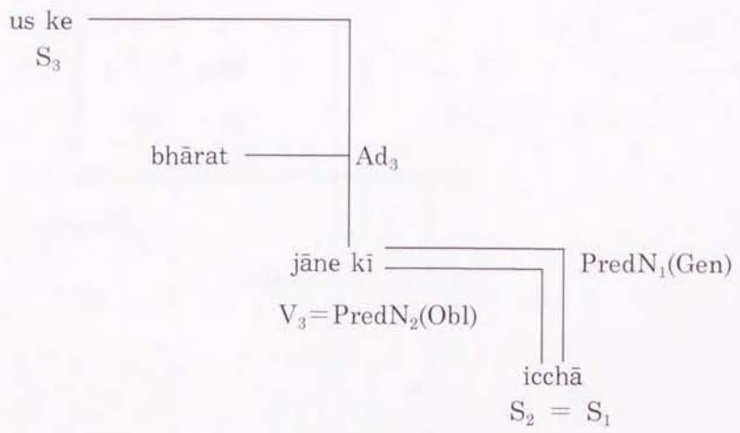
次は、不定詞を含む例を観察する。先の（27）を代表例にする。

pīne kā pānī 「飲み水」



この名詞句は、ヘッドの部分が目的語、修飾部が動詞、主語は空になっている。「飲む」と「水」の間には、目的語と動詞の関係が成立している。しかし、「飲み水」は「水」の特性を付加的に修飾しているので、動詞が句の一部を成してはいても、前述した動詞派生名詞のように、句レベルでも文レベルでも文法関係の補完が必要条件とはならない。

もう1つの（30）の同格的な例も挙げておく。



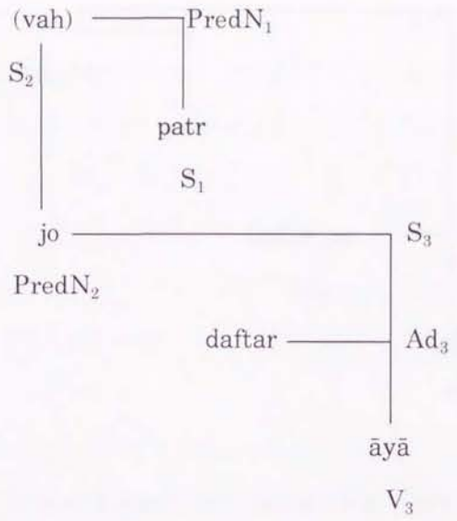
第三層に、「彼がインドへ行く」という SV の層ができる。この層が第二層で「望み」という S_2 と第三層の命題が $PredN_2$(Obl)の関係になる。外枠の第一層は、属格後置詞を含んだ「B の A」である。PredN は、語や句ではなく、文になるわけだが、ここでは、非定形節（Type II）の不定詞である。これが次節で扱う定形節を使用した Type I に対応することになる。

3.2.2 後置修飾句

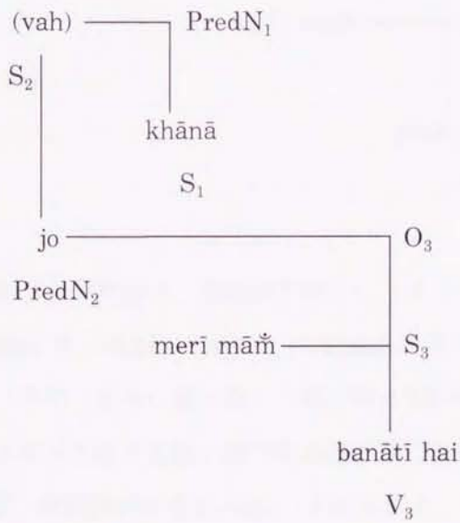
後置修飾型は、先にも僅かながら触れたように、関係詞節と同格接続詞節にのみ観察される。まず、関係詞を使った例から分析していく。

前節でも述べたが、ヒンディー語の関係詞のうち、関係代名詞 ' jo ' は、主語，目的語を修飾するものである。以下に１つずつ例を挙げる。相関辞 ' vah ' は、省略されることも多々あるが、主述関係を明らかにするため、相関辞のあるものを構造図化の対象とする。その場合、相関辞と先行詞の間に主述関係（S_1＋$PredN_1$）がまず成り立つ。次の主述関係（S_2＋$PredN_2$）は、相関辞と関係代名詞の間に成り立つ。また、関係代名詞は $PredN_2$ であると同時に補完文の主語（S_3）の機能も担っている。

(42) (vah) patr jo daftar se āyā
その 手紙 関係詞 オフィス から 来る－過去
「オフィスから来た手紙」

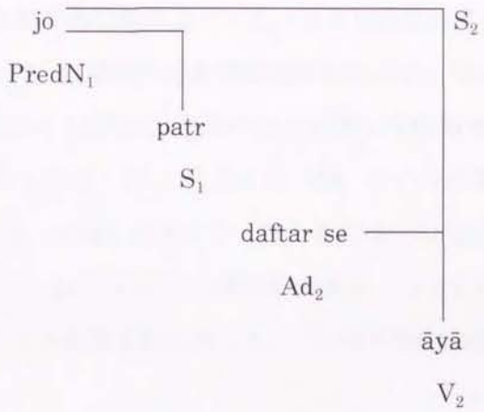


(43) (vah) khānā jo merī mām̐ banātī hai
その 食べ物 関係詞 私の 母 作る－未完了 コピュラ－現在
「私の母が作る食事」

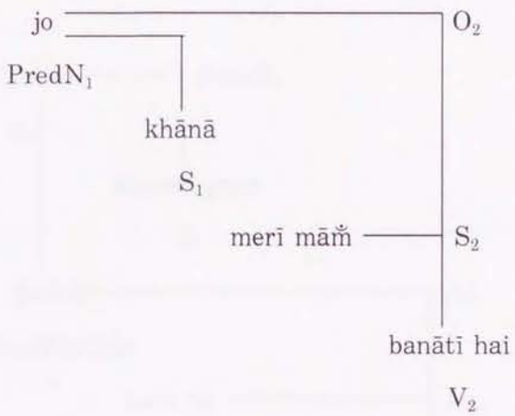


先に挙げた関係詞の異形の構造図も以下に挙げる。

jo patr daftar se āyā 「オフィスから来た手紙」



jo khānā merī mãm̃ banātī hai 「私の母が作る食事」



先にも述べたが、この別形は、相関辞が消失し、そこに関係詞が出てくる例である。つまり、指示代名詞の S と名詞 ‘ patr ’, ‘ khānā ’ の PredN から成る「その（あの）手紙」もしくは「その（あの）食べ物」の層が減っている。

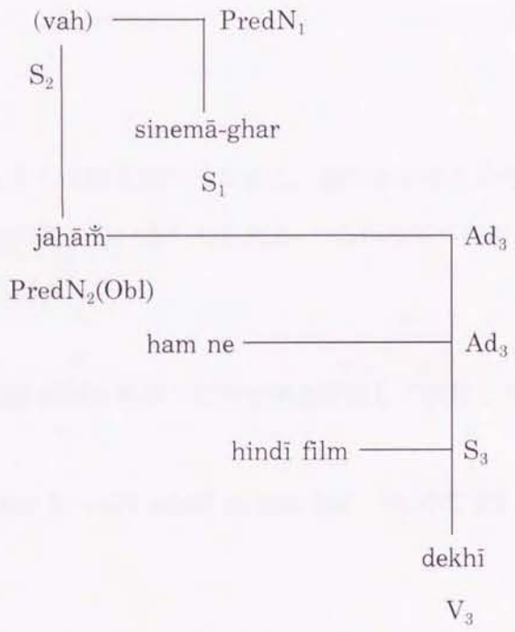
元々、名詞をトピック化する言い方である関係詞の構造に対し、日本語を当てはめて考えてみよう。まず、相関辞があるものは、「あの手紙さ、（ほら）オフィスから来た（やつ）、あれ、私のではなかった。」となる。相関辞を使う以上、話し手と聞き手の間で既知であるものと考えられる。ところが、相関辞を外すと、「手紙、（それが）オフィスから来たんだけど、あれ、誰が書いたのかしら。」となり、「手紙」が両者の間で既知である必要がなくなる。つまり、相関辞のないこの構造は、話題提示の構造となり、デフォルトの関係詞による名詞修飾構造なのである。では、上の別形として挙げた構造は、どうなるだろうか。

関係詞自体は、相関辞の位置に出てくる。つまり、指示代名詞の代替物になっているわけである。したがって、相関辞のある関係詞節と同じで、「オフィスから来た（あの）手紙、私にも見せて。」という具合に、既知のことに対して使用されるものと考えられる。[9]

関係代名詞そのものは、「人」もしくは「物」という名詞を内包することもある。それに関連して、「何人，何個」のような「数」または、「どれだけ」という「量」が問題になる場合には、この ‘ jo ’ とは別の関係詞がある。（1.1.1.1.3 を参照。）

次に、関係詞のうち斜格名詞に対する、いわゆる関係副詞について例を挙げ、分析する。

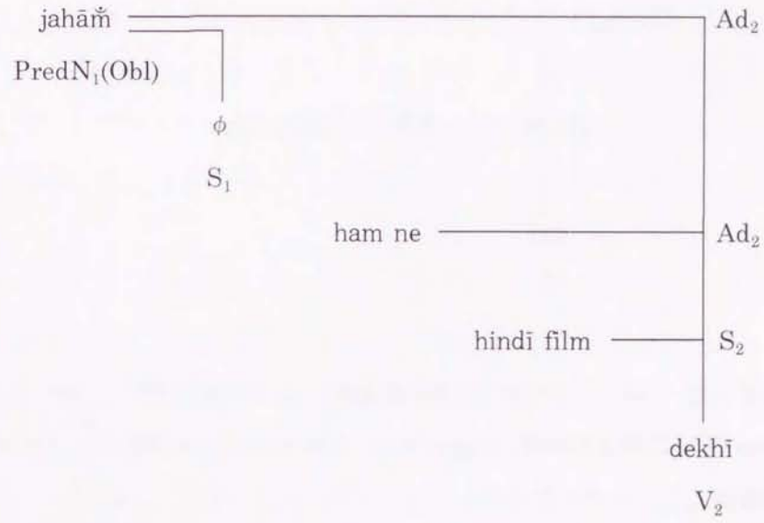
(44) (vah) sinemā-ghar jahāṁ ham ne hindī film dekhī
その 映画 館 関係詞 私たち 能格 ヒンディー語 映画 見る－過去
「私たちがヒンディー映画を見た映画館」



前節の統語的類型の中で、関係副詞 ‘ jahāṁ ’ は ‘ jis meṃ ’ に相当すると述べてあるが、その場合は明らかに後置詞句である。本論文では、いわゆる副詞を後置詞句もしくは斜格名詞句として処理しているので、関係副詞のラベルは PredN（ここではこの斜

[9] 相関辞のあるなしは、話題提示する ‘ A man who came in ’ と既知の情報とする ‘ The man who came in ’ の違いを反映しているものと考えられる。

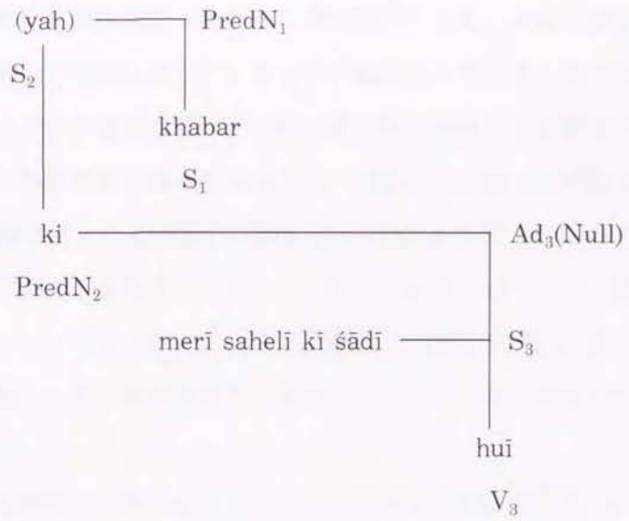
格名詞が述語機能をもっているので $PredN_1$ の Obl）になる。これも上の関係代名詞と同様、別形をもつので、その構造図を表示する。なお、この関係副詞 ‘ jahāṁ ’ は、『場所』という名詞を内包しているため、先行詞（S_1）が空になっている。



関係副詞すなわち斜格名詞句になるは、場所を示すものだけでなく、時，方法，方向，理由等の名詞を内包しているものもある。（これらについても、1.1.1.1.3 に掲載してあるので参照されたい。）

最後に、同格接続詞を使用した例を構造図化して観察してみる。

(yah) khabar ki merī sahelī kī śādī huī 「私の友達が結婚したという知らせ」



最後に挙げたのが、同格詞節である。同格接続詞といわれる‘ ki ’は、後続の節部分に対していかなる文法関係も担わないので、この Ad_3 は、無格の斜格名詞［PredN (Null)］を表している。日本語の「ということ」の「こと」に当たるものとして。英語の同格節を導く‘ that ’も同様と考えられる。

3.3 名詞修飾構造における重層性

まず、文法関係と格標示の重層性について的を絞ると、属格後置詞‘ kā ’を伴う「B の A」という名詞句構造については、ヘッドが動詞派生名詞の場合、文でありかつ句であるという中間的な要素をもつことが観察された。これは、深層に文としての文法関係および格を温存したまま句を形成するためである。自動詞派生名詞の場合は、主語のみの補完なので属格部分には自動的に主語の文法関係を残すが、他動詞派生の場合は、主語，目的語の両方ありえる。往々にして優先されるのは（すなわち言語事実としてよくみられるのは）目的語の方だが、それは、文を成す後続の動詞（‘ karnā ’「する」）で曖昧性が回避される時である。その場合は、補完名詞句ではあっても、完全に文要素を担った句を形成するものではない、いわば文としては不完全な名詞句である。完全に文として成立するには、主語の補完が必要になるが、これは文レベルのものになるので、第５章の述語複合（1）で、新たに取り上げる。これとは別に、名詞句レベルでも完全な補完的名詞句を形成するには、属格の修飾部が主語となり挿入後置詞句でその目的語を補うという形をとることができる。これは、コピュラ動詞を付けることにより、文にもなり得る。

また、後置修飾型の関係詞節の表層的な文法関係と格を、前置修飾型の非定形節である分詞を伴った名詞句の深層に残していることが観察されている。これは、定形節の文修飾から非定形の句へという統語構造、すなわち文と句にまたがる重層性である。ヒンディー語のこの定形節から非定形修飾への移行には、主語なら主語，目的語なら目的語，後置修飾句なら後置修飾句等々の文法関係の継承という制約がかなりかかっている。日本語でも、後置修飾型の関係詞による修飾法はない。それに代わるものとして、前置修飾型の連体修飾構造があるが、ヒンディー語に比べて文法関係上の制約は緩い。このような文法関係の制約の違いが起因し、日本語を母語とする者にとっては、非文を作り出す可能性が高くなるのである。

定形節から非定形節への変形としてもう１つ挙げることができるのは、同格接続詞型と非定形の不定詞を使用した名詞修飾構造の相関である。関係詞型と違い、ヘッド名詞に対して付加的な要素になるが、この２つの構造も、定形節から非定形節へという構造が対応している。このような、定形節を使用するTypeⅠと非定形節を使用するTypeⅡの区分は、次章の複文構造においても、重要な役割を果たすことになる。

第４章　複文構造

複文には、２つのタイプの統語構造がある。１つは、定形節を２つ以上含む構造で、もう１つは、定形節と非定形節のそれぞれを１つ以上ずつ含む構造である。例えば、日本語の「私は、昨日、友達の家に行ったが、友達は出かけていた。」は、動詞の「行った」も「出かけていた」も定形である。これとは対照的に、「雨が降らなければ困る。」になると、「降らなければ」が動詞の非定形であり、「困る」が動詞の定形になっている。共に文を複合した複文であっても、動詞の形態が定形と非定形で異なる。従来、定形動詞を含む定形節が、複文として扱われる傾向にあり、主文に従属文が埋め込まれて、従属文の述語の方が非定形となり、見た目には単文のようになってしまう後者の構造は、なかなか複文とは認識されずにきた。しかし、このような文も、複文の定義を、定形述語を２つ以上持つものというのではなく、定形・非定形を問わず、述語を２つ以上含むということにするならば、複文として扱えよう。

本論文では、これまでいわゆる複文といわれてきた複文を、定形節型 Type Ⅰ とし、複文の異形ともいえるこの種の複文を、非定形節型 Type Ⅱ として、分析していく。定形節型 Type Ⅰ には、等位接続詞で文と文をつなぐ等位接続構造、従属接続詞を使う従属接続構造、そして、その従属接続構造の一種としての同格節派生構造を含む。一方の非定形節型 Type Ⅱ では、動詞の非定形である不定詞，未完了分詞、完了分詞が、文の要素を保ちながらも、主文の中に埋め込まれる。ここでは、主文のどの要素に埋め込まれていくか、また、どのような形態を取りながら埋め込まれるかに注目しながら、観察することにする。

4.1　定形節型（Type Ⅰ）

以下に、定形節型（Type Ⅰ）に含まれる等位接続構造，従属接続構造，同格節派生構造の例文を順に挙げていく。

4.1.1　等位接続構造

まずは、等位接続構造の例文についてみてみる。日本語の「そして、または、しかし」に相当する ‘ aur, yā, par ’ をヒンディー語の等位接続詞の代表として、それぞれの例文を挙げる。以下に、順接の接続詞 ‘ aur ’ と ‘ yā ’ を使用した例を挙げる。

(1) Alādīn ne dīpak uṭhāyā aur gufā ke dvār par ā
アラジン 能格 ランプ 持ち上げる一過去 そして 洞窟 の 入り口 に 来る一語幹
pahuṁcā.
着く一過去

「アラジンは、ランプを持ち、洞窟の入り口までやって来た。」

[Bāl bhāratī bhāg 2 : 25]

これは、順接の接続詞 ‘ aur ’ によって、能格構文と平叙文をつないだ複文である。主語が同一なので、後ろの文では主語が省略されている。与格構文対平叙文なので、行為者である主語の格標示が異なりはするが、通常は前の文に一致する。「アラジンはランプを持った。そして、洞窟の入り口にやって来た。」のように、一旦、文が前半で完結してしまうからである。ところが、後節で扱う動詞の非定形を用いた形式にすると、主語の一致は従属的な非定形側ではなく、主文の定形になる動詞に一致する。

ヒンディー語のこの接続詞は、文と文をつなぐ他に、等価値な句と句，語と語，節と節をも等位的につなぐものでもある。日本語の「君と僕」，「月と太陽」、「実際見ること（の）と話に聞くこと（の）」の「と」の機能に酷似している。しかし、日本語の「と」は、文と文を等位的につなぐものにはならない。文と文をつなぐ場合は、接続詞「そして」を使用するわけだが、これがヒンディー語の ‘ aur ’ と全く同じ機能のものというわけではない。日本語の「そして」は、元々「そうして」であり［広辞苑第四版］、「そう」と「する」の『て』形を合成したものである。したがって、これは「そう」が前の文脈全体を従属する形で受けることができる。そのため、これは文頭に現われる「それから」という意味にも使用されるが、一方のヒンディー語の ‘ aur ’ は、基本的に語であれ、句であれ、節であれ、文であれ、さらには文脈であれ、あくまで等価値でなければ使用されることはない。したがって、「それから」のような文頭の話題転換には使用されることはない。

次はもう１つの順接接続詞、‘ yā ’ の例を挙げる。

(2) tum idhar ā rahe ho yā udhar jā rahe
君 こちら 来る一語幹 いる一完了 コピュラー現在 また あちら 来る一語幹 いる一完了
ho?
コピュラー現在

「君はこっちに来るところなのかい、それともあっちへ行くのかい。」

等価値な文要素を等位的につなぐという機能は、先の ‘ aur ’ と同じだが、この接続詞は、２つもしくはそれ以上の選択すべき語，句，節，文を等位的につなぐ機能になる。また、文レベルになると、後節で扱う同格の接続詞 ‘ ki ’ を使用することもある。

(3) tum kal āoge ki nahīṃ?
君 明日 来る－未来 同格接続詞 否定辞
「君は明日来るのか来ないのか。」

前文の「君が明日来る」という命題全体を後ろで等位的に受ける構造になる。上のように前の文と後の文の命題が違う場合でなく、命題の真偽を問う場合に使用される。日本語の「来るのか、そうではないのか。」の「そう」が指すのは前の文の命題全体である。

等位接続詞として最後に挙げるのは逆接の接続詞である。ヒンディー語の逆接接続詞には、いくつか種類があることは、第１章の品詞のところで述べたが、その中で、比較的頻度の高い ‘ par ’ を使用した例を以下に挙げる。

(4) ham phir kabhī ise dekhne āeṁge par āeṁge pūrṇimā ko.
私たち また いつか これを 見る－不定（斜） 来る－未来 しかし 来る－未来 満月の日 に
「またいつか見に来よう。でも満月の日に来ようね。」
[Bāl bhāratī bhāg 2 : 90]

この例では、接続詞の後の文において倒置が起きている。平叙文では、SOV の語順どおりになる。

4.1.2 従属接続構造

次に、従属接続詞を含んだ例文を挙げる。従属接続詞の種類は先の品詞のところで挙げてあるので、参照されたい。以下に挙げる例文では、‘ yadi, yadyapi, kyoṃki ’ が使用されている。これらは、脱落することもある。

(5) yadi sāṁs ṭūṭ jātī to vah 'marā' ghoṣit kar
もし 息 壊れる－語幹 行く－仮・現在 小詞 彼 死ぬ－完了 宣告された する－語幹
diyā jātā.
与える－完了 行く－仮・現在

「もし息が切れれば、その人は失格を宣告されてしまう。」

[Bāl bhāratī bhāg 2 : 39]

(6) yadyapi ise bane tīn sau varrṣ se bhī ūpar ho cuke
けれども これを できる－完了 3 百 年 より も 上 なる－語幹 終わる－完了
haiṃ par lagtā hai, māno āj hī
コピュラー現在 しかし 感じられる－未完了 コピュラー現在 まるで 今日 小詞
banā ho.
できる－完了 コピュラー仮・未来

「これができて 300 年以上も経っているが、まるで今日できたかのように感じられる。」

[Bāl bhāratī bhāg 2 : 90]

(7) kyoṃki āj bāzār baṃd hai islie kuch nahīṃ milegā.
なぜなら 今日 市場 閉まった コピュラー現在 だから 少し 否定辞 得られる－未来

「今日は市場が閉まっているので、何も手に入らないだろう。」

従属接続構造の場合、従属文側の従属接続詞に呼応した相関辞が主文側に現われる。(5) の条件節に対しては ' to ' が現われている。これは、小詞であり、いろいろな機能を持つ。また、これは、名詞に付いてテーマ化する日本語の「は」に似た機能も持つ。(6) では、逆接の従属接続詞に対して、前節で説明した逆接の接続詞 ' par ' が現われている。(7) では、理由を述べるものとして、' islie ' が現われている。

最後の例文については、以下のような倒置も可能である。

(8) islie kuch nahīṃ milegā kyoṃki āj bāzār baṃd hai.
だから 少し 否定辞 得られる－未来 なぜなら 今日 市場 閉まった コピュラー現在

(9) āj kuch nahīṃ milegā kyoṃki āj bāzār baṃd hai.
今日 少し 否定辞 得られる－未来 なぜなら 今日 市場 閉まった コピュラー現在

上の例文については、‘ islie ’が文頭に来ることに少し違和感を覚えるようである。下の例文では、その‘ islie ’が脱落しているのだが、こうなると全くおかしくない文になる。その他の例文では、倒置が起こることはほとんどない。

倒置されない場合、この逆接接続詞は、冗長的なものになるので、削除可能であるが、倒置した場合は、上のとおり、削除することはできない。

4.1.3 同格節派生構造

同格節を伴う名詞修飾構造については、次章で詳しく述べるので、ここでは、構造の変形に重点を置いて観察する。被修飾語（ヘッドの名詞）である名詞が削除され、相関辞‘ yah ’と同格接続詞‘ ki ’の呼応のみのもの、さらに相関辞さえ削除されるものの例文についてみていく。まずは、主語に同格節がかかるものから考察する。

4.1.3.1 主語節型

以下に、主語に定形節が修飾句としてかかっている例文を挙げる。

(10) yah ḍar ki vah bīmār hogī sac niklā .
この 恐れ 同格接続詞 彼女 病気の コピュラー未来 真実 出る一過去
「彼女が病気だという恐れは現実のものとなった。」

同格節はヘッドの名詞の後に置かれるのが常である。ここでは、「恐れ」がヘッドになっている。このヘッドを削除すると、非文(*)になる。

(11) *yah ki vah bīmār hogī sac niklā .
これ 同格接続詞 彼女 病気の コピュラー未来 真実 出る一過去
「彼女が病気だという恐れは現実のものとなった。」

ヘッドを削除すると「恐れ」という意味はなくなり、漠然とした「…ということ」になるが、このような相関辞のみの場合、外置化しない限り非文になる。以下には、外置化された例文を挙げる。

(12) mujhe yah lagā ki vah kaṃjūs hai.
私に これ 感じられる－過去 同格接続詞 彼 けちな コピュラ－現在
「私は彼がケチだと感じた。」

(12) の例文は、全体が与格構文になっている。主語が相関辞になる場合、この主文の後に同格節を後置すれば、適格な文になる。さらに、相関辞が削除された例文を以下に挙げる。

(13) idhar-udhar pūchne par mālūm huā ki koī
こちら あちら 聞く－不定（斜） 上で 知った コピュラ－過去 同格接続詞 何らかの
dīpak becnevālā āyā thā.
ランプ 売る－不定（斜）＋接辞 来る－完了 コピュラ－過去
「あっちこっちで聞いた結果、ランプ売りが来たことが分かった。」

(13) も、(12) と同じ与格構文になっている。実際、同格節が与格の主語になることは明らかなので、相関辞はなくても問題はないのである。

4.1.3.2 述語名詞節型

ここでは、述語名詞に定形節がはまる例文を挙げる。「私の望みはこれである。」と言った後に同格節が置かれる。

(14) merī icchā yah hai ki āp kal āeṁ.
私の 望み これ コピュラ－現在 同格接続詞 あなた 明日 来る－仮・未来
「私は、あなたが明日来られることを望んでおります。」

これも、定形節が主語にかかる場合と同じように、相関辞を削除できる。以下に相関辞を削除した例を挙げる。

(15) merī icchā hai ki āp kal āeṁ̃.
私の 望み コピュラー現在 同格接続詞 あなた 明日 来る一仮・未来
「私は、あなたが明日来られることを望んでおります。」

このように、述語名詞の場合でも相関辞が削除され、「私の望みは…です。」という構造により近くなる。

4.1.3.3 目的語節型

目的語の場合も同じように、相関辞を残すものと相関辞を削除してしまうものの２つの型がある。まず、相関辞を残している例文を挙げる。

(16) maiṃ ne yah kahā ki tum pāgal ho.
私 能格 これ 言う一過去 同格接続詞 君 馬鹿な コピュラー現在
「君はバカだと私は言った。」

次に、目的語としての相関辞を削除した例を以下に挙げる。

(17) ham cāhte haiṃ ki āp phir yahāṁ̃ āeṁ̃.
私たち 欲する一未完了 コピュラー現在 同格接続詞 あなた また ここ 来る一仮・未来
「私たちは、あなたにまたここに来ていただきたい。」

(18) ve pāte haiṃ ki ātmā kī amartā par Arjun
あの方 得る一未完了 コピュラー現在 同格接続詞 魂 の 不死 ついて アルジュナ
dhyān nahīṃ de rahā hai
注意 否定辞 与える一語幹 いる一完了 コピュラー現在
「神は、魂が不死であることに、アルジュナが気づいていないのを分かっておられた。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 37]

(19) maiṃ ne apne dādā jī se sunā thā ki is se
私 能格 自分の 祖父 敬称 から 聞く一完了 コピュラー過去 同格接続詞 これ より
pahle bhī hamāre deś ke logoṃ ne is jhaṃḍe ke nīce svataṃtrtā
前 も 私たちの 国 の 人々 能格 この 旗 の 下に 独立
ke lie āṃdolan kie the.
の ため 運動 する一完了 コピュラー過去

「私は祖父から、これよりも以前に私たちの国の人々がこの旗の下、独立運動をしたことを聞いた。」

[Bāl bhāratī bhāg 2 : 57]

(17) は、「欲する」の目的語、(18) は「取る」の目的語、(19) は「聞く」の目的語が同格節全体になっている例であるが、相関辞はない。(16) と (19) について言及すると、日本語では、「…ということを言う／聞く」になるか、「いうことを」の部分を削除して「と言う／聞く」にできるが、日本語と同じ語順であるにもかかわらず、ヒンディー語では、同格節の内容は外置される。相関辞を削除すると、あたかも SVO のような語順になる。(17), (18) も SVO 語順のような構造を取ることについては同じであるが、(16), (19) と違い、これらは次節で扱う非定形節型の構造も持ち合せている。特に、(18) の「取る」という動詞は、物理的に「取る」という意味ではなく、同格節の内容全体を目的語とし、それを「見て取る，分かる」という知覚・認識に関する意味になる。

4.2 非定形節型 (Type Ⅱ)

複文の中の従文が主文に埋め込まれる場合、ある言語要素が、複文中での文法機能と主文中での文法機能を併せ持つ。これは、通言語的に起こる現象である。例として英語の例文を観察する。

(20) I want him to come with me.
私 欲する一現在 彼を 来る一不定 ともに 私 (斜)

「私は彼に来てほしい。」

この例文における‘him’は、動詞‘want’の目的語であると同時に、‘to come’の主語でもある。つまり‘him’は二重の文法機能を果たしていることになる。この文の母体と考えられる定形節型の文を以下に挙げる。

(21) *I want that he would come with me.
私 欲する－現在 同格接続詞 彼が 助動詞 来る－不定 とともに 私（斜）
「私は彼に来てほしい。」

この文は非文法的な文である。ヒンディー語の例として挙げた（17）の定形節型の構文と同じであるが、英語の‘ want ’では、定形節を取らなくなっている。しかし、類義語である動詞‘ wish ’を使えば、定形節・非定形節のどちらの文も可能である。

(22) I wish that he would come with me.
私 願う－現在 同格接続詞 彼が 助動詞 来る－不定 とともに 私（斜）
「私は彼が私と一緒に来ることを願っている。」

(23) I wish him to come with me.
私 願う－現在 彼を 来る－不定 とともに 私（斜）
「私は彼が私と一緒に来ることを願っている。」

このように、英語では、動詞によって非定形節のみであったり、定形節・非定形節どちらも可能であったりする。このような表現の場合、ヒンディー語では、定形節の主語と非定形節の主語が一致しない限り定形節型しか使用されない。[1] しかし、それも‘ cāhnā ’「欲する」を使用する場合にかかる制限である。動詞の意味はともかく、他の動詞を使用した場合には、非定形の埋め込み型が多々観察される。ここでは、そのような例を網羅的に挙げ、語の重層機能を看取することに勤めることにする。非定形節型（Type Ⅱ）を観察するにあたっても、非定形節になる部分を、主語節型，述語名詞節型，目的語節型，斜格語節型の４つに分けて行う。

---

[1] 同じインド・ヨーロッパ語族の中で、フランス語でも定形節型しかないようである。

4.2.1 主語節型

まず、不定詞を主語として使用した例を挙げる。

(24) jhūṭh bolnā āsān hai.
嘘 話す－不定 易しい コピュラ－現在
「嘘を言うことはたやすい。」

これは、日本語の構造といくらか似たところがある。日本語の「言うこと」は、しばしば「言うの」に変わる。行為者は、日本語ならば「～にとって」を付加して表わすが、ヒンディー語では、‘ ke lie ’「のために」を付加する。英語の場合、ヒンディー語や日本語と同じ構造の‘ To tell a lie is easy for me. ’と、相関辞に当たる‘ it ’を主語に立てた‘ It is easy (for me) to tell a lie. ’の構造がある。

(25) mujhe kār calānī ātī hai.
私に 車 動かす－不定 来る－未完了 コピュラ－現在
「私は車を運転できる。」

(25) は、第２章の (29) で観察した与格構文の構造と基本的に同じで、主語として「車を運転すること」という動詞的名詞が入っている例である。この主語の部分のうち、本来は目的語である「車」が女性名詞の直格であるため、「運転すること」に当たる不定詞のデフォルト形‘ calānā ’が、性・数の一致を起こし‘ calānī ’になることが特徴的である。また、この与格構文では、述語に‘ ānā ’「来る」が使用されている。「私に車を運転することが来る」というのが、論理的な意味である。これが、能力的に「できる」ことをいう表現になる。

もう１つ、与格構文の例を挙げる。

(26) mujhe jāpān acchā lagtā hai.
私に 日本 良い 感じられる－未完了 コピュラ－現在
「私は日本が良いと思う。」

これも与格構文の主語に文単位のものが埋め込まれている例である。ここでは、形容詞述語文が埋め込まれている。文全体をみると、「日本」という名詞が、「良い」という形容詞述語と「感じられる」という動詞述語の両方の主語になっていることが分かる。

次に、受身表現の例を挙げる。

(27) yah patr Rām dvārā likhā gayā
この 手紙 ラーム よって 書く－完了 行く－過去

「この手紙はラームによって書かれた。」

(28) mujh se nahīṃ rahā jātā.
私 よって 否定辞 いる－完了 行く－未完了

「私はじっとしていられない。」

先の品詞のところでも述べたが、これが、完了分詞と動詞‘ jānā ’「行く」を複合して表わす、ヒンディー語の一般的な受身である。(27) では、「この手紙」は、「書く」の目的語であるが、それが主節（受身）の主語となっている。つまり、一語が二重の文法機能を帯びていることになる。(28) は、自動詞‘ rahnā ’「いる」が受身になっている例である。自動詞を使用する場合には、否定表現[2] になっていることが多い。日本語の「いる」も受身の接辞を付けると「いられる」となる。日本語の「いる」は、状態を表わす助動詞的なものなので、「??私はいられない。」とは言えない。したがって、「じっとして」を補うことになる。日本語の場合、ある種の不可能を表わすものになるが、ヒンディー語のこれもよく似た意味になる。この他にも、同様の意味で‘ baiṭhnā ’「座る，いる」‘ ṭhaharnā ’「泊まる，留まる」という動詞も受身として使用され、「座っていられない」,「留まっていられない」の意になる。完了分詞を使用している以上、「座って，留まって」を補うのも自然であり、そういう状態（「座った」,「留まった」ような状態）にならないというのが、この受身の骨子になる。したがって、受身に可能の意味が出てきても、純粋に能力自体を問う可能・不可能表現にはならないのが道理である。他動詞‘ paṛhnā ’「読む」をこの構造に適応した場合、心情的にできないというニュアンスが生じるが、「読

[2] 広辞苑によると、日本語のこの接辞を利用した可能表現も、近世までは否定表現に使われていたということである。

んでいられない」と考えれば、無理なく理解できる。逐語訳にも似た「私によってこの本は読まれない。」というのは、いかにも人工的な表現であり、ニュアンスを読み取るには程遠い。受身でありかつ可能の意味の「私には、この本は読めない。」は、「私はこの本が読んでいられない。」という意味合いで「読めない」だけである。したがって、これは、「読んでいられない」と解釈する方がニュアンスもよく伝わり自然である。動詞 ' calnā '「歩く」をこの構造にすると、「もうこれ以上は歩けない」という意味合いで「歩いていられない。」,「歩けない」となる。

これに関連して、次に受身によく似た構文を挙げる。

(29) usse pleṭ ṭūṭ gayī.
彼＋よって 皿 壊れる－完了 行く－過去
「彼によって皿が壊れてしまった。」

[Prayog aur prayog : 319]

この文は、一見、受身のようであるがそうではない。文法的な受身の構文は、(27) の構造である。上は、文法要素が接続して受身を成すものであり、この (29) は、先の動詞のところで述べた自他対応型にみられる、一語彙として確立した自動詞である。日本語の「手が切れた。」,「表のドアが開いた。」,「通りの角にレストランができた。」の「切れる」,「開く」,「できる[3]」が、自他対応型の自動詞になる。行為者が後置詞 ' se ' を取り、対象が主語になるところから、擬似受身 (pseudo-passive / mithyā-vācya) とも呼ばれるが、日本語の受身接辞「－れる，－られる」を付けた「切られる」,「開かれる」,「作られる」と、一語化した「切れる」,「開く」,「できる」が違うのと同じで、前者の受身接辞を付けたものは、他動詞文「(誰かが物で) 手を切る。」,「(誰かが) ドアを開く。」,「(誰かが) レストランを作る。」という前提があってはじめて成り立つのに対し、後者は、基本的に人が関与しておらず、自然になされる様相を呈するものになる。

また、(27), (28) と同じく (29) も ' jānā '「行く」という動詞が述語として使用されているが、(29) のそれは、後章で扱う、演算子の機能を果たす動詞との複合を成し

[3] この「できる」は、「作る」と自他の対応を成すが、意味の上での対応であり、形態上は相関性がない。

ているものである。

4.2.2 述語名詞節型

ここでは、述語名詞として非定形節が使用されている例を挙げる。

(30) merā kām skūl jānā hai.
私の 仕事 学校 行く－不定 コピュラー現在
「私のやることは学校に行くことだ。」

前節の主語に非定形の不定詞が使用されるものとは反対に、述語名詞として、非定形の不定詞が使用されている例である。この場合、非定形の主語は「私」になる。

4.2.3 目的語節型

目的語として文が埋め込まれている例を挙げる。

(31) vah ṭhaṃḍā pānī pīnā cāhtā hai.
彼 冷たい 水 飲む－不定 欲する－未完了 コピュラー現在
「彼は冷たい水を飲みたがっている。」

定形節型（Type Ⅰ）で節を使用していた動詞であるが、この例文の場合は、従属文と主文の主語が一致するので、動詞を不定詞にし、目的語の位置に埋め込むことができる。

(32) maiṃ ne Aśok se nayā patr likhvāyā.
私 能格 アショーク よって 新しい 手紙 書かせる－過去
「私はトムに新しい手紙を書かせた/書いてもらった。」

この文は一般的な使役の構文である。実際に手紙を書く行為者は、‘ se ’「よって」で表わされる。ここでは、「新しい手紙」が「書く」の目的語であると同時に、主節（使役動詞）の目的語ともなっている。これについては、第８章で詳細に議論する。

以下に、人の認識に関わる動詞を使った例文を挙げる。本論文では、これを認知動詞と呼ぶことにする。

(33) maiṃ ne jaṃgal meṃ śer ko dauṛte dekhā.
私 能格 森 に トラ を 走る－未完了 見る－過去
「私は森でトラが走っているのを見た。」

(34) Śīlā Mohan ko mūrkh māntī hai.
シーラー モーハン を 馬鹿な 思う－未完了 コピュラ－現在
「シーラーはモーハンを馬鹿だと思っている。」

(33) では、「トラ」は「見た」の目的語であり、かつ「走る」の主語である。(34) では、「モーハン」は、「バカだ」の主語であるが、同時に主節「思っている」の目的語である。それぞれ、表面的には対格標示だが、埋め込まれた非定形動詞の主語である。二重の機能を持つ典型的な例である。

4.2.4 斜格語節型

非定形動詞には、未完了分詞，完了分詞，不定詞の３つがあるが、副詞的修飾句になる斜格語節では、未完了分詞，完了分詞には、基本的にコピュラ動詞の完了分詞が付加され、不定詞には各種後置詞が付加されるか、付加された後に斜格名詞が来る場合もある。日本語では、継続・続行を表わす「しながら[4]」，「すると／して」，「する／したまま」、条件や仮定を表わす「すれば／したら」、即時に起こる事柄を表わす「した途端」，「した矢先」，「するとすぐ／してすぐ」，、原因・理由を表わす「することにより／よって」，「することで」等のように、それぞれ専用の接続助詞や斜格名詞、また、動詞の連用形や「て」形，そして格助詞と、付加される要素も、接続時の動詞の形態もさまざまである。まず、主文と従属文の主語が一致したものから観察することにする。

以下に、未完了分詞を使用した例を挙げる。

---

[4] 元は複合形。『助詞「の」と同義の「な」に、ものの性質・資質を表す体言「から」の付いた語。体言・形容詞語幹・動詞連用形に接続する。』［広辞苑第四版］

(35) sone se pahle paraspar bātcīt karte hue
寝る－不定（斜） より 前（斜） 互いに 話 する－未完了 コピュラ－完了
mustafā ke bhāī ne batāyā....
ムスタファー の 兄 能格 語る－過去

「寝る前に互いに話をしながら、ムスタファーの兄は話した・・・。」

[Bāl bhāratī bhāg 2 : 24]

(35) では、文頭から不定詞に後置詞と斜格名詞を付加した斜格語がみられる。その直後に、未完了分詞とコピュラ動詞の完了分詞を使用した従属文の非定形が観察される。非定形節の主語は、「ムスタファーとその兄」である。従属文の述語動詞が未完了の状態にあるということから、「しながら」という意味になる。

(36) sab kuch jānte hue bhī us ne kuch bhī nahīṃ kahā.
すべて 少し 知る－未完了 コピュラ－完了 も 彼 能格 少し も 否定辞 言う－過去

「すべて知っているのに、彼は何も言わなかった。」

(36) は、同じ「しながら」に当たる構造をしているが、その非定形部分の後に「も」が来ている。これは、日本語の「しながらも」と同じで、逆接の意を表わすことになる。

(37) tumheṃ aisā kām karte śarm nahīṃ ātī ?
君に このような こと する－未完了 羞恥心 否定辞 来る－未完了

「君はこんなことをして（いて）、恥ずかしくないのか。」

(38) āp ko hiṃd paṛhte kitne sāl hue?
あなた に ヒンディー語 学ぶ－未完了 いくつ 年 なる－過去

「あなたがヒンディー語を学んで何年になりますか。」

(37), (38) では、未完了分詞のみで、コピュラ動詞の完了分詞がない。ほぼ日本語の「いて」に当たるものなので、なくても十分意味が通じるため省略されるものと考えられる。(38) は、時の経過を尋ねる表現である。未完了分詞を使用する場合と完了分詞を使用する場合があるが、未完了分詞を使用する以上、「学びつづけて」という継続中の事

柄に対する聞き方になる。(37) も (38) も、主語が与格標示されている。どちらも母体が与格構文であるためだが、与格主語が非定形節の主語にもなっている。

(39) vah paṛhte paṛhte so gayā.
彼 読む－未完了 読む－未完了 寝る－語幹 行く－過去
「彼は読書しているうちに寝てしまった。」

(39) の例のように、未完了分詞を二度繰り返すことで、そういう状態にある中、という時間的な区切りが生じる。すなわち、日本語では「する／しているうちに」もしくは「する／している間に」に当たる表現になる。

(40) yah mazāk sunte hī vah haṁs paṛā .
この 冗談 聞く－未完了 小詞 彼 笑う－語幹 生じる－過去
「この冗談を聞いた途端、彼はどっと笑った。」

(41) vah mujhe dekhte hī bhāg gayā .
彼 私を 見る－未完了 小詞 逃げる－語幹 行く－過去
「あいつは、俺を見た途端、逃げ出した。」

(40), (41) は、未完了分詞に、先行する要素を強調する小詞 ‘ hī ’ を付加した例である。「～してすぐ」,「～するやいなや」,「～した途端」という具合に、即時に主文の事柄が起こる場合に使用する。主語は、定形，非定形ともに、直格の「彼」である。(40) は、非定形節を前方に出し、その中の同一の主語を削除したもので、(41) は、主文の中に、その非定形節を埋め込んだ例である。

次は、完了分詞を使用した斜格語節の例を挙げる。

(42) us ne hāth meṃ kitāb lie (hue) kahā.
彼 能格 手 に 本 取る－完了 コピュラ－完了 言う－過去
「彼は本を手に持ったまま言った。」

(43) āp ko hiṃdī paṛhe kitne mahīne hue?
あなた に ヒンディー語 学ぶ－完了 いくつ 月 なる－過去

「あなたがヒンディー語を学んで何ヶ月になりますか。」

［エクスプレス・ヒンディー：118］

(42) は、当然のことながら、完了分詞は、未完了の状態とは対照的に完了した状態にあるということを指すので、「したまま」もしくは、「持つ」の過去終止形である「持った」の連用形「持って」という意味になる。コピュラ動詞の完了分詞は、完了状態にあることを冗長的に示すものになるので、しばしば省略されるものと推察される。(例：「持っていて」⊂「持って」)

(43) は、(38) のところでも述べたように、時の経過をたずねる表現である。未完了分詞ではなく完了分詞を使用することで、完了した行為。つまり「学ぶことに従事してから」、のニュアンスを強調するものと考えられる。

次は、先に挙げた未完了分詞を二度繰り返すものが、完了分詞に入れ代わっっている例である。

(44) vah aspatāl meṃ paṛe paṛe ūb gayā .
彼 病院 で 横になる－完了 横になる－完了 飽きる－語幹 行く－過去

「彼は病院で寝ているうちに飽きてしまった。」

［エクスプレス・ヒンディー：121］

ここの「寝ている」は、寝た状態にあるということであり、したがって、完了分詞が使用される。時間的な区切りが生じるのは、先の未完了分詞を使用した場合と同じである。

次に、(35) でも出てきた、非定形述語に動詞の不定詞を使用する例を挙げる。不定詞は、元々動詞でありながら名詞の働きをするもので、後置詞と組み合わせることで、斜格語の修飾句になる。

(45) din bhar kām karne se vah thak gayā.
日 中 仕事 する－不定（斜） よって 彼 疲れる－語幹 行く－過去

「一日中仕事をして、彼は疲れた。」

(46) pāp ke adhik baṛh jāne se kul kī striyāṁ duṣcaritr
罪 の 多い 増える－語幹 行く－不定 より お家 の 女性（複） 悪い性分
ho jatī haiṃ.
なる－語幹 行く－未完了 コピュラ－現在

「罪が増えていくと、お家の女たちが性質悪くなってしまう。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 23]

(45), (46) では、後置詞 ‘ se ’ が使用されている。これは、道具格の延長にあるものとして、原因・理由を述べる時に使用される。また、原因・理由という名詞 ‘ kāraṇ / vajah ’ を不定詞と同格的に付加することも可能である。（例：不定詞（斜）＋ ‘ ke kāraṇ[5] ’, ‘ kī vajah se ’）また、(45) の主語は、主節の主語と同じだが、(46) は、従属節と主節の主語が異なっている。その場合、従属節の主語は、属格後置詞で不定詞とつなぐ。従属節の目的語は、(45) のように、直格の対格標示のままである。

(47) bādśāh dūsre deśoṃ se laṛāī karne meṃ vyast rahe.
王 他の 国々 と 戦い する－不定（斜） に 忙しい いる－過去

「王は他の国々と戦うのに勤しんでいた。」

(47) では、後置詞 ‘ meṃ ’ が使用されている。これは、位置を表わす後置詞である。日本語の「～することに」の格助詞「に」と同じ使用である。

(48) vahāṁ pahuṁcne par maiṃ āp ko fon karūṁgī.
あそこ 着く－不定（斜） 上に 私 あなた に 電話 する－未来

「そこに着いてから、あなたに電話します。」

---

[5] この場合、後置詞は付加されない。この名詞 ‘ kāraṇ ’ 自体がゼロ後置詞の斜格名詞になるからである。日本語の「為」という名詞を斜格語として利用した「～のため（に）」と同じものと考えられる。

(48) は、後置詞 ‘ par ’ を使用した例である。「A の上で B」[6] ということになるので、従属文の命題 A と主文の命題 B に時間的なズレを持たせることになる。言い換えれば、「A の後に B」ということにもなる。「後」という名詞を複合していう言い方もある。(例：不定詞 (斜) ＋ ‘ ke pascāt ’, ‘ ke bād ’)

(49) maiṃ tum se milne ke lie āūm̃gā.
私 君 と 会う－不定 (斜) の ため 来る－未来
「私は君に会うために来るよ。」

(49) では、後置詞の複合形 ‘ ke lie ’「のため (に)」が不定詞に付加された例である。複合後置詞 ‘ ke lie ’ は、与格の後置詞に取って代わることもある。また、これら後置詞を削除してしまうこともある。(これについては第 9 章で詳しく述べる。) 定形動詞「来る」の主語も非定形動詞の「会う」の主語も一致している。

ここまでは、主文と従属文の主語が一致をしている例を主に挙げてきた。しかし、当然のことながら、いつも主文と従属文の主語が一致しているわけではない。(46) でもその例を掲載済みだが、ここからは、意図的に両文の主語が異なる例を挙げる。

(50) skūl baṃd hote hī turaṃt ghar jākar un kī
学校 閉まった なる－未完了 小詞 すぐに 家 行く－語幹＋接続分詞 あの方 の
sevā meṃ lag jātā.
世話 に 付く－語幹 行く－未完了
「学校が終わるやいなや、すぐに家に帰り、父のお世話にかかっていました。」
[Bal bhāratī bhāg 2 : 8]

非定形節の主語は「学校」である。定形節の主語は、文中では省略されており、さらに手がかりとなるコピュラ動詞も省略されているので分かりづらいが、文脈からの補完で「私」であり、コピュラ動詞の時制が過去形であることが分かる。この場合、非定形側の

[6] 筆者は、このような A と B の上下関係の落差を利用したものとして、A および B に定形の文が代入された場合の逆接の接続詞に発達したものと推察している。

主語「学校」は直格になっている。しかし、下の文では、従属文側の主語が直格ではない。

(51) laṛkiyoṃ ke vahāṁ pahuṁcte hī un kī haṁsī aur ṭhahākoṃ
少女たち の そこ 着く－未完了 小詞 彼女ら の 笑い そして 高笑い（複）
se vātāvaraṇ gūṁjne lagā.
で 雰囲気 響く－不定（斜） 付く－過去

「少女たちが着いた途端、彼女らの高笑いが周りに響き始めた。」

[Bal bhāratī bhāg 2 : 12]

(51) では、従属節の主語である「少女たち」が、非定形動詞と属格 ' ke '「の」でつながれている。これは、未完了分詞の斜格形に呼応しているので、属格が斜格形になっている。

また、従属節側の主語が属格になる例が他にもある。以下の不定詞を用いた斜格語節の例がそうである。

(52) kal mere āne par vah mujh se śikāyat karegā.
明日 私の 来る－不定（斜） 上に 彼 私（斜） に 不平 する－未来

「明日、私が来れば、彼は私に不平を言うだろう。」

(53) billī (ke) āne se cuhiyā bhāg gayī.
猫 (の) 来る－不定（斜） よって ネズミ 逃げる－語幹 行く－過去

「猫が来たので、ネズミは逃げた。」

不定詞を用いた (52) の斜格語節の場合、不定詞が動名詞として名詞性を持つので、「彼が行く・こと／の」が「彼の行く・こと／の」のように、主語が属格になるのは理解し易い。しかし、(53) では、未完了分詞の斜格形に対する主語が、直格ではなく、属格で「??私の行って」という具合に、動詞側に名詞性がないにもかかわらず、属格でつながれている。

(52) をみると、従属節側の主語が「私」で、主文の主語は「彼」である。(53) は、従属節側の主語が「猫」で、主文の主語が「ネズミ」である。例文中に（ ）で表わしたように、「猫」が主語の場合、属格でつなげるかどうかが曖昧になる。以下に、属格表示されていない例を挙げる。

(54) din nikalne se pahle hī hāthiyoṃ kā yah jhuṃḍ ghās ke
日 出る－不定（斜） より 前 小詞 象（複） の この 群れ 草 の
maidān kī or cal diyā
土地 の 方向 進む－語幹 与える－過去

「日の出前に、この象の群れは、草のある場所へと出発した。」

[Bal bhāratī bhāg 2 : 42]

(54) は、「過ぎる（より）前」という、斜格名詞「前」を後置詞句に付加した例（3.1.3.1 を参照。）である。定形節の主語は、「象の群れ」であり、非定形節の主語は、‘ din ’「日」である。この場合、属格標示されてはいない。日本語では、「日の出前」を「日が出る前」という具合に、ヒンディー語と平行して言い換えることができるが、非定形節の主語の「日が」を「日の」という具合に属格標示もできる。というのは、日本語の格助詞「の」は、所有の意だけではなく、「人の作る」のように、行為主体を表わす場合にも属格標示されることがあるからである。「外聞のわるい。」（東海道中膝栗毛三）［広辞苑第四版］の平叙文や「時に雨の点々下りて面を撲つことあり。」［鴎外論集］の非定形節の主語から、現代では、「えたいの知れない人」,「人の書いた本」のように、名詞句の中の主語を表わす場合に使用されることが多い。この「の」は、現代で主格を表わす格助詞「が」で代替することもできる。[7]

ヒンディー語では、非定形節の主語が属格を取るか否かについて、説明の 1 つに、生物性の有無［+animate／−animate］という意味素性がある。すなわち、上記の例文からもその様子は見て取れるが、有生のものは属格標示され、無生のものは主格標示されるということになる。ただし、(53) の例が揺れている。C.Masica (1976) や B.Comrie (1981) によると、人間 vs. 非人間の間で有生性の境界が明確でなくなるという。「猫」がその範囲のものとすれば一応の理由付けとなるが、先の B.Comrie も認めるように（氏がヒンディー語で扱っているのは、後章で述べる与格後置詞の直接目的語への付加であるが）、文字通りの有生性というパラメータ単一では、解決のつかない問題であることは確かである。実際、日本語でも「の」と「が」のどちらもの格助詞で標示ができるわけである。主格の

[7] 九州北部辺りでは、現代でも「が」の代わりに「の」を使用することがある。また、現代では主格を表わすこの「が」も、「我(わ)が家」,「誰(た)が命」のように、属格としても使用されることがある。

「が」が非定形節の主語としても使用されるのは、主語である以上問題ないとして、「の」で標示できるものが、ヒンディー語のそれのように、有生性のパラメータで片づけられるものではない。両氏が提示する別のパラメータに関しては、後章で改めて議論するとして、この場合、多分に格助詞「の」の「何かに属する／所有する」という性格に起因するものと考えられる。つまり、それは、人間などの所有意識が働くものでなければ、（不定詞もしくは未完了分詞で表わされる）行為に対して「の」が使用できないと考えられる。

また、現代では、名詞句であっても「彼が行くこと」,「君が来るの（は)」,「私が書いた手紙」,「えたいが知れない人」のように「が」標示が多いが、この中で「の」標示がしづらいものは、「彼の行くこと」のみである。残りは上にも挙げたように「の」標示してもさほど無理はないはずである。

英語の統語構造をみると、前置詞を伴なった動名詞（‘ by seeming to be asleep ’）ではなく、分詞構文の場合、主文と従属文の主語が違うと、従属文側の主語は、属格か対格で標示される。（例：‘ my going home ’, ‘ my being scared and needing something to clink to ’, ‘ me going home ’）英語は、人やものという区別なく、ほとんど分詞構文の主語は属格になる。ヒンディー語の未完了分詞もしくは完了分詞も、基本的には分詞構文と同じものと考えられる現象であり、‘ Tom coming home ’ という対格（主格の可能性もある）よりも ‘ Tom's coming home ’ の属格の方が使用率は高い。

これらは、現在分詞，もしくは未完了分詞を名詞的に捉えたものと考えられる。これを、言語学的には動名詞的名詞化形（Gerundive Nominal）というが、本来、直格である主語を属格標示するメカニズムは、名詞句と密接な関連があるということであり、ヒンディー語では、現在分詞にほぼ似た働きを未完了分詞がしていることになる。

以上、ヒンディー語の統語構造を、単文構造，複文構造の順に、例文を挙げて概観した。基本になる単文構造は、語が表層通りの文法関係しか持たない。この単文を２つ以上合せて、複文にする過程も、定形節型の Type I と非定形節の Type II に分かれる。定形節型の Type I では、単文の並列なので、文法関係が複雑になることはないが、非定形節型（Type II）にみられたように、従属文が主文に埋め込まれると、二重、三重の文法機能が文の下層に沈んでいくことになる。

しかし、ここで観察したものは、非定形節が名詞句となり、主語，目的語に埋め込まれたものか、もしくは斜格名詞句になって副詞的に文を修飾しているかのどちらかである。

したがって、前章で観察した名詞修飾構造の、単文が名詞句になる過程で負った文法機能の重層性なのである。ここまでは、一旦、単文が名詞句になったものを別の文に埋め込んだ過程を観察したわけだが、この名詞句化の過程を通らず、単文そのものを別の単文の主語や目的語に埋め込んだ構造が存在する。それが、線的に述語複合となるものである。次章からは、その述語複合を（1），（2），（3）に分け、構造を中心に詳しく分析していく。

第５章　述語複合（1）――　名詞編　――

述語複合とは、文字通り述語が複合されることである。述語になる品詞としては、名詞，形容詞，動詞の３つが挙げられる。ヒンディー語に‘ saṃyukt kriyāeṁ ’（compound verbs）という術語があるが、これは通常『複合動詞』と訳される。その際、名詞，形容詞，動詞と別の動詞の複合を含むかどうか、これは学者により異なっている。例として挙げるが、S.H.Kellog は、この‘ compound verbs ’で、名詞，形容詞，動詞との複合を取り扱っており、Kāmtāprasād Guruは、‘ saṃyukt kriyāeṁ ’の中で動詞との複合のみを扱っている。このように、学者により含む品詞の範疇が異なっているので、本論文では新たに述語を複合するものとして、これらを『述語複合』と呼び、名詞，形容詞，動詞の３つを先行述語として扱うことにする。そして、後続述語には主に動詞が来るものを扱うが、名詞を複合するものの例として、‘ pyār karnā ’「愛する」，‘ ghṛṇā karnā ’「軽蔑する」，‘ iśārā karnā ’「合図する」等があり、形容詞を複合するものの例としては、‘ ūṁcā karnā ’「高くする」，‘ acchā karnā ’「よくやる」等がある。形容詞に関しては、『形容詞』＋『動詞』の複合形式のみならず、逆の『動詞』＋『形容詞』をとる構造があり、中には膠着的要素が強いものもある。動詞を複合する場合は、形式と意味共に複雑になる。非定形動詞の形態１つ取っても、語幹，不定詞，未完了分詞，完了分詞の４つが存在することはこれまでにも述べているが、それらが（特に語幹が）定形動詞となる後続述語に続き、しばしば日本語に訳しにくい複雑な意味を表わすのは、ヒンディー語を学んだことのある者ならば、経験済みであろう。

一方、日本語にもこれらの品詞による述語複合が観察される。名詞を複合するものとして「愛する，学習する，勉強する，観察する，ばかにする，医者にする，医者になる，異なる[1]」などがある。これらは、大きく２つに分けられる。１つは「ばかにする，医者にする，医者になる」のような純粋に述語名詞（PredN）を複合したもので、もう１つは、名詞が動詞に編入される「愛する，学習する，勉強する，観察する，異なる」のような、往々にして漢語の熟語による抽象名詞＋『する，なる』である。これは、名詞と動詞が一体になり、一語と化してしまっている名詞編入動詞型のものである。

---

[1] 古語「異なり」の「なり」（断定の助動詞）の連体形を動詞として異分析したもの。

また、形容詞を複合するものとして、日本語には「おいしく食べる，楽しく過ごす，高くする，汚くする，親しくする，よくやる，美しくなる，悲しくなる」のような『形容詞の連用形』＋『動詞』の複合形式がある。これも名詞の場合と同様、大きく２つに分けられる。純粋に述語を複合する「おいしく食べる，楽しく過ごす」のようなものと、一語として一体化してしまっている「高くする，汚くする，親しくする，よくやる，美しくなる，悲しくなる」の類である。形容詞が連用形になるのは「おいしく食べる，楽しく過ごす」と同じだが、後続動詞には『する，やる，なる』になり、自由に複合されうる前者とは違い、一語化された側面が強くなる。

また、日本語には『動詞の連用形』＋『形容詞』の複合形式がある。「書きやすい，話しにくい，しがたい，読みづらい」などが、その例である。この複合形式にも「書きやすい，話しにくい，しがたい，読みづらい」のように、形容詞そのものが後にくるものから、ひいては「話したい」の「たい[2]」のように活用の点から形容詞出自と推察される接辞のようなものがくるもの、合わせて大きく二種類ある。

動詞と動詞を複合するものももちろんあり、数えあげれば切りがないが、ここでは恣意的にいくつか挙げておく。例えば、「してしまう，食べつくす，やり直す，開けておく，かけてみる，泊めてやる，待ちわびる，遊びほうける」のような動詞と動詞の複合形式である。詳細は後章で述べる。

まず、本章では、名詞との複合形式に焦点を当て、日本語と対照しながら観察していく。

5.1　名詞編入型

先に述べた日本語の「愛する，学習する，勉強する，観察する，異なる」のうち、そのほとんどは名詞編入が完了している動詞であるが、このうち「勉強する，観察する」は、その途中段階にあるといえる。例えば、名詞編入が完了した「愛する」は、「*愛をする」

---

[2] これは、形容詞活用するが、通常、助動詞と呼ばれている。これは、動詞の連用形に付き動詞を補助するという機能の点を重視しているためであろう。つまり、日本語でいうところの助動詞は、その品詞の出自や活用等の形態に関わらず「動詞を助ける品詞」全般を指しているのである。一方、ヒンディー語の‘ sahāyak kriyā ’や英語の‘ auxiliary verb ’は、助動詞と訳されるが、本来は補助動詞、つまり「(動詞を) 助ける動詞」を指す。前者は後者を包括するが、実際、品詞にまたがるずれを起こしている。したがって、形態を重視する本論文では、活用の面から形容詞出自のものとし、拘束形式としての機能の面から接辞として扱う。

とはいえない[3] が、「勉強する」に関しては、「勉強をする」という具合に名詞と動詞を分割できる。これをみると、名詞が完全には動詞に編入されていないのが分かる。この場合、例えば、科目としての対象である目的語（ここでは『数学』を例に挙げる。）が対格になって名詞編入される「数学を勉強する」の場合と、本来の目的語と『勉強』を属格でつなぐ「数学の勉強をする」の２つの統語構造が観察される。

目的語を属格でつなぐ構造については、第２章で述べたヒンディー語の名詞句の重層構造をもつものとしてすでに述べているが、ヒンディー語では、「抽象名詞＋する」型については、この構造、すなわち、完全には名詞が編入されていない半名詞編入型動詞がかなり多いのである。その際、動詞としては、‘ karnā ’「する」，本動詞 ‘ honā ’「なる，生じる」が専ら使用される。

動詞が編入する抽象名詞によっては、格標示の形式が変わることもある。ここでは、徐々に動詞側へ編入されていく様子を看取しながら、その際の格標示について詳細にみていく。

まず、半名詞編入型の例を挙げて説明する。

5.1.1 半名詞編入型（＝『数学の勉強をする』型）

後続動詞として ‘ karnā ’「する」の例を主に挙げて考察する。

(1) āp kā iṃtzār karūm̃?
あなた の 待つこと する－仮・未来
「あなたを待とうかな。」

この文は、主語が欠落しているが、動詞の形態の一致により、一人称単数であることが分かる。抽象名詞として使用されている ‘ iṃtzār[4] ’ は、アラビア語出自の動詞派生名詞（男性名詞）である。3.1.3.2 の名詞修飾構造のところで挙げた ‘ pratīkṣā ’ は、サンスクリット出自の同義語であるが、名詞の性が女性なので、属格「の」に当たる ‘ kā ’ が ‘ kī ’ になる。

---

[3] 『愛』に別の名詞がつけば、「略奪愛をする」といえるが、そうなると、これは単純な SOV 構造になるので、別物となる。

[4] ‘ n－z－r ’ の不定詞。「見ること」を指す。同様の派生名詞 ‘ nazar ’「視線」も、‘ ānā ’「来る」と複合し、「見える（視界に入る）」という意を成す。

この文の構造は、文字通りに日本語にすれば「私の待つことをする」となるが、日本語表現としてはいうまでもなく不適格である。というのは、日本語には一語の動詞「待つ」があるので、敢えてそのような表現形式をとる必要がないのである。一方のヒンディー語には、一語で「待つ」という意味を持つ動詞はないため、名詞編入型の構造に頼ることになっている。また、名詞編入型の中でもこれは半名詞編入型であり、属格「の」に当たる‘ kā ’と抽象名詞「待つこと」をつなぐわけだが、この場合の日本語の属格後置詞「の」は、重層構造になっている場合、通常、主語（主格）か目的語（対格）という文法関係を下層に持つ。ヒンディー語もその点では同様であるが、動詞の不定詞は別として、このような動詞派生の抽象名詞の場合、‘ kā ’は、目的語をその下層に持っている。

(2) vah āp kā pūrā ilāj kar degā.
彼 あなた の 完全な 治療 する－語幹 与える－未来
「彼があなたをちゃんと治してくれますよ。」
[Cācā Caudharī 7 : 34]

この文の場合、日本語でも、「治す」の一語の動詞ではなく、熟語の「治療」を編入した「治療する」を使えば、「あなたの治療をしてくれる」といえる。また、「あなたを治療してくれる」もいえるので、完全な名詞編入型と半名詞編入型の両方の構造が成立する。なお、この例文には、動詞の述語複合も入っているが、これは後節で扱うので、ここでは、「してくれる」という日本語を当てるにとどめておく。

(3) mujhe cācā Caudharī ke lie lakṛī kā prabaṃdh karnā cāhie.
私に 叔父 チョードリー の ため 材木 の 束ねること する－不定 欲する－命令
「俺はチョードリーおじさんのために、木を集めてこなければならない。」
[Cācā Caudharī 7 : 19]

この文は、全体として与格主語＋不定詞＋‘ cāhie ’の与格構文になっている。ここの‘ cācā ’「叔父」は、本来、父方の叔父を表わす語であるが、叔父といわれうる年齢層の人全般への敬称としても使用される。例文における『名詞句』＋『する』は、論理的には「木の束ねることをする」、つまり、「木を束ねる」こと、これを文脈に置くと、薪を

集めに行く場面なので、柴刈りのことになる。

(4) maiṃ ne us arth meṃ is śabd kā istemāl kiyā thā.
私 能格 その 意味 に この 言葉 の 使用 する一完了 コピュラー過去
「私はその意味でこの言葉を使ったのでした。」

この文は、「この言葉の使用をする」すなわち、「この言葉を使用する」になる。例文ではアラビア語出自の ‘ istemāl ’ を使用しているが、サンスクリット出自の ‘ prayog ’ も使用する。しかし、後者は文語に使用されることが多い。[5]

この名詞句は、‘ honā ’「なる」も取り、自動詞としても使用される。

(5) hiṃdustān meṃ is śabd kā istemāl ho rahā hai.
インド に この 言葉 の 使用 なる一語幹 いる一完了 コピュラー現在
「インドで、この言葉は使用されているのですか。」

日本語では、この場合、他動詞「使用する」の自動詞は一語として存在しないので、受身接辞「－れる」を付加した受身形でしか表わせない。ヒンディー語では、これは、「この言葉の使用がなって（生じて）いる」になっているだけである。

ところで、この『使用』という語彙の格標示を位置格 ‘ meṃ ’ に変え、別の動詞を複合する表現もある。‘ prayog / istemāl meṃ ānā ’「使用に来る」となれば、自動詞の「使用される」の意を表わすものになり、‘ prayog / istemāl meṃ lānā ’「(～を) 使用に持って来る」となれば、「使用する」の意になる。[6]

---

[5] ‘ istemāl ’ は口語に使用されることが多い。さらに口語の場合、‘ istemāl ’ の代わりに英語の ‘ use, using ’ も使用される。もっとも、この代替は、英語教育を受けた者に多くみられる現象のようである。

[6] 最近、日本語では若者の間で「ブルー入る」のような、外来語の語彙と動詞「入る」を複合した形式が使われている。これは英語の ‘ blue ’「憂鬱な」を名詞として取り入れて動詞と複合した、新たな名詞編入動詞の形式と考えられる。この場合、「憂鬱入る」すなわち「憂鬱になる」の意を表わす。抽象名詞と自動詞を組み合わせるところは、ヒンディー語の与格構文によく似ている。

(6) hamārī naukarānī kamroṃ kī safāī kar rahī hai.
私たちの 女中 部屋（複） の 清掃 する一語幹 いる一完了 コピュラー現在
「うちの女中が部屋の掃除をしています。」

この文では、‘ safāī ’「清掃」と清掃の対象である「部屋」を属格後置詞でつないだ名詞句を複合している。日本語では、「部屋の掃除をする」,「部屋を掃除する」のように、完全な名詞編入型および半名詞編入型の構文も成り立つが、ヒンディー語は、「部屋」を対格標示する場合は、次章で挙げるこの抽象名詞の形容詞形 ‘ sāf ’「清潔な」と ‘ karnā ’ の複合形になる。

(7) āzādī kī bāt kareṃge.
自由 の 話 する一未来
「独立の話をしましょう。」

［Mohan se Mahātmā : 5］

これは、「～の話をする」という言い方である。ここでの「自由」はすなわち「独立」を指す。主語はないが動詞の一致により、一人称複数形になる。特に口語表現の「独立の話、しましょう。」のような「を」格を付加しない直格形を用いる場合は、形態・統語共に完全に同じ構造である。しかしながら、日本語で「を」格を付加しないのは、口語表現に限られる。

また、対象である「独立」が必ずしも属格を取るわけではなく、「独立についての話」の「～について」になると、‘ par / ke bāre meṃ ’ が対象になっている「独立」の斜格名詞句の後置詞として現われる。これについては、属格「の」でつないでいる「独立」と「話」の関係に注目すればよい。この場合、「独立」は、「話」の対象でありかつ「話」の内容に関わるもので、「独立」は「話」に包括されているものであるから、「を」格を取る純粋な対象ではないのである。日本語でも純粋な対象として「独立」を「を」格で標示する「??独立を話す」は言い難い。「独立について」にするか、「独立のことを」という具合に「話」に当たる部分を「こと」で受けて初めて成立する。あくまで話の一部すなわち内容であり、それを「の」格でつないでいるに過ぎない。これまでに挙げた属格の名詞句と

は種類が少々異なるのである。

完全に一語と化した「話す」の場合、「*独立の話す」は不適格である。また、話の内容を対象にした「を」格標示も、意味こそ通じるが日本語表現としては適当とはいえない。この場合、統語構造としては属格でつないだ半名詞編入型の「独立の話（を）する」,「独立について話（を）する」か、対象に別の格標示をして抽象名詞を動詞側に編入する名詞編入型の「独立について話する」（一体型：「独立について話す」),「独立のことを話する」（一体型：「独立のことを話す」）になる。

また、これについても、‘ honā ’「なる」が来ることがある。

(8) agar bāt nahīṃ ho pāegī to...
もし 話 否定辞 なる一語幹 得る一未来 と
「もし話ができなかったら…。」

述語の部分は、後章で述べる動詞との複合になっており、日本語の「しうる，話しうる」のような可能を表わすものとなる。ここでは‘ honā ’との複合により、日本語の「話がされる」,「話がならない」つまり「話が行われない」の意となり、自動詞のようなふるまいをすることになる。

(9) Mohan pitā kā ādar kartā thā.
モーハン 父 の 尊敬 する一未完了 コピュラー過去
「モーハンは父を尊敬していました。」

この文は、論理的には「父の尊敬をする」となるが、これは、日本語では特殊な場合[7]を除いて、通常は言わない。したがって、日本語の「～を尊敬する」は、ほぼ完全に名詞が動詞に編入されて一体化してしまっているということになる。しかし、ヒンディー語では、完全に名詞が動詞に編入されているとはいえない。

ここで、完全に編入されていないと言わざるを得ないのは、後置詞‘ ko ’を取り、

[7] 筆者のいう特殊な場合とは、例えば、「僕は父の尊敬はしないけど、母の尊敬ならするかもね。」のように、「父の尊敬」が一体化した名詞句として使われる場合のことである。この「は」標示は目的格を示す「を」に取って代わるものである。

完全に名詞が編入された動詞として ‘ ādar karnā ’ を使用する場合があるからである。以下に例を挙げる。

(10) maiṃ ne apne adhyāpak ko ādar kiyā.
私 能格 自分の 先生 を 尊敬 する一過去
「私は自分の先生に敬意を表しました。」

「尊敬」という抽象名詞に「する」を複合すれば、「尊敬する」になるのはいうまでもないが、これは、静的な動詞、他の言葉を借りれば状態動詞になっているのである。「私は首相を尊敬するだろう，私は尊敬している，私は尊敬した」など、これらはあくまで何かをした結果、それに対し、私が尊敬の状態になるという状態を表わしているだけである。ヒンディー語の名詞 ‘ ādar ’ は、動詞側に編入されることによって、静的な動詞から動的な動詞に変わる。つまり、この場合、「尊敬にまつわる何かをする，敬って何かをする」になるのである。構造を違えることで、「尊敬」が単に状態としての尊敬ではなく、「尊敬にまつわる行動をする」という意味にまで広がるわけである。

(11) Afrīkā meṃ goroṃ kī manmānī kā muqāblā kiyā.
アフリカ に 白人 の 好き勝手 の 抵抗 する一過去
「(人々は) アフリカで白人の横暴に対して抵抗した。」

この例文には主語がないが、文脈から『人々』もしくは『民衆』が補完される。アラビア語出自の抽象名詞 ‘ muqāblā ’ は、サンスクリット出自の ‘ virodh ’ と同義で、統語構造も同じ構造になる。

また、この「抵抗」を表わす ‘ muqāblā / virodh ’ は、目的語を属格後置詞で表わす以外に、「から，よって，に対して」に当たる後置詞 ‘ se ’ を使用する場合がある。先の統語構造が「～の抵抗をする」という半名詞編入型ならば、この後置詞 ‘ se ’ を伴った ‘ se muqāblā karnā ’、すなわち「～に（対して）抵抗する」の完全な名詞編入型になる。

R.S.McGregor の辞書によると、物のときは属格名詞句による半名詞編入型の構造を取り、人の場合は、後置詞 ‘ se ’ を伴った名詞編入型の構造になるということになってい

るが、上に挙げた例では、「白人たち」という人を表わす名詞が、半名詞編入型の構造に組み込まれている。これは、主語に抵抗するものとして、物よりも人がくる可能性が高いだけで、実際は、人・ものに関わらず、それらを名詞編入型の「(～に対して) 抵抗する」か、半名詞編入型の「～の抵抗をする」の構造に、任意に組み込むことができる[8] のである。

5.1.2 名詞編入型 (＝『数学を勉強する』型)

次に考察するのは、先の半名詞編入型にも若干みられた、名詞編入型の統語構造を持つものである。先の半名詞編入型同様、動詞 ‘ karnā ’「する」の例を主にみていく。

(12) us ne śahar kī or prasthān kiyā.
彼 能格 町 の 方向 出発 する一過去
「彼は町に向かって出発した。」

‘ prasthān ’ は、元々「離れた」という意味を持つ接辞 ‘ pra- ’ が ‘ sthān ’「場所」に付加されたサンスクリット系の合成語である。場所を離れるという意味で、日本語の「出発」を当てる。日本語でも「出発をする」という構造は、SOV であるが、実際は、名詞編入を起こした自動詞になっている。したがって、「町」という対象は、方向の「町へ」か起点の「町から」によって格標示が変わる。

(13) kyā tum ham se īrṣyā karte ho?
疑問辞 君 私たち に対して 嫉妬 する一未完了 コピュラー現在
「おまえ、俺たちに嫉妬しているのか。」

この例は、‘ īrṣyā ’「嫉妬」という名詞を編入した例である。これも先の ‘ ādar ’「尊敬」同様、ものの場合は「～の嫉妬」という属格でつなぐということである。しかし、(11) の「抵抗する」の場合と同じように、人かものかというより、対象に対する位置的な認識

---

[8] どちらの構造を取るかは、抵抗する対象を、主語に対峙するものとして捉えるか、単なる対象として捉えるかにかかっている。前者の場合が、対象に後置詞 ‘ se ’ を付けた名詞編入動詞になるのである。

の仕方で格標示が変わるだけである。

(14) maiṃ ne tum se pyār kiyā.
私 能格 君 に対して 愛 する一過去
「僕は君を愛した。」

この ‘ pyār ’ という名詞以外に、同義の語として ‘ prem ’（サンスクリット出自），‘ muhabbat ’（アラビア・ペルシャ語出自）があり[9] 名詞編入動詞を形成するが、対象への格標示に ‘ se ’ を使用するのは、どの語にも共通である。他の後置詞としては ‘ pyār ’ には与格 ‘ ko ’（与格の対格使用である。第 9 章で改めて議論する。）が、‘ prem ’ には ‘ par ’ が、そして、‘ muhabbat ’ には属格後置詞の女性形 ‘ kī ’ が来る。

次は、抽象名詞 ‘ yād ’ を動詞 ‘ karnā ’「する」に編入した場合の例を挙げる。

(15) maiṃ ne tujhe yād kiyā.
私 能格 おまえを 記憶 する一過去
「私はおまえを覚えた。」

これは、「記憶した」すなわち日本語の「覚えた」に当たる名詞編入動詞である。対象の人には、目的語への与格標示がされている。物の場合は、この後置詞は付かず、直格の名詞が来る。ここで、以下の例を考察したい。

(16) maiṃ ne purī kahānī yād kī.
私 能格 全部の お話 記憶 する一過去
「私はお話を全部覚えた。」

---

[9] 他にアラビア語出自の ‘ iśq ’ もあるが、動詞 ‘ karnā ’ に名詞編入される例はあまりみかけない。同じ外国語の ‘ love ’ も同様である。ヒンディー語にとっては、外国語としての意識が強いせいであろう。

この例文では、対象の「お話」も「記憶」も女性名詞なので、女性名詞に一致した動詞が、どちらの名詞によるものなのかが、限定できない。しかし、次の文ではそれがはっきりと分かる。

(17) maiṃ ne pāṭh yād kiyā.
私 能格 課 記憶 する一過去
「私は課を丸暗記した。」

[Prayog aur prayog : 259]

この文では、動詞の性・数一致がこの『記憶』の方ではなく、対象である目的語の方に一致している。人を目的語にした最初の文にしても、もはや、『記憶』の方には一致せず、デフォルトの男性単数形になっている。このように、抽象名詞の性・数に動詞が一致しなくなるのは、名詞が完全に動詞側に編入されてしまっているということである。

この名詞については、これまで挙げてきた属格で名詞を結ぶ構造はみかけることはほとんどないが、V.R.Jagannāthan によると、属格で結ぶ構造は、そう言う人があるかもしれないという可能性がある文として提示している。

(18) ! maiṃ ne ghar kī yād kī.
私 能格 家 の 記憶 する一過去
「私は家を覚えた。」

! maiṃ ne baccoṃ kī yād kī.
私 能格 子供（複） の 記憶 する一過去
「私は子供たちを覚えた。」

[Prayog aur prayog : 259]

「家の記憶をする」すなわち「家を記憶する」は、ヒンディー語では言うことがあるかもしれないという意味で、エクスクラメーション付きの文になっている。すなわち、可能性を否定していない以上、かなり場面を限れば使用されるうるものと推察される。氏は、

あまり言わない理由として、‘ patā yād karnā ’[10]「住所を覚える（記憶する）」には「忘れる」という前提があるが、‘ ghar / boccoṃ kī yād karnā ’「家／子供を覚える」もしくは動詞「する」の方に名詞編入をした‘ boccoṃ ko yād karnā ’「子供を覚える」には、忘れることがないからであると述べている。ということは、例えば、何かで記憶を失った場合なら、「忘れる」という前提が出てくるので、意図的に「覚えた」という意味で使用は可能ということになる。

ところで、この『記憶』という名詞を使った別の表現もある。‘ yād honā[11] ’「記憶がある」といえば「覚えている」の意になり、‘ yād ānā ’「記憶が来る」といえば、自動詞の「思い出される ≒ 思い出す」の意になり、‘ yād lānā ’「記憶を持って来る」といえば、他動詞の「思い出す」の意に、‘ yād dilānā ’「記憶を与えさせる」といえば、「思い出させる」になる。最初の２つ‘ yād honā ’および‘ yād ānā ’については、共に与格構文を取る。その際、覚える対象と抽象名詞‘ yād ’は、それぞれ直格で使用する場合と属格後置詞で結ぶ場合の両方がある。

(19) mujhe gopāl yād nahīṃ hai.
私に ゴーパール 記憶 否定辞 コピュラー現在

mujhe gopāl kī yād nahīṃ hai.
私に ゴーパール の 記憶 否定辞 コピュラー現在

[Prayog aur prayog : 259]

上２つの例文中、一番目は名詞が直格として現われる場合であり、二番目は２つの名詞を属格で結んだ場合である。先の氏は前者を非文に、後者を使用するかどうか疑わしい文にしている。後者に関しては根拠が先にも説明した「忘れる」という前提に関わるものなので、場面が成立すれば、成り立つわけである。また、前者も他に聞くと成り立つ文であるという。

共に「ゴーパール（のこと）を覚えていない。」という脈絡で使うわけだが、前者は「私には、ゴーパールは記憶にない。」になり、後者は「私には、ゴーパールの記憶がない。」になる。

---

[10] この場合、住所を属格後置詞で抽象名詞‘ yād ’とつなぐ‘ pate kī yād karnā ’は言わないという氏の言である。
[11] ‘ honā ’はコピュラ使用の場合である。

では、物の場合はどうか。以下に例を挙げる。

(20) mujhe rāmāyaṇ yād nahīṃ hai.
私に ラーマーヤナ 記憶 否定辞 コピュラー現在

*mujhe rāmāyaṇ kī yād nahīṃ hai.
私に ラーマーヤナ の 記憶 否定辞 コピュラー現在

上から順に「私には、ラーマーヤナは記憶にない。」、「私には、ラーマーヤナの記憶がない。」となる。後者がほとんど言わない理由として考えられるのは、属格後置詞で結んだラーマーヤナと記憶の関係にある。前者は「ラーマーヤナは記憶にない」になる。すなわち、「記憶にない 」を名詞編入した「覚えていない」とほぼ同義とすると、「ラーマーヤナは覚えていない。」ということになるので、適格な文になる。後者は名詞編入されていないので、『記憶』の方がテーマになりそのような記憶があるかないかの話になる。日本語でも「ラーマーヤナの記憶がない。」というのは、記憶がテーマになるので、かなり特殊な場合にしか使用されない。[12]

ヒンディー語には、この抽象名詞 ‘ yād ’「記憶」以外に、‘ pasaṃd ’「好み」という名詞がある。この名詞も動詞への性・数一致を及ぼすことはなく、完全な名詞編入動詞としての働きをする。(これらの抽象名詞を使用した類例は、第２章にも挙げてある。)

いくつか例をみてきたが、ヒンディー語には、名詞編入型といっても半名詞編入型の構造を同時に持つものが多い。それぞれの構造に別の意味を負わせるものもいくつかあったが、ほとんど同じ文脈で、どちらの表現も可能なものが多いのである。したがって、ヒンディー語の場合は、前節で挙げたものも含め、半名詞編入型が多いことになる。

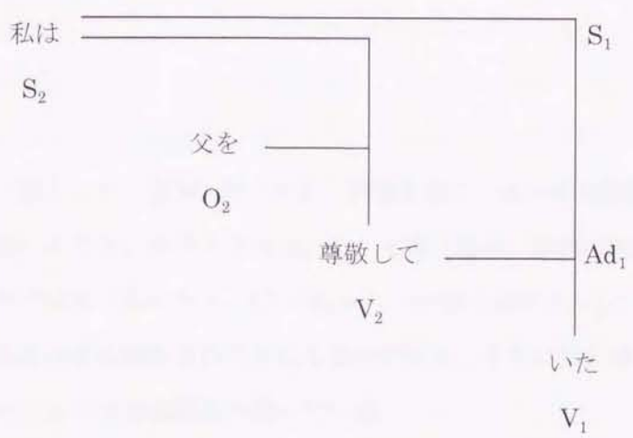
では、日本語の方はどうか。日本語の名詞編入動詞の例は、「洗濯する，選択する，放置する，違反する，教育する，改築する，伝達する，感謝する，嫉妬する，愛する，恋する，尊敬する，軽蔑する」など、例を挙げれば切りがない。この中には、ヒンディー語同様、完全な名詞編入型の統語構造を取るものと、半名詞編入型の統語構造のどちらも取り

---

12 例えば、場面設定を記憶喪失の患者の身内に診断を伝える医者にすれば、人の記憶はおろか物の記憶もないという文脈でこのような表現をし得る。しかし、実際、このような特殊な状況など現実世界ではほとんどありえはしない。

得るものがある。前者は、「～の…をする」がいえないものになるので、「感謝する，嫉妬する，愛する，恋する[13]，尊敬する，軽蔑する」が含まれる。対象への格標示は「に」もしくは「を」である。後者は、「～の…をする」がいえるものになるので、「洗濯する，選択する，放置する，違反する，教育する，改築する，伝達する」が含まれる。ここで挙げた例をみると、複合している名詞は名詞でも、動詞を併合した熟語が多いことが分かる。特に半名詞編入型にみられる例は、例えば「放置する」の「放ち置く」，「教育する」の「教え育てる」のように、すべてその類である。それぞれについて、例文を挙げ、構造図で文法関係を説明する。

(21)　私は父を尊敬していた。



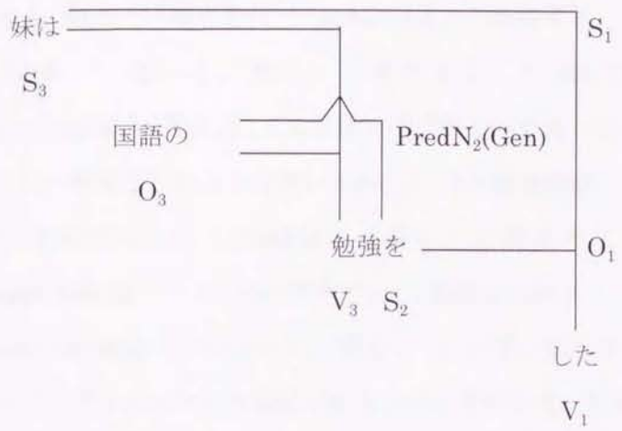
完全に名詞編入されている動詞「尊敬する」は、「敬う」のように一語としてふるまうので、第二層の命題自体はSOVの単層型となる。第一層は、SV型にAd（副詞的修飾語）が付いた構造となっている。これは、「私が（そういう状態に）いた」という状態を副詞的に表わしているためである。

次に、「～の…をする」という半名詞編入型の例を挙げる。

---

[13] 名詞編入動詞の「～に恋する」は、最近の表現では「～に恋をする」という具合に抽象名詞に「を」格標示をし、分化させることが多い。使用率も最近では少なくなってきている。

(22)　妹は国語の勉強をした。



第一層として、SOV の「する」構造を取る。その目的語に、第二層の命題「私が国語を勉強すること」が代入される。そして第三層の「国語の勉強」があるが、これも属格の名詞句ではありながらも「(この場合の) 勉強は国語である」という、S はすなわち PredN であるという命題を含むことになるのである。さらに第三層では、「(私が) 国語を勉強すること」という文法関係が潜んでいる。

日本語の場合、この例文は、名詞編入型の構造も取る。構造図は先の「尊敬する」とほぼ同じ、SOV の単層構造になるので省略する。

ヒンディー語についても、第 2 章の名詞句構造のところで述べてあるとおり、動詞出自の名詞が多く、その場合、半名詞編入構造を取る。他にも、ヒンディー語の半名詞編入型の例として、‘ svāgat karnā ’「歓迎する」, ‘ niṇdā karnā ’「非難する」, ‘ vyākhyā karnā ’「説明する」, ‘ varṇan / zikr karnā ’「述べる」, ‘ praśaṃsā / tārīf karnā ’「賞賛する」半名詞編入型と名詞編入型の統語構造の両方を持つものとして、‘ viśvās karnā ’「信じる」, ‘ vicār karnā ’「考える」などがある。

また、名詞編入型の動詞は ‘ karnā ’ 以外にもいろいろある。若干説明の中で挙げた

が、例としては、‘ rakhnā ’「置く」と複合する、‘ viśvās rakhnā ’「信じる（信用を置く）」, ‘ dhyān rakhnā ’「気を付ける（注意を置く）」、‘ denā ’「与える」と複合する、‘ dhyān denā ’「注意を払う」, ‘ udhār denā ’「貸す」, ‘ dikhāī denā / paṛnā ’「見える」, ‘ sunāī denā / paṛnā ’「聞こえる」、‘ lenā ’「取る」と複合する、‘ udhār lenā ’「借りる」, ‘ sāṁs lenā ’「呼吸する」, ‘ mol lenā ’「購入する」、‘ khānā ’「食べる，食う」と複合する、‘ ḍāh khānā ’「妬ましく思う」, ‘ gam khānā ’「耐える」（文字通りは「悲しみを食べる」）, ‘ dhokhā khānā ’「騙される」（「一杯食う」のような言いまわし），その他動詞形 ‘ dhokhā khilānā ’「騙す（いっぱい食わせる）」、‘ mārnā ’「殴る」と複合する、‘ lāt mārnā ’「蹴る」, ‘ gappā mārnā ’「おしゃべりする」, ‘ āṁkh mārnā ’「ウィンクする，色目を使う」、‘ mazā cakhānā ’「からかう」（同じく「いっぱい食わせる」のような言いまわし）等々、ほとんどイディオム化した側面があるものも含めれば、数あまたである。また、これらの名詞編入動詞が別の対象を取る場合は、その格標示が後続動詞により変わってくる。例えば、動詞 ‘ rakhnā ’ は、本来「～（の上）に…を置く」になるので、「注意を置く」になるならば、別の対象には、「に」に当たる ‘ par ’ が出現するのは、ごく至極当然である。

全体を包括していえることは、ヒンディー語では、この名詞編入型の動詞は数多くあるが、中でも ‘ karnā ’「する」を使用する場合は、完全に名詞編入される構造を取るものよりも、半名詞編入型の構造を取るものが多いということである。また、日本語でもいくつか見られた動詞に関連した抽象名詞の場合は、半名詞編入型の構造を取る傾向にあるということである。

5.2 述語複合型

名詞を複合するという点では前節のものと同じ範疇に入るが、ここでは、本来の述語が文に埋め込まれる形をとるものを考察する。日本語の場合、先にも挙げたとおり、「医者になる／する」や「ばかになる／する」にみられる、名詞を複合した「～になる／する」に当たるヒンディー語の構造を挙げる。

(23) maiṃ ḍākṭar banūm̃gā.
私 医者 なる一未来

「僕は医者になる。」

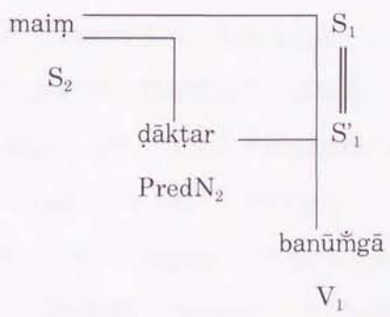
(24) maiṃ us ko bhikhārī banā dūm̃gā.
私 彼 与・対格 乞食 作る一語幹 与える一未来

「僕はやつを乞食にしてやるぞ。」

一番目の文は、「僕が医者である」という命題が（僕が医者の状態に）なるという、一見、単純にみえて、実は命題が折り重なった文なのである。二番目の文は、この一番目の文に使用されている‘ bannā ’「作られる（なる）／作られる」の派生型他動詞‘ banānā ’「作る」（1.1.3 の表を参照）が、述語として使用されており、「…を～にする」に当たる文を生成している。

日本語の「～になる／する」の場合、ヒンディー語では、‘ honā ’「なる」や‘ karnā ’「する」の動詞ではなく、これらの動詞‘ bannā / banānā ’「作られる（なる）／作る」を使用するのは、興味深いところである。

以下に構造図を挙げ、この構造における文法関係の重層性を看取し、また、日本語の表現では同じ「なる」となるところを、‘ honā ’「なる」ではなく‘ bannā ’「作られる（なる）」を使用する要因を考察してみる。



まずは、構造図の文法関係から説明する。第二層では、「私が医者である」という命題が形成されている。その命題の文を含み、第一層ではその命題が作られる、もしくはなるとなっているのである。この命題の部分を第一層上では S'_1 と表わしている。しかしなが

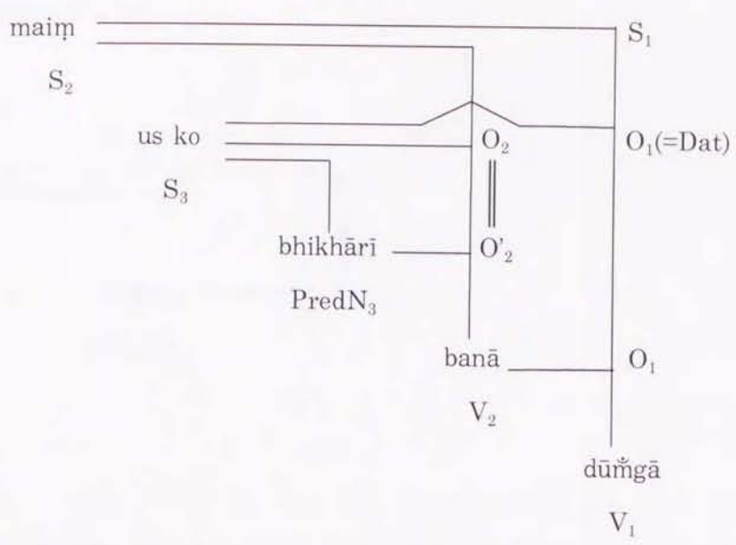
ら、実際、表層上の主語（S_1）としてはその命題のうちの‘ maiṃ ’「私」だけが顕在化しており、これが動詞との性・数の一致を起こしている。これが、日本語の「PredNになる」という名詞を複合した文になっている。

文の文法関係および統語構造は、以上のようになっている。ここで同じ日本語の「なる」でも‘ honā ’「なる」ではなく‘ bannā ’「作られる（なる）」が使用される要因は、先にも述べたように、文の主語としては命題を代表してその中の主語だけが表現しているけれども、本来は命題全体が主語になっていることにある。その前に本来の「作られる」使用の文を挙げる。

(25) mujh se cāy banī.
私 よって お茶 作られる一過去
「チャーイができた。」

これは、「私によってチャーイが作られた。」という文である。日本語は受身表現であるが、ヒンディー語には一語の自動詞が存在する。この自動詞は、‘ maiṃ ne cāy banāī. ’「私がチャーイを作った」という命題が前提にあってはじめて成立する文であり、単層構造自体が、他動詞「作る」を伴う文から自動詞「作られる」に転換された命題そのものなのである。ところが、ここで議論している文‘ maiṃ ḍākṭar banūm̃gā. ’は、S が PredN であるという名詞述語文をもう１つの命題として内包した複文なのである。その命題が、外圧によりそういう状況として作られる，作り出されるということ示唆している文構造ということになるが、それならば、上記の文のように前提として「S が O を V」の関係が何らかの形で存在することになる。すなわち、ここに外圧性が生じるのである。

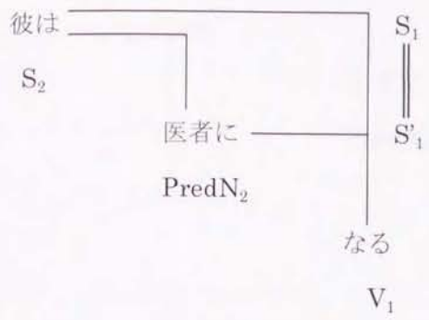
これらの要因により、コピュラ動詞使用の場合の存在する、もしくは自然に生じるという本動詞‘ honā ’の「なる」ではなく、「作られる」もしくは「作り出される」という意味を前提にした‘ bannā ’が使用されるのである。このことは、以下に挙げる‘ bannā ’の他動詞‘ banānā ’を伴った他動詞文の統語構造をみれば、さらに明らかになる。



この文を統語分析すると、第三層に、「彼が乞食である。」という名詞述語文が内包されている。その文全体が第二層における‘ banānā ’「作る」の目的語になるので「私がそういう命題を作る」つまり、「彼が乞食である」という状況を私が作り出すことになる。そして、この文には、後述する動詞複合で説明する予定のモーダルに似た意味を表わす動詞が付加されているので、第一層に別の構造が被さっている。この表層の構造には、動詞‘ denā ’「与える」が使用されているので、「…に～を与える」という SOOV 構造が基本になる。この中で、第三層の主語が表層に間接目的語（格標示は与格）として現われ、「彼が乞食であるという状況を作り出す」という第一層，第二層の命題を直接目的語として与えるという構造を取るのである。この後続動詞としての「与える」は、日本語の「してやる，書いてやる，送ってやる」の動詞「やる」によく似た統語構造およびニュアンス持ち合わせている。この複合形式が創出する意味については後章に譲る。

日本語の場合、純粋な述語動詞を組み合わせる場合、「なる」，「する」を使用するが、先の名詞編入構造とは違い、その動詞と共に、格助詞「に」を付けることになる。格助詞の「に」には、本質・内容・状態を示す種類があり、『指定の助動詞「なり」「だ」の連用形「に」、いわゆる形容動詞の連用形の「に」も、これに相当する。』［広辞苑：第四版］ということから、これは、本来「彼は医者なり」の「なり」が連用形の「に」に変化したものと考えられる。まずは、構造図を挙げて説明に入る。

(26)　彼は医者になる。



ヒンディー語同様、第二層において、「彼が医者である。」という名詞述語文の命題が成り立つ。第一層の構造は、「S がなる」という構造である。すなわち、この S には命題全体が入るが、表層の第一層に主語として顕在化しているのは、「彼は」の主語のみである。「医者に」の「に」の部分は、第一層の動詞「なる」に接続するための「なり」の連用形と考えれば、この「に」が付くのも不思議ではない。「X は Y なり」という命題を Z にすると、その Z が、別の命題「S がなる」の S に代入されて、「Z に[14] なる」となっているのである。

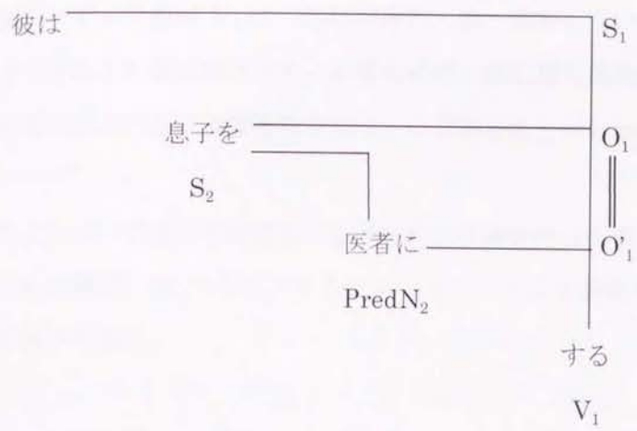
命題そのものが代入され、重層的な構造をみせるという点で、日本語は、ヒンディー語と同じ構造を取るが、日本語は「Z になる」になるのに対し、ヒンディー語は「Z が作られる（できる）」になるところが、大きく違う点になっている。違う理由は、先にも挙げたように、自然発生的に「生じる」という意味の「なる」ではなく、外圧性をもたらすためであり、その片鱗が、日本語の「になる」の「に」にあったり、ヒンディー語の動詞 ‘ bannā ’ にあったりするのである。

では、日本語の「なる」に対する「する」の方の例文と構造図を観察する。

(27)　彼は息子を医者にする。

---

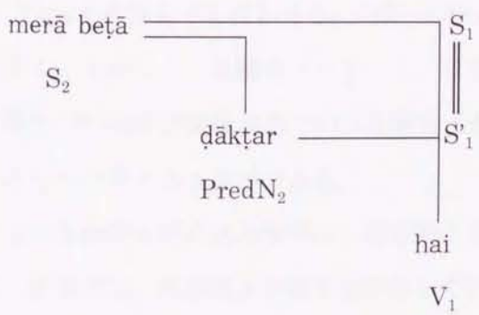
[14] 後続動詞「なる」に接続するための連用形。



第二層に「息子が医者である」という命題が含まれるところは、先の「なる」型と同じであるが、その命題が、第一層の「S が O をする」の O になる。もっとも、第一層の目的語として表現しているのは、命題全体ではなく、「息子を」の部分だけである。

ところで、このような、「息子が医者」,「僕らが忘れんぼう」の「A＝B」という命題を表わすものとして、第２章の単文のところで挙げた名詞述語文（S PredN Cop）も、これまでの論理からすれば、名詞と存在の意を表わす本動詞 ‘ honā ’ 出自のコピュラ動詞を使った述語複合である。改めて、ここで名詞述語文を観察してみよう。

(28) merā beṭā ḍākṭar hai.
私の 息子 医者 コピュラ－現在
「私の息子は医者です。」



この名詞述語文は、第二層で「S が N」という命題になっており、第一層において、命

題がコピュラ動詞 V_1（これまでの Cop）により存在することを表わすものになる。実際、第一層のコピュラ動詞 V_1 は、S_1 にのみ性・数一致をしている。これをみると、単文として扱ってきたこの名詞述語文も、本質的には、第二層の基本命題「S が N」が、第一層の構造に埋め込まれる二重層構造を成すものであることが分かる。

このように、下層に名詞述語から形成される層を持った構造（すなわち、名詞述語文を埋め込んだ構造）は、「なる／する」もしくはコピュラ動詞だけではない。以下に1つだけ例を挙げておく。

(29) log hameṃ bhulakkaṛ kah kar hamārā mazāk uṛāte
人々 私たちを 忘れっぽい人 言う－語幹 接続分詞 私たち 冗談 飛ばす－未完了
haiṃ.
コピュラ－現在

「皆が僕らを忘れんぼうと言って、からかうのです。」

［Cācā Caudharī 7 : 61］

この例では、接続分詞を使用した非定形節の「～と言って」に埋め込み構造が観察される。動詞 ‘ kahnā ’「言う」の目的語に、「僕らが忘れんぼうだ。」という命題を複合したものである。日本語の「と言う」の格助詞「と」は、指定の助動詞「たり」の連用形に相当する。［広辞苑第四版］つまり、命題の埋め込みとなっているのである。日本語の場合、「皆が、僕らが忘れんぼうだと言って、…。」という具合に、「を」格から「が」格へ表示を変えられるが、その場合は、断定の助動詞「だ」を付加した完全な名詞述語文が埋め込まれる。これは、定形節型 Type I の複文になるが、ヒンディー語も同格接続詞を使用した Type I の複文でも表わせる。(29) の例は Type II の複文で、格標示は、先の「～を…にする」と同じく、命題を「～を…と」にする。ヒンディー語も非定形節の主語が、対格を取り、PredN は関係文法でいう失業者（chômeur）［David M. Perlmutter (1983)］と化したものと考えることができる。

このような命題の埋め込み操作は、形容詞との複合にも観察される。この埋め込み構造も含め、次章では、形容詞との複合を分析していく。

第6章　述語複合（2）―― 形容詞編 ――

この章では、名詞複合に続き、形容詞との複合について統語構造を観察する。ヒンディー語の形容詞の複合形式には、『動詞』＋『形容詞』と『形容詞』＋『動詞』の二種類あることは前章で述べたが、先行述語として動詞が来る前者の場合、動詞の形態は不定詞の斜格形に限られる。この斜格形には、通常、何らかの後置詞が付くことになっているが、名詞にもゼロ格があったように、斜格形でも後置詞の付かないパターンもある。

日本語の複合形式に目を移せば、これも二種類に分けることができる。ヒンディー語の場合と同様、『動詞』＋『形容詞』と『形容詞』＋『動詞』で、特に、非定形になる前者の場合、動詞の形態は連用形になる。例としては「書きやすい，話しにくい，しがたい，読みづらい」が挙げられよう。先行述語に形容詞が来る後者の場合も、形態は「－く」の連用形である。「おいしく食べる，楽しく過ごす，高くする，汚くする，親しくする，よくやる，美しくなる，悲しくなる」がその範疇に含まれる例である。

日本語では、前者の形式は、「やすい，にくい，つらい（有声化して「づらい」）」等の難易文にみられるが、これらは、多少、拘束形式化した形容詞である。ヒンディー語で難易について述べる場合、S に不定詞を代入して、PredA とする形容詞述語文の構造を取る。（第4章の（24）を参照。）また、日本語でも、語を変えて「易しい，難しい」を使用すれば、「ヒンディー語は話し易い。」から「ヒンディー語を話すのはやさしい。」[1]，「ヒンディー語は話しにくい」から「ヒンディー語を話すのは難しい。」のように、形容詞述語文の構造を取ることができる。

この形容詞述語文の構造を取るものはさておき、ヒンディー語にも、日本語と同じく動詞＋形容詞の形式があり、中には接辞化したようなものもある。まず、次節でそれらの例を観察していく。

6.1　動詞＋形容詞型（述語複合型）

ヒンディー語では、動詞を形容詞に含む場合、動詞の形態が不定詞であり、かつ、後置詞付きの斜格形になる。まず、このパターンにみられる後置詞として、‘ ke lie ’「のため，に対して」という複合後置詞を付加した不定詞のものを例としてあげる。

---

[1] この場合、「ヒンディー語は話すのがやさしい。」のように「～は…が」構文も可能である。次の「難しい」も同様である。

(1) maiṃ jāne ke lie taiyār hūm̃.
私 行く－不定 の ため 用意した コピュラー現在
「行く用意はいいわ。」

「行くことに対して、私が、用意された状態にある。」つまり、「用意はいいわ。」という意の決まり文句である。この不定詞斜格に付いている複合後置詞 ‘ ke lie ’ に取って代わる後置詞として、与格の後置詞 ‘ ko ’ がある。

次の例文は、その与格の後置詞 ‘ ko ’ を不定詞に付加している文である。

(2) merā dil har bār yah sunne ko beqrār hai.
私の 心 毎 回 これ 聞く－不定 を 困った コピュラー現在
「私の心は、いつもそれを聞きたくてしようがないのよ。」

「毎回これを聞くこと」と「私が落ち着かない状態にある。」という２つが、文中の命題であるが、この命題同士の位置関係は、‘ ke lie ’ ではなく、‘ meṃ ’ であると推察される。(後置詞 ‘ ko ’ については後章で議論する。)

また、不定詞の斜格形（ゼロ後置詞）の後に、形容詞が来る文もみられる。以下に挙げる例がそれである。

(3) yah film dekhne lāyaq hai.
これ 映画 見る－不定（斜） 価値のある コピュラー現在
「この映画は見るに値する。」

(4) bahubhāṣiktā ke bāre meṃ yah tathya dyān dene yogya hai....
多言語性 について この 事実 注意 与える－不定（斜） できる コピュラー現在
「多言語性についてこの事実は注目に値する。」

一番目の文では、不定詞斜格形 ‘ dekhne ’ に、アラビア語出自の形容詞 ‘ lāyaq ’

が付加されて、「見るに値する，見る価値のある」という意味を出す。二番目の文は、ほぼ同義の形容詞を使用している例であり、サンスクリット出自の語彙を使用したものである。これらの例から、ヒンディー語には、動詞の斜格形が後置詞を伴うことなく、形容詞に接続する構造があることが分かる。この形式自体、形容詞変化をすることがないので、見た目には分かりにくいが、しばしば、‘ dhyān dene yogya viṣay ’「注目に値するテーマ」のように、形容詞らしく名詞を修飾することもある。

この複合形式に当たるものとして、次に、‘ vālā ’ を用いた例を挙げる。これは、通常、接辞と呼ばれており、活用は基本的に形容詞変化する。表わす意味こそ違うが、日本語の形容詞変化をする接辞「たい[2]」によく似た要素である。

(5) yah laṛkā dillī jāne vālā hai.
これ 少年 デリー 行く－不定（斜） 接辞 コピュラー現在
「この少年はデリーへ行くようだ。」

ヒンディー語の正書法がなかなか定まらないこともあり、接辞 ‘ vālā ’ は、‘ dillī jāne vālā ’ を ‘ dillī jānevālā ’ のように膠着させて書くことがしばしばある。正書法の問題はともかく、実際、二通りの記述の仕方があるということは、個々人により、これを独立した形容詞として認識するか、形容詞出自の接辞と認識するかが揺れているものと考えられる。接辞というにしても、完全な拘束形式の接辞（例：‘ pramāṇit ’「証明された」の接尾辞 ‘ -it ’）ならば、分けて書くことはない。したがって、語としての要素を多分に持つこれは、完全な拘束形式の接辞になる前の段階、つまり、接語（clitic）の段階にあると考えるのが妥当である。本論文では、この種の形式を、以降、接語として扱う。

この接語は、動詞のみならず、名詞，形容詞にも付加される。‘ ṭopī vālā laṛkā ’ といえば、「帽子の少年」（「帽子をかぶった少年」の意）となる。この場合、日本語の属格「の」に当たるヒンディー語の属格後置詞を使用して ‘ ṭopī kā laṛkā ’ ということができない。これは、『帽子』と『少年』の関係が問題になるからである。この場合、二語の

[2] 動詞の連用形に接続して願望を表わすこの形式は、国語学で助動詞と呼ばれているが、形容詞変化するところから、形容詞の接辞化したものともいえる。

関係はOとSの関係であるが、第2章の名詞修飾構造で述べたように、ヒンディー語で属格後置詞が負う文法関係の中に、SやOはあるが、ヘッドの名詞として動詞派生名詞（深層でのV）が来ている場合に限られる。しかし、この名詞句にはVに当たるものがない。したがって、属格後置詞を使った場合、『帽子』がOの資格を持ち得ないため、深層における文、すなわち命題が成り立たず非文になるのである。[3] また、これは、例えば、「国語の本」の『国語』と『本』のように本の種類としての属性があるものと違い、文として命題を成り立たせる以外に、『帽子』と『少年』の関係に何らかの属性が成り立つものでもない。[4] したがって、属格の後置詞を使用しても不適格になるのである。裏を返せば、この接語‘ vālā ’は、名詞と名詞の関係を成り立たせるために、任意のVの役割をも果たしているのである。

『帽子』と『少年』の関係にVとして補完されるのは、何の前提もなければ、従来「帽子は人がかぶるもの」になるので、「それをかぶった人」ということになる。したがって、この‘ vālā ’を使った‘ ṭopī vālā laṛkā ’「帽子の少年」（便宜的に「の」を当てる）は、Vを補い「帽子をかぶった少年」を指すのである。[5] 日本語ならば、この動詞補完の場合でも、「帽子をかぶった少年」⇒「帽子の少年」のように、属格の「の」で表現できる[6]ところだが、ヒンディー語では、属格の‘ kā ’を使用せず、特殊な接語‘ vālā ’を使用して表わしているのである。

この‘ vālā ’は、後続名詞がない場合、形容詞の名詞使用[7]と同じ機能で、漠然とした人やものを表わす。この‘ ṭopī vālā laṛkā ’の‘ laṛkā ’「少年」を取ると、「少年」を照応して「帽子をかぶった方」の意味になるが、何も照応してない場合は、「帽子をかぶった人」という漠然とした人を指す。同様に、‘ camṛe vālā jūtā ’「革（製）の靴」

---

[3] ‘ hāth kā banāyā khānā ’「手の作った食事＝手作りの食事」のように動詞を補っていうこともある。これを照応したものとしてなら、‘ hāth kā khānā ’もありうる。

[4] 逆の『少年』と『帽子』ならば、『少年』が所有という属性が成り立つ。

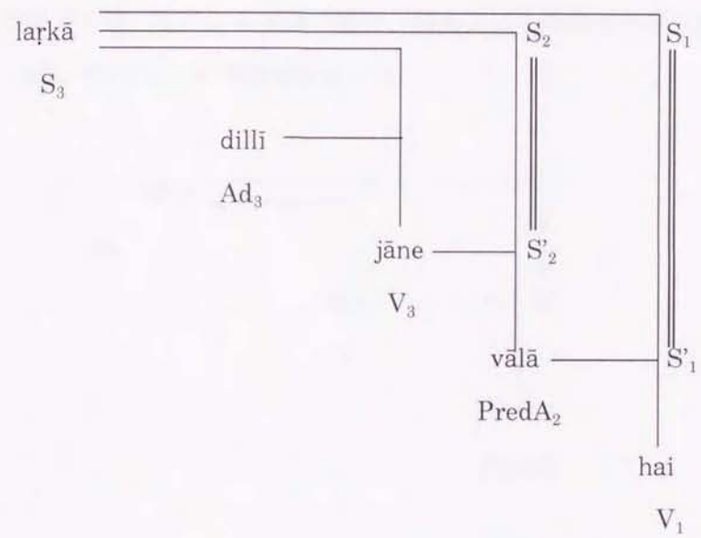
[5] 日本語ならば、場面を限定すれば他の意味も成り立つ。例えば、「（手に）うちわを持っている子じゃなくて、帽子の子よ。」のような例がある。この場合は、「の」が指すところは、通常の「かぶっている」ではなく、「持っている」になる。Vに当たる動詞が場面によって変わりはするが、動詞の部分を受けることには変わりない。

[6] しかし、日本語の「の」を使ったこの表現は、話題提示の段階では使用されにくい。「?昨日、帽子の子が家に来たのだけど、…」と言えなくもないが、文が曖昧になるのは避けられない。つまり、日本語のこの場合の「の」使用は、「昨日、帽子をかぶった子が来たけれど、その帽子の子、ただの物売りだったわ。」という具合に、動詞の部分を前提として照応させなければ、曖昧な文になるのである。ところが、ヒンディー語の‘ vālā ’は、文脈における前提とは関係なく、任意のVを照応し、‘ ṭopī vālā laṛkā ’「帽子をかぶった少年」，‘ paise vāle ’「金持ち」（金を持った人々）などを表わすのである。

[7] 形容詞‘ garīb ’「貧しい」が、「貧しい人」のように名詞的に使用されること。

という場合も、‘ jūtā ’「革」を取ると、‘ jūtā ’を照応した‘ camṛe vālā ’「革（製）の方」の意味にもなるし、何も照応してない場合は、漠然とした「革のもの」という意味にもなる。また、形容詞が来る場合も同じで、‘ choṭī vālī laṛkī ’「小さい方の女の子」にから、‘ laṛkī ’「女の子」を取ると、‘ choṭī vālī ’は、‘ laṛkī ’を照応した「小さい方」になる。この「方」に当たる場合は、人だけでなくものにも使用される。

この要領で考えていくと、先行名詞に動詞の不定詞が来る場合、斜格形になり、‘ dillī jāne vālā laṛkā ’ができる。意味は「デリーへ行く少年」となる。この構造が母体となってヘッドの名詞が S となり、残りの部分が PredA の構造を取って、‘ laṛkā dillī jāne vālā hai. ’「少年はデリーへ行く状態にあるのだ。」となるものと考えられる。構造図にすれば、この文は以下のようになる。



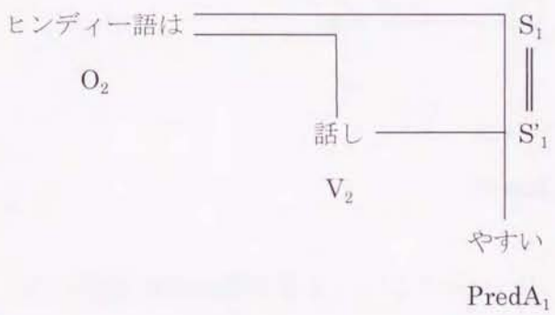
この構造の用法として、V.R.Jagannāthanは、近未来，推量を挙げている。先の例文は近未来の意味を持つものとして提示した例文であるが、文脈により「彼はデリーに行くようだよ。」のような推量の意味にも使用される。‘ bāriś hone vālī hai. ’「雨が降りそうだ。」のように、『雨』という物質名詞が主語になっている場合は、比較的推量の意になる確率が高い。近未来，推量という意味を創出する構造ということは、日本語の「ところ・だ／です」，「そう・だ／です」，「よう・だ／です」のような表現とほぼ同じということになるであろう。異なる点は、日本語の「そう」，「よう」という接尾語は、「相」や「様」からの転といわれており、したがって名詞出自のものと考えられるため、構造図中の

‘ vālā ’ に当たる部分が PredN になるところである。

日本語の「そう」,「よう」のような名詞出自の接尾語と断定の助動詞「だ」の複合形とは別に、日本語には、形容詞出自の接語である ‘ vālā ’ によく似た要素である、形容詞出自の接尾辞「ぽ・い」がある。これは、「子供っぽい」,「忘れっぽい」のように「～の傾向にある，～しやすい」という意味を持ち、名詞や動詞の連用形に付く。動詞に付く場合、「～しやすい」という意味の「忘れっぽい」以外に、前者の「傾向にある」という意味でも「明日は行くっぽいよ」のように使えないこともない。しかし、現代の日本語では、この意味で「行くみたいだ」の「みたいだ[8]」や「ようだ」,「そうだ」を使用することが多い。

品詞の出自こそ違うが、接辞化もしくは接語化したものを使用し、「傾向にある」というような意味を出すことには違いなく、興味深いところである。

前節でも述べたが、日本語の場合、難易文にこの構造がみられる。以下に「ヒンディー語は話しやすい。」の構造図を挙げる。



第二層は、「ヒンディー語を話す」という他動詞文の命題になる。第一層では、第二層の S'_1 命題全体が $PredA_1$ の主語になるが、実際はその中の目的語である『ヒンディー語』だけが主語になる。これは、目的語が表層で主語になっている構造図だが、この構造は、次章で扱う受身構文と同じパターンになる。

また、第二層の命題部分に「コップが割れる」のような自動詞文が代入されると、自動的に第二層の主語「コップ」が表層でも主語になる。

一見、何の変哲もない構造にみえるが、第一層の主語になる名詞によっては、その深層における文法関係および格標示が異なるものもある。以下にその例を挙げて観察してみよ

---

[8] これは、「子供みたい」,「馬鹿みたい」のように「－ぽい」と代替可能である。

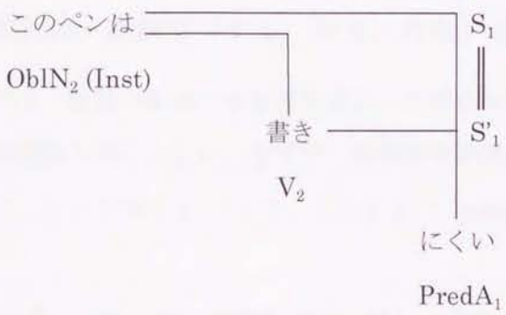
う。

(6)　この靴は、歩きやすい。

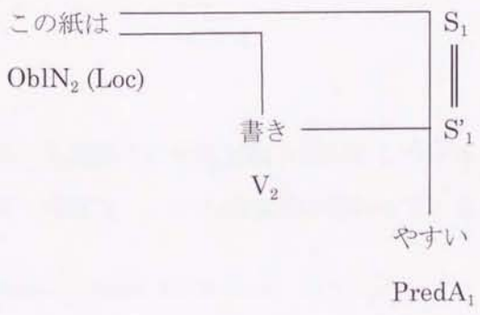
(7)　このペンは、書きにくい。

(8)　この紙は、書きやすい。

（6），（7），（8）の主語になる「この靴」，「このペン」，「この紙」は、それぞれの述語動詞「歩く」，「書く」の主語ではない。構造図で示すと、よく理解できる。（7），（8）を順に構造図化して観察してみる。



（7）の第二層の命題を見ると、「このペン」は、道具格の斜格名詞句である。それが、第一層において主語になる。（6）も同様に「この靴」が道具格の斜格名詞句になるのである。



（7）に対して、（8）の第二層の命題を見ると、「この紙」は、位置格の斜格名詞句である。同様に、これが第一層において主語になる。

このような難易文に対し、ヒンディー語では、『S　PredA　Cop』で表わすが、S に非定形句（この場合、不定詞になるが）を代入しても、「ペン」や「紙」はあくまで、道具格，位置格の斜格名詞句（‘ is qalam se / is kāgaz par likhnā ’）になる。日本語も、「このペンで書くのは難しい。」のように、同じ構造を取れば問題ない。しかし、「やすい，にくい」の構造を取ると、主語にもなる。日本語で主語になり得る格階層は、「が，を，に，で」までである。ところが、これまでもみてきたように、ヒンディー語では、主格，対格のみが主語化させることのできる範疇にある。したがって、この日本語の構造において、道具格，位置格のものを主語化するのは、ヒンディー語の論理的な制約にかかり、ヒンディー語を母語とする者には、かえって使用し難いことになる。[9]

6.2　形容詞＋動詞型「する，やる，なる」（述語複合型）

ここでは、前節の動詞と形容詞を逆にした構造を観察する。前章の名詞述語複合で観察した半名詞編入型にならい、まずは、形容詞を動詞に編入している度合いが比較的薄い例を挙げる。以下の例文は、「する」に当たる‘ karnā ’を複合しているものである。

(9)　vah　āp　kā　kamrā　bhī　sāf　kar　degī.
彼女　あなた　の　部屋　も　清潔な　する－語幹　与える－未来
「彼女はあなたの部屋もきれいにしてくれますよ。」

(10)　Ṭum　ne　hamārā　ṭāim　barbād　kiyā.
トゥム　能格　私たちの　時間　無駄な　する－過去
「トゥムは我々の時間を無駄にした。」

［Cācā Caudharī 7 : 69］

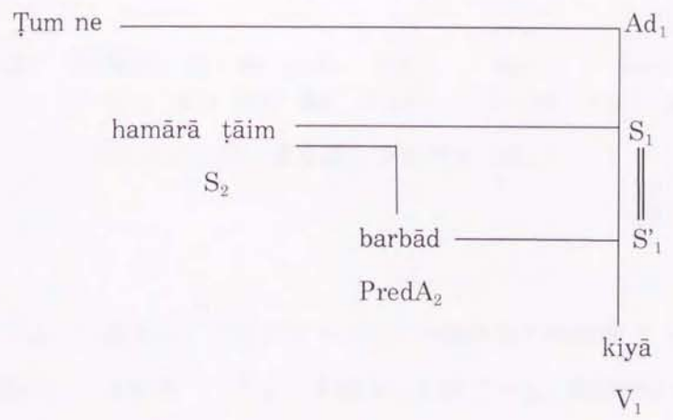
（9）は、名詞複合の半名詞編入型のところで述べた「掃除をする」の『清掃』という抽象名詞が「清潔な」という形容詞に変わっている文である。形容詞との複合になると、

---

[9] 「漢字を書くのは難しい。」から「漢字は（が）書きにくい。」のように、目的語である対格を主語化するのは、ヒンディー語でも、後章で観察する受身構文にみられるので、発想としてはまだ理解し易いものと推察される。

「部屋がきれいだ」という命題の状態に「する」という構造になる。(10) も、形容詞 ‘ barbād ’「駄目になった，無駄になった」を使い、命題「時間が無駄になった」状態に「する」という構造になっている。

例として (10) の構造図を以下に挙げる。



第一層では、能格構造を取っているので、動作主としての主語＋能格後置詞の部分は、副詞的修飾句の Ad になる。対象としての目的語が文法上の S になり、動詞は、目的語である名詞に従い、性・数一致をする。第二層では、「われわれの時間が台無しだ」という形容詞述語文の命題が作られる。それが、第一層に目的語として標示されるところを、第二層の S だけが目的語として表層に出ている。

(11) us ne apnā kām acchā kiyā.
彼 能格 自分の 仕事 よい する一過去
「彼は自分の仕事をよくやった。」

これも (9), (10) と同じ文構造を持つ。「自分の仕事がよい」という第二層の命題が、第一層の「する」動詞の目的語になる。一見、これは「よくやる，よくする」という形容詞編入を起こしているようにもみえる。しかし、直格の目的語と形容詞の性・数が一致することと、それらが動詞の性・数一致の要素になることを考えると、先の名詞編入のところで挙げた ‘ yād ’「記憶」や ‘ pasaṃd ’「好み」のように、もはや、動詞に対して

性・数を一致させる力を失っているものとは明らかに違う。この形容詞は、目的語と本動詞「する」に性・数一致をしているので、実際、この形容詞がどちらに編入されているのか分かりづらい。しかし、以下のような、「よくできる，よく思う」など、他の動詞との組み合わせもみられるので、取り立てて「よくなる，よくする，よくやる」のみを一体化したものとみるのは、少々無理がある。

(12) Gāṁdhī jī ne use māf kar diyā.
ガンディー 尊称 能格 彼を 許された する一語幹 与える一過去

「ガンディーは、彼を許してあげました。」

[Mohan se Mahātmā 2 : 11]

(12) の例文は、アラビア・ペルシャ語出自の形容詞 ‘ māf ’「許された，許されている」と ‘ karnā ’「する」を複合した例である。動詞側を命令形にすれば、「ごめんなさい」のように許しを請う表現になる。サンスクリットの語彙を使用してこの表現をする場合は、名詞 ‘ kṣamā ’「許し」とこの「する」動詞の組み合わせになる。その際、統語構造は名詞編入型になる。

また、この ‘ māf ’ の名詞 ‘ māfī ’ および ‘ kṣamā ’ の形容詞 ‘ kṣamit ’ と「する」動詞の組み合わせもあるが、汎用性が低く、あまり使用されない。

(13) āp kī vidvatā par rījh kar anek sabhāoṃ ne āp ko
あなた の 学識 に 喜ぶ一語幹 接続分詞 たくさんの 会（複） 能格 あなた を
sammānit kiyā...
尊敬した する一過去

「この方の学識に歓喜し、各界の人々がこの方に敬意を表しました。」

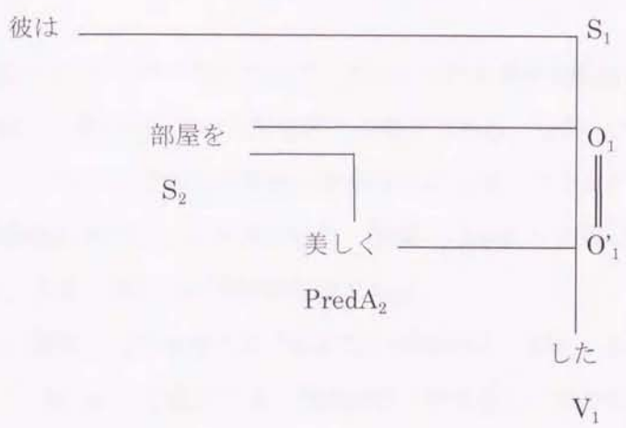
[Bāṣā bhārtī : 29]

この例文には、サンスクリット出自の名詞 ‘ sammān ’「尊敬」の形容詞形が使用されている。サンスクリット出自の名詞から派生した形容詞は、「～された」という受身的な意味を持つ。この種の形容詞を複合する例は無数にある。‘ uplabdh / prāpt karnā ’「得る」，‘ prakāśit karnā ’「出版する」，‘ vibhakt karnā ’「分ける」，‘ prabhāvit karnā ’「影響する」等が該当例であるが、サンスクリット出自のこれらは、

基本的に書き言葉に使用される。また、メタ言語の意味としては「あなた」にしてある二人称複数の代名詞 ‘ āp ’ は、この場合、三人称の複数尊敬形「この方」の意味で使用されている。[10]

日本語のこの形式に相当する「する」型の場合、格標示はどうなるか。以下に、構造図を挙げて比較してみる。

(14)　彼は部屋を美しくした。



第二層の命題は、「部屋が美しい」という形容詞述語文である。本来、この命題が目的語として埋め込まれるところだが、第一層では「部屋」のみが対格標示され O になっている。これをみると、ヒンディー語の『形容詞』＋『動詞』の組み合わせと同じで、日本語の形容詞と「する」動詞の組み合わせは、同じ統語構造を持つが、１つ、異なるのは、人の場合、往々にして与格後置詞が付与されているところである。対する日本語では、語の種類による差異はなく、すべて「を」格を表示する。

次に「なる」に当たる ‘ honā ’ を複合する例を挙げる。

---

[10] 文脈上、これは、G.A.Grierson（英国植民地時代に行政官としてインドに赴任。現地の言語調査を行い、数々の功績を上げたことから、偉大な言語学者として尊敬されている。）への代名詞として使用されているが、同時に近称詞を含む三人称複数形も氏に対する代名詞として使用されている。先述のように、神への呼びかけから出現したといわれるこの ‘ āp ’ は、単なる三人称に対する尊敬の意を含んだ使用法という一律のものではなく、元々呼びかけの二人称であるため、照応される第三者は、話し手と聞き手の（物理的であれ精神的であれ）近距離に位置する必要があるようである。

(15) kiṃtu kisī bhī rānī se un kī yah icchā pūrṇ nahīṃ huī.
しかし どの も 女王 で その方 の この 願い 満ちた 否定辞 なる一過去

「しかし、どの女王とも、その方の願いは成就しませんでした。」

[Hamāre graṃth : 29]

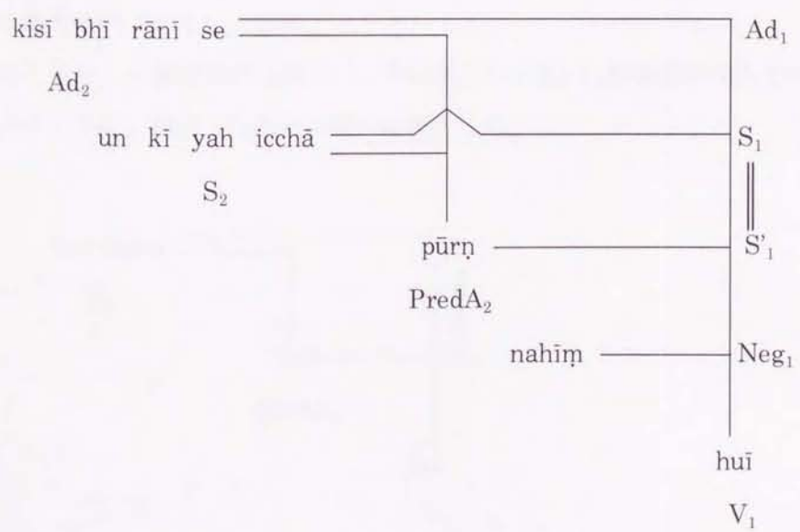
(16) merā kām ab samāpt ho gayā.
私の 仕事 今 終わった なる一語幹 行く一過去

「私の仕事が今終わった。」

(15) は、ラーマーヤナの話で、ダシャラタ王が子宝祈願をするに至るくだりである。ここでは、「満ちた」という形容詞との複合である。(16) では、‘ samāpt’「終わった，終わっている」に当たる形容詞が使用されている。アラビア語出自の ‘ xatm ’ も、同義，同機能のものとして使用される。動詞 ‘ honā ’ の後に来ている動詞 ‘ jānā ’「行く」は、次章で取り上げる動詞複合である。

また、意味として対峙する「始まる」の場合は、名詞 ‘ āraṃbh ’ もしくは ‘ śurū ’ をこの ‘ honā ’ と複合する。他動詞の「終える」，「始める」にする場合は、「する」動詞の ‘ karnā ’ を複合する。

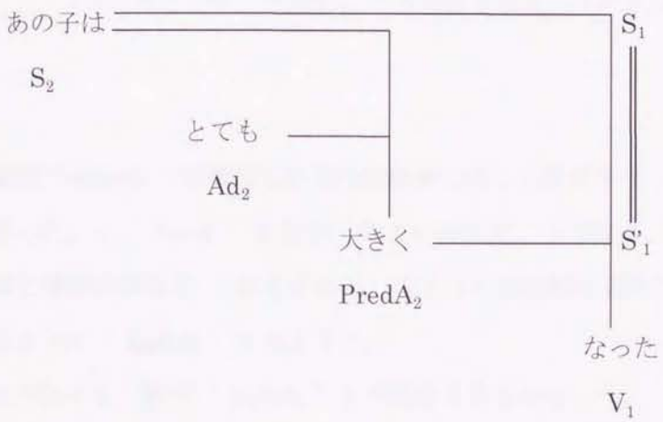
ヒンディー語の「なる」型の例として (15) の構造図を以下に挙げる。なお、接続詞はここでは排除する。



第二層の命題には、副詞的修飾句として「で（から），によって」の句が付いており、「（どの女王によっても）その願いがかなう」になる。第一層へこの命題が埋め込まれることになるが、表層上、主語になるのは第二層の命題の主語である。この文には否定辞がついているので、「第二層の命題がならなかった。」になる。

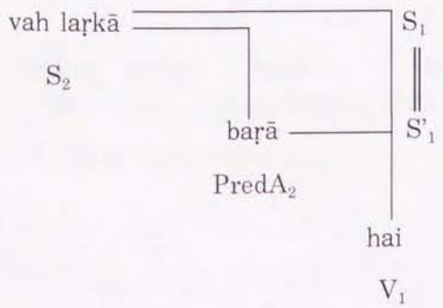
日本語のこの「なる」型も、統語上は同じ構造を取る。

(17)　あの子はとても大きくなった。



(17) は、「あの子はとても大きい。」という命題を、表層にある動詞「なる」の主語として埋め込んだものである。日本語では、形容詞が動詞に接続する場合、「－い」語尾から連用形の「－く」になる。

ところで、名詞述語文と同じく、『A=B』の『B』に形容詞が代入された形容詞述語文のコピュラも、先の「なる」と同じ位置にくる。



日本語では、「あの子は大きい。」という命題は、文としてもそのまま成り立つが、ヒンディー語で‘ vah laṛkā baṛā ’というコピュラなしでは、文として成り立たない。動詞出自のこのコピュラは、命題のその存在を表わすもので、上記の構造図からも分かるように、これまで単文で扱ってきた形容詞述語文も、究極的な埋め込みの二重構造である。

もう1つ、「なる」が使われる他の例文を挙げておく。

(18) Rāygaṛh bas sṭeṇḍ par gāṛī khaṛī ho cukī thī.
ラーイガル バス 停留所 に 車 立った なる－語幹 終わる－完了 コピュラ－過去
「ラーイガルのバス停に、バスはもう止まっていた。」
[Bāṣā bhārtī : 26]

動詞‘ cuknā ’を複合した部分は後章で詳しく説明するとして、‘ khaṛā ’「立った，止まった」と‘ honā ’を複合したこの形式は、日本語の「立つ」や「止まる」という動詞と等価値になる。「車を止める」のように他動詞に変換する場合は、やはり上の例と同じように‘ karnā ’を複合する。

この他にも、動詞‘ karnā ’とを複合するものとして、‘ mahsūs karnā ’「感じる」，‘ maujūd karnā ’「存在させる」，‘ mālūm karnā ’「知る」（形容詞はすべてアラビア語出自）、動詞‘ honā ’とを複合するものとして、‘ mahsūs honā ’「感じる」や‘ mālūm honā ’「知る」（共に与格構文使用），‘ maujūd / vidyamān honā ’「存在する」（通常、‘ honā ’はコピュラ使用）などが、この構造を取る。

また、「する，なる」動詞以外でも、この構造を取るものがある。以下にいくつか例を挙げる。

(19) khānā acchā banā hai.
ご飯 よい 作られる－完了 コピュラ－現在
「ご飯がうまくできたよ。」

(20) vāh! bhojan svādiṣṭ banā hai!
わあ 夕飯 おいしい 作られる一完了 コピュラー現在
「わあ、ご飯、おいしくできているね。」
[Cācā Caudharī 7 : 3]

前章の名詞述語複合のところでも説明したが、動詞 ‘ bannā ’「なる，できる」を使用した例である。構造図は先の ‘ honā ’ と同じになる。(19) では、「ご飯がよい」という命題全体が「できる／作られる」の主語となっており、また、(19) と同じ構造で、形容詞部分が「おいしい，美味の」に変わっている (20) の例もある。「うまくできる」と「おいしくできる」の構造も同じあり、「なる」型の構造に準じているのである。

また、この埋め込み構造を取るものとして、認知動詞を使用するした例もある。認知動詞も種類により与格構文を取る場合がある。まず、その例を以下に挙げる。

(21) āj bhūkh bhī baṛī lagī thī.
今日 空腹 も 大きい 感じる一完了 コピュラー過去
「今日はお腹もとても空いていたのよ。」
[Cācā Caudharī aur pāp śo : 18]

(22) carkhā jhaṃḍe ke donoṃ or samān dikhāī nahīṃ
糸車 旗 の 両方の 方向（から） 同じの 見ること 否定辞
detā thā.
与える一未完了 コピュラー過去
「糸車は、旗の両側から同じには見えなかった。」
[Bāl bhārtī bhāg 2 : 58]

(23) āp baṛe pareśān nazar ā rahe haiṃ.
あなた とても 困った 視野 来る一未完了 いる一完了 コピュラー現在
「あなたはとても困っているようですね。」
[Cācā Caudharī 7 : 78]

ここで挙げた例文３つには、与格になる行為者が明記されていないので、自動詞文のよ

うにみえる。(21) は、‘ lagnā ’「感じる」を使用しているが、埋め込みになる第二層の命題は、「空腹がひどい（＝大きい）。」である。(22) では、外枠の与格構文の述語「見える」に当たる‘ dikhāī denā ’が使用されている。これは、動詞‘ dekhnā ’「見る」の名詞派生形と動詞‘ denā ’「与える」を複合したものである。その主語に「糸車が裏表から（見て）同じだ。」という命題が埋め込まれている。(23) では、第２章、単文構造の自動詞文のところでも観察し、第５章の名詞複合のことろでも若干触れた、抽象名詞「視野」と動詞「来る」の複合形式が述語として使用されている。名詞編入動詞の一種と考えられ、構文上も与格構文を取ることから、日本語の「視界（目）に入る」によく似た構造になる。ここでも、下層にある命題「あなたは困っている」が、表層の与格構文の主語になる。

次に、外枠が平叙文の構文に認知動詞が使用される例を挙げる。

(24) maiṃ ne jalkar mar jānā ṭhīk samjhā.
私 能格 燃える－語幹＋接続分詞 死ぬ－語幹 行く－不定 正しい 理解する－過去

「私は焼け死んでしまってもいいと思ったの。」

[Cācā Caudharī 7 : 19]

(24) の外枠は、能格構文である。したがって、本来の目的語が絶対格になる。そこに、命題「焼け死んでしまうことが、ちょうどよい（＝正しい）。」の『S PredA』が埋め込まれている。この時点で、S に文が非定形で入っているため、この文は三層構造になる。

(25) ham log use acchā mānte haiṃ.
私たち 人々 彼を よい 認める－未完了 コピュラー現在

「私たちは彼をよく思っていますよ。」

(26) Alādīn ne darvāzā kholā to apne sāmne ek vṛddh vyakti ko
アラジン 能格 戸 開ける－過去 小詞 自分の 前に 1 老いた 人 を
khaṛe pāyā.
立っている 得る－過去

「アラジンが戸を開けると、そこに老人が一人立っているのが分かった。」

[Bāl bhārtī bhāg 2 : 23]

(25) では、「彼がよい」という命題が、動詞「思う，認める」の目的語として埋め込まれている。その際、前章の名詞述語複合でも観察されたように、埋め込まれる命題の主語が、対格標示されている。(26) も同様に、「老人が立っている」の主語である「老人」が対格標示されている。

(25) で使用されている動詞 ‘ mānnā ’ は、同格接続詞を使用した定形節型 Type I の複文構造も取ることができる。日本語では、文そのものの埋め込みをした「彼がよいと思う。」と「彼をよく思う。」の二通りの表現法があるが、前者が、Type I の「～が…と思う」の場合で、Type II の埋め込み型の複文では、「～を PredA 思う」になっている。ヒンディー語も非定形節の主語が対格を取り、PredA は、前章の PredN の場合と同様に、失業者になったものと考えることができる。(26) の ‘ pānā ’ は、本来「得る」という意味で、ここでは、論理的には「老人が立っている状況を得る」ということになる。ヒンディー語のこの動詞も Type II の構造を取る。ところが、これに相当する日本語の「分かる」は、Type II の埋め込み型にはならず、Type I の「～が…と分かる」の構造になる。

このように、日本語には、埋め込み操作が可能な動詞とそうでないものがあるが、ヒンディー語の認知動詞では、Type I，Type II ともに可能である。さらに、この PredA に動詞の未完了分詞，完了分詞が代入されることもある。次章では、この埋め込みも含め、動詞との複合を扱う。

第７章　述語複合（３）―― 動詞編 ――

これまで、名詞と動詞，形容詞と動詞の複合を観察してきたが、今度は、動詞と動詞の複合について考察する。ヒンディー語学においては、いわゆる複合動詞（saṃyukt kriyāeṁ = compound verbs）として、形態・意味論・語用論の分野において、インド本国およびアメリカをはじめとする外国の学者によってかなり考察され、さまざまな説明がなされている。

インド本国の学者によっても、この複合形態を成す後続動詞の種類分けはさまざまである。ヒンディー語文法の大家のうち、Kāmtāprasād Guru（1970）は、先行動詞の形態を、動名詞，現在分詞，過去分詞，前時制分詞の形態（本論文では、前から不定詞，未完了分詞，完了分詞，語幹と呼ぶ。）に分け、それぞれに接続する定形の後続動詞についての意味もしくは用法を説明している。

また、上述の氏を含め、しばしば、この動詞の連結が、１つの範疇を成した複合動詞と呼ばれるが、V.R.Jagannāthan（1981）は、この後続する動詞を特に、彩飾動詞（raṃjak kriyā = coloring verb）と呼び、P.E.Hook は、ベクトル動詞（vector verb）と呼ぶ。この範疇に含まれる動詞は、第１章の 1.3 でも説明済みのように、本来の動詞としての意味を失いかけたもので、意味の上ではっきり説明し難いが、命題の部分のその方向性もしくは彩りをする、いわばモダリティを帯びた動詞群である。

統語的にみれば、これは核に対する演算子として付加するものである。基本的に SOV 語順のヒンディー語では、この演算子は文末に来ることになる。動詞述語文の場合、「S が V」もしくは「S が O を V」という部分が核となり命題を表わすのに対して、その後ろに、プラスαの意味をもたらすために付加するものである。したがって、基本的に命題になる核自体は、話し手と聞き手の間で何らかの形で既知もしくは予測の範囲内のことである必要がある。彩飾動詞が付加される時、既知・未知が１つの指標になりうることについては、先のV.R.Jagannāthan が指摘している。氏の枠組みでは、この彩飾動詞が統語的に先行するか後続するかで、第一群と第二群に大きく分けられている。第一群には、‘ ānā ’「来る」，‘ jānā ’「行く」，‘ calnā ’「進む，歩く」が挙げられている。第二類では、再度、既知か未知かを指標にして、大きく２つに分類している。既知のものとしては‘ lenā ’「取る」，‘ denā ’「与える」，‘ jānā ’を、既知ではない、すなわち未知のものとして、突発性の意味を持つ‘ uṭhnā ’「起き上がる」，‘ paṛnā ’「生じる」，

‘ ḍālnā ’「注ぐ，入れる」，‘ baiṭhnā ’「座る」，‘ ānā ’「来る」と、位置を示す‘ rakhnā ’「置く」に意味分類して提示している。

意味の分類は、人それぞれの受け取り方や場面場面に依存するので置いておくとして、談話文法的な既知・未知の要素は、統語上の命題にプラスαされるものということからみても、手がかりになると考えられる。氏は、P.E.Hook（1974，1980）が指摘している、時を表す関係詞‘ jab ’節がくる構造でこの形式が登場しやすい（例えば日本語でも「彼が来た時には、御飯は食べてしまっていた。」のように言う。）ということも、‘ jab ’節は既知のものなので、主節に出現しやすいことを指摘し、既知・未知の指標に対する証明の一部にしている。日本語でもその点は同じで、従属節で時間軸の一点を絞り、その時には…というパターンが一般的にある。ところが、「彼がやって来た時には、辺りは静まりかえっていた。」，「あなたは時計が壊れてしまった時に、どうするつもりですか。」の「やってきた／静まりかえっていた」，「壊れてしまった」のように、日本語では時の場合でも従属節側，主節側ともに現れるので、必ずしも主節にだけ現れるわけではなく、さらにいえば、時を表す節にだけ多く現れるわけでもない。[1] すなわち、実際、これは命題にプラスαするモーダルの機能を帯びるものなので、命題が既知である必要はあるが、時が必ずしも既知を表す起点として叙述される、もしくはされている必要はないということである。

しかしながら、核と演算子による命題の部分と、それにプラスαされるモーダルやアスペクトの部分に分けられることからも、命題は当然のことながら既知のものなのである。したがって、氏のいう既知・未知という弁別素性は重要な要素である。

意味主体の説明になると、例えば主動詞に動詞‘ denā ’「与える」を後続する場合、完了性の意味になるという具合に説明がなされる。確かに解釈上では、動詞が醸し出す意味の共通項として抽象化しやすい概念だが、実際、解釈上の完了性が成り立つということが、文の統語構造に反映される完了性全体を説明することにはならないのである。事実、本来、完了性を表すものである完了分詞＋コピュラ現在形の‘ kiyā hai ’（「する」＋コピュラ）以外に、動詞‘ lenā ’「取る」を複合した‘ kar liyā ’、もしくはコピュラ動詞を文末に複合した‘ kar liyā hai ’が公然と存在している以上、これらが単なるデフォルトの完了性ではないことは明らかである。また、現在時制においてもこの複合はみら

[1] 時を表す構文に多く観察されるというのは、コーパスの問題ではないか。

れるわけで、その場合、完了という指標は当てはまらなくなる。このように、次から次へと挙げざるを得なくなる意味素性では、この複合形式に対して説明上どうしても限界を迎えてしまうのである。

一方、日本語には、幸いなことに、統語的にも機能的にもヒンディー語によく似た動詞複合の形式がある。英語では、命題への演算子としていわゆるモーダルを付加する動詞は、原形不定詞を接続する‘ will, may, can, must, shall, need, dare ’等の助動詞か、‘ to go to see him ’の‘ go ’, ‘ to come to know ’の‘ come ’, ‘ to get to know ’の‘ get ’のような to-付き不定詞と接続する動詞、もしくは‘ to stop moving ’の‘ stop ’や‘ to forget seeing him before ’の‘ forget ’のような動名詞と接続する動詞と、限られたものぐらいで、あまりみられない。そのため、S.H.Kellog（1938）のように、‘ girnā vs. gir jānā ’を‘ to fall vs. to go (to) fall ’ということなく、‘ to fall vs. to fall down ’という具合に、副詞的な前置詞に依存して説明することになるのである。

ところが、日本語では、これを「落ちる vs. 落ちていく／落ちてしまう」のように、動詞と動詞を接続することで、付け加えの意味を表すことができる。ここで出てきている「いく」,「しまう」は、比較的どの動詞にも後続する、生産性の高い後続動詞であるが、日本語では、動詞の複合形式の中にも「飛びつく，飛び跳ねる，やり込める，見届ける，待ち侘びる，聞き流す，食いはぐれる」等々の、２つの動詞が合わさってはじめて特殊な意味を成すものもある。ここに挙げた例だけをみても、後続動詞はすでに７種類ある。特殊な意味を成すということは、これらは動詞が２つであっても、一語化してしまった結果、別の意味を成すものなのである。後続動詞の種類は、この種の一語化した複合形式を、本論文では複合動詞と呼ぶ。（ヒンディー語にもこの種の動詞複合、つまり複合動詞がみられる。）

同じ形式を持つヒンディー語と日本語では、必ずしも同義の動詞を使うわけではなく、まったく同じニュアンスを出すものでもない。しかし、多少の差異はあっても、同じ要素でプラスαの意味を加えるのは共通であり、本来の具体的な意味をなくし、モーダルに向って漠然化（bleaching）されつつあっても、日本語のそれを考えれば、その過程および機能を理解しやすい。

つまり、ヒンディー語ではどのような動詞が演算子として使用されるか、その時の意味の漠然化はどうなっているかを分析する必要があるのである。また、同時に日本語にある演算子としての動詞と対照し考察することが、普遍性追求、ひいてはわれわれの言語習得

に役立つものと考えられる。

同じ動詞という要素でモーダルを表わす日本語の体系をよく理解することが、ヒンディー語の動詞複合を理解することに通じるものと仮定し、本章では、日本語との対比を試みながら、モーダル的要素付加としての演算子がともに動詞であるヒンディー語と日本語では、どのような共通点，相違点があるか後節から詳しく観察していく。

7.1 複合動詞

先にも述べたように、ここでは動詞が複合されてあたかも一語のごとく作用する動詞群を挙げる。日本語には、このタイプは数え切れないぐらいあるが、改めて非生産的な後続動詞の例を先に挙げると、「飛び跳ねる，思いあぐねる，漕ぎ着ける」の「跳ねる，あぐねる，着ける」がある。これらの後続動詞は、自由にどの動詞にでも付くものではなく、両方が複合されて初めて、ニュアンスの違った意味になるものである。

また、上のものに比べて、より生産的な後続動詞の類として、「倒す，破る，放つ，流す，つぶす，着ける，下す，上げる」等がある。以下にこれらの後続動詞を使用した例を挙げる。

「倒す」	「打ち倒す，切り倒す，押し倒す，借り倒す，食い倒す」
「破る」	「打ち破る，突き破る，押し破る，食い破る，言い破る」
「放つ」	「解き放つ，開け放つ，追い放つ，思い放つ，聞き放つ」
「流す」	「洗い流す，売り流す，見流す，聞き流す，書き流す，読み流す」
「つぶす」	「押しつぶす，取りつぶす，握りつぶす，酔いつぶす，食いつぶす」
「下す」	「書き下す，借り下す，読み下す，言い下す，見下す」
「上げる」	「押し上げる，追い上げる，打ち上げる，畳み上げる，突き上げる，差し上げる，」

これらすべて、広辞苑第四版に掲載されている複合例である。この中の「倒す」を例に取って説明すると、「打ち倒す，切り倒す，押し倒す」は、「(打って) 倒す，(切って) 倒す，(押して) 倒す」のように、具体的な「倒す」という意味が温存されている後続動詞としての使用である。これに対し、「借り倒す，食い倒す」は、「*(借りて) 倒す，*(食って) 倒す」のように、「倒す」の意味が本来の「倒す」という意味ではなくなっている。「借り倒す」は、一体になって初めて『借りて返さず、先方に損をかける。』の意になり、「食い倒す」も同様に『①食いついて引き倒す。②飲み食いして代価を払わずにすます。

③くいつぶす。』［広辞苑第四版より抜粋］の意を創出するのである。

このように、後続動詞になる動詞にも様々あり、同時に、生産性の高いものから低いものがある。また、先行する動詞によっては、後続動詞の意味がそのまま温存されるものから、本来の意味を失い特殊なニュアンスを伝えるものに変わるものまである。

先の日本語の例は一部のものであり、すべてではないので、非生産的・生産的という枠組みもあくまで相対的なものであり、後続動詞の意味の漠然化も一概に言えるものではない。実際、これらは連続体を成すものであり、線引きをするのはかなり難しいのである。特に、生産的なものに挙げた例は、さらに下位区分できるものと推察される。しかし、ここでは日本語との対照により、ヒンディー語のいわゆる複合動詞を分析することが眼目なので、大きな枠組みだけを呈するにとどめる。

ヒンディー語でも、この種の複合形式は存在する。その中でも、まず、相対的に生産性の低いものを挙げてみると、‘ kah sunānā ’「言い聞かせる」, ‘ khoj nikālnā ’「探し出す」, ‘ ṭūṭ girnā ’「壊れ（崩れ）落ちる」, ‘ mār bhagānā ’「叩き出す」や ‘ kāṭ khānā ’「食い千切る」, ‘ le ḍūbnā ’「巻き込む」［K.Siṃh（1975）, V.R.Jagannāthan（1981）］等がある。[2] ここで挙げた例をみると、先行動詞，後続動詞共に元の意味を保持しているものと、イディオム化して（すなわち一体化して）別の意味を表わすものの大きく２つに分けられる。前者の範疇にある ‘ kah sunānā ’ を例にとると、「言い聞かせる」は「言って聞かせる」と言える。ヒンディー語もその意味で使用できる複合形式になっている。したがって、共に意味が漠然化していないのである。一方、後者の範疇にある ‘ le ḍūbnā ’「巻き込む」について説明すると、文字通りは「取って沈む」になっているこの複合形式が、「何かを連れて沈む」という具合に流用され、現在は「（悪い方向に）巻き込む」という一語化したものとして使用されるのである。

一語化してしまったものはともかく、前者の範疇のものは、後節で扱う接続分詞

[2] これらは、接続分詞 ‘ -kar ’（後節を参照）が落ちたものと考えられるので、彩飾動詞の範疇にないとV.R.Jagannāthanは述べている。日本語にもちょうど、最初の例に対応するものがあるが、例えば「言って（から）聞かせる」といえるからといって、元の動詞の複合形「言い聞かせる」が動詞を複合したものではないとは言えない。形式が存在している以上、これはこれである種、一語化した複合形式になっているのである。実際、接続分詞の有無が判断基準（criteria）となるのは、後続動詞の意味が漠然化しているかどうかを見極める時だけである。氏のいう彩飾動詞は、本論文では後節の動詞複合で扱う範疇のものであることがここで明らかに分かる。さらに言えば、compound verbs 自体が動詞を複合するというだけで扱われる傾向にあったことも窺える。

‘ -kar ’ を使用して言い換えることが可能である。しかし、この接続分詞を使用する形式すべてが、接続分詞を省略して言えるものではない。日本語の連用形と動詞を複合する形式が、どの動詞に対しても汎用的ではないことからも、意味の漠然化に依らず、一体化したものとして位置付けできるであろう。

もう1つ、相対的に生産性が高いが、先行動詞により特殊な意味を創出するものをここで一度挙げておく。‘ ānā ’「来る」使用の‘ ho ānā ’「行って来る」,‘ ḍālnā ’「入れる」使用の‘ mār ḍālnā ’「殺す」,‘ denā ’「与える」使用の‘ cal denā ’「出発する」,‘ paṛnā ’「生じる」使用の‘ cal paṛnā ’「出発する」,‘ lenā ’ 使用の‘ ho lenā ’「交わる，合流する」,‘ ban baiṭhnā ’「成り済ます」等がそれである。先ほど日本語でも、生産性が高いものは線引きし難いと述べたが、これらの後続動詞は、その類であり、次節の動詞複合でも使用される動詞なので、その都度、例示していくことにする。

7.2 動詞複合（述語複合型）

ここで扱う複合形式は、先の一語化した複合形式とは違い、生産性も高く、モーダル的な要素を付加するものである。このような動詞を、Hopper&Traugott（1993）は、文法化（grammaticalization）の一過程にある、拘束形式である助動詞（auxiliary verb）になる前段階で、意味が漠然化（bleaching）された動詞群としている。本論文で扱うこの種の複合形式も、その顰に倣った範疇のものとして分析していく。

7.2.1 動詞複合の類型

まず、動詞が複合される際のヒンディー語の形態を以下に示す。ヒンディー語は基本的にSOV言語なので、前にくる動詞を先行動詞、後続の動詞を後続動詞と呼ぶことにする。ヒンディー語の先行動詞には以下の表に挙げるように6つの形態がみられる。

	先行動詞	＋	後続動詞（後続成分）
1	語幹	＋	接辞
2	語幹	＋	本動詞
3	不定詞	＋	本動詞
4	未完了分詞	＋	本動詞
5	完了分詞	＋	本動詞
6	語幹 - kar	＋	本動詞

先行動詞の形態は非定形であり、後続動詞の形態は時制を担う定形である。先行動詞の形態は、中核的命題の部分に当たるが、アスペクトとしての要素をもつ。語幹もしくは不定詞は絶対値的な動詞形態であるが、未完了分詞の場合、事象の未完了性、完了分詞の場合、事象の完了性をもつのである。

タイプ1で接辞を後続動詞に挙げている。1つの言語内である品詞が文法化を経た結果、拘束形式である接語（clitic）もしくは接辞（affix）になると仮説が立てられるが、それを適応すると、これは本来の動詞が接辞と化したものと考えられるのである。

インド・ヨーロッパ諸語の一支流であるインド・イラン語派のヒンディー語とその基底となっているサンスクリットでは、使役形を作る場合、‘ -aya- ’接辞を語幹に付加するパターンをとるが、同じインド・ヨーロッパ語族のロマンス諸語・ゲルマン諸語では、使役表現の際、独立した動詞と命題である先行動詞とを組み合わせる。それらの祖語に当たるラテン語や古代ギリシャ語ではどういう形式で使役を表わしていたのだろうか。2つの可能性が考えられる。1つは、ラテン語や古代ギリシャ語もサンスクリット同様、接辞型であった場合である。そうなると、後世に下るにつれ、ロマンス諸語・ゲルマン諸語側が動詞複合型に変化を遂げたことになる。もう1つは、ラテン語・古代ギリシャ語・サンスクリット語の段階ですでに別々の形式を使用していたか、ラテン語・古代ギリシャ語が接辞型と動詞複合型の両方の形式を持っていた場合である。歴史言語学では語彙レベルでの音韻的類似点により、それらの祖語に当たるとされるプロト・インド・ヨーロッパ語の再建が盛んに行われているが、3 つのプロト・タイプを1つに仮定している以上、どちらかの形式を持つか両方を持っていたには違いないであろう。その点からも、サンスクリットでは、動詞が接辞と化し、膠着したと考えられるのである。

接辞については、ヒンディー語の祖語であり、文献上最古の言語とされるサンスクリットには、使役接辞を伴った使役語幹と共に、受身接辞を伴った受身語幹が存在した。この語幹には、接中辞‘ -ya- ’が内包されている。現代ヒンディー語では、語幹に接辞が膠着するのは、使役接辞のみである。現代ヒンディー語[3] 以前の標準語とされる先のブラジ・

[3] 序論で述べたとおり、現代ヒンディー語の母体になっているのは、ブラジ・バーシャー（Braj Bhāṣā）優勢の時期から方言レベルで存在したカリー・ボーリー（Khaṛī Bolī）方言である。

バーシャーでも、サンスクリット出自と考えられる受身の接中辞‘ -iya- ’[4] が観察されている。この中期ヒンディー語に当たるブラジ・バーシャーでは、この接辞型の受身が存在すると同時に、‘ jānā ’「行く」という動詞を複合した受身も存在した。現代ヒンディー語では、接辞型が消失し、後述する完了分詞に後続動詞‘ jānā ’「行く」を組み合わせた複合形式のみが受身表現となっている。つまり、現代ヒンディー語では、動詞複合による受身が主流になり、接辞型を淘汰したものと考えられる。使役接辞の場合は、実際のところ接辞型しか見当たらないので、動詞出自かどうかは不明である。しかし、ヒンディー語にみられる接辞が動詞に関連があるであろうという仮説を裏付けるものがある。それは、直説法未来時制の構成要素の接尾辞‘ -gā ’（異形は‘ -gī ’,‘ -ge ’）である。Dhīreṃdr Varmā（1962）によると、現在では一体とみられているこの未来形も、語尾に当たる接尾辞の‘ -ga ’は、サンスクリットの動詞語根‘ gam- ’「行く」の過去分詞‘ gata ’から来ているということである。とすれば、この未来形は、現代語の仮定法未来形に動詞出自の接辞（サンスクリットの過去分詞が未来形の語形成に用いられるということは、何らかの形で途中、意味変化を起こしたものと推察される。）を付加し、さらに膠着させたものということになる。付加の段階であれば、接辞化していない接語といえるが、過去の書物には、この‘ -gā ’を分けて書いたものもある。このように、文法化と語形成への過程を見る限り、動詞に付加される接辞については、少なくとも動詞に関連があるといえるであろうし、動詞複合の最終段階（語形成）と捉えることができる。

タイプ２は、ヒンディー語の複合動詞の中で、もっとも説明が難しい複合形式である。先行研究にしばしばみられる意味論・語用論的な枠組みでは、他の形態との接続もさることながら、この説明のしがたい後続動詞のもつ意味および使用法を説明することが多いが、周縁的な説明に固執することなく、本章で十分そのメカニズムを観察していく形式である。

タイプ３は、不定詞と本動詞が接続するものである。文要素としては、不定詞が主語，目的語，そしてオプションの修飾語になる。主語の場合は、通常、与格構文になる。目的語の場合は、そのまま動名詞的なものになる。ヒンディー語のこの不定詞は名詞性がかな

---

[4] R. Snell（1992）では、この接辞（正確にはこの後ろに不完了・完了を表す接辞が付加されるので、接中辞となる。）をある種の語幹（theme）とみなし、語根（root）に付加して、受身語幹（passive stem）を形成するとしている。しかし、Dhīrendr Varmā（1954）は、‘ -ya ’のみを態（voice）の内の受身を表す受動態としている。前者は２つ合わせて一体化したものとみているが、本論文では、形態の構成成分から実際、受身の部分を負う形式を明らかにする必要があるので、受身の接辞もしくは接中辞として処理する。

り強い。というのは、英語のように、副詞的な用法（I came to see you.などにみられる to 付き不定詞のような用法）を持たないからである。

タイプ４は、未完了分詞に本動詞がつく例である。先にも少し述べたが、このタイプは、先行動詞が語幹の場合と違い、不完了の相を持ったものである。

タイプ５は、もう１つの相を持つ完了分詞と本動詞がつく例である。上記の未完了分詞とは逆の完了相を負う。

タイプ６の接辞 - kar は、ヒンディー語では一般に接続分詞と呼ばれ、多分に生産的なもので、（もちろん意味的な制約はあるが）どんな語幹にでも膠着する。これは、例えば日本語の動詞「みる」から派生した連用形，もしくは『て』形と似た働きをする。

次に、日本語の複合形式を挙げる。日本語の動詞複合については、形態上 3 つのタイプが挙げられる。

	先行動詞 ＋ 後続動詞
1	連用形 ＋ 本動詞
2	－て形 ＋ 本動詞
3	語幹 ＋ 接辞

タイプ１には、「書き出す，やり直す，話し始める，話し疲れる」のような複合が挙げられる。タイプ２には、「書いてあげる，作っておく，やってみる，話してやる」のような例が挙げられる。タイプ３には、使役接辞の「－す，－さす／－せる，－させる」と、受身と可能の接辞「－る，－れる／－れる，－られる」がある。具体的な日本語の例は、先行動詞として、五段活用の「書く」，一段活用の「出る」を使用した複合形態を一覧にして章末に挙げることにする。

ヒンディー語の後続動詞はだいたい種類が限られているが、日本語の場合、後続動詞の種類は、ヒンディー語の比ではないことが分かる。接辞についても、今となっては使役接辞のみになっているヒンディー語に比べ、日本語は、使役接辞と受身・可能の接辞がある。

7.2.2 語幹＋接辞

ヒンディー語では、使役文の場合にのみ語幹に接辞が付くことはすでに述べているので、

ここでは、使役接辞を持つ例文を挙げる。同じ使役接辞を持つ日本語との対照分析および用法の分析は、次の章に譲る。

(1) maiṃ in aṃḍoṃ ke cūze nikalvāūṃgā.
私 これらの 卵（複） の 鶏 出させる－未来
「私はこれらの卵から雛を孵すぞ。」
［Cācā Caudharī 7 : 84］

これは、動詞 ‘ nikalnā ’「出る」に接辞 ‘ -vā- ’ が付いた例文である。意訳として「雛を孵す」にしたが、文字通りは「私はこれらの卵のヒヨコを出させるつもりである。」である。

(2) āj maiṃ zamīn par hal calvākar hī dam lūṃgī.
今日 私 土地 に 鍬 動かさせる－語幹＋接続分詞 小詞 息 取る－未来
「今日は畑を耕させてからじゃないと、安心できないよ。」
［Cācā Caudharī 7 : 46］

ここでは、‘ calnā ’「動く，進む，歩く」に接辞 ‘ -vā- ’ が付いた動詞が使役動詞として使用されている。意訳として「耕す」にしたが、これも文字通りにいえば、「大地の上で鍬を動かさせて…。」となっている。

7.2.3 語幹＋本動詞

この複合形式は、ヒンディー語において頻繁にみられる形式である。これについても、名詞に関する複合と同じく、一語化したものとそうでないものがあるが、実際、なかなかその境目がはっきりしない。それはともかく、語幹＋本動詞の複合形式の本動詞にも、拘束形式化しているものが若干ある。まず、以下にその例を挙げる。

(3) rājsūy yagya samāpt ho cukā thā.
即位式 供犠 終わった－形 なる－語幹 終わる－完了 コピュラー過去

「即位式の供犠は終わっていた。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 48]

(4) bhagvān śrīkṛṣṇa hastināpur se lauṭ kar jā
神 クリシュナ ハスティナープル から 帰る－語幹 先行時分詞 行く－語幹
cuke the.
終わる－完了 コピュラー過去

「クリシュナ神はハスティナープルから帰って行ってしまっていた。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 50]

この（3），（4）には、「終わる」という意味を持つ ‘ cuknā ’ を本動詞として使用するが、この動詞自体、日本語の「試合が終わる」の「終わる」のように単独で使用することはなくなっている。ただし、接辞 ‘ -ā- ’ を付加して他動詞派生させた ‘ cukānā ’ は、‘ badlā cukānā ’「借りを返す」のように、単独で使用される。

(5) kyā pāṇḍav aur kauravoṃ meṃ jue kā khel ho
疑問辞 パーンダヴ と クル族 に 賭け の 試合 なる－語幹
saktā hai ?
できる－未完了 コピュラー現在

「パーンダヴァとクル族で賭け試合をしてもいいですか。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 50]

便宜的に日本語を当てるが、可能を表す ‘ saknā ’「できる」は、事象の完了を表す ‘ cuknā ’「終わる」のように、語幹形態の先行動詞なしで、単独で使われることはまずない。以下のように語幹を省略すれば非文になってしまうのである。

(6) * usī tarah kā khel nahīṃ saktā hai.
その（強調） 種類 の 試合 否定辞 できる－未完了 コピュラー現在

「そのような試合などできない。」

一方の日本語の「できる」や「終わる」は自由形式であり、単独でも十分使いうるので、助動詞の範疇にはない。強いていえば、「できる」より、「あり＋うる」,「し＋うる」にみられる可能を表す動詞複合「うる」の方が形式的には近い。つまり、非文を日本語の形態に合わせれば「そのような試合などありえない。」を「*そのような試合などゅえない。」とはいえないのと同じである。

これらの動詞‘ cuknā ’「終わる」,‘ saknā ’「できる」の２つが、ヒンディー語のいわば助動詞の範疇にあるものである。ここからは本来の本動詞を接続する例を挙げていく。若干先に述べてあるが、これは、ヒンディー語を学習する際、難関な項目の１つに数えられている。というのは、本動詞の意味も持ち、なおかつ助動詞的な機能も持つ、中間的な存在だからである。このような両方の機能を持つ動詞は、ヒンディー語のみならず、日本語にも存在する。これまでの章で幾度か使用した日本語の動詞「しまう」もその１つである。これは本動詞としての意味をいくつか持っている。広辞苑によると、「なし終える／すます／しとげる」にはじまり、「やめる／なくす」,「入れ納める／片づける／始末する」,「やっつける」など、類義語を入れると枚挙にいとまがない。複合形式になる助動詞的な「しまう」については、動作の完了を表わすものと明記してあり、「すっかり…しおわる」,「完全に…する／ほんとに…する」もしくは「もはやどうにもならない／とりかえしのつかないことになる」というような意を含むもの、というように言い換えてある。

この本動詞と助動詞の間には、関連性がある。「入れ納める」を包括する「片づける」,「仕事を片づける vs. 火を始末する」にみられるように、対象こそ違えるが「片づける」と「始末する」の間にある等価値の意味、同じく、人を対象にした場合の「あいつを片づけろ／始末しろ vs. あいつをやっつけろ」の等価値の意味などのように、それぞれが対象を違えるにしても、語彙を越えた超越的意味は等価値なのである。また、その「片づける」等の概念から『物事が終わる』、もしくは『物事を終わらせる』ようなニュアンスが創出される。それが、文脈により単に行為が完了したことを表わすものであったり、行為者の意図しないところである行為が完了したため、結果として後悔の念を内包していったりして、使用法が広がるわけである。例えば、「私は彼の仕事をしてしまった」という文があるとすると、単に仕事をすること全体が主題になっている文脈ならば、この「しまった」を素直に完了の意味だけに解釈できる。しかし、主題がそれ以外、例えば仕事の属性（彼の仕事か自分の仕事か）にあるとすれば、この「しまった」は、完了と同時に、「過ってした」ことへの後悔の念を二次的に負うことになるのである。

このように、使用法上説明される意味は、多分に文脈に左右されるものが多く、言語形式自体がそれぞれの文脈の中で映し出す色は、玉虫の放つ色のごとくさまざまである。ヒンディー語のこの形式についても同様のことがいえる。ヒンディー語の文法家によって後続動詞に数えるものも様々であるが、本論文では形態・統語の接続形式で分類するので、意味が漠然化（bleaching）したものも、そうでないものも一括にして取り扱う。

まずは、後続動詞として‘ pānā ’「得る」を複合する例を挙げる。

(7) kal bāt nahīṃ ho pāī.
昨日 話 否定辞 なる－語幹 コピュラー過去
「昨日、話できなかった。」

(8) phir bhī kah na pāūm̐?
また も 言う－語幹 否定辞 得る－仮・未来
「それでも、やはり言えないんじゃないかな。」

（7）は、前節にも出てきた「話」と「なる」動詞の複合形に、動詞‘ pānā ’が付いている例である。（8）は、‘ kahnā ’「言う」に動詞‘ pānā ’が付いている例である。先行動詞が語幹の場合に、この動詞‘ pānā ’が付くと、日本語の「－る，－れる」，「できる」，「連用形＋える／うる」が表わすような可能の意味になる。

先に挙げた拘束形式の‘ saknā ’「できる」とこの動詞‘ pānā ’「得る」が、動詞連続の形態の上で、可能を表す場合の表現形式であるとされる。抽象概念化した可能という意味の範疇分けでは正当であるが、２つの表現形式がある以上、細かなニュアンスがもちろん違う。日本語でも、「私はこの仕事ができた。」という場合と、「私はこの仕事をし得た。」では、自ずと意味が違う。ここでは、細かな意味の分類には踏み込まないが、後続動詞として‘ pānā ’「得る」を使用する場合、「取る，得る」という行為の具体的意味が薄まって、能動的にその行為を行おうとするニュアンスが残ると考えられる。

このように、ヒンディー語と日本語はある種の可能を表現する場合、「得る」という動詞を後続させる点では共通であるが、文語使用か口語使用かというの用法の点が異なる。日本語の場合は後者が文語的表現になる。口語であれば、「（なんとか）し得る」という意味合いの場合も、通常「できる」もしくは動詞の語幹プラス接辞「－れる，－られる」も

しくは「ーる，ーれる」を使用する。したがって、日本語の場合、口語において前者が後者のニュアンスを包括するといえるが、ヒンディー語の場合、そのような包括関係が成り立つかどうかは不明である。ただ、1ついえることは、ヒンディー語の‘ pānā ’「得る」の場合、文語・口語という使用上の差異はなく、そのニュアンスを強調する場合には、自由に使用できる表現形式なのである。

次は、後続動詞‘ jānā ’「行く」を観察する。この動詞は後続動詞としての頻度がかなり高い。その分だけ用法があるわけだが、ここでは、基本的な用法を説明する。まずは、平叙文に使用されている例を挙げる。

(9) vah badmāś tumhārī kār bhagākar le gayā....
あの 悪漢 君の 車 走らせる一語幹＋接続分詞 取る一語幹 行く一過去

「あのワル、あんたの車を運転して、持って逃げた…」

[Cācā Caudharī 7 : 8]

日本語と同様、動詞複合の部分は「取って(持って)行く」となるので、後続動詞‘ jānā ’には、「行く」という行為そのものの意味が温存されている。先行動詞として使用されている「取る」の形態は「取り」という連用形ではなく、「取って」の「て」形になる。もっとも、語が「取る」から「連れる」に変われば、「連れゆく」という形式が成立する。[広辞苑第四版] 接続の形態はともかく、このような、本来の意味を温存した例は枚挙にいとまがないので、一例を挙げるに止めることにして、今度は、具体的な「行く」という意味が失われかけている例を挙げる。

(10) Duryodhan kī cintā adhik baṛh gaī thī.
ドゥルヨーダナ の 心配 多く 増える一語幹 行く一完了 コピュラー過去

「ドゥルヨーダナの心配はさらに増していった。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 50]

(11) ..... māno us ke śarīr meṃ koī rog ho gayā hai.
まるで 彼 の 体 に 何か 病 なる－語幹 行く－完了 コピュラ－現在

「まるで、彼の体に何か病にかかってしまったようである。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 50]

(12) sārā sāmān bhī ā gayā hai.
すべての 荷物 も 来る－語幹 行く－完了 コピュラ－現在

「荷物も全部乗っている。」

[Cācā Caudharī 7 : 67]

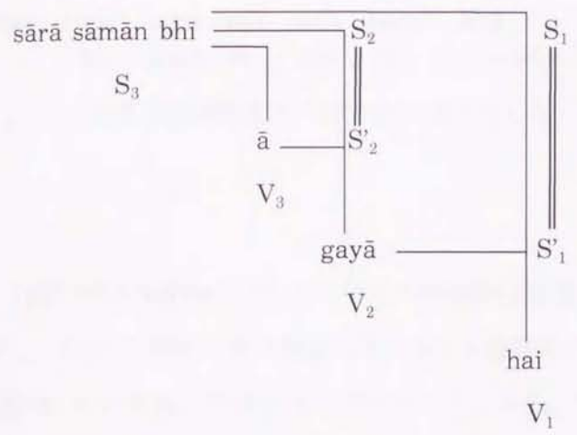
最初の例文では「増していった」となるので、複合形式も日本語と同様である。また、意味もおおよそ同様であるといえる。「人口が減っていく。」,「財産は失われていく。」などのように、具体的な行為として人が「行く」の意味ではなく、物が先に向けて進行していくという方向性のニュアンスを出すために付加する演算子としての「いく」である。

しかし、(11), (12) の例文については、日本語の連用形に接続した「?なり＋いく[5]」,「*き＋いく」も、「て」形に接続した「なって＋いく」,「きて＋いく」も、ヒンディー語の複合形式の持つ意味には当てはまらない。日本語のこの複合形式はどちらも、後続動詞の「行く」という意味が、本来の意味を持たないまでも、(10) の場合のように、進行していくという方向性のニュアンスを持つものだからである。一方、ヒンディー語側のこの演算子は、日本語と同じ演算子としての機能ではあっても、意味の漠然化の段階をさらに進めているものと考えられる。すなわち、行為の方向性を若干残してはいるが、論理的に「行為に至る」もしくは「行為が完了するに至る」という、さらに漠然化したニュアンスのみを伝えるものになっているのである。これに一番近い日本語の演算子は、先にも述べた「しまう」である。これを使用して (11) を忠実に訳せば、「病が生じてしまっている」で、(12) も「荷物が来てしまっている」となる。

ここで、一番日本語に演算子を反映し難い (12) の例文を構造図に示して観察してみる。

---

5 日本語には「成り行く」があるが、「物事がうつりゆく」という意味に使用されるので、この場合、適当ではない。



これは、列車内の会話で「荷物が列車に積み込まれている。」という意味合いで使用されている文である。第三層では、核となる命題「荷物が来る」が形成されている。第二層では、第三層の命題が、演算子として使用された V_2 により「完了するに至る」となる。本来は命題全体（S'_2）が主語になるところだが、論理的な V_2 の主語は S_2 である。さらに第一層で、その命題がコピュラ動詞 V_1 により存在するということを表わす。命題（S'_1）を代表した主語は S_1 である。これらを論理的に解釈すると、「荷物が乗ってしまっている」になるが、実際、日本語の表現としては、第二層の演算子をわざわざ「しまう」と言う必要はない。ヒンディー語の演算子は、行為が完了することを表わしているに過ぎないので、この場合、日本語では『て』形プラスコピュラ動詞の「いる」で十分なのである。

補足として、ヒンディー語では、後続動詞の ‘ jānā ’「行く」もさることながら、先行動詞として ‘ ānā ’「来る」が使用されることが多い。主語が人間や理を有する生物にとどまらず、ものでも抽象名詞でもこの動詞を使用することは、第２章の単文構造で述べたとおりである。

さらに、‘ jānā ’ を複合する例文を挙げる。

(13) jise gāṛī meṃ jānā thā, vah to pleṭfārm par
関係詞（与） 列車 に 行く－不定 コピュラ－過去 彼 小詞 プラットフォーム に
hī rah gayā.
小詞 いる－語幹 行く－過去

「列車で出かけるはずだった人が、プラットフォームに取り残された。」

［Cācā Caudharī : 67］

(14) merā laṃc vah muft meṃ khā gayā.
私の 昼御飯 彼 無料 に 食べる－語幹 行く－過去
「うちの昼御飯をやつはただで食べてしまったぞ。」

[Cācā Caudharī : 5]

(13) の ‘ rahnā ’「いる」とこの後続動詞を複合すると、「(そこに) いるに至る」から、「(後に) 残る，取り残される」という意味になる。(14) は、‘ khānā ’「食べる」と複合しているものだが、「食べるに至った」から、「食べてしまった」というニュアンスを生むことになる。日本語の「しまった」に実によく似ているが、この (14) の場合、二義的に「過ちでそうするに至った」という意味合いを含むことになるのである。[6]

(15) jab dāmv par lagāne ke lie kuch bhī nahīṃ rah gayā,
関係詞 担保 に 付ける－不定 の ため 少し も 否定辞 いる－語幹 行く－過去
to Śakuni Yudhiṣṭhir ko utsāhit kartā huā bolā-....
小詞 シャクニ ユディシュティラ を 奮起した する－未完了 コピュラ－完了 話す－過去
「賭けるものが何もかもなくなると、シャクニはユディシュティラを元気付けて (こう) 言いました。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 59]

(15) は、上の (13) と同じ ‘ rahnā ’ と複合した例であるが、‘ rah gayā ’ の前に否定辞がきて、命題自体を否定している。V.R.Jagannāthan (1981) は、彩飾動詞に否定文は存在しないと述べている。つまり、これは、これまでみてきた彩飾動詞としての ‘ jānā ’ と同じ複合形式ではあっても ‘ rah jānā ’ の場合、彩飾動詞ではなく、語彙としては日本語の「取り残される」のように、半ば一体化したものと考えられる。ところが、語彙からすれば一体化しているようにみえるこの複合形式の間に、否定辞が割って入る例もある。以下にその例文を挙げる。

---

[6] 他動詞に付く場合、この二義的な過ちでというニュアンスが出やすいようである。日本語の「食べてしまった」も、ただ行為が終わった場合と、過ちでやってしまった場合の二通りに使用される。

(16) koī cīz rah to nahīṃ gaī?
何か 物 いる－語幹 小詞 否定辞 行く－過去

「何か忘れ物はありませんか。」

［エクスプレス・ヒンディー：105］

「取り残される」を意訳したのが「忘れ物はあるか」である。ここで使用されている小詞‘ to ’は、日本語の「は」によく似た話題提示のマーカーである。日本語の「取り残される」を例にして否定辞と話題提示マーカーの「は」を入れてみると、「何も取り残されてはいない。」になる。「*取りは残されない」という具合に、複合形式自体に割り込むことはできない。日本語のこの複合形式は、一語化してしまっているのだが、ヒンディー語の‘ rah jānā ’は、さほど一語化していないのである。この文も、「何か物が残るには至っていない。」という具合に、彩飾動詞として働いていると考えるのが妥当である。

また、ヒンディー語には、自動詞とされる‘ milnā ’「得られる，手に入る，会う」という動詞がある。この動詞は、「会う」の意味の場合、平叙文の統語構造を取る場合と、動作主を与格標示する与格構文の場合によって使い分けがある。前者は意図的に「(約束して) 会う」ことになり、後者は「(偶然に) 出会う」の方になる。しかし、前者の場合はかなり特殊な使用で、基盤になっているのは与格構文の「得られる，手に入る」の方である。ものだけでなく人が得られる場合にも使用され、これが日本語の「会う」の意になるだけである。この動詞も、ヒンディー語では使用率の高い動詞であるが、この動詞も‘ jānā ’と複合する形式を持つ。

(17) us se Duryodhan ke apmān kā badlā to mil hī jaegā,
それ から ドローパディー の 侮蔑 の 代償 小詞 手に入る－語幹 小詞 行く－未来
Dropadī ko sabak bhī mil jāegā.
ドローパディー に 教訓 も 手に入る－語幹 行く－未来

「それにより、ドローパディーの侮辱に仕返しをすることになるし、ドローパディーにもよい教訓になろう。」

［Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 55］

(17) は二文に分かれている。命題の部分を文字通り訳せば「我々には侮辱の仕返しも得られるし、ドローパディーには教訓も得られる。」となっている。複合形式の部分に注目すると、それぞれの文中で ‘ mil jānā ’ の複合形式が使用されている。前者には複合形式内に強調を置く小詞 ‘ hī ’ が割り込んでいる。この ‘ hī ’ は、直前の動詞語幹を強調するものになるので、「手に入るにはもちろん至る」となる。後者についてもやはり「手に入るに至る」と解釈できる。この「至る」に当たる部分を日本語に表現するのは大変難しい。日本語の動詞の中でおおよそ等価値のものである「しまう」も、この場合、日本語の「手に入ってしまう」にすると、「意図していないことになる」のような二義的な意が発生するので適当ではない。したがって、無理に訳に反映する必要はないのである。

しかし、たとえ日本語にできないとしても、演算子が存在していることは理解しておく必要がある。先のV.R.Jagannāthanによる指摘では、彩飾動詞を複合したものに否定文は存在しないということと関連してくるからである。

以下の対話は、B がある本を探しているという前提を A が知っているという前提で行われた対話である。

(18) A : tumheṃ　　mil　　gaī?
君に　手に入る一語幹　行く一過去
「見つかったのか。」

B : nahīṃ　　milī.
否定辞　手に入る一過去
「いいえ、見つからなかった。」

氏が指摘するように、A の文では彩飾動詞 ‘ jānā ’ を複合している。「手に入るに至ったか」というニュアンスなので、当然、「本を探している」という命題は、A と B の間で既知であるのが分かる。そして、その答えとして B が述べる否定文には ‘ jānā ’ みられない。それは、文の中枢的な命題「手に入る」か否かが焦点になっているからである。日本語でも、「浩司、宿題、してしまったの。」と母親に聞かれて、「いや、してない。」と答えるのが普通である。これは、「宿題をした」か否かに話題があるからである。彩飾動詞を複合した形式を否定する「してしまわなかった」もあり得るが、「おまえ、宿題は昨日のうちにしてしまったはずじゃないの。」に対してならば、「いや、しなかった／（結局、昨日のうちには）してしまわなかった。」と答えることができる。応答のうち、前者は「宿

題をした」という中枢の単純命題に対する否定であり、後者は「宿題をしてしまった」という「しまった」をも含めた複合命題に対する否定である。この後者の複合形式は、「昨日のうちにはしてしまわなかった。」のように、行為が終わること全体が話題の焦点になって初めて、否定に使用されるのである。ヒンディー語の彩飾動詞の使用も、オプションの演算子としての使用である以上、原理的にはこれと同じと考えられ、この場合は、「あの本、手に入るに至ったか。」のように聞かれていると考えれば、中枢の命題のみを否定した「いいえ、手に入らなかった。」と答えても不思議ではないはずである。[7]

ところで、平叙文の段階で命題の部分に付け足す演算子として後続動詞を加えたものが、別の文構造に埋め込まれると、動詞の複合形式が3項に至る。以下の例文では、動詞が3項続いているのが観察される。

(19) is baṛe pāip meṃ chip jānā cāhie.
この 大きい パイプ に 隠れる－語幹 行く－不定 欲する－命令
「この大きなパイプに隠れてしまおう。」
[Cācā Caudharī 7 : 17]

この例文では、‘ chip jānā ’「隠れてしまう」までが命題となり、大枠の与格構文の主語として組み込まれている。したがって、結果的に動詞が3項連続しているのである。

以下の文も、平叙文であり、動詞が3項連続する例である。

(20) islie use jaldī hī kabristān le jāyā gayā.
だから 彼（与） 早さ 小詞 墓地 取る－語幹 行く－完了 行く－過去
「だから、彼はすぐに墓地へ連れていかれた。」
[Kahāvatoṃ kī kahāniyāṁ : 46]

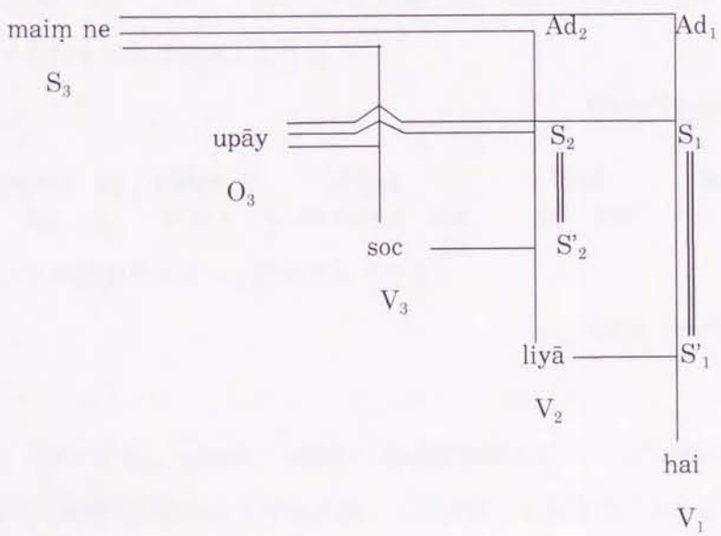
---

[7] 上述の氏は、従属節に現われる否定辞付きのこの複合形式を、否定の意を持つものではないと述べている。これは、中枢的な命題である「する vs. しない」に関わる否定ではないということで、漠然化した意味を持つ彩飾動詞の方を否定しているものと推察される（例：‘ kahīṃ ve log ā na jāeṁ. ’, ‘ agar maiṃ do din meṃ yah kām pūrā na kar lūṁ to... ’）

これは、命題の部分が ‘ le jāyā ’「連れて（取って）いった」までで、それに彩飾動詞が演算子として付加されている例である。命題の部分で文を終える場合は ‘ le gayā ’ のように定形になるが、彩飾動詞が付加されているので非定形である完了分詞 ‘ jāyā ’ になっている。

次は、彩飾動詞 ‘ lenā ’「取る」の例を挙げる。これも、‘ jānā ’ 同様、行為に至ることを表わす動詞で、他動詞に付くことが多い。これは、次に挙げる ‘ denā ’「与える」と対を成すものである。行為に至るというニュアンスを加える点では、‘ jānā ’ も ‘ lenā ’ も同じであるが、‘ lenā ’ は、「取る」という行為から、その行為の方向性が自分に及ぶものになったり、自らが進んでやるというニュアンスをも付け加えることになる。

(21) maiṃ ne upāy soc liyā hai mahārāj !
私 能格 方法 考える－語幹 取る－完了 コピュラー現在 王様
「私は方法を考えついております、王様。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 55]



第一層が、命題「私が方法を考える」を形成し、それが第二層の動詞 ‘ lenā ’「取る」の目的語となる。第二層からみれば、目的語になるのは ‘ upāy ’「方法」のみである。

S 表示しているのは、この外枠が能格構文になっているからである。「私が方法を考えることを取る」となっているが、もちろん、具体的に「取る」という意味を持つものではない。ここでは、「取る」という行為の背景にある、主体的かつ自発的に行動するニュアンスが付け加わったものになるのである。その意を汲んで、「考えついた」という表現もできるであろう。第一層は、第二層の命題全体が、コピュラ動詞により現在存在していることを表わしている部分である。

(22) Śakuni ne pāsā pheṃk kar use jīt liyā.
シャクニ 能格 サイコロ 投げる－語幹 接続分詞 それを 勝つ－語幹 取る－過去
「シャクニはサイコロを投げて、それを勝ち取った。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 59]

(22) については、ヒンディー語の彩飾動詞 ‘ lenā ’「取る」に当たる日本語の動詞「取る」をそのまま訳に適応し、「勝ち取る」(戦って自分のものとする意。[広辞苑第四版]) と言うことができる。

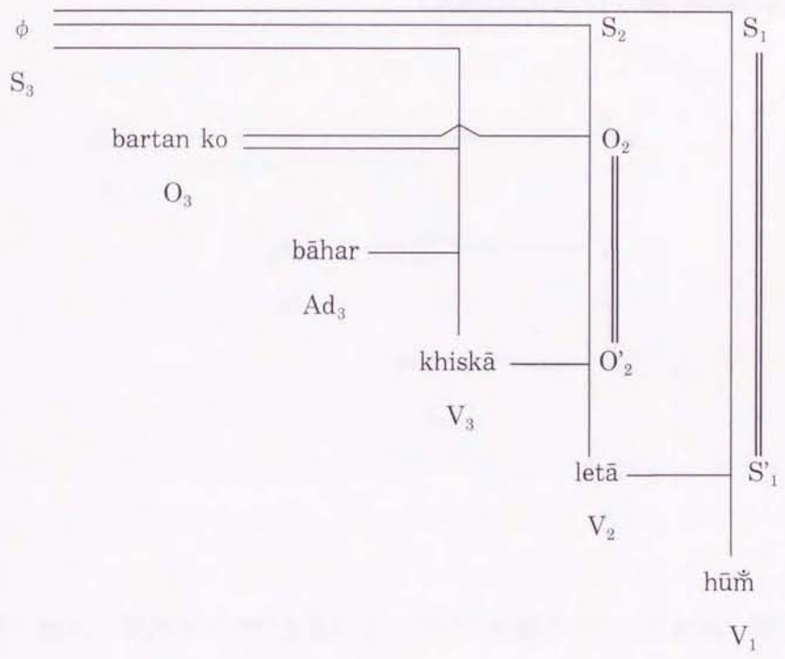
(23) tab tak maiṃ snān kar letī hūṁ.
その時 まで 私 沐浴 する－語幹 取る－未完了 コピュラ－現在
「それまで私は沐浴しよう。」
[Cācā Caudharī 7 : 44]

(24) bartan ko bāhar khiskā letā hūṁ.
食器 を 外（に） こっそり持ち出す－語幹 取る－未完了 コピュラ－現在
「この器を外にそっと持ち出してやる。」
[Cācā Caudharī 7 : 45]

(23), (24) にも、‘ lenā ’「取る」が彩飾動詞としてとして付いている。先の構造図の要領で、命題を「取る」と考えるが、ここでは、それを当てるわけにはいかない。日本語の後続動詞としての「取る」は、まだその行為自体を指すもので、(22) のような、

実際に物を取るという場合以外には、ほとんど使用されないからである。[8] (23) の前提を説明すると、対話の相手である大男に食事前に川に沐浴しに行かせている。あちらは川に沐浴しに行ったので、その間、こちらも「(自分も家で) 沐浴することを取る」ということになる。状況を加味すると、日本語では「それまで、沐浴できるわね／しようかしらね」となる。(24) は、(23) の後に出てくる文で、奥さんが沐浴しに行ったのを見計らって先にそれを盗み食いしようという大男の発話である。体が家の中に入らないので外に取り出そうとするくだりであるが、この場合は、「取る」という行為自体の意味に近いので感覚としては理解し易い。

なお、(23), (24) 共に未来の事象を指しているが、第 2 章の単文で観察済みのように、定形動詞の形態は、現在複合形を使用している。以下に (24) の構造図を挙げておく。



(24) は、(21) のように同じ演算子を使用している文ではあるが、構造図が先のものとは違う。この文には主語がないので、それを補って分析すると、第三層の命題は「俺が器を取り出す」であり、これが第二層の目的語 (O'_2) になる。実際、目的語として具現

[8] 「読み取る」,「見取る」は若干例外的である。前者は、「読んで理解する」の意から、「機械が処理する」のような特殊な意にも使用され、後者は「見て知る」から「看病する」のような意に使用される。

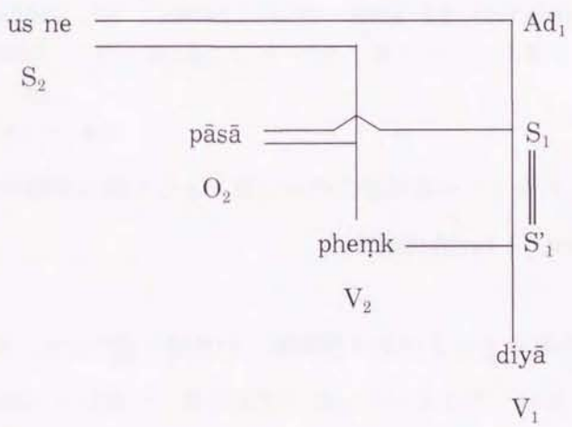
しているのは、O_2 になる。そして、第二層までの命題が、第一層のコピュラ動詞の主語（S'_1）になる。第二層と同様に、実際の主語は φ である S_1 になる。能格構文を第二層に持つ（21）の構造図との違いは、本来の目的語が目的語のままで表示できることである。

次は、‘ denā ’「与える」との複合形式の例を挙げる。先にも述べたが、‘ lenā ’「取る」と対をなす動詞なので、行為に至る点では同じであるが、方向性が‘ denā ’とは逆になり、行為が相手に及ぶというニュアンスを持つ。[9]

(25) us ne pāsā pheṅk diyā.
彼 能格 サイコロ 投げる－語幹 与える－過去

「彼はサイコロを投げた。」

［Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 60］



第二層が、「彼がサイコロを投げる」という命題になり、それが、第一層の「与える」の目的語となる。第一層に現われる目的語は「サイコロ」になるが、能格構文になっているので、S 表示してある。構造図自体は、上に挙げた‘ lenā ’の複合形式の場合と変わらないが、命題を与えるとなるので、方向性が‘ lenā ’とは逆になる。「与える」という動詞は、直接目的語以外に、「～に」という間接目的語を伴うが、表示されていない。

[9] P.E.Hook の用語である、‘ vector verb ’は、漠然とした意味と方向性を同時に表わすという点で、適切な表現であると思われる。

この場合、文脈から察して、行為を受ける相手は賭けの相手、ユディシュティラになる。この種の方向性を持つ日本語の後続動詞は「やる，あげる，くれる」であるが、この文の場合、日本語で「サイコロを投げてやった／あげた／くれた」のように、敢えて行為の方向性を示す必要はない。また、この演算子が完了を表わすものといわれていることを加味して、相手に与えるという方向性を持ちつつ、先にも出てきた「行為に至る」という具合に解釈しても、実際、「サイコロを投げてしまった」のように「しまう」を付加する必要もない。日本語の後続動詞「やる，あげる，くれる」は、まだ、本来の意味合いを強く発揮する動詞であるし、行為の完了を表わす「しまう」では、この場合、「過ちで」というニュアンスを含みかねない。したがって、どちらも適当ではないので、単なる「投げた」で十分なのである。

もちろん、これは演算子としての一例に過ぎないので、もう少し他の例も観察してみたい。

(26) senāpati kā patan pūrī senā kā manobal girā detā
指揮官 の 倒れること すべての 軍 の 士気 落とす－語幹 与える－未完了
hai.
コピュラ－過去

「指揮官が倒れると、軍全体の士気が落ちてしまう。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 56]

(26) は、文字どおり訳せば「指揮官が倒れることが軍全体の士気を落としてしまう」になる。(25) とは違い、物が主語になっているので、行為が及ぶといっても何に向けてか分かりづらい。実際、行為が及ぶとしたら、これを述べている側の軍になると推察される。日本語の「やる，あげる」は、基本的にものが主語の場合には（例：「*空が晴れてやった／あげた。」）使用できない。他の同じ方向性を持つ動詞として、他に「くれる」という動詞があるが、これは、通常、相手（もしくは物）が自分にものを与える時に使用するものである。これを後続動詞として使用すると、「上司が私を助けてくれる」，「子供が買

い物してくれる」,「雨が降ってくれる」[10] という具合に、ベクトル的な方向性もニュアンスもよく似たものになる。

(27) jue meṃ un kā sarvasva jītkar bhikhārī banā dūm̃gā.
賭け で 彼（複）の すべて 勝つ+接続分詞 乞食 作る－語幹 与える－未来
「賭けですべてを手に入れ、文無しにしてやろう。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyām̃ bhāg2 : 56]

(27) は、名詞の述語複合に、さらに彩飾動詞を複合した形式である。相手に行為が及ぶという方向性を考慮すると、日本語では「文無しにしてやろう」もしくは「文無しにしてくれる」が当てられる。ここでの「くれる」は、(26) で述べたのとは若干違う。本来、他人もしくは物が自分に与えるという意味の「くれる」だが、ここから出てくるニュアンスは、A が B に授けるというような、上から下へ向けて与えるベクトルである。その上に当たる A の位置に自分を置くことにより、相手の意向を無視し、一方的な（果ては相手にとって迷惑な）行為を与えるという意味を出す。

(28) agar vah hal calā deṃ to us meṃ gannā, gehūṃ
もし 彼 鍬 動かす－語幹 与える－仮・未来 小詞 その 中に サトウキビ 麦
yā canā bo diyā jaye.
や ヒヨコ豆 植える－語幹 与える－完了 行く－仮・未来
「もし畑を耕してくれたら、そこにサトウキビ、麦、ヒヨコ豆が植えられるのにねぇ。」
[Cācā Caudharī 7 : 46]

(28) は、動詞 ‘ bonā ’「植える」にこの彩飾動詞が付き、さらにこれが受身の ‘ jānā ’（後節を参照）と複合されている例文である。動詞が 3 項連なることになるが、まず、「植える」という命題が、彩飾動詞を付加することで、「植えてしまう」になる。それが受身

[10] これは、しばしば迷惑な意を含むものになるが、それは文脈に左右される二義的な要素である。というのは、動詞「くれる」が、そもそも他が自分に「与える」という意味であり、自分の意思とは無関係であることを同時に示すもので、場合によっては、意思が無視された「ありがた迷惑」の意を生じるだけである。

になっているのだが、日本語では「*植えてしまわれる」とはいい難いので、ここでは、受身を尊重して受身形で訳す方がよい。

(29) rel-gāṛī kitne baje cal degī?
列車 いくら 鳴る－完了 進む－語幹 与える－未来
「列車は何時に出発するのかしら。」

この複合の例は、先行動詞 ‘ calnā ’「進む，歩く」に ‘ denā ’「与える」を複合して、はじめて「出発する」という意味を生む。これは、ある種イディオム化したものとなっており、複合動詞 ‘ compound verb ’ と呼ばれるに相応しい複合形態となっている。ただし、日本語の複合動詞「やり込める」の「込める」ように、生産的に他の動詞に付くことがほとんどない動詞群とは違い、生産的に複合できる動詞を使い、場合によって特殊な意味を表わす類である。これとは、進行方向が逆になったものが以下の例である。

(30) tab Sītā ko praṇām karke Lakṣmaṇ vāpis Ayodhyā
その時 シーター に 挨拶 する－語幹＋接続分詞 ラクシュマナ 戻った アヨーディヤ
lauṭ die
戻る－語幹 与える－過去
「そして、シーターに挨拶し、ラクシュマナはアヨーディヤに戻って行った。」
[Hamāre graṃth : 52]

(30) の例でも、(29) と同様、方向が逆になる先行動詞「戻る」にも、この彩飾動詞が付加される。実質的な進行方向を表わすのが先行動詞側とすると、後続動詞側の「与える」という動詞は、行為が及ぶというニュアンスがさらに漠然化し、「自分が（ある方向へ）向かう」という方向性のみを表わしているものと考えられる。

次は、‘ rahnā ’ を演算子として使用したものである。本動詞としては、「暮らす，残る，いる」等、様々な意味を持つ動詞である。この動詞は、演算子としてコピュラ動詞にも似た存在を表わすものになるが、コピュラ動詞が時間軸の一点での存在を表わすものであるのに対し、こちらは時間的な幅を持った「(ずっと）いる／ある，続く」という意味合いの存在を表わすものになる。語幹にこの後続動詞が付く時、形態は完了分詞＋コピュ

ラ動詞となる。この複合形式は、行為が進行中（いわゆる進行相）の場合に使用され、多分に生産的なものである。

(31) kakṣ meṃ prakāś jagmagā rahā thā.
部屋 に 明かり 燃える－語幹 続く－完了 コピュラー過去
「部屋には明かりが灯っていた。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 57]

(32) aisā lag rahā thā māno.....
このようなこと 感じる－語幹 続く－完了 コピュラー過去 まるで
「まるで・・・のように感じていた。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 57]

意味的な制約がかからない限り、この複合形式はどの動詞とも複合可能である。(31) は平叙文であるが、(32) は与格構文になっている。行為が進行中であることを表わすこの形式は、日本語では『て』形の「－て＋いる」が包括している。ヒンディー語のこの形式にはもう１つ用法があり、はっきりした予定を述べる場合に使用される。

(33) maiṃ agle hafte hiṃdustān jā rahā hūṁ.
私 次の 週 インド 行く－語幹 いる－完了 コピュラー現在
「僕は来週インドに行く予定だ。」

便宜上、「～の予定だ」としたが、文脈により、「僕は来週インドに行く（のだ）／ことになっている。」など、訳し方はさまざまである。動詞の未来形は、未来の事象であっても、「行くつもりだ」という意志を叙述するだけになるのに対し、この形式は、準備も整い、よほどのことがない限り予定が変更されることはない事象に対して使用される。

(34) aise viṣam samay meṃ bhagvān arjun par ruṣṭ nahīṃ
このような 悲惨な 時 に 神 アルジュナ 上に 怒った 否定辞
ho rahe haiṃ, balki haṃs rahe haiṃ....
なる－語幹 いる－完了 コピュラ－現在 逆接詞 笑う－語幹 いる－完了 コピュラ－現在

「このような悲惨な状況で、クリシュナはアルジュナに怒るのではなく、笑っている。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 30]

(34) は２つの文で構成されている。ここでの「神」はクリシュナを指す。前者の文には否定辞が付いている。文字どおり日本語にすると、「怒って（は）いなくて、笑っている」になる。つまり、「怒って」と「笑って」という命題の部分を対比させた例になっている。

次は、後続動詞 ‘ ānā ’「来る」を複合する例である。

(35) ho saktā hai, āp kā sab lauṭ āye.
なる－語幹 できる－未完了 コピュラ－現在 あなた の すべて 戻る－語幹 来る－仮・未来

「あなたのものすべてが戻ってくるかもしれませんよ。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 60]

これは、日本語の「帰って来る，戻って来る」にみられる「来る」と同じ表現である。他の例もみてみよう。

(36) ab dūsrā ḍibbā tāūjī ko de āūṁ.
今 別の 箱 伯父さん に 与える－語幹 来る－仮・未来

「さあ、もう１つの箱を伯父さんに届けてくるか。」

[Cācā Caudharī 7 : 53]

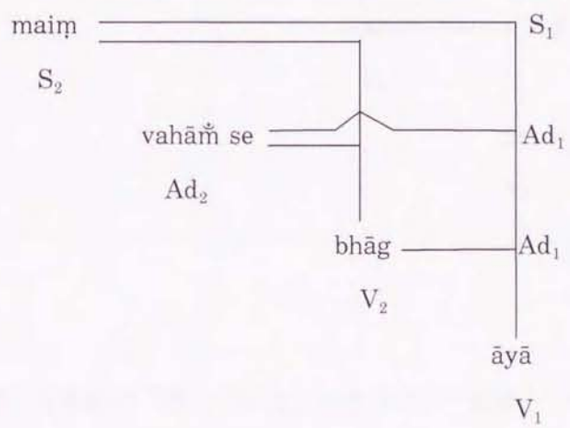
(37) maiṃ vahāṁ se bhāg āyā.
私 そこ から 逃げる－語幹 来る－過去

「私はそこから逃げてきた。」

(38) maiṃ pustak ghar bhūl āyā hūm̃.
私 本 家 忘れる－語幹 来る－完了 コピュラー現在
「僕、本を家に忘れてきた。」

[Hindī prayog : 111]

(36), (37), (38) もすべて、「届けてくる」,「逃げてくる」,「忘れてくる」という具合に日本語の「くる」と置き替えることができる。日本語の「くる」は、動詞の形態が完了分詞に当たる『て』形にしか付かない。この『て』形と「くる」の複合は、「(ずっと)してきた」のような状態を表わす場合と、「して（から）きた」のような文と文を接続した場合の両方がある。ヒンディー語には、後者を表わす場合、後節で考察する、語幹に接続分詞 ' -kar ' を付加し、後続動詞を続ける形式がある。ここで観察している複合形は、この接続分詞 ' -kar ' を省略した形であるというのが定説になっている。以下に、(35)を構造図化して、考察してみる。



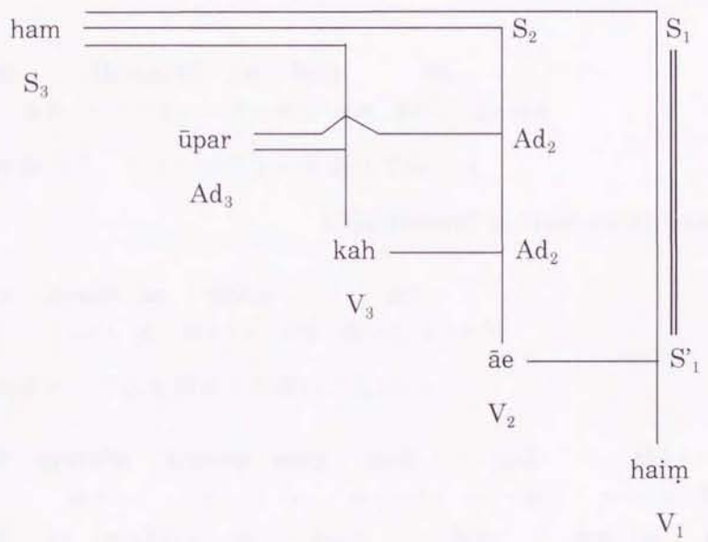
この複合形式を、語幹に接続分詞 ' -kar ' を付けないで ' ānā ' と接続した結果であると考えたとしても、意味が状態を表わすか、行為の時制が前後するかの違いで、文の要素としては、副詞的修飾句には変わりない。この文は、これまでの彩飾動詞にみられた、下層の命題全体が主語（S）や目的語（O）になってきた構造とは少し違い、第二層の「私がそこから逃げる」という命題は、第一層の「私がそこから来た」という命題上では、副詞的修飾句（Ad）になっている。日本語では、語幹と複合して「*逃げきた」とはいわな

いが、ほぼ同様の意味で「逃げ帰った」という表現ができる。この語幹の「逃げ帰る」の場合は、『て』形を使用した「逃げて帰る」も成り立つ。２つを見比べた時、「逃げ帰る」の方が、語彙的に一体化しているようにみえる。

また、この他にも本来の「来る」とは若干違ったニュアンスを持つ例がある。構造図を挙げてこれを観察してみよう。

(39) ham ūpar kah āe haiṃ ki ...
私たち 上に 言う－語幹 来る－完了 コピュラ－現在 同格詞
「筆者が・・・・と上で述べてきた。」

[Hindī prayog:106]



この例は、日本語の「述べてきた」のように、‘ ānā ’「くる」を使用したものである。物理的な移動を伴う「くる」とは違い、少々意味が離れてしまっているが、「くる」の持つ方向性は表わしている。

もう１つ、漠然化してはいないが、この動詞と‘ honā ’「いる」を複合した、‘ ho ānā ’という複合形式がある。これは、「行ってくる」という意味に使用される、半ば一語化した複合形式である。以下に例を挙げておく。

(40) tum donoṃ vahāṁ ho āo
君 二人とも そこ いる－語幹 来る－命令
「おまえたち二人でそこに行って来い。」

「そこに存在して（戻って）来い」ということから、これは、日本語の「行って来る」に当たる表現になる。この意味に対し、日本語通り ‘ jānā ’「行く」を複合した ‘ *jā ānā ’ もしくは接続分詞を付けた ‘ *jā kar ānā ’ を使用することはない。

次は、‘ lānā ’「持ってくる」である。この動詞自体、‘ lenā ’「取る」の語幹と ‘ ānā ’「来る」が融合して新たな動詞を形成したものである。

(41) jā Draupadī ko bulā lā.
行く－命令 ドローパディー を 呼ぶ－語幹 連れてくる－命令
「さあ行け、ドローパディーを連れて来い。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 60]

(42) tum donoṃ ko pakaṛ lāo.
君 二人とも を 捕まえる－語幹 連れてくる－命令
「おまえ、二人を捕まえて連れてこい。」

(43) vah pratidin khetoṃ meṃ calā jātā thā aur
彼 毎日 畑 に 歩く－完了 行く－未完了 コピュラー過去 そして
anāj ke paudhoṃ se jhaṛe hue ann ko bīn
穀物 の 草木（複） から 落ちる－完了 コピュラー完了 穀物 を 拾う－語幹
lātā thā.
連れてくる－未完了 コピュラー過去
「彼は毎日畑に行き、穀物の木から落ちた実を拾って持ってきていた。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 37]

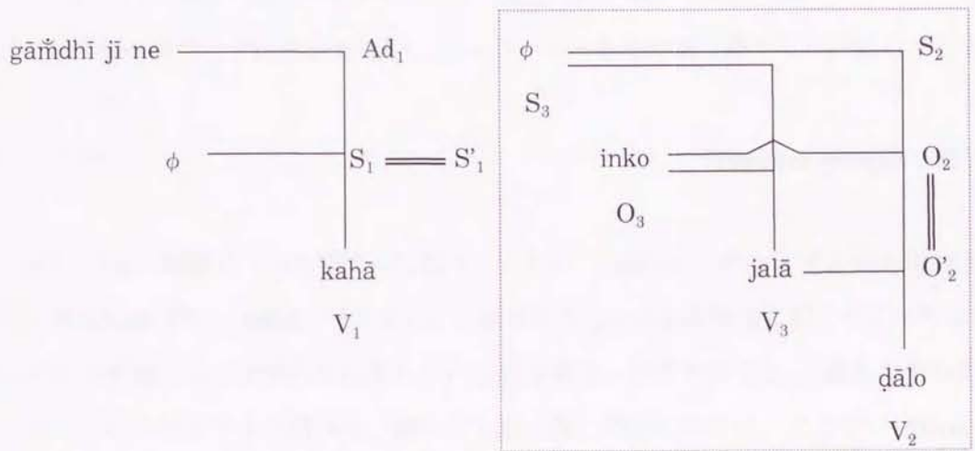
(41), (42), (43) は、順に「呼んで連れて来い。」,「捕まえて（連れて）来い。」,「拾って持って来る。」となり、後続動詞における意味の漠然化は起こってない。先の ‘ ānā ’ 同様、このような場合、ヒンディー語では、通常、接続分詞 ‘ -kar ’ が先行動詞に付く

が、後続動詞がこの ‘ lānā ’ の時は比較的付かないことが多い。

次は、‘ ḍālnā ’「入れる」である。先に挙げた、他動詞と複合して行為に至ることを示す ‘ lenā ’「取る」, ‘ denā ’「与える」と同じ演算子であるが、付加するニュアンスが変わってくる。この動詞が複合形式になる場合、行為自体をあらわす具体的な意味は漠然化し、物を投げ入れたり、注ぎ入れたりする様から、核となる命題に、一気にことをしてしまうのようなニュアンスを付加する。

(44) gāṁdhī jī ne kahā -- inko jalā ḍālo.
ガンディー 敬称 能格 言う一過去 これらを 燃やす一語幹 注ぐ一命令
「ガンディーは『これらを燃やしてしまえ』と言った。」

[Mohan se Mahātmā 2 : 20]



この例は同格節を伴った複文になっており、複合形式が使われているのは、同格節内のガンディーが言ったセリフの部分である。第一層は「彼が言った」の部分になり、問題のセリフの部分が、‘ lenā ’「取る」, ‘ denā ’「与える」のように、命題を複合した二重構造になっている。したがって、「命題を入れる」となるが、これまでの彩飾動詞と同じで、本来の「入れる」という意味ではない。ニュアンスを考えた時、日本語に当たるものとして、「(入れ) こむ」, 「(入れ) 込める」, 「尽くす」がある。

訳には「しまう」を使用したが、これは他の文脈との絡みでそうしたまでで、この形式だけを考えた場合、「これらを燃やし尽くしてしまえ」というぐらいのニュアンスが含ま

れているのである。

(45) Lakṣman bhayyā ne merā dhanuṣ toṛ ḍālā....
ラクシュマナ 親称 能格 私の 弓 壊す一語幹 入れる一過去
「ラクシュマナが僕の弓を壊してしまった。」
[Rāmāyaṇ : 20]

(46) ab isī vijay ke uplakṣy meṃ ek aur kām kar ḍālie.
今 この（強調） 勝利 の 記 に 1 もう 仕事 する一語幹 入れる一過去
「さあ、この勝利を機にもう1つやってしまいましょう。」
[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 57]

(47) tab śrīrām ne agni bāṇ kā prayog karke śubāhū
その時 ラーマ 能格 火 矢 の 使用 する一未完了＋接続分詞 シュバーフー
ko vahī jalākar rākh kar ḍālā.
を そこ（強調） 燃やす一語幹＋接続分詞 灰 する一語幹 入れる一過去
「その時ラーマは火矢を使い、シュバーフーをその場で燃やして灰にしてしまった。」
[Hamāre graṃth : 31]

(45) では、命題が「弓を壊す」になり、それに ‘ ḍālnā ’ のニュアンスが加わっている。先にも挙げた ‘ denā ’「与える」と複合することもある例文だが、そこはやはり、ニュアンスが違うことを明らかに示しているのである。前者を使うと、「壊してやった／くれた」というベクトルを持った「壊してしまった」の意になるが、ここで ‘ ḍālnā ’ を使うことにより、「(めちゃくちゃに) 打ち壊す」になるのである。(46) は、敵方の王族の王子ドゥルヨーダナが、ライバルの王族の王ユディシュティラを言葉たくみに賭博に誘うくだりだが、「(即位式も無事に終えたことだし) 勝利を記して、ついでにもう1つやってしまいましょう。」という文脈である。勢いに乗じて一気にやり尽くすというニュアンスを付け加えるのは、ごく自然な処理であるのは言うまでもない。(47) も「火矢を使って鬼を灰にし（尽くし）てしまう。」となる。

もう1つ、この ‘ ḍālnā ’ を複合した例文を挙げる。

(48) pulis ne us daridr puruṣ ko mār ḍālā.
警察 能格 あの 貧しい 男 を 叩く－語幹 入れる－過去
「警察があの貧しい男を殺した。」

先の節でも触れたが、先行動詞として ‘ mārnā ’「打つ，殴る」が複合されると、「殺す」という特殊な意味になる。これも、本来は ‘ ḍālnā ’ という演算子を加え、「(死ぬまで) 打ちのめす」としておいて、「殺す」に意味転化を起こしたものと考えられる。[11]

次は、‘ uṭhnā ’「起きる」の複合例である。

(49) videśī khilāṛī xuśī se nāc uṭhe.
外国の 選手 喜び よって 踊る－語幹 起き上がる－過去
「外国の選手たちは、喜びで躍り上がった。」
[Cācā Caudharī 7 : 73]

(50) dādājī kī tasvīr ke pās rakhī mombattī apne āp jal uṭhī.
おじい様 の 写真 の そば 置く－完了 ろうそく 自動的に 燃える－語幹 起き上がる－過去
「おじい様の写真のそばに置いてあるろうそくが、勝手に燃え出した。」
[Cācā Caudharī 7 : 33]

(49) は、日本語と同様、「躍り上がった」に当たる表現である。(50) は、日本語の「燃え＋あがる」によく似た表現ではあるが、日本語の場合の「上がる」は、ことが激しくなる意かことが済む意に使用される。したがって、パッと火が点いたという場合には使用しない。一方、ヒンディー語では ‘ uṭhnā ’「起き上がる」を複合すると、上向きのベクトルが生じ、「突然その行為が起こる」というニュアンスが生まれるのである。

[11] これとは別に、名詞複合型の ‘ hatyā ’「殺し」と ‘ karnā ’「する」で「殺す」という表現もある。

次は、‘ uṭhnā ’「起き上がる」の反義語である ‘ baiṭhnā ’「座る」を演算子に使用した例である。

(51) becāre dimāgī saṃtulan kho baiṭhe.
かわいそうに 頭の 均衡 失う－語幹 座る－過去
「かわいそうに、頭の均衡を失ってしまった。」
[Cācā Caudharī 7 : 35]

(52) .... maiṃ apne prāṇoṃ se hāth dho baiṭhtī.
私 自分の 命（複） で 手 洗う－語幹 座る－仮・現在
「私は、死んでしまうところだったわ。」
[Bāl bhāratī bhāg 2 : 15]

(51) の「頭の均衡を失った」は、すなわち「頭がおかしくなった」ということである。 (52) の「命で手を洗う」は、日本語の「命を落とす」のような比喩表現で、「死ぬ」ことを意味する。上の ‘ uṭhnā ’ とこの ‘ baiṭhnā ’ は、共に突然性を表わすが、反義語の ‘ baiṭhnā ’ を複合すると、ベクトルが↑から↓へと逆になり、「突然その行為に陥る」というニュアンスを生むことになるのである。したがって、これは、日本語の「しまう」や、「しでかす」のような、よくない行為，体裁の悪いことをするに至った場合に使用される。

次は、‘ paṛnā ’「生じる」を複合した例を挙げる。

(53) pitājī ro paṛe, par kahā kuch nahīṃ.
父＋尊称 泣く－語幹 生じる－過去 しかし 言う－過去 少し 否定辞
「お父さんはひどく泣き出しましたが、何も言いませんでした。」
[Mohan se Mahātmā 1 : 19]

(54) sab bol paṛe – gāṁdhī jī kī jay....
皆 話す－語幹 生じる－過去 ガーンディー 尊称 の 勝利
「皆が叫び出した。『ガンディー万歳！…』」
[Mohan se Mahātmā 2 : 23]

(53), (54) に使用されている ‘ paṛnā ’「生じる」も、突然性のニュアンスを持つものになっている。(54) で使用している先行動詞 ‘ bolnā ’「話す，口にする」には、先に挙げた ‘ uṭhnā ’「起き上がる」が複合される場合もある。(章末の表を参照。) したがって、これは「突然行為が起こる」とほぼ同様の「突然行為が生じる」の意味を持つ。これらのニュアンスの違いを述べるには、言葉を尽くしても周縁的な説明に終わるだけである。例えば、日本語の「書き出す」,「書き始める」の「出す」と「始める」は、同じ開始を表わすものであるが、違いというほどの違いはほとんどないはずで、発話者の任意で選択可能である。それと同じことで、形式が二通り以上存在し、ベクトルやニュアンスの差がない場合は、どちらを使用しても構わない。

この他に、この動詞を複合する一語化したものとして、‘ cal paṛnā ’ で「出発する」という意味を創出する。同じ意味を持つものとして (29) の ‘ cal denā ’ の複合形もある。

次は、‘ rakhnā ’「置く」を複合する例を挙げる。

(55) ham ne unse kah rakhā hai.
私たち 能格 あの方に 言う一語幹 置く一完了 コピュラー現在
「私はあの方に言っておいた。」

[Prayog aur prayog : 268]

(56) maiṃ tumhāre lie ek acchī gāṛī dekh rakhūm̃gā.
私 君の ため 1 よい 車 見る一語幹 置く一未来
「君のためにいい車を一台見ておこう。」

[Prayog aur prayog : 268-269]

日本語の「おく」という動詞は、状態を表わす場合に使用される。V.R.Jagannāthan (1981) は、ヒンディー語のこの複合形式は他動詞専用のものであり、自動詞に対しては同じ状態を表わすものとして、完了分詞とコピュラ動詞を組み合わせた副詞的修飾句を

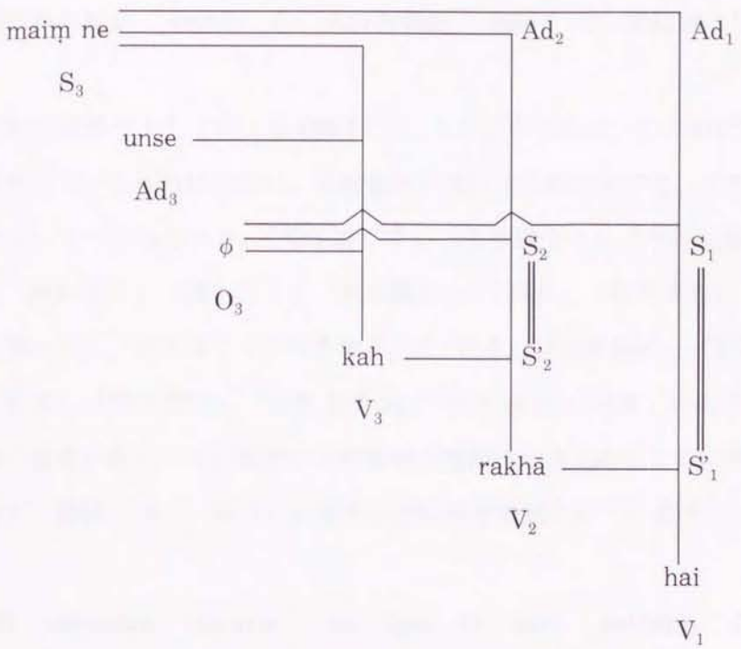
述語にしたものを使用すると述べている。[12] 日本語の「おく」には、そのような区別はなく「走っておく」,「立っておく」,「言っておく」,「見ておく」,「放っておく」のように、自動詞・他動詞には関係なく使用される。現代の日本語では、「おく」は『て』形と組み合わせることが多いが、中には、「言いおく」,「見おく」,「捨ておく」[広辞苑：第四版]のように、連用形と複合するものもある。これらは一語化しており、どんな動詞にでも付くというものではない。

また、状態表現ということに言及すれば、日本語も完了分詞とコピュラ動詞に相当する『て』形と「ある／いる」動詞の複合によって表わすことができる。例としては、「走ってある／いる」「見てある」,「言ってある」のような、完了分詞に相当するを組み合わせたものであり、自動詞・他動詞の区別はない。

したがって、(55) の「言っておいた」は、「言ってある」と言い換えることができる。しかし、これはコピュラ動詞の方の意味を反映した形になる。また、先に挙げた「言いおく」という半ば一語化した複合形式も存在するので、「言いおいてある」とすれば、形態上も一致する。(ヒンディー語のこの ' rakhnā ' と語幹との形式は、ほぼ一語化したものに限られるのではないか。)

日本語では、論理的には可能なはずの、連用形複合の「言いおいてある」や『て』形複合の「言っておいてある」のような動詞が３つ連続する言い方はあまりせず、「言いおいた」にするか「言っておいた」にする傾向にある。この (55) を構造図にすると、次のようになる。

[12] 氏は 1981 年の時点で、他動詞でも完了状態を表わす場合、' kiyā huā hai ' のように完了分詞とコピュラ動詞をデリー周辺で使用されていることを指摘している。氏は、この形式では別の時制 (例：「しておいた／しておこう」 vs. 「してある／??してあろう」) が作れないことから、他動詞に対するこの形式の使用を認めていない。しかし、今では普通に使用される形式である。この形式には、自動詞・他動詞に関係なく、完了状態を表わすものという機能を負わせてしまっているだけである。



第三層は、基本命題「私があの方に言う」になる。本来、これは他動詞文であるが、ここでは目的語が表示されていないため、便宜上、ϕの目的語を立てておく。この第三層の命題全体が第二層において、V_2 の目的語になる。ただし、第二層は能格構文なので、目的語であっても S_2 表示になる。第二層は、論理的に「命題を置く」ということになり、その命題の状況あるいは状態を整えることを指すものになる。第一層は、第二層の命題（S'_1）が、コピュラ動詞により存在することを示すものである。ここでも、実際の V_1 と性・数一致する主語は、第三層の O_3 でありかつ第二層の S_2 でもある S_1 である。

次は、‘ calnā ’「進む，歩く」である。

(57) calo, bhāg caleṃ.
進む一命令 逃げる一語幹 進む一仮・未来
「さあ、逃げよう。」

‘ calnā ’ は、本来の意味においては ‘ jānā ’「行く」と同じベクトルを持つものであるが、命令や勧誘に使用されると、‘ calnā ’ は、「行く」の主語と発話者が共に「行

く」ということになり、‘ jānā ’は、主語だけが「行く」ことになる。なお、(57) の文頭にみられる‘ calnā ’の二人称複数形‘ calo ’は、感動詞としての使用法である。

語幹に演算子として付く後続動詞は以上のようである。この他に、V.R.Jagannāthan が提唱している区分けに従い、彩飾動詞が先行する例を挙げる。このタイプの例は、日本語でもいくつかみられる。「やり過ごす」,「やり損なう」,「やって来る」の「やる／やって」、「流れ歩く」,「流れ行く」,「流れ渡る」の「流れ」、「戻り来る」,「戻って来る」の「戻り／戻って」、「行き着く」,「行き渡る」の「行き」、「引き戻す」,「引き合う」,「引き込む」の「引き」、「突き進む」,「突き上げる」,「突き通す」「突き」のように、後続動詞の方に本来の意味があり、先行動詞の方の意味が漠然化したものをここに挙げる。

まず、語幹‘ ā ’「来る」に関する逆転複合の例を以下に挙げる。

(58) saṃtulan bigaṛne se ūpar kī sārī peṭiyāṃ dhaṛādhaṛ nīce
均衡 崩れる－不定 よって 上 の すべての 箱（複） ガラガラ 下に
ā girīṃ.
来る－語幹 落ちる－過去

「均衡が崩れたので、上の箱が全部ガラガラと落ちてきた。」

[Cācā Caudharī 7 : 89]

(59) .... ek din Mārīc aur Subāhū nāmak rākṣas ā dhamke.
1 日 マーリーチ と スバーフー 名前の 鬼 来る－語幹 音を立てる－過去

「ある日、マーリーチとスバーフーという名の鬼が、足音立ててやってきた。」

[Hamāre graṃth : 31]

(60) pitā ke lauṭne meṃ der huī jānkar Ram vahāṁ
父 の 帰る－不定 に 遅延 生じる－完了 知る－語幹＋接続分詞 ラーマ そこ
ā pahuṁce.
来る－語幹 着く－過去

「父の帰りが遅いのを知り、ラーマはそこにやってきた。」

[Hamāre graṃth : 35]

(61) .... aur Sugrīv kī senā pūrī taiyārī ke sāth samudr kināre
そして スグリーヴ の 軍 すべて 準備 の 供に 海 岸
ā ḍaṭī.
来る－語幹 止まる－過去
「そして、スグリーヴァの軍は、準備万端で、海岸に駐留した。」
[Hamāre graṃth : 46]

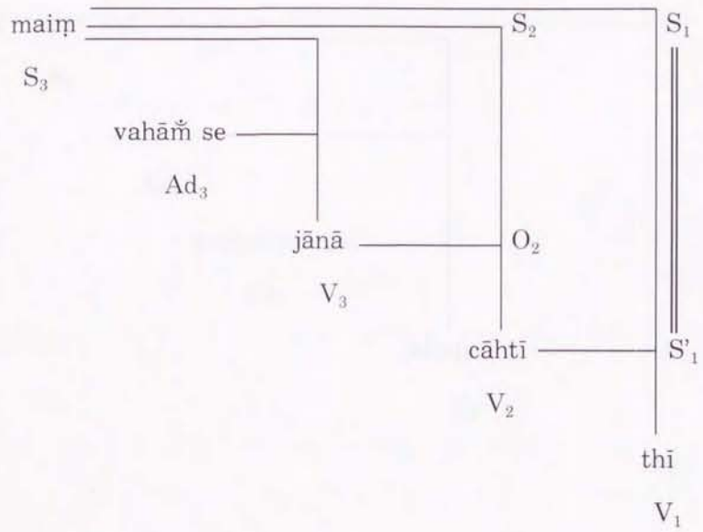
(58) の ‘ girnā ’「落ちる」, (59) の ‘ dhamaknā ’「音を立てる」, (60) の ‘ pahuṁcnā ’「着く」, (61) の ‘ ḍaṭnā ’「止まる」が、逆転の複合形式になるものの例である。先の氏によると、語幹 ‘ jā ’「行く」も先行するようである。この他に、語幹 ‘ cal ’「進む, 歩く」が先行する ‘ cal nikalnā ’「出ていく」の逆転した複合形式がみられる。

7.2.4 不定詞＋本動詞

ヒンディー語のこの組み合わせには、二通りの表現形式がある。動作主が主格となる場合と動作主が与格になる場合である。まずは、平叙文の例を挙げる。

以下に挙げるのは、‘ cāhnā ’「欲する」である。先行動詞の形態は常に男性・単数・直格形である。この場合は、動名詞的に働き、動詞 ‘ cāhnā ’「欲する」の目的語となる。

(62) maiṃ vahāṁ se jānā cāhtī thī.
私 そこ から 行く－不定 欲する－未完了 コピュラー過去
「私は、そこから出たかった。」

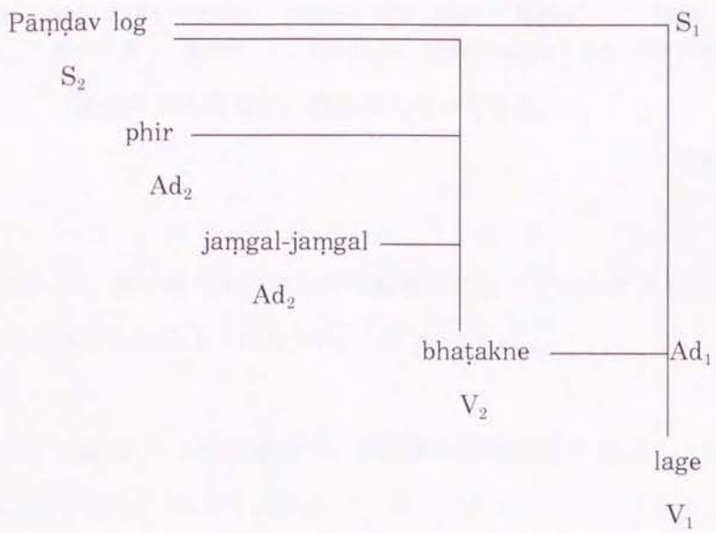


第三層が、命題「私がそこから（出て）行く」になり、その命題が第二層の目的語になる。第一層は第二層の命題（S'_1）が存在していたという部分を表わす。

日本語では「私は彼に来て欲しかった。」という、内層の命題の主語とと外層の命題の主語が違う場合にも、文中に埋め込むことができるが、ヒンディー語の場合、第 4 章でも触れたように、(17) の複文になる。

次は、‘ lagnā ’「付く，感じる」である。先行動詞の形態は常に斜格形となる。これは、開始を表わす複合形式である。

(63) Pāṃḍav log phir jaṃgal-jaṃgal bhaṭakne lage.
パーンダヴァ 人々 また 森（という）森 さまよう－不定（斜） 付く－過去
「パーンダヴァたちは再び森中をさまようことになった。」
[Hamāre graṃth : 57]



(63) は、構造図を同時に挙げた。第二層は「パーンダヴァたちが再び森中をさまよう」という命題になる。第一層の動詞 ' lagnā ' に付く V_2 の形態は、斜格形になるのが常である。第一層上では、副詞的修飾句の働きをしているものと考えられる。以下に、' lagnā ' が主動詞として使用されている例を挙げる。

(64) un dinoṃ ve yuddh meṃ lage rahe the.
その（複） 日々 あの方 戦争 に 付く－完了 いる－完了 コピュラ－過去
「その頃、王は戦争に明け暮れていた。」

(64) の「戦争に付く」ということは、「戦争に従事する」という意味になる。この場合は、「戦争」という名詞に位置格の ' meṃ ' が付いて、位置関係をはっきりさせている。不定詞の斜格形は、後置詞が付加される場合の後置格形である。演算子としてこの動詞が後続する場合に、先行動詞の形態として（ゼロ格ではあるが）斜格形を要求するのも納得がいく。

したがって、(63) の意味は「さまようことに付く。」すなわち、「森でさまようことに従事する。」になる。これが、意味の上でも開始の意を創出する原理である。

(65) koī āvāz nahīṃ, mujhe bhī ḍar lagne lagā hai.
何の 音 否定辞 私に も 恐怖 感じる－不定 付く－完了 コピュラー現在

「何の物音もしない。俺も怖くなってきた。」

[Cācā Caudharī 7 : 88]

(65) は、第一層である外枠が与格構文になっている例文である。文字通りは、「私には怖さを感じられるようになった。」になっている。

上の ‘ lagnā ’ と同じ原理で、不定詞の斜格形に ‘ jānā ’「行く」を複合する例を挙げる。

(66) vah yah kām karne jā rahā thā ki patnī
彼 この 仕事 する－不定 行く－語幹 いる－完了 コピュラー現在 接続詞 妻

ā gaī.
来る－語幹 行く－過去

「彼がこの仕事をしようとした時、妻がやって来た。」

(66) は、「しに行く」と「しようとする」の両方の意に取れるが、ここでは、後者である。前者のように「行く」という元の意を持つ場合は、不定詞の斜格形に後置詞 ‘ ke lie ’「のため（に）」を付けるか、もしくはゼロ格の斜格形を使用する。したがって、統語上も、先の ‘ lagnā ’ ヒンディー語の方は、「行く」の意味が漠然化し、時間軸における方向性を表わしているだけである。[13]

なお、この漠然化した意味での使用は、前節に挙げた進行を表わす複合形の語幹に ‘ jānā ’ が使用された形式のみで、全時制において汎用的なものではない。

次は、‘ denā ’「与える」である。上の ‘ lagnā ’ と同様、先行動詞の形態は常に斜格形となる。

---

[13] 英語の ‘ be going to infinitive ’ によく似た複合形式であるが、英語には、不定詞の斜格形はない。

(67) usne mujhe bolne na diyā.
私＋能格 私に 行く－不定（斜） 否定辞 与える－過去

「彼は私に話させてくれなかった。」

[Hindī vyākaraṇ : 314]

(68) bhīṣm pitāmah ke nikaṭ śikhaṃḍī ko mat āne do.
ビーシュマ 父（尊称） の 近く シカンディー を 否定辞 来る－不定詞 与える－過去

「ビーシュマ将軍にシカンディーを近づけないように。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 17]

不定詞の斜格形に動詞‘ denā ’を複合すると、(67) にみられるように、日本語の「させてくれる」という意味になる。(68) は、文字通りにすると「来させないでくれ」になっている。語幹と複合する形式とは違い、「(他人に) させてやる」「(自分に) させてくれる」のように、日本語では使役の意で使用される。許可を表す統語構造といわれている。

上の‘ denā ’「与える」とは同じような統語構造で、‘ pānā ’「得る」を使用した動詞が、本動詞として使われる。その際、意味が逆になり「させてもらう」になる。

(69) tum yahāṁ se jāne nahīṃ pāoge.
君 ここ から 行く－不定 否定辞 得る－未来

「君はここから退出させてもらえないよ。」

[Prayog aur prayog : 201]

(67), (68), (69) のように、‘ denā ’「与える」, ‘ pānā ’「得る」を不定詞斜格形と組み合わせると、主動詞側に使役性が生じる。語幹との組み合わせも持つこれらの動詞は、日本語の「～てやる／～させてやる」(「～てあげる／～させてあげる」,「～てくれる／～させてくれる」) や「～てもらう／～させてもらう」の構文と対比される。使役性を生むメカニズムについては、次章、使役構文のところで、議論することにする。

次は、‘ cāhnā ’「欲する」の命令形 ‘ cāhi(y)e ’ が不変化詞として使われている例を挙げる。これは与格構文になるものである。「～することを欲しなさい。」、すなわち、「当然なのだから、そうしたいと思いなさい。」となり、転じて「すべきである。」等の義務的な意味を作り出す。

(70) manoranjan kī dṛṣṭi se bhī juā nahīṃ khelnā cāhie.
娯楽 の 観点 から も 賭博 否定辞 遊ぶ－不定 欲する－命令

「娯楽にしても賭博をすべきではない。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg 2 : 61]

R.Snell（1992）によると、ブラジ・バーシャーにおける受身語幹、すなわち語幹と受身接辞 ‘ -iya- ’ に ‘ -i ’ 語尾を付けると、受身の仮定法現在になり、「欲される」（欲されん）になるということであるが、氏は、この受身接辞 ‘ -iya- ’ に ‘ -i ’ 語尾が接続された ‘ -iyai ’ が、現代ヒンディー語の丁寧な命令を表すとされる命令形 ‘ -i(y)e ’ 語尾になっている可能性を示唆している。[14]

現代ヒンディー語の丁寧な命令を表す命令形語尾 ‘ -i(y)e ’ が、語幹に受身接辞を付けた仮定法現在が、一体化して（文法化の過程を経て）命令形の語尾に転化してしまっているのだとしたら、フランス語の二人称 ‘ tu vs. vous’ に対応する命令形 ‘ Aide-moi vs. Aidez-moi ’, ロシア語の二人称 ‘ ты vs. вы ’ に対応する命令形 ‘ ты говори vs. вы говорите ’ のような、人称代名詞と動詞の形態との一致（agreement）を起こす次元ではなく、受身を利用したある種の迂言的命令形を、丁寧という意味の点からほぼ等価値に

[14] これと同様の現象が日本語にも観察される。日本語の「されよ」「書かれよ」「出られよ」にみられるように、「れる／られる」という接辞に「よ」もしくは「い」「ん」の語尾が付き、丁寧な命令を表す現象に酷似している。日本語では、この場合の「れる／られる」は尊敬・自発・受身を表す接辞となっているが、その中の尊敬に関しては、受身が間接的に尊敬に拡張したかもしれないということが（この現象を普遍的な現象であるとしたら）いえるのではないか。

なる二人称代名詞複数形 ‘ āp ’ [15] に対応する形式として充てていることになる。[16]

ところで、この ‘ cāhie ’ は、不変化詞であり、この後ろにコピュラ動詞の過去形を付けることがある。以下の例がそれである。

(71) mujhe vahāṁ jānā cāhie thā.
私に そこ 行く－不定 欲する－命令 コピュラ－過去
「私はそこに行くべきだった。」

この場合は、コピュラの過去形が付くことにより「すべきであった（のにしなかった）」になる。この不変化詞には、(71) のようにコピュラの現在形が使用されることはない。日本語の形容詞のように、この不変化詞そのものが、現在時制をも具現しているのである。また、コピュラについて、直説法の未来形や仮定法の未来形，現在形が、この不変化詞に付くこともあるが、従属節に限られる。[V.R.Jagannāthan (1981) : 145]

---

[15] これは比較的新しい言語形式である。Bolānāth Tivārī (1966) によると、ヒンディー文学のバクティ期文学に、この言語形式が初めて使用されているという。特に、バクティ期文学代表されるカビールの詩においては、神に対する呼びかけとして使用されているということである。日本語の「おまえ，きさま」のように、以前は目上の人に対する尊称であったが、現在では同輩や目下のものに対して使用される（しばしば相手をののしる場合にも使用される）言語形式であるのと同じく、本来の二人称複数 ‘ tum ’ の尊称価値が下落し、新たに尊称として補充されたものと考えられる。また、Aśok Kālrā (1976) によると、この言語形式 ‘ āp ’ も、日本語の「あなた」と同じように、普及しすぎた結果、尊称度が下がってきているという。

[16] インド・ヨーロッパ語族の特徴とされる二人称代名詞の複数形の単数使用は、親密性 (solidarity) を表すもの [Brown & Gilman (1960)] といわれる。そして、その人称代名詞に対応した動詞が法の範囲内で形式的に性・数・格の一致をする。また、同氏の言に従うと、日本語の尊敬語は power に基づくもので、丁寧語はこの solidarity に基づくものとなる。ヒンディー語の場合は、この２つの要素が入り乱れてしまっているようである。直説法の段階で、元の二人称複数形 ‘ tum ’ に尊敬の意味合いが薄れた結果、新たな人称 ‘ āp ’ を設けたことは先にも述べたが、その際に、それまでの二人称複数形 ‘ tum ’ の動詞形態を流用し、意図的に二人称複数形に合わせたものと考えられる。これは、すなわち、この時点で、動詞の二人称複数形自体に尊敬という要素を負わせているわけで、純粋に形態的な人称と動詞の一致とは違う性格を持つようになってきている。それが命令法に顕著に現われている。ここで取り上げた丁寧を表わす命令形語尾 ‘ -i(y)e ’ は、一般的に ‘ āp ’ に一致するものになっているが、本来 ‘ tum ’ に一致する命令語尾 ‘ -o ’ のものと組み合わせた ‘ āp karo ’ が出てくるのも、もはや形態の一致ではなく、それぞれが独立し、尊敬，丁寧等の意味的な一致をするものとなってきているからである。これは日本語で考えた方が分かり易い。例えば、「あなた」に対して「して・ください／ちょうだい」は後者が丁寧語なので意味的なバランスが取れるが、「しろ」という命令形は「あなた」の持つ丁寧さや尊敬の意味とバランスが取れないのでおかしい。この点では、形態の一致をするわけではない日本語と同じである。

ヒンディー語の直説法は、‘ āp ’ が台頭してきた後も、形態の一致を温存しているが、命令法については、形態の一致が起こらなくなっている（もしくは緩やかになっている）のは、このように、丁寧さや尊敬という意味的なバランスを取るようになってきているからと考えられる。

次は、‘ paṛnā ’「生じる」である。先行動詞の意味する事象が自然発生することから転じて、好むと好まざるとにかかわらず、その事象の必然性が自然発生的に出てくることを意味する。

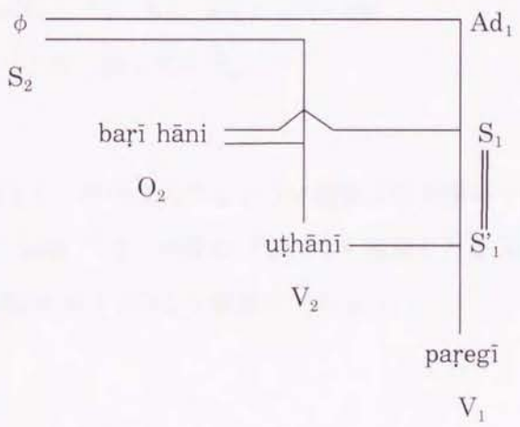
(72) yuddh karne par baṛī hāni uṭhānī paṛegī.
戦争 する－不定詞（斜） 上に 大きい 損害 持ち上げる－不定詞 生じる－未来

「戦争になれば、多大な被害を受けることになるぞ。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 30]

しばしば、この表現の訳語として当てられる日本語の「～しなければならない」という表現は、「～しなければ（ことが）ならない」のように義務的にする必要がある場合と、「～しなければ（どうにも）ならない」のように否応なしにせざるを得なくなる場合に使用される表現である。文脈でそのうちのどちらかが判断可能だが、ヒンディー語では、義務的な場合、先に挙げた任意の不定詞＋‘ cāhie ’の構造になる。

与格構文の部分だけ、以下に構造図にして文法関係を示す。



第二層は、主語がないが、文脈から「あなた」を補い、「あなたが大変な損害を受ける」という命題が成立する。第一層は、与格構文であり、主語として第二層の目的語が立つ。第二層の命題の不定詞部分は、S_1 の性・数一致を受けることになる。基本的に与格構文は、この文法関係と格標示になる。

7.2.5　未完了分詞＋本動詞

ここでは、未完了分詞と本動詞を複合する形式について観察する。未完了分詞と複合する本動詞は、（一語化したものは除き）先の語幹との複合形式のものよりは少ない。

まずは、語幹との複合形式にも使用されていた ‘ jānā ’「行く」の例を挙げる。

(73)　cācājī !　ek　faislā　　karte　　jāo.
おじさん　1　決定　する－未完了　行く－命令

「おじさん、１つ決めていってよ。」

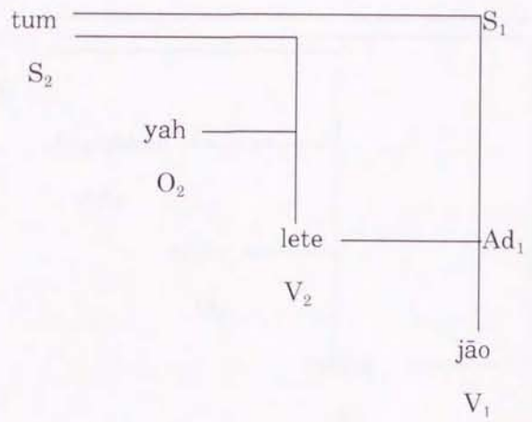
[Cācā Caudharī 7 : 85]

これは、出かける途中のおじさんを呼び止める場面の発話である。この場合は、前の節で観察した語幹に ‘ jānā ’ を組み合わせた ‘ *kar jāo ’ は言えない。接続分詞 ‘ -kar ’ を使えば可能であろうが、未完了分詞が使われていることに注目すると、これは、おじさんに声をかけた段階では、決めることが終わっていないためと考えられる。

(74)　tum　yah　　lete　　jāo.
おまえ　これ　取る－未完了　行く－命令

「これ、持っていけ。」

この例文も、前の文と同じように接続分詞を用いてもよいところである。また、この先行動詞 ‘ lenā ’ は、前節の（9）でも観察したように、語幹と複合する形式もある。以下に構造図を挙げて詳しく観察してみよう。



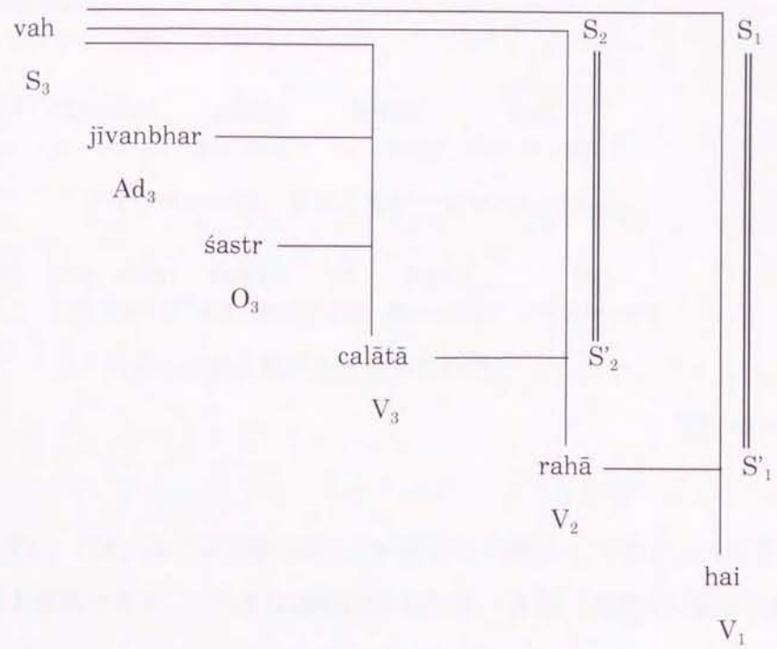
第二層で作られる命題「おまえがこれを取る」が、第一層で、副詞的な修飾句（未完了状態）で、行けということを指していると考えられる。

次は、‘ rahnā ’「(ずっと) いる／ある，続く」である。

(75) vah jīvanbhar śastr calātā rahā hai.
彼 人生一杯 武器 動かす一未完了 いる一完了 コピュラー現在
「彼は一生武器を使いつづけたのである。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 31]

彼はここではアルジュナを指す。「武器を動かす」すなわち「武器を使う」ことに相当する。以下に構造図を挙げて、この文の統語構造を観察してみる。



まず、第三層の命題から観察すると、「彼が武器を使う」という SOV 構造になっている。この命題が第二層の V_2 である「いる」につながり、「そういう状態が続く」となる。その際、第三層の命題の V_3 が未完了分詞であるのは、「未完了の状態が続く」ということを指す。それら全体が、最後の第一層のコピュラ動詞 V_1 にかかっていることになる。

次の例文も、(75) と同じである。

(76) pichle adhyāyoṃ meṃ bhagvān Arjun ko batāte rahe
前の 章（複） で 神 アルジュナ に 伝える一未完了 いる一完了
haiṃ ki...
コピュラ一現在 同格詞

「前の章で神がアルジュナにずっと言い続けているのは、・・・。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 151]

後方に同格節を持つが、ここでは省略する。上の構造図に従うと、「伝える」状態が未完了の状態で続くということになる。「行為が未完了の状態で続いた状態にある」という点が、先の節で取り上げた相に囚われない語幹を使用して、「行為自体が続いた状態である。」ということを表わす進行形とは違う。

次は、‘ bannā ’「できる，なる，作られる」である。これは、ある種イディオム化した側面がある。

(77) tājmahal dekhte bantā hai.
タージマハル 見る－未完了 なる－未完了 コピュラー現在
「タージマハルは、見てこそタージマハルである。」

(78) yah chavi dekhte hī bantī hai.
この 美しさ 見る－未完了 小詞 なる－未完了 コピュラー現在
「この美しさは、見てこそ分かるのだ。」

[Hindī vyākaraṇ : 321]

(77)，(78) は、文字通りは、「A は見て、なる。」である。つまり、見て初めて成立すると解釈できる。これを反語的に捉えれば、「A は（実際に）見なければだめ。」ということになる。

(79) us kā ronā dekhte nahīṃ bantā.
彼 の 泣く－不定 見る－未完了 否定辞 なる－未完了
「彼の泣くのは見ていられなかった。」

(79) は、(77)，(78) の構造の否定文である。先の構造を論理的に否定すると、「A は見て、ならない。」、つまり、見ることが成り立たないことになる。主語は「彼の泣くこと」という、名詞句である。「A を見ることが成り立たない。」ということから、「A は見ていられない。」もしくは「見ることができない」になる。見ていられない当人は、道具格‘ se ’で表示される。これは、第５章で観察した「～によって A が成る。」という構造の主語 A に文が非定形で埋め込まれた構造である。上の肯定文は文語的であるが、この否定文は、口語でも使用される。

次に、第４章の複文構造のところでも例示した、認知動詞を使用した例を挙げる。

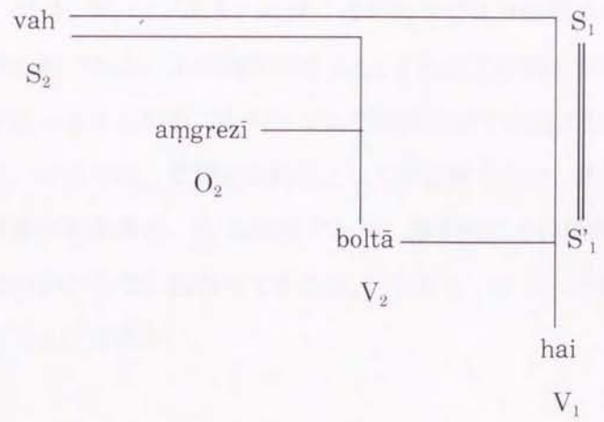
(80) strī kaṛvī nazar se use jate dekhtī hai.
女性 辛い 視線 で 彼を 行く－未完了 見る－未完了 コピュラ－現在
「女は、辛そうに、彼が出て行くのを見ている。」
[Ādhe adhūre : 40]

(81) rājā ne is ciṛiyā ko kabhī gāte nahīṃ sunā thā.
王 能格 この 鳥 対格 いつでも 歌う－未完了 否定辞 聞く－完了 コピュラ－過去
「王様はこの鳥が歌うのを一度も聞いたことがありませんでした。」
[Bāl bhārtī bhāg 2 : 62]

日本語でいう「A が…するのを見る／聞く」という表現である。埋め込まれている命題は（80）の「彼が行く。」，（81）の「この鳥が歌う。」であり、これらの主語は、前の章で観察したとおり、対格表示される。先の章では、失業者の位置に PredN や PredA が入っていたが、ここでは未完了分詞の斜格形が使用されている。日本語の「見る，聞く」は、「～の（こと）を見る／聞く」のように、文を名詞的に目的語として埋め込むが、ヒンディー語では、埋め込まれた命題の主語を対格表示し、未完了分詞の斜格形を、本動詞の資格を失わせた失業者にしてしまう構造を取る。同じ章で例示した ‘ pānā ’ も、認知を表わす場合はこの構造を取る。

ところで、埋め込みの命題は「A が B する」という動詞述語文の中で、未完了分詞とコピュラ動詞を複合するものに関しては、これも、前章，前々章で観察した形容詞述語文，名詞述語文と同じように、本来は、二層構造を成すものになる。ここで、それを確認する。

(82) vah aṃgrezī boltā hai.
彼 英語 話す－未完了 コピュラ－現在
「彼は英語を話す。」



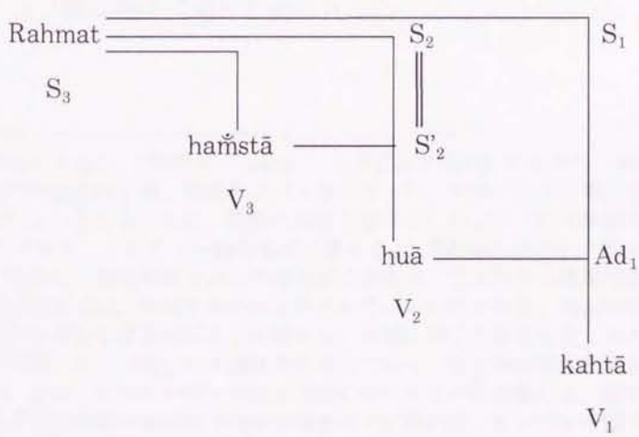
第二層は、「彼は英語を話す。」という命題になる。その命題が、第一層のコピュラ動詞の主語 S'_1 になる。しかし、実質的な第一層の主語は、第二層の主語である。第二層の動詞の形態が未完了分詞であることから、この事象は完了していない行為を示し、さらにそれが存在することを指し示している。

また、この未完了分詞とコピュラ動詞を複合したものが、別の文に埋め込まれることがある。

(83) Rahmat haṁstā huā kahtā, "hāthī."
ラハメト 笑う一未完了 コピュラー完了 言う一未完了 象

「ラハメトは、笑いながら『象だよ』と言う。」

[Bāl bhārtī bhāg 2 : 94]



(83) では、V_1 の「言う」に付くはずのコピュラ動詞が欠落しているが、本来は通常の現在複合形である。上の構造図からも、『未完了分詞＋コピュラ動詞』の埋め込みであることがはっきり分かる。V_2のコピュラ動詞が完了分詞になることで、埋め込み側の「状態にある」の部分は、定形の本動詞としての資格を失い、失業者となる。

この構造を取る場合、V_1 は変数であり、基本的にどの動詞でも代入し得る。(ただし、意味制約がかからない範囲内であるが。) ただし、コピュラ動詞だけは例外で、以下のように言うことはできない。

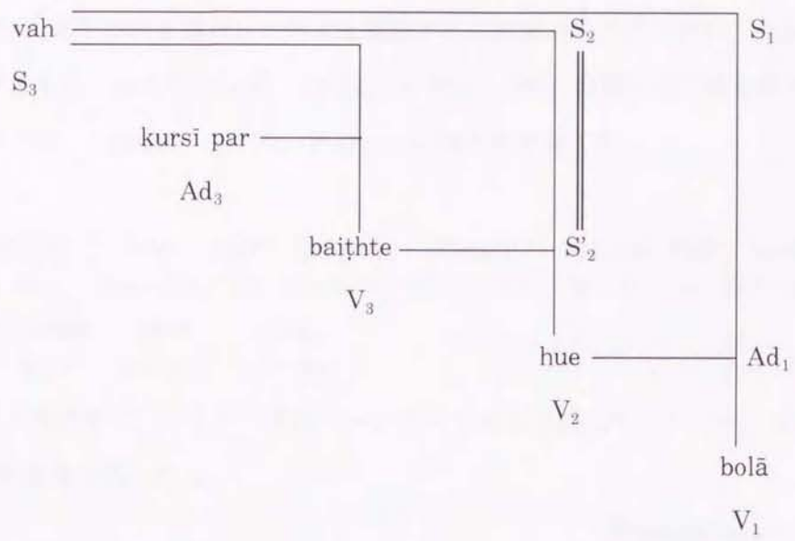
(84) *Rahmat haṁstā huā hai.
ラハメト 笑う－未完了 コピュラ－完了 コピュラ－現在

V.Jagannāthan (1981) によると、この不適格な形式に代わるものとして、前節で観察した『語幹＋ ‘ rahā ’ ＋コピュラ動詞』で表わす進行形があるという。実際、論理的に考えれば、「行為が完了していない状態にある」ということなので、進行を表わすものとして、理に適った形式ではあるが、ヒンディー語では使用されることはない。というのは、先の進行形の形式をすでに持っている[17] ため、無用の長物にも等しいからである。

また、この『未完了分詞＋コピュラ動詞』の部分が斜格形になることもある。以下の例がそれである。

(85) vah kursī par baiṭhte hue bolā ....
彼 椅子 に 座る－未完了 (斜) コピュラ－完了 (斜) 話す－過去
「彼は椅子に座りながら言った…。」

[17] 同氏によると、『語幹＋ ‘ rahā ’ ＋コピュラ動詞』の形式は、英語から入ってきたもので、ヒンディー語の方言をはじめ、同族のグジャラーティー，マラーティー等，さらにはサンスクリットには観察されないということである。英語の影響を受けたためというのは事実であろうが、英語の形式は、‘ be + -ing ’ であり、ヒンディー語の形式に準えると、『未完了分詞＋コピュラ動詞』になる。ヒンディー語のこの形式は、現在時制を表わす複合形であるが、これに対し英語は現在時制の単純形を持つ。すなわち、両言語間では、形式自体の対応がずれているわけである。現在時制の単純形がないヒンディー語では、進行を表わす必要性が生じた時点で、英語に準じた形式を使うことができなかったのは理解できるが、その際、ここで扱った不適格な形式ではなく、全く別の形式を発達させたことが、筆者としては興味深い。また、元々ヒンディー語と同族のヨーロッパの言語には、進行形に対し、取り立てて別の形式に頼らず現在時制の単純形で表わす言語の方が多いが、ヒンディー語では、このような別の形式を創り出したことも、興味深い言語事実である。



第三層の命題「彼が椅子に座る。」が、第二層の命題中にあるコピュラ動詞の主語になる。第二層命題の主語でもあり、第一層でも実質的な主語になる「彼」ではあるが、形態上の一致は、V_3 の段階から斜格形になっており、第一層に副詞的修飾句としてかかる。(83) と (85) の修飾形式は、埋め込み文が、主語との性・数一致を保った元の文に近いか、完全に副詞的な修飾句として独立したものかという違いで、どちらも深層の命題の行為が完了していない状態を指すことには変わりない。したがって、この (85) も、「座りながら」や「座りつつ」のように、他の動作と同時に行う意を持つ接続助詞「ながら」や「つつ」を連用形と接続して使用する。

なお、動詞の種類により、未完了分詞を完了分詞に置き換えると、確実に行為が完了したものを指すことになる。(83) の「笑う」は、行為を表わす動詞であり、日本語の「笑ったまま」という表現に当たる ' haṁsā huā, haṁse hue ' にはならない。また、『て』形を使用した「笑って」になると、後節で観察する接続分詞を語幹に接続して表わす。しかし、(85) の「座る」は、行為と共に状態も表わす動詞なので、「座ったまま[18]」もしくは「座って」に当たるものとして ' baiṭhā huā, baiṭhe hue ' になる。詳しくは次節で観察する。

---

[18] ただし、これは、『て』形の連体形「座った」に、本来名詞である「まま」を修飾させたものである。斜格名詞句の一種として、接続助詞の使用法をも持つ。

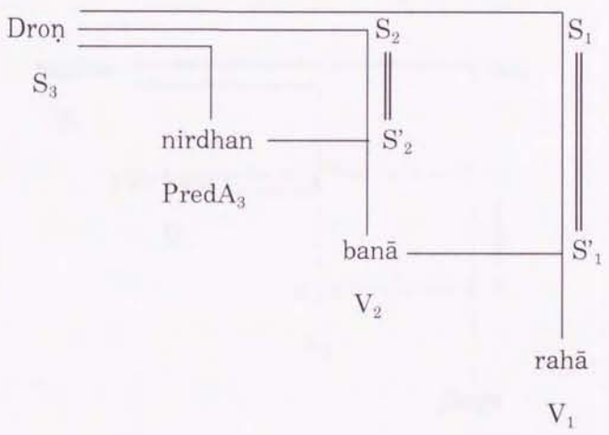
7.2.6　完了分詞＋本動詞

ここでは、完了分詞を複合した例文を観察する。前節の未完了分詞が、命題の不完了性を保持するものであったならば、この完了分詞は、当然、命題の完了性を保持したものである。以下に、‘ rahnā ’「いる，住む」との複合例を挙げる。

(86) samay　āne　par　Drupad　Pāṃcāl　deś　kā　rājā　banā,　Droṇ
　　時　来る一不定　上に　ドゥルパダ　パーンチャラ　国　の　王　なる一過去　ドローナ
　　nirdhan　banā　rahā.
　　貧しい　なる一完了　いる一過去
　　「時が来て、ドゥルパダはパーンチャラ国の王になり、ドローナはずっと貧しいままであった。」

［Śrīmadbhagavatgītā : 15］

この例文は複文である。前の文では、「ドゥルパダが王になった。」となっているが、後の文に、該当の複合形式が使用されている。説明の前に、該当の文を以下に構造図化する。



第三層は、形容詞述語文である。それが第二層で「なる」となる。V_2 が完了分詞であることから「なった」になり、それ全体が、第一層の動詞にかかる。つまり、複合形式の部分は、「ドローナは貧しくなったままでい続けた」となる。

(87) janm ke sāth maraṇ, sukh ke sāth dukh lagā rahtā hai.
生 の 共に 死 楽 の 共に 苦 付く－完了 いる－未完了 なる－過去

「生には死、楽には苦がつきものである。」

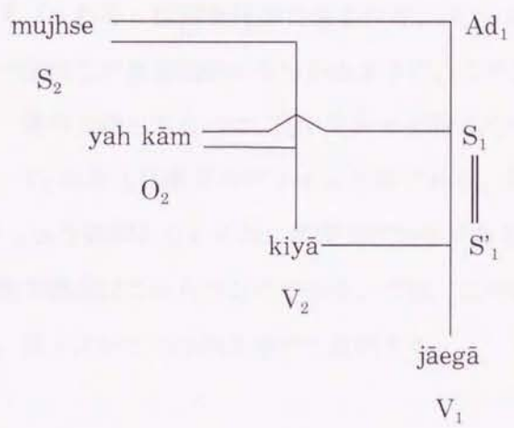
[Śrīmadbhagavatgītā : 45]

(86) の構造論理と同じで、「生に死が、楽に苦がくっついている」完了によって「くっついた」、この ‘ rahnā ’「いる」でそういう状態が継続した状態にある。ということを示している。

次は、‘ jānā ’「行く」を複合して、受身を成す例を挙げる。

(88) mujhse yah kām kiyā jāegā.
私によって この 仕事 する－完了 行く－未来

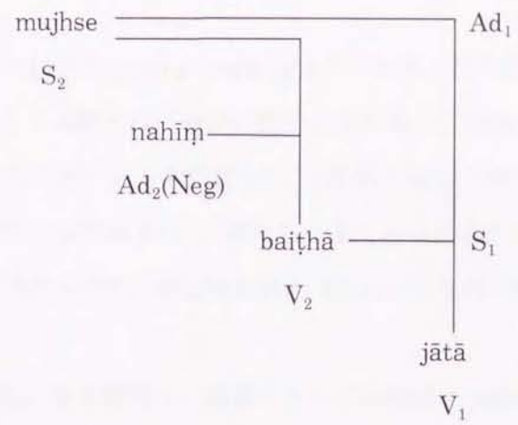
「私によってこの仕事がなされる。」



受身文の構造は、基本的に二層構造になる。第二層には、「私がこの仕事をした。」という命題が形成される。その命題が第一層の主語になるが、実際は、第二層の目的語である「この仕事」が主語として表現する。第二層の行為者には、道具格もしくは奪格の後置詞 ‘ se ’ か、「～を通じて」の意味なる複合後置詞 ‘ ke dvārā ’ を付与する。

また、この受身文には、非人称構文になるものがある。以下にその例を挙げる。

(89) mujhse nahīṃ baiṭhā jātā.
私によって 否定辞 座る－完了 行く－未完了
「私はじっとしていられない。」



(89) は、第４章の (28) の例と構文が同じである。意味もほぼ変わらず、広義に「(そこに) いる」という意味で ' baiṭhnā '「座る」を使用している。日本語も自動詞に受身・可能を表す「－れる」接辞を付加できるので、「いられない」という表現が可能である。ヒンディー語のこの構造図からも分かるように、この文には、論理主語がない。第二層の命題を第一層の主語とするのは、先の受身文と同じだが、論理主語になる要素がないので、その場合、V_1 は非人称構文のデフォルト形である、男性・単数形になる。なお、第一層の V_1 にコピュラ動詞がないのは、否定文だからである。

受身の基本構造はこれらの２つである。では、この構造がどのようなところで使用されているか、以下にいくつか例を挙げて説明する。

(90) mahārathī pad un yoddhāoṃ ke lie prayog meṃ lāyā
マハーラティー 地位 その 戦士 (複) の ため 使用 に 持ってくる－完了
jātā thā jinkā rath baṛā ho....
行く－未完了 コピュラ－過去 関係詞＋の 戦車 大きい 行く－仮・未来
「マハーラティーという地位は、戦車が大きい戦士に対して使用されていた。」
[Śrīmadbhagavatgītā : 16]

(91) hameṃ ullū banāyā gayā hai.
私たちを ふくろう 作る－完了 行く－完了 コピュラ－現在

「俺たちはピエロにされたんだ。」

[Cācā Caudharī 7 : 48]

(90) では、‘ prayog meṃ lānā ’「使用に持ち込む」という命題の述語が受身になっている。日本語では「使用に持ちこまれる」になるが、もってまわった言い方になる。「使用する，用いる」を受身化し、「使用される，用いられる」にする方が自然である。(91) では、文字通りは、「俺たちはふくろうにされた。」になる。「ふくろう」は、ヒンディー語では「ばか」の比喩表現に当たる。ここは「謀られた」という意味合いで使用されている。

次の文は、受身構造に、演算子として助動詞 ‘ saknā ’ が付加された例である。

(92) un dinoṃ har mahārathī ke rath par apnā alag dhvaj-cihn
その 日々 毎 戦車兵 の 戦車 上に 自分の 別の 紋

hotā thā, jis se dūr se jānā jā
なる－未完了 コピュラ－過去 関係詞 より 遠い から 知る－完了 行く－語幹

saktā thā ki ....
できる－未完了 コピュラ－過去 同格接続詞

「その頃、どの戦車部隊の戦車にも、遠いところから分かるように、旗指物がついていた。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 19]

日本語では、「見られえた」,「見られることができた」のように演算子を連続させる表現を通常はしないが、ヒンディー語では、普通にこのような表現をする。日本語からすれば、特に、本来受身を使う必要のなさそうなところで使うことが多いのである。

また、自動詞が受身構造を取ることは先にも述べたが、ヒンディー語では、「なる」動詞に当たる ‘ honā ’ も自動詞ながら、この受身構造を取るのである。

(93) faislā huā jātā hai aslī - naklī kā.
決定 なる一完了 行く一完了 コピュラー現在 本物 偽物 の
「本物か偽物か決めよう。」

[Cācā Caudharī 7 : 59]

「決定」の修飾部「本物・偽物の」の部分が倒置されているが、文字通りは「本物・偽物の決定がなされる。」となっている。この（93）は、先の非人称構文にみられた論理的主語がないものとは違い、第二層の命題にある「決定」という主語が、第一層でも主語として機能している例である。

同じ自動詞の完了分詞と‘ jānā ’を複合する例を挙げる。

(94) tab vah calā gayā thā.
その時 彼 歩く一完了 行く一完了 コピュラー過去
「その時にはもう彼は帰ってしまっていた。」

これは、「行ってしまった」（文脈により、「帰ってしまった，去って行った」等になる。）というイディオム化した複合形とされている。複合形式は受身のそれと同じであるが、元々、命題が埋め込まれたものと考えられる。最下層の命題が「彼が進んだ。」までとし、その命題が次層で、‘ gayā ’の主語になる。ここの‘ gayā ’は、本来の「行く」という意味ではなく、彩飾動詞としての機能であり、「至った，しまった」で代替できるものである。

この例については、イディオム化したものとして処理することもできるが、実際、受身構造自体は、元々彩飾動詞の‘ jānā ’との複合で、構造全体が命題の埋め込みと考えれば、受身性を発揮するのは、下層命題の完了分詞という仮定が成り立つ。論理主語のある他動詞の命題を例に挙げると、例えば、（88）の‘ kām kiyā ’は、ヒンディー語では、能格構文になるので、目的語の「この仕事」自体が絶対格の主語になる。能格構文自体、「この仕事」と「した状態にある」を論理的に考えれば、主語として「この仕事」を立たせれば、それは「された」ものでしかなくなる。同時に行為者は、能格後置詞‘ ne ’によって表わされる。能格後置詞は元々道具格の一種であったことも考え合わせると、「A

によって B がされた」が能格構文の正体である。したがって、この完了分詞は、完了でありかつ受身性も帯びる中動態的な機能をするものと考えられるのである。その中動態[19]の名残になるものが、先にも挙げた非人称構文の例である。

(95) usse nahīṃ calā jātā.
彼によって 否定辞 進む一完了 行く一未完了
「彼は（もうこれ以上）歩けない。」

(94) では、「彼が歩いた」が下層命題であったが、この (95) は、下層命題において「彼」を道具格標示したものである。この場合、非人称になっている部分に再帰代名詞を想定すると、「彼によって（自分自身が）歩いた」と考えることができる。否定辞も合せると、これが、純粋に能力を問う「歩けない」ではなく、「彼によって自身が歩くには至らなかった。」という、能力とは別次元で（往々にして心情的にできないという意になる。）不可能なことを表わすのである。

非人称構文自体、古くは中動態にみられる構造を継承したものであり、現代では架空の再帰代名詞を補うことによって成り立つ文であるが、このメカニズム自体は、何も自動詞にだけみられるものではない。他動詞を使用しても同じニュアンスになる。

(96) mujhse yah ciṭṭhī nahīṃ paṛhī jātī.
私によって この 手紙 否定辞 読む一完了 行く一未完了
「私にはこの手紙が読めない。」

例外なく、この他動詞の場合も、行為者が道具格標示されている。(95) と同じように、「私によって（自分自身が）手紙を読んだ」と考えられる。そして、その命題には至らないという論理が、現存の受身構造として捉えられている。日本語では、受身接辞の「－れる／－られる」とは別に、可能を表わす助動詞「－る」によって、「私にこの本は読めない。」のように表わすことができる。

---

[19] middle という語は、サンスクリットやギリシャ語の文法用語で、主語になる人や物が、動詞によって表わされる動作や行為によって影響を受ける場合、その動詞の形や態（voice）に使用された。サンスクリットでは、態に対して使用される。

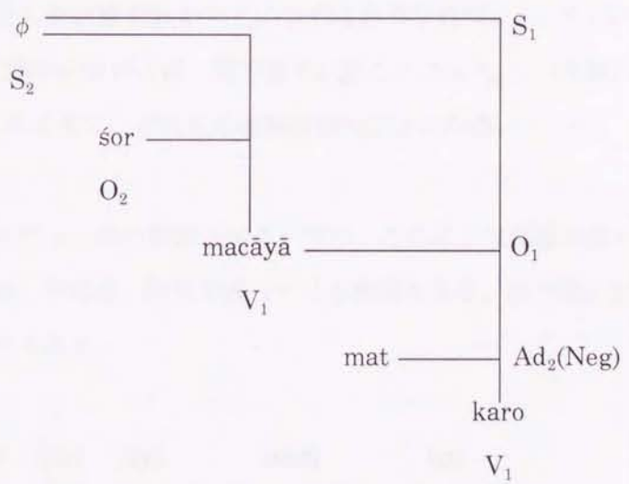
結論として、受身接辞を失ったヒンディー語では、受身専用の動詞形態がないが、完了分詞自体に中動的な要素があり、彩飾動詞としての ‘ jānā ’ の主語として埋め込むことで、受身構造としているものと考えられるのである。

次は、‘ karnā ’「する」を複合する例を挙げる。

(97) ab tum aise hī kapṛe pahnā karo.
では 君 このような 小詞 服 着る－完了 する－命令
「では、おまえはこういう服を着るようにしろ。」
[Cācā Caudharī 7 : 55]

(98) śor macāyā mat karo.
騒音 たてる－完了 否定辞 する－命令
「騒がないようにしろ。」

これは、習慣を表わすイディオムとされている。解釈において習慣に至るメカニズムを解明するため、(98) を例に構造図化して、その文法関係を観察してみよう。



この文は主語が欠落した命令文になっている。主語を補って考えると、第二層には「君たちが騒いだ」という命題が形成される。この命題が第一層の目的語になるのはこれまでの完了分詞との複合と同じだが、ここの完了分詞は、第一層の V_1 の目的語として、動名

詞になっているものである。

名詞性を証明する根拠は、この完了分詞が本来受けるはずの性・数の一致を受けることなく、常に‘ -yā ’語尾の男性・単数形で用いるところにある。本来、名詞性を持つ動詞は‘ -nā ’語尾の不定詞であるが、完了分詞は行為が完了したものとして名詞的に使用されるのである。したがって、(97) の例も含めて、「着た」,「騒いだ」という完了した状態を「する」ことを示す文になる。これらは命令文なので、行為自体は未来のことなのに完了分詞を充てるのはいささか矛盾しているようにもみえるが、(97) は「着る」という行為を終えた相手に対して発話されたものであり、(98) もいつもうるさくしている相手に対して発話されたものである。したがって、「着る」,「騒ぐ」という行為が一度は完了している場合に使用されているのだから、なんら矛盾することはない。

日本語でも、習慣を表わすものとして動詞「する」を使用した表現がある。「これからはここで食事を取ることにしよう。」,「休みの日だけは、家で寝ることにしていた。」のように、「〜することに／ように・する」がそれである。日本語に訳すと「〜すること」になるが、ヒンディー語は、完了分詞である。ヒンディー語の完了分詞は行為の完了したことと同時に過去のことを表わすが、日本語にも「したこと」という過去を表わす形がある。しかし、これを埋め込むと、「〜したことにする／?〜したようにする」となり、通常、「振りをする」という実際にはしてないことを表わすことになる。

完了した状態を表わすという点に注目すれば、「して・いる」が使用できる。こうすると、「休みの日だけは、家で寝ていることにした。」,「今旅行に行っていることにしておいて。」のように、どちらの意味も持つことになる。

ヒンディー語の動詞「する」では、このような形態の使い分けで、用法を違えることはないが、中には、用法が違ってくる動詞もある。先の節に出てきた、‘ cāhnā ’「欲する」がそれである。

(99) gāṛī　āyā　　cāhtī　　hai.
列車　来る一完了　欲する一未完了　コピュラー現在
「列車がもうすぐ来る。」

この動詞は、不定詞と複合することが多く、その場合は、既出 (62) のように願望を

表わすものになる。しかし、完了分詞を目的語として埋め込むと、「すぐに～する」という意味が生じる。この完了分詞も、主語である女性・単数形の「列車」と一致することなく、男性・単数形のままで、変化することはない。したがって、先の動詞「する」の例と同じで、完了分詞が動名詞的に目的語として働いているものと捉えることができる。つまり、この文は、「列車が来る」という動作が完了した状態になることを、列車自体が欲するという論理から生じる意味と考えられる。

次は、‘ denā ’「与える」を複合する例を挙げる。

(100) tumhāre aṃḍoṃ kā ghāṭā maiṃ pūrā kie detā
君らの 卵（複） の 不足 私 完全の する一完了 与える一未完了
hūṃ.
コピュラー現在

「君らのなくした卵はわしが補うぞ。」

[Cācā Caudharī 7 : 87]

複合現在形は、近未来に起こる事象の時にも使用できることは、すでに何度も述べてある。命題中の動詞が完了分詞になるのは、先の完了分詞＋‘ karnā ’「する」のところでも若干述べたが、元々、認知の世界では、終わったこととして事象を捉えているためと考えられる。これは、日本語の仮定を表わす「すれば」と「したら」にみられる連用形と過去形の対立によく似ている現象である。どちらも今となっては区別なく仮定を述べるのに使用できるが、前者を使用した場合、事象を終わったこととして捉えている感はない。

次は、‘ rakhnā ’「置く」の例文を挙げる。

(101) ṭhīk, ise mazbūtī se pakaṛe rakhnā.
よし これを 力 よって つかむ一完了 置く一不定

「よし、これをしっかりつかんでおくんだ。」

[Cācā Caudharī 7 : 17]

この後続動詞は、語幹を複合した形もみられたが、ここでは、これまでの例と同じく完

了分詞を使用している。意味自体、もうほとんど区別がないものと考えられるが、強いて言うなら、やはり掴んだままの状態を表わすものであり、完了分詞を用いても不思議ではない。

完了分詞と複合するものとして、前節の最後に挙げた認識動詞を使用した例文がある。

(102) kyā kisī ko mombattī jalī huī dikh rahī
疑問辞 誰か に ろうそく 燃える一完了 コピュラ一完了 見える一語幹 いる一完了
hai?
コピュラ一現在

「誰かろうそくが灯っているのが見えるかしら。」

[Cācā Caudharī 7 : 33]

(103) pitā ke lauṭne meṃ der huī jānkar Ram vahāṁ
父 の 帰る一不定 に 遅延 なる一完了 知る一語幹＋接続分詞 ラーマ そこ
ā pahuṁce.
来る一語幹 着く一過去

「父の帰りが遅いのを知って、ラーマはそこに行った。」

[Hamāre graṃth : 35]

(102) は、前章 (22) の複合形「見える」[20] に対して、一語の動詞を使用したものである。したがって、全体が与格構文になるので、埋め込みの命題は、「ろうそく」がそのまま主語に、「灯った状態にある」という完了状態を表わす、『完了分詞＋コピュラ動詞』の「灯っている」の部分が主語の性・数一致を受ける。また、本動詞のコピュラ動詞が、本動詞としての資格を失い完了分詞になっている。(103) で使用されている認知動詞は、「知る」である。埋め込み側の命題に使用されている ‘ huī ’ は、本動詞としての ‘ honā ’ 使用である。「遅れが生じた」という過去なので完了分詞が使用され、主語である「遅延」の性・数一致を受ける。

(102) の命題の中にも出てきたが、ここで、改めてコピュラ動詞を使用した完了分詞との複合形を挙げてみよう。

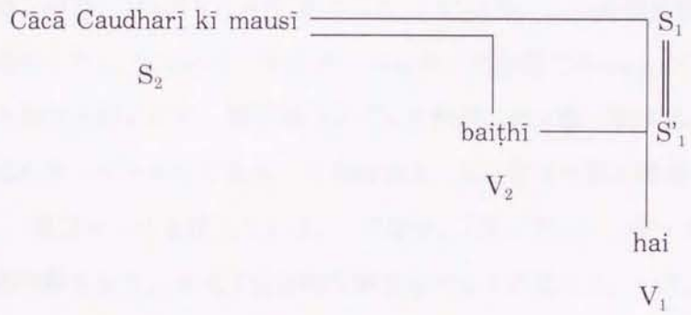
[20] 「聞こえる」も ‘ sunāī denā ’ という複合形を使用する。ちなみに、この複合形の本動詞 ‘ denā ’ は、‘ paṛnā ’「生じる」を使用することもできる。

(104) vah Cācā Caudharī kī mausī baiṭhī hai.
あれ 叔父 チョードリー の 伯(叔)母 座る－完了 コピュラ－現在

「あれ、チョードリー叔父さんのおばさんが座っているぞ。」

[Cācā Caudharī 7 : 10]

(104) は、自動詞の完了分詞とコピュラ動詞の組み合わせである。構造図にすると以下のようになる。



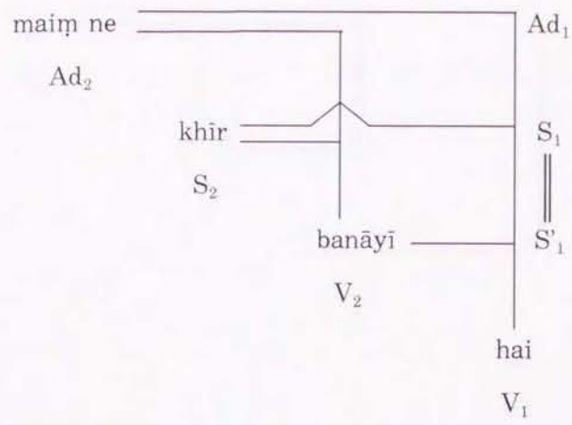
第二層の「チョードリー叔父さんのおばさんが座った」が、第一層のコピュラ動詞の主語 S'_1 として立つが、実際、第一層の主語は第二層の主語と同一である。したがって、本来命題が主語になるので「チョードリー叔父さんのおばさんが座った状態である。」ということを示す文になる。

(105) us ke lie maiṃ ne khīr banāyī hai.
彼 の ため 私 能格 キール 作る－完了 コピュラ－現在

「ロケットにはキールを作ってあるわ。」

[Cācā Caudharī aur pāp śo : 17]

(105) は、他動詞を使用した例である。文頭の代名詞は、文脈より「ロケット」という名の犬を照応している。以下の構造図を挙げるが、「ロケットのために」の Ad は排除する。



第二層は、「私がキール[21] を作った。」になる。この命題が第一層の主語になり、「命題が存在した」、すなわち「私がキールを作った状態である。」となるのは前の自動詞を使用した場合と同じだが、第一層のコピュラ動詞に性・数一致するのは、第二層で実質的な主語になる「キール」である。日本語では、ヒンディー語の構造どおり「私」を主語にすると、「私はキールを作っている。」になり、「作って」が、作った状態にあるという完了分詞的な働きより、未完了分詞的な働きをするものになる。したがって、この場合、ヒンディー語の能格構文が示す主語のキールに合せ、存在を表わすコピュラ動詞「ある」を使用して、「キールが作ってある。」とする方が、コピュラ動詞のニュアンスを反映し易くなる。

また、この完了分詞とコピュラ動詞を複合したものに、さらにコピュラ動詞が付加されることがある。

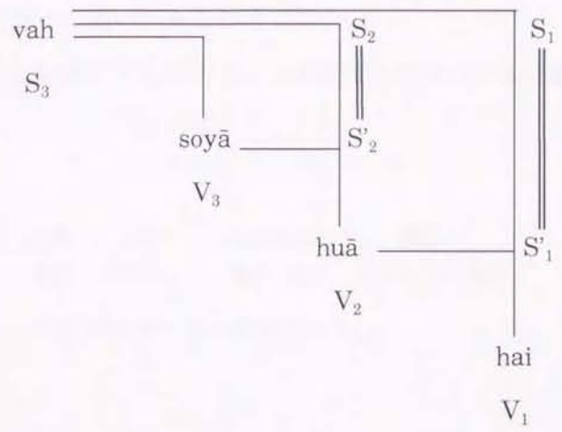
(106) vah soyā huā hai.
彼 寝る－完了 コピュラー完了 コピュラー現在
「彼は寝ている。」

[Prayog aur prayog : 112]

(106) は、自動詞を使用した例である。先の『完了分詞＋コピュラ動詞』がそもそも二層構造なので、さらにコピュラ動詞が付くと三層構造になる。

---

21 デザートの名称で、牛乳と砂糖で米を煮たミルク粥の類。



「彼は寝ている。」にもう１つコピュラ動詞が付くと、第一層を抱合した第二層の命題が存在するということになる。こうなると、単に「寝た状態である」のではなく、「寝ている状態である。」という、状態を強調するものになる。日本語では、動詞が３項連なることはほとんどなく、また、状態を表わす要素を冗長的に重ねることはないが、ヒンディー語では、とりわけ何らかの状態にあることを示す時、これが使用される。他動詞の場合も同じである。以下の例をみていただきたい。

(107) tājmahal ke darvāze aur dīvāroṃ par bahut hī suṃdar nakkāśī
タージマハル の 戸 と 壁（複） に とても 小詞 綺麗な 彫刻
kī huī thī ....
する−完了 コピュラ−完了 コピュラ−過去

「タージマハルの戸口と壁に、とても綺麗な彫刻がしてあった。」

[Bāl bhārtī bhāg 2 : 88]

(107) には、行為者が表記されていない。しかし、(106) の統語構造で、命題が埋め込みされたものと捉えると、下層にある実体は、能格構文になる。したがって、「彫刻がしてあった。」という命題が、その時点で存在した（その状態であった）ということになる。これも、(106) の自動詞の例と同じく、状態を強調するものである。

これによく似た構造で、先に挙げた受身構文がある。本動詞の直後に付加されているコピュラ動詞の完了分詞が、受身を表わす場合に使用される ‘ jānā ’「行く」の完了分詞 ‘ gaī ’ に変わるが、こちらは、「彫刻がされていた。」という日本語を当てることができる。「してあった」と「されていた」の間に多少のニュアンスの差があったとしても、

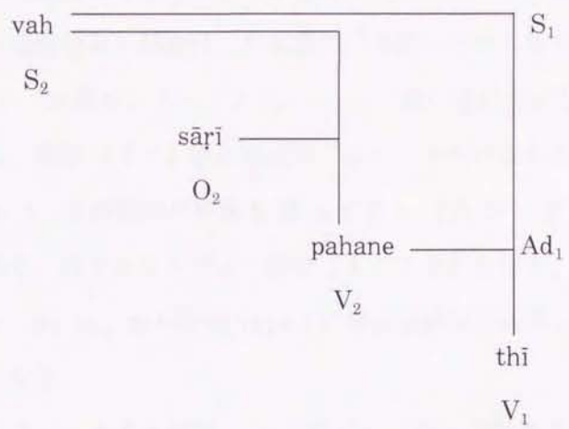
大きな意味の違いがあるわけではない。

これに関連してもう１つ、この完了分詞とコピュラ動詞の複合が、斜格形を取ることがある。

(108) vah　　sāṛī　　pahane　　thī.
　　彼女　サーリー　着る一完了　コピュラー過去
「彼女はサーリーを着ていた。」

［エクスプレス・ヒンディー：85］

弟４章の複文構造のところで、副詞的な修飾句になる斜格語節として挙げたものが埋め込まれている構造である。(104) の完了分詞とコピュラ動詞の複合形に似ているが、「サーリーを着た」という命題が斜格形になるのである。この場合の構造図は以下のようになる。



状態にあることをはっきり述べる場合は、(106), (107) のように、コピュラ動詞の完了分詞を付加する。この構造を見る限り、第二層にある命題「(彼女が) サーリーを着た」という状態は、副詞的修飾句として第一層にかかっているのである。したがって、「サーリーを纏った状態にあった。」ということになる。

最後に、慣用化した複合形、すなわち、複合動詞に近づいたともいえる複合形を挙げておく。

(109) ..... so pīche pīche calā āyā.
だから 後ろに 後ろに 進む－語幹 来る－過去

「だから、後からやって来たのさ。」

[Cācā Caudharī 7 : 91]

(109) は、完了分詞 ‘ calā ’「歩いた，進んだ」と動詞 ‘ ānā ’「来る」を複合した例である。‘ ānā ’ の他に ‘ jānā ’「行く」と複合することもある。(本節 (94) を参照) 日本語の「やって来た」のようなイディオム化した側面があり、‘ jānā ’ と共に、一体化したものとしての使用率が高い複合形式である。

7.2.7 語幹 ‘ -kar ’ ＋本動詞

語幹と本動詞の形式のところでも若干触れたが、語幹に接続分詞 ‘ -kar ’ [22] を付け、本動詞に後続させる形式とほぼ意味が変わらないものもある。

この接続分詞の機能は、日本語の「休憩してから泳ぐ。」「今日はゆっくり休んでから話そう。」,「お風呂に入ってからいく。」,「僕の絵は完成してからみせるさ。」等にみられるように、動詞の『て』形に格助詞「から」を付けるものと似ている。つまり、先行動詞の事象を A，後続動詞の事象を B とすると、『A から B (に移る)』というのが日本語の発想であり、対するヒンディー語は『A して B』となる。この非定形節を使用する『A して (-kar) B』は、定形節型 Type I の等位接続詞を使用した『A aur B』の複文と対応するものになる。

ところで、上述の例は、「して泳ぐ」,「休んで話そう」,「入っていく」,「してみせる」という具合に、「から」をとっても同じ意味は成り立つ。こうなって初めて日本語では動詞複合らしい様相を呈するわけだが、後続動詞の種類によっては同義性が成り立たないものもある。例えば、この中の「してみせる」は、「(任せてくれ。) 明日中にはこの仕事をしてみせるよ。」のような、故意に何かをするもしくは決意を表わす文にも使われる。す

[22] 動詞 ‘ karnā ’「する」の出自。語幹に本動詞としてこの動詞が使用されると、‘ *kar-kar ’ にはならず、‘ karke ’ の ‘ ke ’ になる。(該当例は (95) である。) 二音節から成る接語レベルのもの (この接続分詞や後置詞) で、‘ -ar ’ 語尾のものは、しばしば (特に口語において) ‘ -e ’ になる。

なわち、これは、後続動詞に使用されている動詞「みせる」が、本来の意味を失いかけたものになっているのである。

ヒンディー語のこの種の動詞群は、彩飾動詞もしくはベクトル動詞として、語幹との複合形式のところに述べてある。ここで挙げる例は、先行動詞，後続動詞がほぼ元の意味を保っているものであり、生産的なものである。

(110) usse maiṃ maśvarā karke āte haiṃ.
彼＋に対して 私 相談 する－語幹＋接続分詞 来る－未完了 コピュラー現在
「彼と話をして来るよ。」
[Cācā Caudharī 7 : 66]

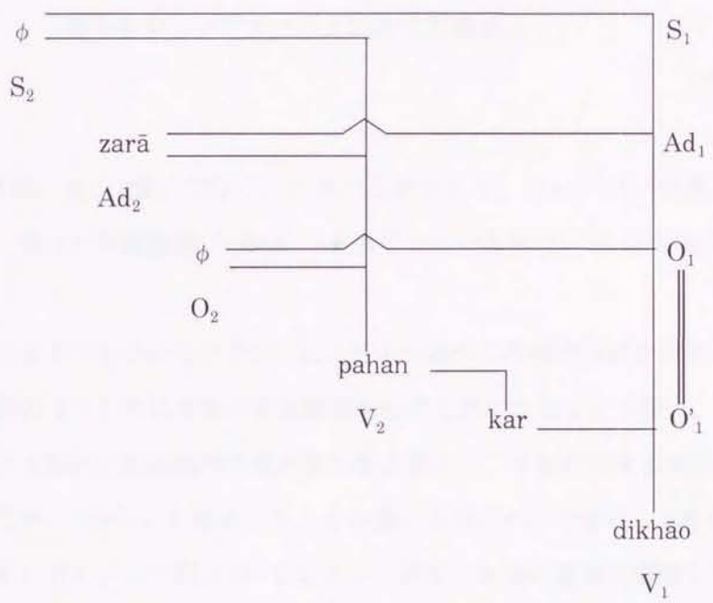
(111) ham āpko gāṛī par caṛhā kar āte haiṃ.
私たち あなたを 列車 に 乗せる－語幹 接続分詞 来る－未完了 コピュラー現在
「われわれはあなたを列車に乗せてこようか。」
[Cācā Caudharī 7 : 66]

(110)，(111) は、日本語の「さて、行ってくるかな。」という文の「くる」に近いものと考えられる。広辞苑第四版によると、『その動作・作用を済ませて立ち戻る意を表す。』という使用法である。後続動詞の本来の意味を失わず、かつ接続分詞のないものとして、先の語幹との複合で挙げた (36)，(37)，(38) があるが、ヒンディー語にも先行動詞の種類によっては、語幹と複合し、一体化させてしまうものがあるということである。同辞書には、「漕ぎ来る」（これは文語とされている。）という複合形が掲載されているが、「(舟を) 漕いで (こちらに) 来る」という、どちらの動詞も本来の意味を保持したものである。現代ならば「漕いで・来る」という具合に、『て』形を使用するところを、半ば一体化したものとして扱ったものと考えることができる。(先の節で述べた「逃げ帰る」も同様である。) ヒンディー語に文語・口語の差があるかどうかは不明だが、後続動詞に本来の意味を温存させて先行動詞と複合する際に、両方の形式があることだけは確かである。他の動詞の例も以下に挙げる。

(112) zarā cācā caudharī kā ḍibbā khol kar dekho.
少し 叔父 チョードリー の 箱 開ける－語幹 接続分詞 見る－命令
「ちょっとチョードリーおじさんの箱を開けてみろ。」
[Cācā Caudharī 7 : 52]

(113) zarā pahan kar dikhāo.
少し 着る－語幹 接続分詞 見せる－命令
「ちょっと着てみせろ。」
[Cācā Caudharī 7 : 55]

(112), (113) も接続分詞を使用した例であるが、それぞれ、動詞 ' dekhnā '「見る」や ' dikhānā '「見せる」が使用されている。先の動詞「来る」と同様、ほぼ本来の意味を保持したものである。以下に (113) を構造図化して示す。



「着る」の対象は「スーツ」であるが、文中には表示されていない。便宜的に構造図にはϕを補ってある。元々、これは複文の Type II であり、「スーツを着る」という命題の V_2 が非定形になって、V_1 の動詞を副詞的に修飾しているようにみえる構造であるが、上述のものとは違い、この対象である「スーツ」が V_1 の目的語 (O_1) でもある。実際、相手

に見せるのは、第二層で形成される「君が服を着る」という命題である。

語幹に、これらの「見る／見せる」を複合するものは見つかっていない。したがって、上述の動詞「くる」とは違って、本来の意味を保持しつつ、語幹との複合になるものはなく、さらに、日本語の「やってみる」や「終えてみせる」のような、後続動詞が漠然化する類の動詞でもない。このような、意味が漠然化しない動詞を接続分詞でつなげる複合形式は、ヒンディー語では多く観察される。以下の例もその範疇のものである。

(114) mujhe　　choṛkar　　mat　　jāo.
私を　放す－語幹＋接続分詞　否定辞　行く－命令

「私を置いて行かないで。」

[Cācā Caudharī 7 : 17]

(115) .... kursī　kā　rukh　thoṛā　sofe　kī　taraf　　karke　　baiṭh
椅子　の　向き　少し　ソファー　の　方向　する－語幹＋接続分詞　座る－語幹
jātā　　hai.
行く－未完了　コピュラ－現在

「椅子を少しソファーの方に向けて座る。」

[Ādhe adhūre : 54]

(113) は、「置いて行く」に当たる例である。(114) は、従属文側が名詞複合構造になり、主文に彩飾動詞 ‘ jānā ’ を複合している例で、「向けて座る」となる。

ここまででも分かるように、ヒンディー語のこの接続分詞を使用した複合形式は、実際、日本語の『て』形に主節の定形動詞を付けた訳になることが多い。しかし、後続動詞に使用される動詞に彩飾動詞の使用法がある場合は、本来の意味を保持していることを際立たせるため、「から」を挿入して、その違いを明らかにできる。(例：「して行く」＝「して（から）行く／して行く」) ヒンディー語も、本来の意味を保持した動詞を接続する場合には、‘ laṛ marnā ’「?戦い死ぬ／戦って死ぬ（＝戦死する)」, ‘ jal marnā ’「焼け死ぬ／?焼けて死ぬ」のように、接続分詞を使用する形式と同時に、語幹にそのまま付加する形式があるものもある。しかし、実際、汎用性のある形式は、この接続分詞を使用した

形式である。[23]

動詞複合については、以下に、ヒンディー語，日本語共に、観察された形態を一括して表にしておくので、随時、参照されたい。

[23] ヒンディー語の ‘ dekhnā ’「見る」については、「～を見て、…。」のように文を後続させる場合、接続分詞を付けた ‘ dekhkar ’ ではなく、語幹 ‘ dekh ’ をそのまま使用していることがある。日本語も、『て』形の代わりに、動詞の語幹に当たる連用形「見（＞見る）」,「食べ（＞食べる）」を使用するが、ヒンディー語の語幹にも同じ機能があるものと推察される。

ヒンディー語の動詞複合についての形態

語幹

語幹 [ゼロ語尾]	先行動詞 後続動詞
kah：言う bhūl：忘れる lauṭ：帰る ho：なる	ānā：来る
kāmp：震える khil：咲く gūmj：響く cauṃk：驚く cīkh：叫ぶ dauṛ：走る bol：話す ho：なる	uṭhnā：起き上がる
le：取る ho：なる	calnā：歩く
ā：来る uṛ：飛ぶ kah：言う caṛh：乗る chā：覆う chip：隠れる chūṭ：離れる ṭhahar：泊まる ḍāl：注ぐ ḍūb：溺れる thak：疲れる dahal：怯える paṛ：生じる pahumc：到着する phail：広がる bamdh：結ぶ bac：助かる baṛh：進む、増える badal：変わる、変える ban：なる、作られる bah：流れる bīt：過ぎる、経つ baiṭh：座る bhūl：忘れる mac：生じる、起こる mar：死ぬ	jānā：行く

mil：会う、手に入る muṛ：曲がる rah：暮らす、いる ruk：止まる lag：付く le：取る leṭ：横になる so：寝る hār：負ける hil：揺れる ho：なる	
kar：する mār：殴る	ḍālnā：入れる
kar：する khol：開ける girā：落とす cal：歩く choṛ：放す、捨てる jhukā：（頭など）下げる ḍāl：注ぐ ḍhahā：破壊する toṛ：折る、壊す dilā：与えさす dauṛā：走らせる de：与える pheṃk：投げる banā：作る bujhā：消す bhej：送る lagā：付ける lauṭ：戻る	denā：与える
uchal：跳ぶ uṭh：起き上がる utar：降りる cal：歩く dauṛ：走る bol：話す ro：泣く	paṛnā：生じる
ā：来る kar：する （生産性が高いため以降省略）	pānā：得る
kah：言う kho：失う dho：洗う	baiṭhnā：座る
kah：言う dekh：見る soc：考える	rakhnā：置く

ā：来る uṛā：飛ばす kah：言う guzar：過ぎる、経つ ghūm：散歩する、回る cal：歩く jagmagā：輝く jal：燃える ḍūb：溺れる dekh：見る pheṃk：投げる bol：話す lag：付く lā：持ってくる sun：聞く haṁs：笑う （生産性が高いためその他省略）	rahnā：いる（暮らす）
pakaṛ：掴む、捕まえる bīn：選ぶ bulā：呼ぶ	lānā：持ってくる
kar：する khā：食べる gher：取り巻く jīt：勝つ dekh：見る nikāl：出す paṛh：生じる pahacān：見分ける banā：作る biṭhā：座らせる mān：認める milā：合わせる rok：止める le：取る samajh：理解する sīkh：学習する、（技能を）学ぶ soc：考える ho：なる	lenā：取る
ā：来る kah：言う khā：食べる jā：行く pahuṁc：到着する batā：伝える banā：作る ho：なる （生産性が高いためその他省略）	cuknā：終わる 拘束形式

ā：来る kah：言う khā：食べる jā：行く pahcān：見分ける mār：殴る mil：合う、手に入る rah：暮らす、いる le：取る ho：なる （生産性が高いためその他省略）	saknā：できる 拘束形式

不定詞

不定詞 [語尾：-na,-ne,-nī]	第一動詞 第二動詞
calānā：動かす paṛhnā：学ぶ、読む bolna：話す （生産性が高いためその他省略）	ānā：来る
karnā：する khelnā：遊ぶ banānā：作る mānnā (cāhie)：認める lānā (cāhie)：持ってくる sunnī (cāhie)：聞く honī (cāhie)：なる （生産性が高いためその他省略）	cāhnā(cāhie)：欲する
āne：来る（不定詞の斜格形） karne：する kholne：開ける calne：歩く choṛne：放す jalne：燃える ḍālne：注ぐ toṛne：折る、壊す banāne：作る bolne：話す bhejne：送る （生産性が高いためその他省略）	denā：与える
uṭhnā：起き上がる uṭhānī：起こす jānā：行く dauṛnā：走る rahnā：暮らす、いる （生産性が高いためその他省略）	paṛnā：生じる

karne：する（不定詞の斜格形） sone：寝る （生産性が高いためその他省略）	pānā：得る
āne：来る（不定詞の斜格形） karne：する khāne：食べる jalne：燃える jāne：行く dekhne：見る paṛhne：学ぶ、読む bajne：鳴る baṛhne：進む、増える bhāgne：逃げる macāne：起こす rahne：暮らす、いる lagne：付く、感じる socne：考える hone：なる （生産性が高いためその他省略）	lagnā：付く
ānā：来る karnā：する jānā：行く dekhnā：見る paṛhnā：学ぶ、読む milnā：会う、手に入る （生産性が高いためその他省略）	honā(copula)

未完了分詞

未完了分詞 [語尾：-tā, -te, -tī]	第一動詞 第二動詞
paṛhtī：学ぶ	ānā：来る
jittā：勝つ baṛhte：進む、増える lete：取る	jānā：行く
(ghoṣit) karte：（宣言）する raṭṭe：復唱する	pānā：得る
dekhte (hī)：見る dete na*：与える　＋（否定辞）	bannā：なる 作られる できる
uṛātā：飛ばす caltā, calte：歩く cubhte：刺す jaltā：燃える dekhte：見る badaltā：変える、変わる	rahnā：いる（暮らす）

soctā, socte : 考える hotā, hotī : なる	
kartā, karte, kartī : する	honā(copula)

完了分詞

完了分詞 [語尾 : -ā, -e, -ī]	第一動詞 第二動詞
calā, calī : 歩く	ānā : 来る
kiyā : する jāyā(*gayā) : 行く diyā : 与える socā : 考える	karnā : する
kahā, kahī : 言う（いわゆる受身構文の複合） calā, calī, cale : 歩く chale : だます diyā, dī, di(y)e : 与える nikālī : 出す pakaṛe : 捕まえる baiṭhā : 座る rahā : 暮らす、いる sajāyā : 飾る	jānā : 行く
kie : する batāe : 伝える banāe : 作る	denā : 与える
dekhā : 見る likhā : 書く	pānā : 得る
pakaṛe : 掴む，捕まえる	rakhnā : 置く
aṛā : とどまる、固執する chipe, chipī : 隠れる ḍūbā, ḍūbe : 沈む、溺れる paṛe : 生じる bane, banī : なる、作られる、できる	rahnā : いる（暮らす）
kiyā, ki(y)e, kī : する	honā(copula)

日本語の動詞複合についての形態

連用形＋本動詞

接続述語 / 先行動詞の形態	後続動詞
書き／出	－だす －かける －はじめる －つづける －おわる －つくす －まくる －とおす －きる －たおす －こむ －あげる －とげる －たりる －あきる －つかれる －なおす (－かえる) －くらべる －わすれる －まちがう －ちがえる (－とめる) －そこなう －なさる（－なさい） －かねる －すぎる

『て』形＋本動詞

接続述語 ＼ 先行動詞の形態	後続動詞
書いて／出て	－みる／－みえる －みせる －ある －いる －いく －くる －しまう －おく －もらう －やる －くれる －あげる －いただく －くださる －さしあげる （－ちょうだい） （－ござる）

語幹＋接辞

	接辞
書か／出	－せる／－させる －す／－さす －れる／－られる
書き／出	（－ます）
書く／出	
書け／出	－る／－れる
書こ／出	

第８章　使役構文

ヒンディー語も日本語も、使役を表わす場合、基本的に、語幹に使役接辞を付加した動詞形態を使用することは、第１章，前章で述べてきた。しかし、両言語間では、動詞以外の語に対する標示が異なる。ヒンディー語は、実際の動作主に‘ se ’「から，よって，対して」を付加して、‘ -vā- ’接辞を複合した使役動詞を使用する。

一方、日本語は「彼に仕事をさせる」のように「…に～をさせる」が典型的な使役文である。しかし、これは動詞「する」に使役接辞「－せる」が付いたものである。たとえば、五段活用の「行く」に使役接辞を付加すると、通常、「行かせる」となるが、前提として「(自分以外の者が) 行くことを（自分が）する」が「行かせる」となっていることが窺える。すなわち「未然形＋せる」にこそなっているが、深層に未然形の動詞が目的語として埋没しているのである。

接辞とはいえ、「－る」で終わり、また別の文要素が後方に付く時に動詞変化を起こす（例えば、過去形にした時の「せた」や「やった」を付けた「せて＋やった」）ので、日本語の使役接辞が動詞と密な関係にあることは容易に察しがつくが、ヒンディー語のこの接辞は、品詞の出自が不明である。ヒンディー語の祖語に当たるものは、サンスクリットをはじめ、ほぼ使役接辞を付加した使役語幹を持つので、その出自を追跡することは不可能に近い。しかしながら、インド・ヨーロッパ語族の現存する諸言語では、使役には動詞が使用されることが多い。あくまで推測の域を出ないが、ヒンディー語のこの接辞も、その動詞が文法化[1] の過程をたどって拘束形式の接辞になったものと仮定し、ヒンディー語と日本語の使役構文について議論を進めていく。

8.1　接辞型使役構文

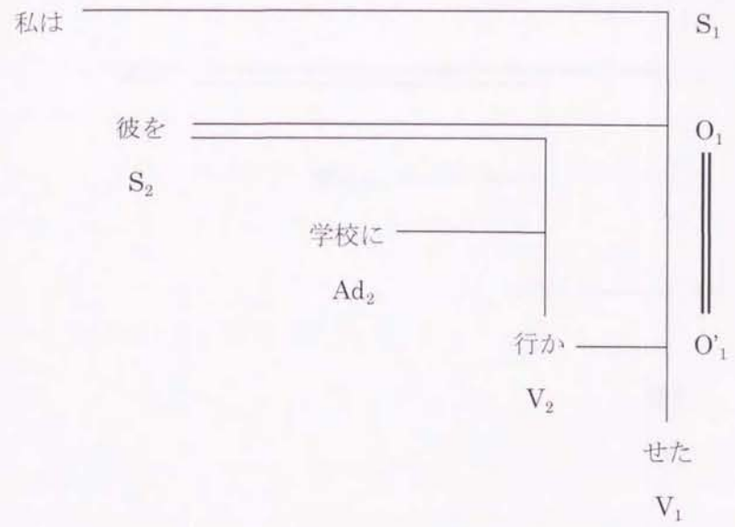
8.1.1　自動詞

ヒンディー語の使役構文を分析する前に、まず、馴染みの深い日本語の使役構文から観察する。以下に自動詞「行く」を使った例を挙げる。

(1)　私は彼を学校に行かせた。

---

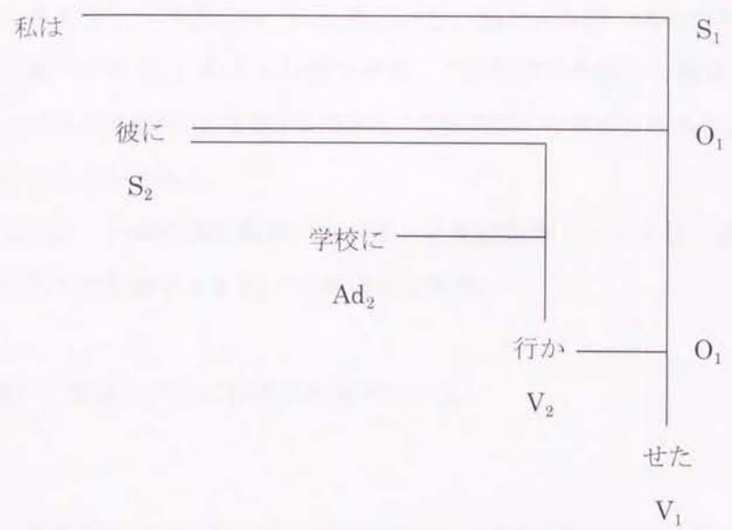
[1] 動詞の細分化。すなわち、助動詞から接語（clitic）へ、接語から接辞（suffix）への文法化。



上記の例文を分析すると、第一層では、単純な SOV の「S が O をする」となる。第二層では、「彼」が S,「学校に」が斜格名詞句の Ad,「行く」は V であり、この第二層で形成されるのが、SV の命題「彼が（学校に）行くこと」である。この命題が本来第一層での目的語、すなわち O'_1 になるが、そのうち、「彼を」の部分だけが、第一層に表われ、V の目的語となっている。論理的に考えると、第一層の SOV は、結局、「－せた」の部分が、「私が O の行為をする」となり、その対象行為が「彼が学校に行くこと」になっている。したがって、この文は私が直接彼に命じるか何らかの形で行かせるという直接的な使役文になる。

その一方で、日本語では「～にさせた」という「に」格をとる文もある。実際、「私が彼に行かせた。」となると、目的語の部分が与格になり、格標示が違うだけで、大した違いを感じさせない。しかし、「に」格を取っている以上、何らかの違いがある。実際、観察すると文の内部構造が明らかに違う。以下に、「私が彼に行かせた。」の構造図を示し、詳しく分析してみたい。

(2)　私が彼に学校に行かせた。



この文は第一層では、二重目的語をもつ SOOV 文である。ヒンディー語は先行の O が与格標示（Dat）され、後続の O が対格標示（Acc）となる。したがって、「…に～を与える」が、基本文型になっている。したがって、上の文とは違い、対格標示の O の部分が第二層の命題「彼が学校に行く」となり、論理的には「彼に、彼が学校に行くことを、与えた」になるのである。そうなると、同じ使役接辞を使っていても、上の文とはおのずと意味が違ってくる。

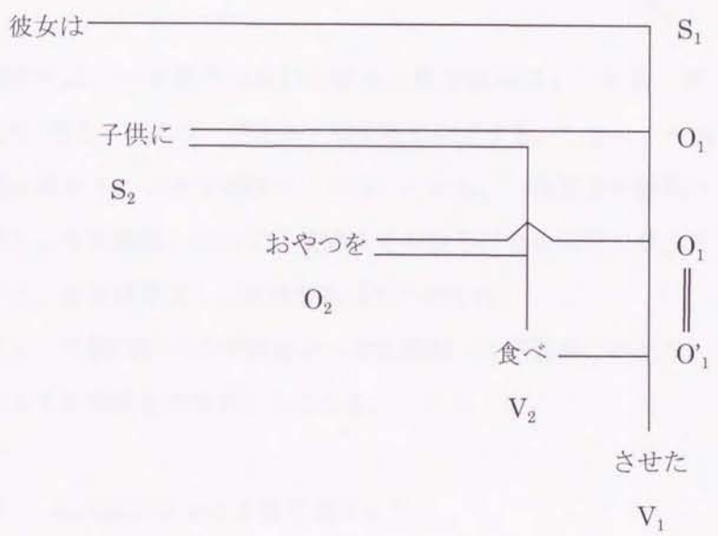
本論文では、先の「を」格を取る使役を「する」型使役とし、この「に」核を取る使役を「与える」型使役とする。「する」型使役は、「彼が学校に行く」ということを「私がする」ことになる。したがって、相手の意向にかかわらず、あくまで私が主体になって遂行するため、直接的な使役でありかつ強制的なものになる。しかし、「与える」型使役は、あくまでそういう行為を与える以上、実際の行為者の意向も多少加味されるので、間接的な使役になり、高圧的な強制性はなくなる。そうはいっても、あくまで「私が与える」という立場がある以上、身分の上下等にみられる力関係が背後に働く。このため、実際、多少の強制性を感じるのは免れないが、後者の「与える」型使役の場合、相手の意向がある場合は、使役というより許可の意味合いが強くなる。

8.1.2　他動詞

もう１つ、日本語には「に」格と「を」格を両方持つ使役がある。「彼女は子供におやつを食べさせる。」のような例である。この例文の命題中の動詞「食べる」は目的語を１つだけ取る他動詞（2 項動詞）である。自動詞がこの構造を取ることはない。「に」格か「を」格のどちらかである。

以下に、一段活用の動詞「食べる」と使役接辞「－させる」を複合した例、「彼女は子供におやつを食べさせる。」の構造図を示す。

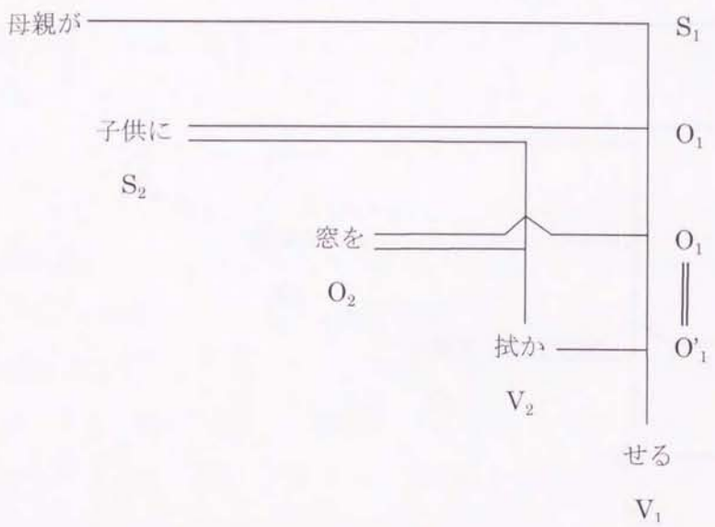
(3)　彼女は子供におやつを食べさせる。



第一層の構造は、構造図中に示したように、SOOV の「与える」型である。第二層には、命題「子供がおやつを食べること」が埋め込まれている。その命題中、第一層に現れているのは「おやつを」の部分のみである。

また、五段活用の動詞「拭く」と使役接辞「－せる」を複合した「拭かせる」を持つ例「母親が子供に窓を拭かせる。」の構造図を示す。

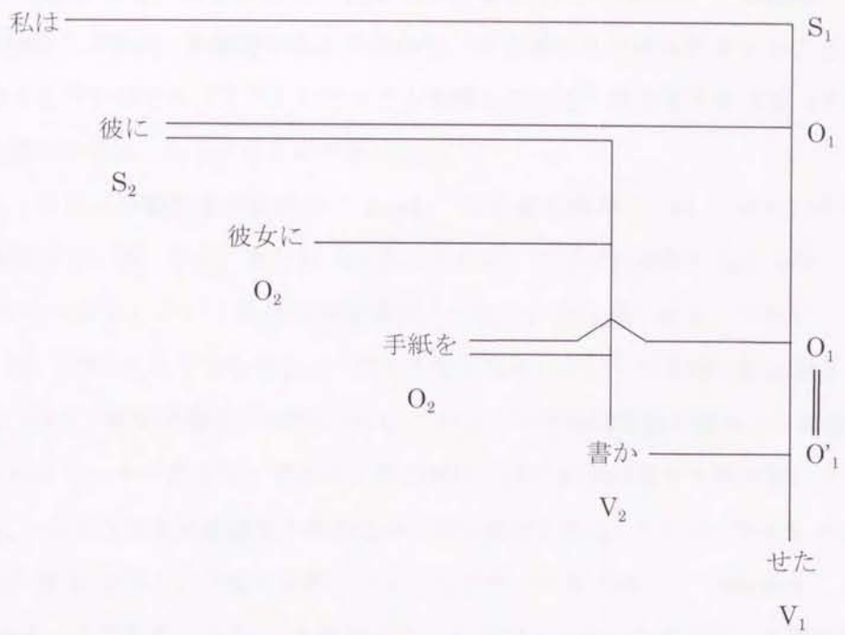
(4)　母親が子供に窓を拭かせる。



構造図は、一段活用の動詞の場合と構造図は同じである。第一層、すなわち表層では SOOV 型で、これは「与える」型使役に相当する。しかし、一段活用の動詞と五段活用の動詞は複合される使役接辞が「せる」になる。一段活用の動詞は「食べる」の「食べ」が語幹もしくは語根となって、接辞はその後ろに自由に付くが、五段活用の動詞は「拭く」の「く」が音韻変化し、未然形の「か」になる。

また、他動詞には目的語を２つ取る動詞（３項動詞）がある。これが命題中に埋められると以下に挙げる例文のようになる。

(5)　私は彼に彼女に手紙を書かせた。



「に」格が連続することになるが、前者の「に」格は第一層と第二層に帰属するものであるが、後者の「に」格は、第二層の命題「彼が彼女に手紙を書くこと」に帰属している。したがって、「彼女に」の部分は、第一層の中ではオプションとなるのである。この「…に～を」使役構文の場合、先の「に」使役構文と同様、SOOV が基盤となって「与える」型使役になるので、純然たる使役の意味にも使用することが可能だが、許可を表す場合にも使用され得る。

このように、日本語の使役接辞「－せる／－させる」が使役と許可の意味を両方醸しだすのは、同じ使役接辞を使っていても、表層に現われる格標示が指し示すとおり、根本的に文の内部構造を違えているためである。

日本語の代表的な使役構文は以上のようであるが、これらの構造に着目し、同じ接辞によって使役を表すヒンディー語ではどうなるかを、ここからみていく。

第 1 章の品詞のところで述べてあるが、ヒンディー語の場合、「行く」‘ jānā ’ に使役接辞 ‘ -vā- ’ を付加した「行かせる」にあたる派生形はない。「来る」‘ ānā ’ からの派

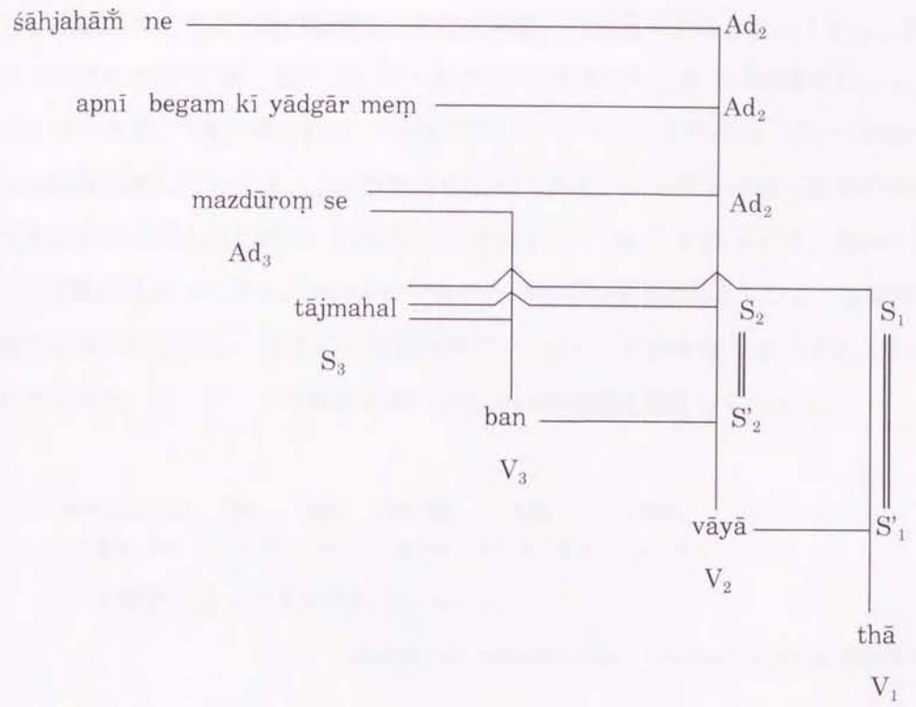
生形「来させる」も同様である。音韻的な問題が大きいと思われるが、その場合は形態派生が不可能なので、若干迂言的ではあるが、意味からの補充形 ‘ bhejnā ’「送る」, ‘ bulānā ’「呼ぶ」を使用する。すなわち、人を送ったり呼んだりすることが、論理的にその人を行かせたり（その人が行くことを誰かがする）来させたりする（その人が来ることを誰かがする）ことになるのである。

また、コピュラ動詞兼本動詞の ‘ honā ’ にも使役接辞 ‘ -vā ’ が付いた形はない。この動詞は「いる，ある」または「なる，生じる」などの日本語に当たるが、日本語の場合、「なら－せる」という具合に使役接辞「－せる」を付加できる。しかし、この「ならせる」は、「??うれしくならせる」,「??よくならせる」という形容詞の変化形とコピュラとしての「なる」使用の場合には使わない。このような形容詞述語の埋め込みの場合は、「(人を）うれしく」＋「させる」である。先の形は「僕の友達は息子を政治家にならせるんだってさ。」のような名詞述語文の埋め込みになら使用される。[2] S が PredN の場合、元々の A が B になるという変化を伴うので、ヒンディー語の場合、‘ banānā ’「作る」(< ‘ bannā ’「できる，なる」) を使用する。ヒンディー語のこのコピュラ動詞兼本動詞の ‘ honā ’ は、元々の A が変化して B になるのではなく、自然発生的に A が生じて存在するので、使役の必然性がない。

このような意味的な補充形にたよる自動詞の使役はさほど多くはなく、使役接辞 ‘ -vā ’ が付加される自動詞の方が圧倒的に多い。以下にその例を示す。

(6) śāhjahāṁ ne apnī begam kī yādgār meṃ tājmahal
シャーハジャハーン 能格 自分の 王妃 の 記念 に タージマハル
banvāyā thā.
作らせる－完了 コピュラ－過去
「シャーハジャハーンは王妃の形見としてタージマハルを作らせた。」

[2] 「ならせる」は、「なる」＋「する」で、一語化して「にする」と考えられる。第５章述語複合 (1) を参照。



第一層は、コピュラ動詞が表示されているので、「S の状態があった」の部分になる。V_3 には、本来、‘ banvānā ’ の使役接辞が外れた形 ‘ bannā ’「できる[3]」が入ることになる。その主語には与格後置詞[4] がついているが、「タージマハル」である。この命題は、「タージマハルができる」になる。「誰（の手）によって」という部分が欠落しているが、実際に作ったのは、ここでは労働階級の者であり、その行為者が挿入される場合、道具格の ‘ mazdūroṃ se ’「労働者たちによって」や ‘ mazdūroṃ (ke) dvārā ’「労働者たちを通じて」になる。これは例文中には出てきてないが、文法関係を明らかにするため、構造図内にはこの句を補って表示してある。省略されている理由は、この文の主題が、作らせたことにあるのではなく、王妃の形見に作ったことにあるからである。この文を日本語にすれば、「シャーハジャハーン王は王妃の形見にタージマハルを作った。」となる。日本語の場合、実際、王が作っていなくても、他動詞の「作る」で済み、わざわざ「－せる」

---

[3] 第１章にこの動詞の形態を挙げたが、「できる（作られる）＞作る＞作らせる」が、ヒンディー語の形態上の派生形に相当する。この場合の「できる」は、「作る」の自動詞対応がないため、意味から補充されたものと思われる。（ ）内の「作られる」は、受身接辞「－れる」を付加した複合形である。

[4] 与格後置詞の別機能については次章で詳しく述べる。

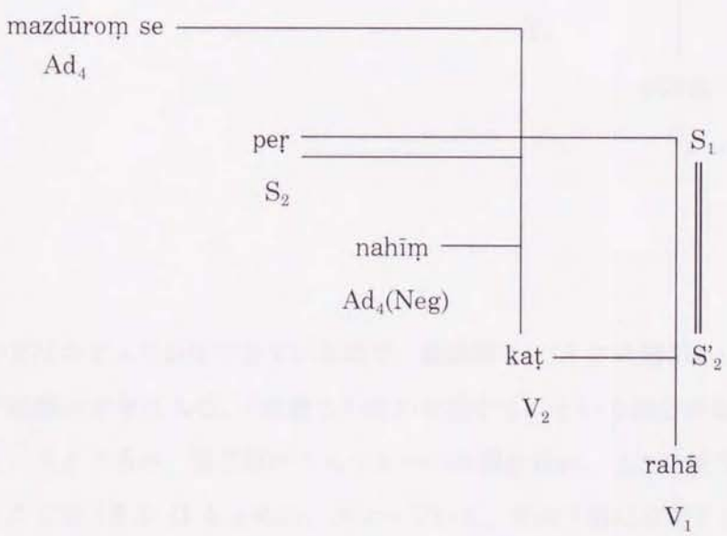
の接辞をつけていう必要はない。これは、「労働者に」という使役性に関わる部分にテーマが置かれていないからである。

ところが、ヒンディー語の場合は、たとえ実際の行為者が省略されようとも、第一層で、「Sの状態にある」、第二層で「S が～をする」、最後の第三層で「労働者によってタージマハルができる」（言い換えれば、「労働者がタージマハルを作る」）となる命題の基本的な文法関係が崩れないまま、文に反映されるのである。ヒンディー語で使役の接辞を複合した動詞形態が現われた時に、往々にして行為者が ‘ se ’ を取るのは、動詞の種類によって「労働者によってタージマハルができた」,「包丁で手が切れた」のような擬似受身（中動態の要素）が出現し、そういう命題状態に ‘ -vā- ’ 接辞を使って「する」と言っているためである。ここで、この擬似受身の例とその構造図を観察してみよう。

(7) mazdūroṃ se peṛ nahīṃ kaṭ rahā.
労働者（複） よって 木 否定辞 切れる一語幹 いる一完了

「労働者によって木が切れていない。」

[Sarasvatī mānak hiṃdī vyākaraṇ tathā racnā : 122]

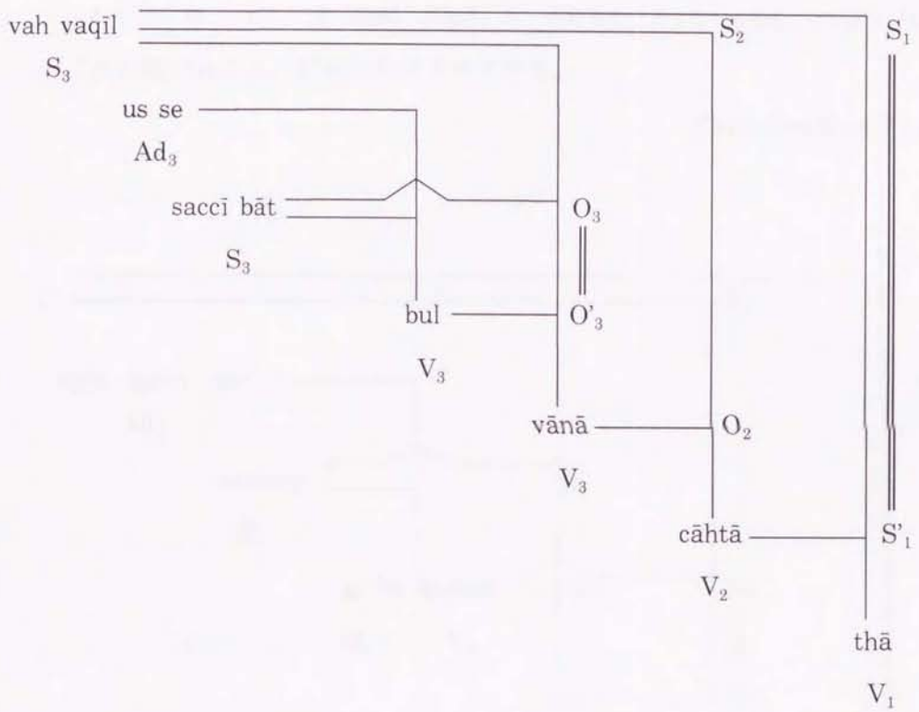


この例は、前節の動詞複合になっているので、二層構造になる。擬似受身と呼ばれる構造は、第二層にある「労働者によって木が切れない。」の部分である。使役構文では、こ

の層全体が、論理的に上層の目的語として埋め込まれることになるのである。

もう１つ、別の例を観察してみよう。

(8) vah vaqīl us se saccī bāt bulvānā cāhtā thā.
あの 弁護士 彼 よって 本当の こと 話させる－不定 欲する－未完了 コピュラ－過去
「あの弁護士はやつに本当のことを言わせたかったのさ。」



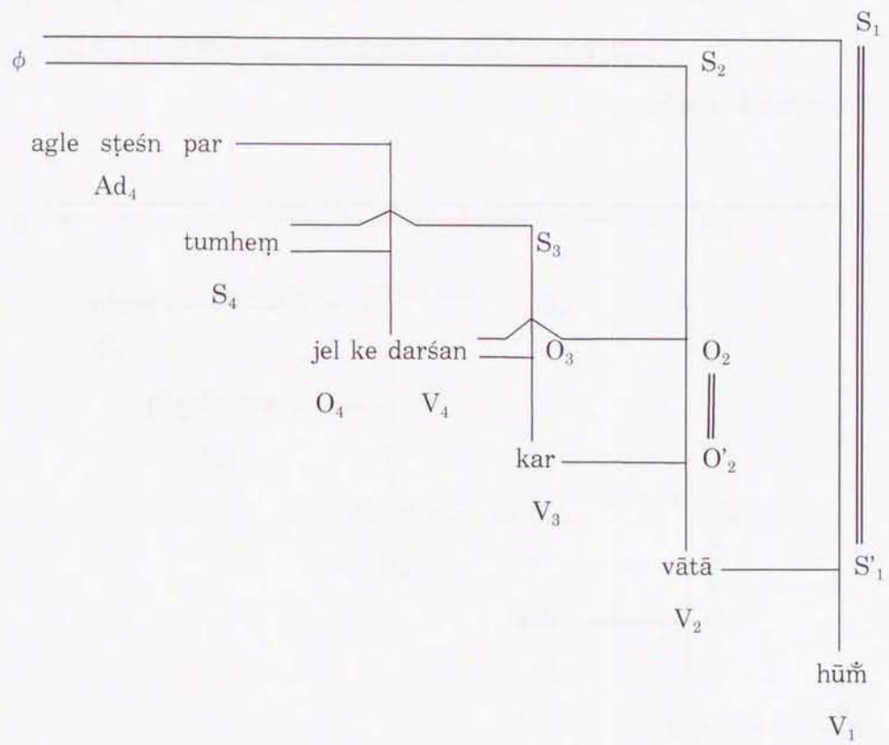
この文はコピュラが出てきているので、最表層で、「S の命題があった」となる。第二層でその命題の中身に入る。「弁護士が何かを欲する」という部分が最初の命題となり、何らかというところが、第三層内でもう１つの命題を含む。ここに使役が含まれている。再び、ここでは「S が O をさせる」となっている。その下層に位置する「彼によって本当のことが話された」という命題は、‘ bannā vs. banānā ’「できる vs. 作る」の場合と同じく、「彼が本当のことを話す」に転換することができる。ヒンディー語の「話す」‘ bolnā ’

には「話される」という一語の単純形[5] はないが、最下層のところでは、その命題が含まれているものと解釈できる。

次に他動詞の代表的な動詞「する」の使役派生形を挙げる。この動詞は通常の「仕事をする」,「勉強をする」から、名詞を複合した「勉強する」,「記憶する（覚える）」などの名詞編入動詞に使用される。以下の例文はこの名詞編入動詞のパターンである。

(9) agle ṣṭeśn par tumheṃ jel ke darśan karvātā hūm̃.
次の 駅 上に 君（対格） 刑務所 の お目見え させる－未完了 コピュラー現在
「次の駅でおまえに刑務所を拝ませてやる。」

[Cācā Caudharī 7 : 68]



第四層では、「次の駅でおまえが刑務所を見る」という命題が生成される。主語である

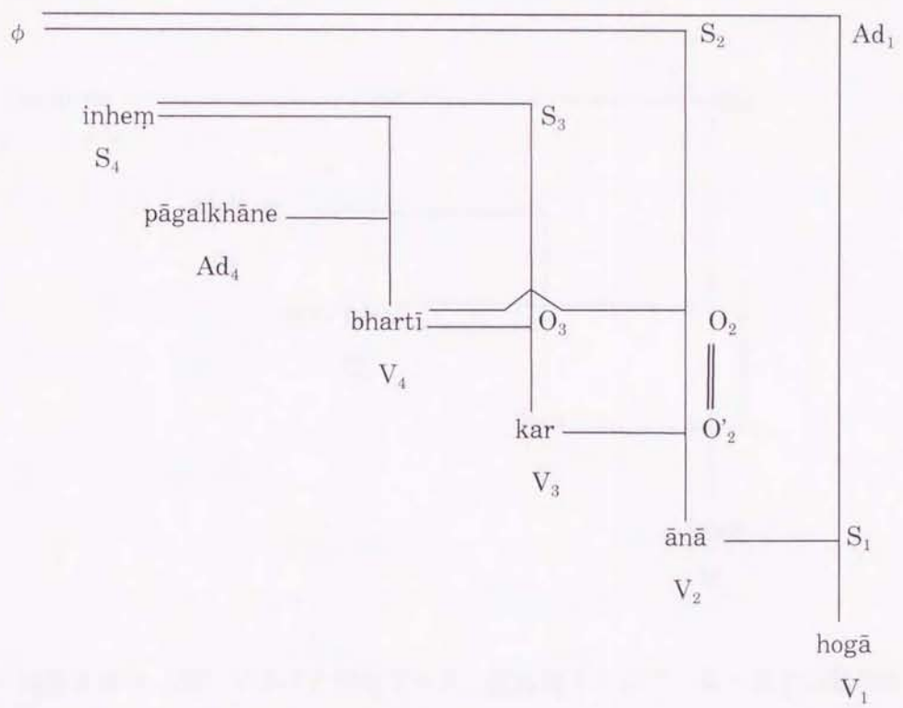
[5] 他の形態と照らし合わせると ‘ *bulnā ’ になると考えられる。（1.1.3 を参照。）他動詞 ‘ bolnā ’ の意味は「話す，しゃべる」になるが、その派生形の１つ ‘ bulānā ’ は「呼ぶ」となり、純粋な派生的意味ではなく、何らかの意味転換を起こしているようである。

「おまえ」が与格標示になり、「刑務所のお目見え」の部分が、本来、動詞派生名詞を複合した名詞句構造を成している。（構造図が複雑になるので、この部分は標示していない。）第 4 章の名詞との述語複合を成すのが、次の第三層である。第四層の命題全体が、第三層上で目的語となる。主語はφの人間、最表層では、コピュラ動詞は V_1 になり、命題を全体的に修飾する。したがって、命題の部分が S_1 となり、「そういう状態に現在ある」という V_1 に一致する。第二層では、動作主である主語が文中では欠落しているが、第一層の V_1 に当たるコピュラ動詞から一人称単数であるのが分かる。したがって、第二層では、φは一人称が主語になり、「次の駅で」が修飾句、「おまえに」の部分が与格で、目的語は「刑務所のお目見え」となり、「させる」という動詞に連結する。第四層に埋もれている文法関係は「おまえが刑務所を拝むこと」を「する」である。

(10) inheṃ pāgalkhāne bhartī karānā hogā.
この方 精神病院 入れること させる－不定 コピュラ－未来

「この方は精神病院に入院させることになりますね。」

［Cācā Caudharī 7 : 34］



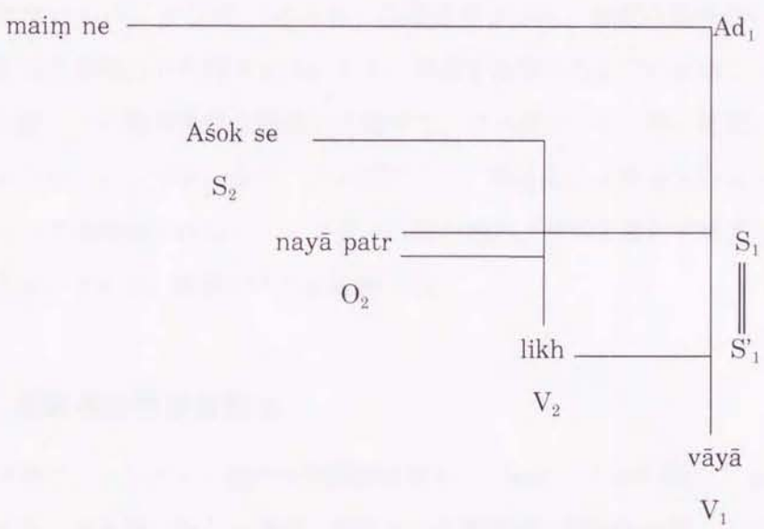
最表層では、コピュラ動詞の未来形が V_1 になり、命題を全体的に修飾する。したがって、

命題の部分が S_1 となり、「そういう状態に将来なるであろう。」という V_1 に一致する。第二層では、動作主である主語が文中では欠落しているが、医者が患者の親族と話ししている文脈から「あなた」もしくは「私たち」になる。その場合、V_2 に不定詞がきていることから、全体が与格構文を成しているので、与格後置詞つきの人称が付与される。

第二層では、φの一人称が主語、「次の駅で」が修飾句、「おまえに」の部分が与格で、目的語は「この方を」となり、「させる」という動詞に連結する。第三層に埋もれている文法関係は「この方」が「病院に入る」の部分である。

この文は、1つ前の文と酷似しているが、動詞の部分が使役の標準形とされる‘ karvānā ’ではなく、非標準形とされる‘ karānā ’になっている。それぞれ名詞プラス「する」動詞が使われているが、前者は第2章で詳しく述べた目的語を含んだ名詞句との複合で、後者はその抽象名詞が、動詞の側に編入されていく名詞編入動詞になっている。この違いから、第二層で目的語となる部分が違ってくるが、格標示は根本的に変わらず、文構造が同じであるということは否めない。すなわち、自動詞の場合に‘ -ā- ’接辞を付加して、見かけが他動詞のような第一使役を作ったのとは違い、他動詞の場合につく‘ -ā- ’接辞は、本来の‘ -vā- ’接辞が不完全調音[6] になっているものと考えられる。

もう1つ、名詞を複合することのない、純粋な他動詞の例を挙げる。



これは第4章の（32）で挙げた例文である。能格構文なので、第一層では動作主が斜格

[6] 日本語の「わたし」（watashi）が「あたし」（atashi）になる不完全調音に同じ。

名詞句となり、目的語が絶対格になっている。第二層では、「アショークによって新たな手紙が書かれる」すなわち「アショークが新たな手紙を書く」という命題が含まれる。

(11) ....vah vyakti kaise kisī ko marvātā hai aur
あの 人 どのように 誰か を 殴らせる一未完 コピュラー現在 そして
kaise kisī ko mārtā hai.
どのように 誰か を 殴る一未完了 コピュラー現在

「あの人がどうやってやっつけさせるか、また、やっつけるか。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 35]

これは、複文である。等位接続詞でつながれている。先行の単文に ' marvānā ' という使役接辞をともなった動詞が使用されている。後続の文には、' marnā ' は「やられる，死ぬ」の他動詞形 ' mārnā ' が使用されている。先行の文は、命題が「誰かによって誰かがやられる」となるので、手を下す行為者は ' se ' になる。

以上、使役接辞を使用した使役構文を観察したが、日本語の場合、「－せる，－させる」の使役接辞を使用して使役を表わす場合、「を」格を取る「する」型使役と、「に」格もしくは「～に…を」格を取る「与える」型使役が存在する。「する」型使役は強制の意味しか持たないものになるが、「与える」型使役の２つは、強制の意味合いが弱くなり、代わりに許可の意味合いを持つものになる。構造を比較した上でいえることは、ヒンディー語の方には、この使役接辞を使用した使役は、日本語の「する型」使役に当たり、強制性を多分に含むものになる。また、日本語の「に」格を取る使役構文のように、許可を表わすものとしては使用されない。ヒンディー語の場合、許可を表わす構文には、別の構文が存在するからである。次節でそれを観察する。

8.2 動詞複合型使役構文

第７章で、ヒンディー語の不定詞斜格形と ' denā '「与える」，' pānā '「得る」を複合すると、日本語に訳した場合、先行する主動詞側に使役性が生じることを述べたが、ここでは、そのメカニズムについて考察してみたい。前節で述べたように、日本語には、使役の接辞を使った、自動詞の「を」使役構文と「に」使役構文、また、他動詞の「～に…を」使役構文があるが、構造図でみたように、「を」格を取る場合が、完全な「する」型

使役で、強制性を生むものになる。ここで取り扱うヒンディー語の構造は、その強制とは少し違い、通常、許可を表わす表現になるものである。

日本語には、ヒンディー語の ‘ denā ’, ‘ pānā ’「得る」に相当する「やる」,「もらう」を複合した「～させてやる」(「～させてあげる」,「～させてくれる」) や「～させてもらう」の意を生じる構文であるが、まずは、日本語の方を観察してみる。

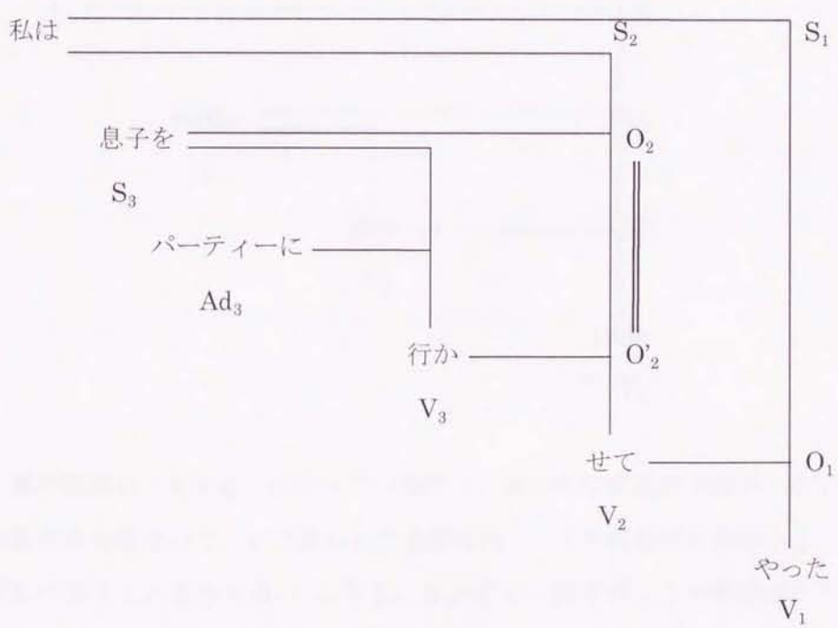
(12) 私は、息子をパーティーに行かせてやった (行かせた)。

(13) もう、私はあの犬にご飯を食べさせてあげない。

(14) 母は、僕をパーティーに行かせてくれた。

(15) 僕は、パーティーに行かせてもらった。

上の四例のように、日本語では許可を表わす場合に、必ず「させて」という使役の形を取る。最初の文を構造図にして分析してみる。

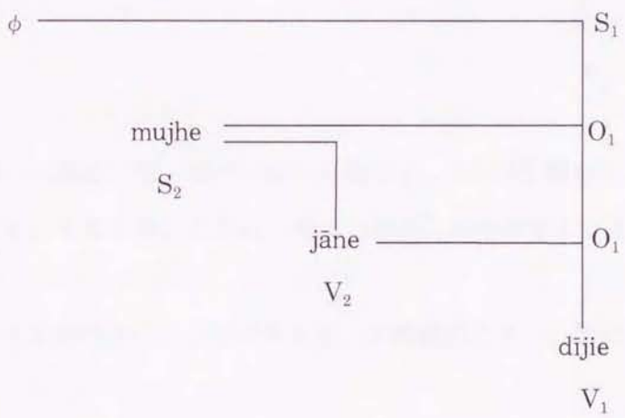


第三層に「彼がパーティーに行く」という命題が作り出される。第二層は、前節で考察した使役化する「する」の部分で、「私が、(第一層の命題) をする」になる。第一層の「やる」は、半ば漠然化した動詞になり、そういう行為を与えることになる。全体が「私が、息子がパーティに行くことをすることをやった。」という命題が複合されている。

ところで、ヒンディー語側の形態に合せた、この「させてやる」のような複合形式は、上で観察した構造図でも分かるように、前節のベクトル動詞のような振る舞いになる。半ば誤用かと思われるこの形式は、「やった」のが「誰に」やった、すなわち、誰に影響を及ぼしたか分かり難い。「息子を」が格助詞「を」を取りながら「に」を含意しているとも考えられるが、それにしてもやはり曖昧な文になるのは否めない。したがって、日本語の方は、冗長的な「やる」を削除した、使役「させた」で十分になる。では、これに関連するヒンディー語の例を観察してみよう。

(16) mujhe jāne dījie.
私に 行く－不定 与える－命令
「私を行かせてください。」

[Hindī vyākaraṇ : 314]



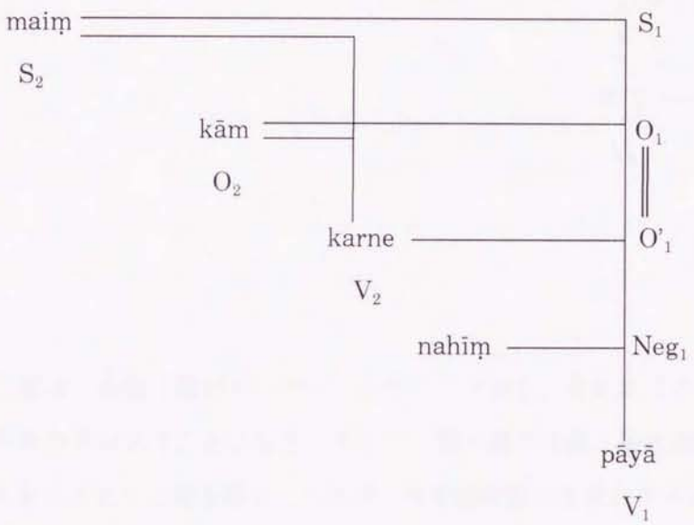
第一層の動詞が「与える」になっているので、基本的な構造は SOOV になる。V_1 は二人称複数の命令形なので、ϕ で表わした主語には、二人称複数代名詞が入る。論理的には「ϕ が私に来ることを与える。」になる。ヒンディー語では、この構造が許可を表す表現になるが、これは、「与える」ということにより、相手の意思を少なからず反映できるか

らである。

これとは逆の意になる、「させてもらった」には、‘ pānā ’「得る」を使用する。次にその例を挙げる。

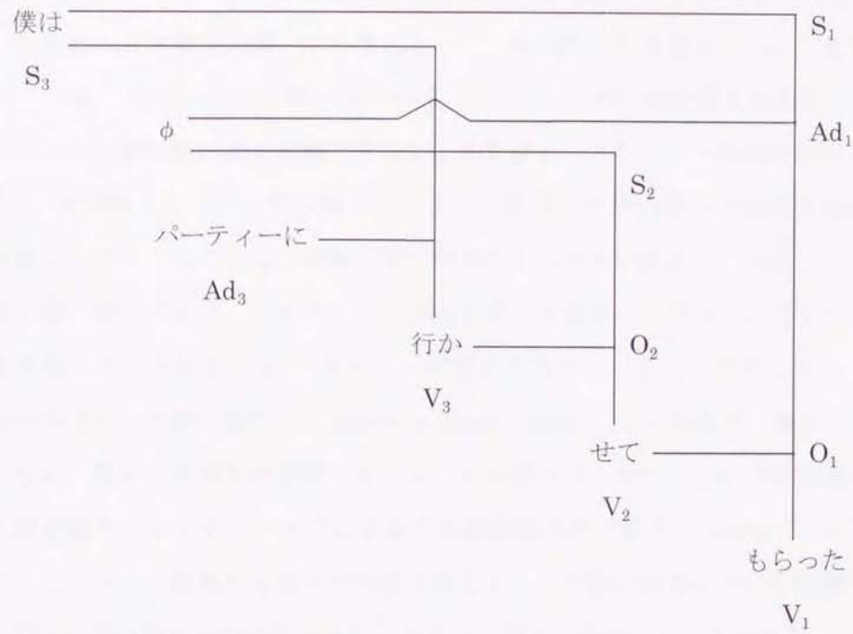
(17) maiṃ kām karne nahīṃ pāyā.
私 仕事 する－不定 否定辞 得る－過去
「私は仕事をさせてもらえなかった。」

[Prayog aur prayog : 201]



第二層の主語は、第一層の主語と一致する。「私が仕事をする」という命題を「私が取る」となる。すなわち、これは「私は（私が）仕事をすることをもらった。」ということになる。

では、日本語の方の「させてもらう」を構造図に示す。例は上に挙げた（9）の例文である。



第三層は、命題「僕がパーティーに行く」である。それに「させて」が付くので、ここで第三者の手が入ることになる。そして、第一層では第二層の命題を、第二層のφの行為者からもらうという形を取る。これが、日本語の許可を表わすメカニズムになるのである。

ところで、我々日本語を母語とする者が、不定詞斜格形と‘ denā ’,‘ pānā ’を複合する場合、統語の論理に従って、許可を表わすというのは比較的察しを付け易いが、ヒンディー語を母語にする者にとっては、日本語で「させて・やる／もらう」という複合形を使うことは、なかなか理解し難いのである。というのは、日本語には「もらう」の場合、『て』形との複合形式もあり、形態上、「してもらう」と一致しているのは、ヒンディー語の不定詞斜格形プラス‘ pānā ’の方になっているからである。この複合形式は、「話し手がすることを話し手自身がもらう」の場合に使用されるが、日本語の「してもらう」の場合、「する」の主語は、「もらう」の主語とは違うのが常である。つまり、論理的には「他人がすることを話し手がもらう」という具合になる。この発想は、ヒンディー語の統語構造では反映しきれない。敢えていうなら日本語の「私は彼に宿題をしてもらった。」という文は、「彼は私のために宿題をした。」という言い方にでも変換して、ニュアンスの

みを伝えざるを得なくなるのである。

本節では、ヒンディー語と日本語の使役構文を、構造図分析を試みながら詳しく観察したが、われわれ日本語を母語とする者にとって、形式的に行為者は‘ se ’を取り、動詞語幹に‘ -vā ’という使役接辞を付ければ、ヒンディー語の使役構文が出来上がるというだけでは、その強制性が深く理解できない。また逆に、ヒンディー語話者が日本語を学ぶ時、「を」使役構文と「に」使役構文のように、格標示の使い分けで強制を表わしたり、許可を表わしたりすることは、理解し難い項目の１つともいえよう。また、さらにもう１つ理解し難い項目がある。日本語では、許可を表わす場合に「やる（あげる）」,「もらう」動詞を複合することもあるが、「させて・やる／もらう」,「して・やる／もらう」も、ヒンディー語では、前者に当たる‘ karne + denā / pānā ’こそあるが、後者に当たる表現を持たない。複合形式自体は理解できても、日本語は「させて」という使役接辞を含んだ『て』形を取り、ヒンディー語では普通の他動詞斜格形である‘ karne ’になる。したがって、ヒンディー語側から意味で対応させると、日本語の後者の形式を彷彿させやすくなる。お互い似た形式を持つがゆえに、かえって混乱しやすいところである。

第９章　談話機能に関わる文法要素

9.1　ヒンディー語における談話機能を持つ語群

語の中には、文を構成するために不可欠な語と、文を構成するために必ずしも必要ではないオプションとして付加できる語群がある。本論文でこれまで主に扱ってきたものは前者であるが、後者に当たるものが、これまでも例文中に個所個所に出てきた小詞（particle）である。これは、元々文文法に関わるものではなく、談話文法の機能を持ったものである。したがって、単なる事象の叙述にはさほど必要ないが、対話形式のものには、かなり頻繁に登場する。これは、文の構成要素とは別次元のものであり、最小自由形式の語から句，節，文までの広い範囲で付加される。

ヒンディー語の小詞の代表として、‘ hī ’, ‘ bhī ’, ‘ to ’ がある。日本語には、談話機能を果たすものとして、「は，も，でも，こそ，しか，すら，だけ，さえ，まで」等の副助詞[1] がある。ヒンディー語の小詞と日本語のこれらとの対応として、‘ hī ’ が副助詞「こそ，だけ」に、‘ bhī ’ が副助詞「も，でも」に、そして ‘ to ’ が日本語の助詞「は」に、だいたい相当するものとされている。また、この助詞群は、「も…ない」,「しか…ない」,「さえ…ない」のように、否定辞（例は、一般的な否定辞「ない」）と呼応する。ヒンディー語もそれは同じで、これらの小詞が否定辞 ‘ nahīṃ[2] ’ と呼応する。

実際、これらは、訳語として当てはまる場合もあるが、必ずしも合致するものではなく、用法が違う場合、さらには付加される要素が異なる場合もある。

また、上述の談話機能専用の小詞とは別に、文文法の要素でありかつ談話機能も持っているものがある。ヒンディー語の後置詞 ‘ tak ’「まで，までに」が、その範疇にあるものとして挙げられる。時間的もしくは距離的な終点を表わすこの後置詞は、日本語の副助詞「まで」の用法にある、「さえ，だけ」のような１つを取り立てて強調するもしくは限定する機能も持っている。

日本語のこれらの副助詞は、細部の違いはあれ、それぞれの要素を際立たせる機能を持つ。ヒンディー語の小詞や後置詞 ‘ tak ’ も、訳語とは必ずしも一致しないまでも、持ち合わせている機能は酷似している。次節では、これらが、語，句，節，文レベルのどの文要素に付くかを観察することにするが、本論文の主眼を見失わないためにも、あくまで

---

[1] この中には係助詞といわれるものもある。

[2] この他に、否定辞には、動詞の命令形に使用される ‘ mat ’ や命令形および非定形節に使用される ‘ na ’ がある。

統語構造の範囲内で観察するにとどめる。(すなわち、談話文法の範囲での分析は行わないものとする。)

.

9.2 ヒンディー語の ‘ hī ’, ‘ bhī ’, ‘ to ’ および ‘ tak ’

前節でも述べてあるとおり、ヒンディー語の談話機能を持つ語群は、日本語とある程度対応させることができても、あくまで近似値でしかなく、日本語では表わしにくいことも多々ある。本論文では、日本語と対照させた詳細な分析・考察に及ばないまでも、統語的な側面からアプローチできる限りに用例を観察する。ここでは、語, 句, 節, 文レベルのそれぞれに分け、これらの小詞がどのように付加されるかに重点を置く。

なお、ここでは、本来後置詞である ‘ tak ’ も含めて用例を観察することにする。

9.2.1 談話機能の用例観察

9.2.1.1 語レベルでの付加

文要素となる語には、名詞, 形容詞, 動詞の３つがあることは、すでに述べてある。それぞれに付加されている小詞の例を以下に挙げる。

(1) yahī maukā hai.
これ＋小詞 機会 コピュラー現在
「これこそチャンスだ。」
[Cācā Caudharī aur pāp śo : 26]

(2) maiṃ bhī apne kām par calūm̃.
私 小詞 自分の 仕事 に 歩く－仮・未来
「わしも仕事に行くかな。」
[Cācā Caudharī 7 : 25]

(3) islie maiṃ to sotā hūm̃.
だから 私 小詞 寝る－未完了 コピュラー現在
「だから私は寝ますよ。」
[Cācā Caudharī 7 : 70]

（1）は、近称の指示代名詞に強調の小詞 ‘ hī ’ が付加されている。ヒンディー語の指示代名詞やそれを含む語（例えば、場所を表わす「ここ，あそこ」のような語）には、この例 ‘ yah + hī = yahī ’ にみられるように、強調を表わすこの小詞が一体化した形がある。（2）は、小詞 ‘ bhī ’ が使用されている。（3）は、‘ to ’ が使用された例である。この文は、後に掲載する（9）に続く文だが、中立文の場合、主語にこの小詞が付くことはない。日本語では、「は」を付けるが、この「は」と違うところは、日本語の主語に「は」が付いた場合、主語をテーマ化するものとなる。一方のヒンディー語は、単にテーマ化するだけなら、主語に何も付ける必要はない。ここで付加されている理由は、前述のとおり、何かと対比しているからである。この文脈は、対話の相手が新聞を読むという行為に入るくだりで、本人は「(自分は字が苦手だから)、寝ますよ。」という、互いの立場の対比により成立している文である。

(4)　aṃdhe　kī　saṃtān　andhī　hī　hotī　hai.
盲目の（人）　の　子孫　盲目の　小詞　コピュラ一未完了　コピュラ一現在

「盲人の子は、やはり盲目なものなのね。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 55]

（4）は、形容詞に強調の小詞 ‘ hī ’ が付加されている例である。談話機能を説明する前に、文構造について若干説明しておく。この例の述部になっているコピュラ動詞の未完了分詞と時制を持つ定形のコピュラ動詞の複合は、普遍の真理を表わすものとなる。この文の主要命題が、「盲人の子は盲目だ。」に当たる ‘ aṃdhe kī saṃtān andhī hī hai. ’ である。最後の定形動詞としてのコピュラ動詞は、この命題が存在するという外枠を成すものである。日本語でも、普遍の真理を述べる場合、「盲人の子は盲目である」という言い方をする。これは、名詞述語文の「盲人の子は盲目だ。」に存在を示す「ある」動詞を置いた二重の命題層になっている。主要命題のコピュラに当たる「だ」が、後続の動詞「ある」に接続するため、連用形「で」になっているのである。他に、「どんな花でも、花は美しいものだよ。」のような言い方もするが、これも形容詞述語文を内包した命題に「もの・だ」という「花」と「もの」を照応させて、断定の助詞「だ」で締めくくっている。したがって、命題が二重になっているという点では、先の「である」と原理的に同じである。

文構造が以上のように構成されていることに注意した上で、問題にしている小詞‘ hī ’に話を戻すと、これは、主要命題内の形容詞に強調を置く形で使用されている。「やはり（やっぱり）盲目な／もちろん盲目な／当然盲目な」のように、日本語でこれを表わす際は、形容詞の前に置くことになる。日本語の副助詞「しか」を使用し、「盲目でしかない。」という否定表現を取ることも可能であろう。

(5) sāhab! maiṃ āp ko kuch de hī rahā hūm̃.
旦那 私 あなた に 少し 与える一語幹 小詞 いる一完了 コピュラー現在
le to nahīṃ rahā?
取る一語幹 小詞 否定辞 いる一完了

「旦那、私は旦那に（お金を）少しあげようとしているだけですよ。取ろうとしているのではないのですから。」

[Cācā Caudharī aur pāp śo : 38]

2つの文から成るこの例は、動詞の語幹に小詞が付加されているものである。前の文では強調の小詞‘ hī ’が、後の文では、小詞‘ to ’が使用されている。この小詞‘ to ’は、強調を置くという点では、‘ hī ’と同じ機能を持つが、用途が少々異なる。任意に強調を置くために使用する‘ hī ’に対し、これは、他と区別して取り上げていう際の強調もしくは主題性を置く機能を持っている。ここでは、動詞の語幹‘ de ’と‘ le ’の対比して「(語幹 1) だけで（語幹 2) ではない」という具合に、後者を際立たせているのである。これは、他と区別して取り上げていうところから、日本語の「あの子は、小遣いをもらいはするけど、使いはしない。」,「ご飯を食べてはいるけど、全然太らない。」のような、主題性を表わす日本語の「は」とよく似た機能を持つのである。ただし、日本語の場合は、(『て』形も含む) 動詞の連用形に付加される。

(6) yah khisak hī nahīṃ rahā?
これ 引き出される一語幹 小詞 否定辞 いる一完了

「こりゃ、出て来やしないのか。」

[Cācā Caudharī 7 : 26]

これは、大男の靴をこっそり持ち逃げしようとする泥棒のセリフである。中立文でいえ

ば、これは事象の進行を表す動詞複合であるが、上述の（5）と同様、語幹の動詞で表わされる動作や行為を強調するものになる。否定辞は、この場合、後方の彩飾動詞の一種として付加される‘ rahā ’を否定するものとなる。

(7) ... par unhoṃne use sūm̃ghā tak nahīṃ.
しかし それら＋能格 それを 嗅ぐ一過去 小詞 否定辞

「けれども、二匹はそれを嗅ぎさえしなかった。」

[Bāl bhārtī bhāg2 : 52]

文脈を補うと、「それら」は二匹の雄牛を指す。「家に戻り、二匹の目の前に粗末な干草をやった。」という文がこの前方にある。単に「嗅がなかった」という中立的な文ではなく、「嗅ぎさえしなかった」の「さえ…ない」が付加されるのも自然である。

9.2.1.2 句レベルでの付加

次に、句に小詞を付加する例を挙げる。まずは、斜格名詞句に付加されている例を若干観察してみよう。

(8) arī Bhāgvān, kyā ghar meṃ hī ho?
感嘆詞 バーグヴァーン 疑問辞 家 に 小詞 コピュラー現在

「あれ、バーグヴァーン、（もちろん）家にいるんだろう。」

[Cācā Caudharī 7 : 47]

(9) mere lie to kālā akṣar bhaiṃs barābar hai.
私の とって 小詞 黒い 文字 水牛 等しい コピュラー現在

「私は、（新聞の黒い）文字が苦手ですからね。」

[Cācā Caudharī 7 : 70]

（8），（9）は、斜格名詞句に付加されている例である。斜格名詞句をそれぞれの持つ機能により彩るものになる。なお、（9）の「水牛に等しい」は、「難しい，苦手だ」という比喩表現である。

次に、属格の後置詞句に付加される例を挙げよう。

(10) acchā, merā to sṭeśan ā gayā.
よし 私の 小詞 駅 来る－語幹 行く－過去
「よし、私は駅に着いたぞ。」
[Cācā Caudharī 7 : 67]

若干文脈を補完するが、これは、列車に乗り合わせた見知らぬ者同士の会話である。したがって、「自分は駅に着いたから降りる。」という前提で発話された文になっている。文を観察すると、文字通りは、「私の駅が来るにいたった。」の「私の」に対比の強調を表わす小詞 ‘ to ’ が付加されている。最後の演算子である動詞を排除して考えるが、日本語で名詞句の間に「は」を割って入れると「??私のは駅が来た。」になる。「私の駅は来た。」という具合に、名詞句の後に表示しなければならない。このように、日本語の「は」は名詞句の間に割って入ることはできないが、ヒンディー語のこの ‘ to ’ は可能である。さらに、この文をヒンディー語の構造に即して日本語らしく言うとすれば、「私の（降りる）駅が来た。」になる。

同じく、属格の後置詞の後に小詞が入る例を以下に挙げる。

(11) ataḥ ab āp sabhī morcoṃ par apnī-apnī jagah par ḍaṭe
だから 今 あなた 皆（強調） 戦線 上に 各々の 場所 に 布陣する－完了
hue sab-ke-sab bhīṣm kī hī sab or se rakṣā kareṃ.
コピュラ－完了 皆 の 皆 ビーシュマ の 小詞 全ての 方向 から 守備 する－仮・未来
「では、ただちに戦闘配置につき、皆、ビーシュマを完全に援護せよ。」
[Śrīmadbhagavatgītā : 17]

(11) は、属格後置詞句を伴う例である。これに、日本語の「だけ」を当てはめて考えてみるが、「*ビーシュマの（だけ）四方から」とはいわない。日本語では、属格後置詞句に係助詞もしくは副助詞を付けることはない。これについて、「ビーシュマの四方からだけ」であれば、「四方から」を限定するものになる。ヒンディー語を見る限りは、「ビーシュマの」を限定しているので、したがって、「ビーシュマだけ四方から」になるものと考えられる。

(12)　kisī　bhī　viṣay　ke　prati　ekāgr　honā　yog　hai.
何の（斜）　小詞　主題　の　対して　一点集中　なる一不定　ヨーガ　コピュラー現在

「どんなことに対しても一点集中するのがヨーガだ。」

［Śrīmadbhagavatgītā : 14］

（12）のように、「何の主題でも」という場合に、日本語では「も」を名詞句の後に付加するが、ヒンディー語では、名詞句内に割り込んで、「何の」の方と呼応させる。「どんな時でも」も ‘ kisī bhī samay ’ のように、小詞が名詞句内に割り込む。

9.2.1.3　節レベルでの付加

‘ bhī ’, ‘ hī ’ を付加したものして、4.2.4 の斜格語節型の（36），（40），（41），（50），（51）で、未完了分詞の非定形節に付加されている例を掲載してあるので、これらについてはそちらを参照されたい。以下の例は、7.3.6 で観察した、語幹に接続分詞を付加したものに ‘ bhī ’ が付加されているものである。

(13)　Rām　ke　tīkhe　bāṇoṃ　se　ghāyal　hokar　bhī　Rāvaṇ
ラーマ　の　鋭い　矢（複）　で　傷ついた　なる一語幹＋接続分詞　小詞　ラーヴァナ
martā　nahīṃ　thā.
死ぬ一未完了　否定辞　コピュラー過去

「ラーマの鋭い矢に傷ついても、ラーヴァナは死ぬことはありませんでした。」

［Hamāre graṃth : 48］

この語幹に接続分詞を付加したものに、さらに「も」に当たる ‘ bhī ’ を付けると、逆接的なニュアンスを生じるものとなる。前の章で挙げた例もすべて、逆接的なニュアンスを生じる点では、これと同じである。

9.2.1.4　文レベルでの付加

最後に、文レベルに付くものを挙げる。1.1.5 の接続詞のところで、若干説明しており、これまでの例文中にも幾度か出てきている、従属節の跡の主節を導くものとして使用され

る ‘ to ’ がその代表的な小詞である。

(14) .... to Śakuni Yudhiṣṭhir ko utsāhit kartā huā bolā-....
小詞 シャクニ ユディシュティラ を 奮起した 来る－語幹 コピュラ－完了 話す－過去

「すると、シャクニはユディシュティラを元気付けながら言った。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 59]

(15) ye sab cāhe mujhe mār ḍaleṃ to bhī maiṃ
これら 皆 欲する－仮・未来 私を 叩く－語幹 入れる－仮・未来 小詞 小詞 私
inheṃ nahīṃ mārnā cāhtā, ...
この人たちを 否定辞 叩く－不定 欲する－未完了

「この人たち皆がたとえ私を殺そうとしても、私はみんなを傷つけたくない。」

[Śrīmadbhagavatgītā : 22]

(14) は、前方に従属節があるものではなく、平叙文が来ている。あたかも、小詞が文同士をつないでいる接続詞のようにもみえる。前文を A, ここで掲載した文を B とすると、『A それから B』という具合に構成されている。(15) は、基本的に (14) と同じ構成ではあるが、小詞 ‘ bhī ’ が ‘ to ’ に付け足されている。先の節のところでも観察したように、逆接的なニュアンスを生むものになる。

9.2.2 統語構造からみた小詞の付加範囲

先の用例は、基本的に１つのアイテムに小詞が１つ付いた例がほとんどであるが、もちろん (15) のように、この小詞は２つ連続したり、一文の中に２つ以上現われたりすることもある。小詞が２つ連続するものを、ある種一体化した複合形 (例えば、先の ‘ to bhī ’ を「それでも」のように一語化したものと考えるようなこと。) であると言及するには及ばないが、日本語の「でも」も『指定の助動詞ダの連用形デに係助詞モがついて一語化したもの。』[広辞苑第四版] のように、元はといえば複合形であったものなので、対照させる価値はあるはずである。

それはさておいて、ヒンディー語のこれらの小詞 ‘ hī ’, ‘ bhī ’, ‘ to ’ および後置詞 ‘ tak ’ が、文の要素となる語, 句, 節, 文レベルで付加されることは、前節で示したとおりである。特に、ここで観察したものでヒンディー語と日本語の若干の共通点, 相違点を述べると、語が動詞の場合、語幹に付く例がいくつかみられた。日本語でも「し

はしない，見もしない，やりさえしない」のような連用形にこれらの助詞が付くことがある。相違点については、属格後置詞句の直後にこれらの小詞を置くヒンディー語に対し、日本語では「の」格の後置詞句（ひいては形容詞も含め）の直後に置くことはない。

ヒンディー語の小詞‘ hī ’,‘ bhī ’,‘ to ’の出自は、実際、明らかではないが、中には元々後置詞であるものが、談話機能を負うものがある。それが‘ tak ’である。日本語の副助詞「まで」のような、終点を表わす格助詞としての機能も持つもので、その関連性は、われわれにも理解し易い。しかし、ヒンディー語には、さらに別の後置詞が、談話機能を果たすものがあるのである。次節ではそれを詳細にみていくことにする。

9.3 与格後置詞‘ ko ’の談話機能

本来、後置詞は、その対象の現実世界での位置感覚を担う機能を持っているものである。主格，対格，与格，奪格，道具格，属格など格の枠組みは言語により様々であるが、後置詞自体、第一機能として、現実世界での位置感覚を担う格標示の機能があるのは、通言語的にも共通である。

その後置詞の中にも、副次的に談話機能を持つものがある。前節で観察した終点格を表わす‘ tak ’がそれである。しかし、この後置詞自体は、文中に頻繁に現われるものでもなく、談話的に機能する場合も、さほど頻繁に観察されるものではない。

ところが、ヒンディー語の与格後置詞‘ ko ’については、その限りではない。本来、与格であるはずこの後置詞は、ある時は直接目的語に付加されたり、表層の格標示が与格，対格とは無縁の名詞に付加されたり、また与格本来の働きを持つものとして使用されたりするのである。これまでの例文でも多々観察されているが、これは談話機能を持つ後置詞として明確に認識されているわけではない。しかしながら、格標示の後置詞とは明らかに違う働きをしているのは、上述のとおりである。このように機能の面から一律に説明し難い後置詞ではあるが、この機能を解明すべく、本節では、この与格後置詞‘ ko ’について、統語的な観点に着目し、議論していくことにする。

9.3.1 談話機能的な側面の定説および私見

ヒンディー語学では、通常、これらの統語上の３パターンが独立した形で説明されている。１つは日本語の「に」格に相当する後置詞、それの延長線上にある動作主を与格にし

た与格構文（詳しくは後節で述べる）、もう１つは直接目的語に付き定性を表す後置詞、最後に語彙化した名詞に付く後置詞、という具合である。意味解釈の領域においては、現実世界で共有している背景知識や文脈の補助が得られ、文法関係が修復もしくは推測可能になるので、まず疑問視されることはない。しかし、説明が独立した形で行われるということは、その関連性が個々人の推察に依拠するということであり、そうなると、学習者は‘ ko ’が付く時の機能を、１）与格後置詞（日本語に照らし合わせた場合「に」格），２）直接目的語が往々にして人の場合に付く後置詞、３）語彙化した名詞句の対格，与格標示以外の後置詞、ぐらいの認識にとどまるのである。三点に絞られると説明上は好都合であるが、これを言語運用にそのまま適応し言語化しようとすると、１），３）に関しては、構造を覚えることと、イディオムのごとく暗記することでまだ問題は回避できるが、２）の点では、あまりに抽象的な概念が先行するため、理解しきれず逸脱文を作り出してしまう可能性が高くなるのである。

これら‘ ko ’の統語的な３パターン（与格標示としての付加，直接目的語への付加，その他の格標示としての付加）のうち、２）の機能に相当する与格後置詞の直接目的語への付加が、実際、インド・アーリア諸語や隣接する諸言語内で、意味論，類型論上の比較・対照研究の議論になっている。C.Masica（1982, 1986）は、南アジア・中央アジア諸語における直接目的語に対格マーカーもしくは与格・対格マーカーを付加することにより、定性（definiteness）という機能を加えると唱えている。氏の研究の一部を以下に記す。

『この種の機能はサンスクリットや中期インド語には見られない最近のインド・アーリア諸語の進化である。Krishnamurti & Gwynn 1985:88 や Moag1980:150-151 によると、ドラヴィダ諸語では、直接目的語の格標示が、しばしば生物か非生物かで異なる。理性を有する生物（rational being）すなわち人が目的語の場合、もともと定性があるのは察するに簡単だが、いつから（もっとも、最近ではあろうが）、任意に非人間の目的語に定性を加えるところまで拡大したのか確信がない。』

【C.Masica（1999）；筆者訳】

氏や上記引用内の学者によると、ドラヴィダ諸語との言語接触の影響を受け、直接目的語の格標示の段階で、語の意味素性である生物性，非生物性によって対格マーカーが付加されるか、与格マーカーが付加されるかが決定されるということである。

比較研究の議論から再びヒンディー語に目を移せば、言語接触による影響を受けたもの

とすると、与格後置詞‘ ko ’が直接目的語に付加される場合は、生物である必要があるわけだが、実際、この‘ ko ’は、非生物の名詞にも付加されるし、逆に生物の名詞であっても付加されない場合もある。この矛盾を回避する意味で、氏は語の純粋な意味素性ではなく、談話文法の範疇に亘る定性に焦点を置いているものと考えられる。

しかしながら、この抽象概念である定性は、意味素性といえば確かにそうであるが、談話文法とのつながりが生じた、意味素性と談話文法の半ば中間に位置する素性である。そのため、この定性という概念はさらに抽象性を増し、実際、その全体像が曖昧になりやすい。それらを考慮しつつ、この概念が現代ヒンディー語内で有効かどうか検証してみたい。特に、ヒンディー語に限っていえば、形態・統語の観点からみると、与格後置詞とされる‘ ko ’が別の統語パターンの場合にも付加されるという現実がある。これを機能が違うからという理由だけで切り離して考えるわけにはいかない。

以上のように、直接目的語に付加される与格後置詞‘ ko ’の機能を談話文法内の定性に求めるのが妥当かどうかも考慮しつつ、次節では、この後置詞を文法関係および統語構造から分析し、考察してみたい。

9.3.2 用例の観察と分析

9.3.2.1 与格名詞句

まずは、文法関係と格標示が一致した、つまり名詞が与格標示されている（受動者・受益者）例を挙げておく。

(16) maiṃ ne use aṁgūṭhī dī.
私 能格 彼女に 指輪 与える－過去
「私は彼女に指輪をあげた。」

ここでの「彼女に」の‘ use ’は、‘ us ko ’に相当する屈折形である。人称・指示代名詞に対格・与格屈折が残っている英語のように、ヒンディー語でも人称・指示代名詞に屈折形が残っている。ただ、英語とは違って、ヒンディー語の指示代名詞兼３人称代名詞では、与格に屈折形が使用され、対格は通常、主格と同形になる。‘ use ’と‘ us ko ’の使用率および使用法の細かな違いまでは分からないが、とりあえず同じ与格を標示する

ものである。[3]

9.3.2.2 与格構文

ヒンディー語にはこの与格後置詞を必要条件として用いる構文が出てくる。これまでもしばしば観察された、通言語的に与格構文と呼ばれる構文である。これは、通常、動作主である意味上の主語に与格後置詞 ' ko ' が付き、統語上の主語（往々にして名詞、特に抽象名詞，不定詞）は無標のまま、そして動詞（主に自動詞）の定形が来るというものである。日本語の「私にはそれが分かる。／私にはそんなこと分からない。」や「私に非があるのか。」など、この動作主にも「に」が付いているように、これも与格構文である。ただ、後者の例に関しては、「に」格を使っているので与格構文ともいえるが、後続の動詞に「ある，いる」の存在を表す動詞を使用するので、たとえ、与格構文と同じ「〜に…が」構文であっても、特に存在文と呼ばれて然るべきである。[4]

では、ヒンディー語で与格構文として確立している代表的な構文を挙げる。

(17) āp kī mātā jī ko bahut xuśī hogī.
あなた の 母 尊称 に とても 嬉しさ コピュラー未来
「あなたのお母さんはとても喜ばれるでしょう。」

(18) āp ko saṃdeh hai ki vah sacmuc paisā de.
あなた に 疑い コピュラー現在 同格接続詞 彼 本当に お金 与える－仮・未来
「あの人が本当にお金を払うか、あなたは疑っておられますね。」

(19) mujhe āp kā nām mālūm hai.
私に あなた の 名前 知っている－形 コピュラー現在
「私、あなたの名前知っていますよ。」

ヒンディー語の与格構文は、通常、喜怒哀楽等の感情を示す時、「喜び，怒り，悲しみ，楽しみ」という抽象名詞を統語上の主語とし、その感情を感受する対象、つまり通常は人

---

[3] ' ko ' の機能が与格マーカー以外に別にあるとすれば、屈折形の ' use ' が無標で ' us ko ' が有標になることも考えられる。

[4] この種の与格構文については、柴谷（1978），角田（1990）は存在文ではなく、与格構文と認定しているが、日本語の格助詞「に」の元の機能（後述）を考慮すると、存在文と呼ぶべきである。

間に与格の後置詞を付けて表すというものである。それに付随するものとして、恐怖，疑念，認識（もしくは認知）の表現もこの構文をとる。恐怖，疑念を表す場合は各々の抽象名詞を置換する。上に挙げた認識を表わす例文では、「あなたの名前」が統語上の主語で、認識に関する部分は「知っている」という形容詞になっている。つまり、第６章で扱った形容詞との述語複合型の構造を持つものである。認識の抽象名詞を使った表現もあるが、ここは構造の重層性を観察することが本題ではないので、例文を挙げるに止める。

日本語の与格構文については、角田（1990）によると、「分かる，できる，要る」等の認知・能力・感情の述語（すなわち主に動詞）で構成するが、ヒンディー語では上記の抽象名詞と自動詞（代表例：‘ ānā ’「来る」，‘ lagnā ’「付く」，‘ honā ’「生じる，コピュラ」）によって構成する。

次に、格の上では同じ与格構文で、今度は存在文に類似したものを挙げる。

(20) mujhe kyā ho gayā?
私に 何 なる－語幹 行く－過去
「俺、どうしちゃったのかな。」

(21) devī sumitrā ko putr huā.
敬称 スミトラー に 息子 生じる－過去
「スミトラー王妃に子息ができました。」

［Ramāyaṇ : 14］

上の文は、日本語に命題の部分を直訳すると「私に何が起こったのか。」となる。下の文は、「スミトラー王妃に息子ができた。」となる。日本語の場合も対象となる人間には「に」格が付いている。日本語の格助詞「に」の定義については、『存在し、動作し、作用する点を、時間的・空間的・心理的に「そこ」と指定するのが原義で、動作・作用の及び着く物・事・人を指定する。のち、下に来る語が存在など静的な意味の場合に用い、動作・作用など動的な意味の場合には「で」を用いるように分れる。』［広辞苑第四版］となっている。これを見ると、日本語の「に」格は、原義からすれば位置（時空的なものも心理的なもの）を確定する格助詞ということになる。心理的な位置をも表すというのは、物理的な存在位置から離れて、位置が「私にくれる，あなたにあげる」等の人称になる場合も「に」格で処理しているということである。日本語の「に」格は存在が原義ではあるが、

受益者・受動者が対象となった時の「に」格を、特に与格と呼んでいることになる。すなわち、統語上の存在文と与格構文は位置に基づいた相関関係があるわけで、日本語の場合、原義からすれば存在文が与格構文の基盤となっていると考えられる。同じ与格構文を持つヒンディー語では、通常の存在文ならば、存在位置を表す対象は ‘ pahāṛ par ’「山（の上）に」や ‘ āṁkhoṃ meṃ ’「目（の中）に」など、位置を表す別の後置詞がくるが、人称の場合は位置を表す後置詞ではなく、人称の斜格にいわゆる与格の後置詞 ‘ ko ’ を付けるか[5]、もしくは人称の屈折形[6] を使用する。

ヒンディー語についてこの置換操作がどういうメカニズムを生むかという議論は、後節に譲ることにして、存在文もしくは与格構文の類を持つという点では、日本語もヒンディー語も同じであるが、日本語と対照すると感情を表す抽象名詞を統語上の主語に立てて与格構文を成すのは、ヒンディー語の特徴である。

9.3.2.3 目的語に付く ‘ ko ’

ここから後置詞 ‘ ko ’ が与格ではない機能を負う例を挙げていく。まずは、目的語に付く例を見てみる。この目的語に付く ‘ ko ’ については、前節でも述べたように、南アジアの諸言語における類型論者がかなり議論をしている。これについての議論は後節で行うが、現時点では、そこで提示されている談話のレベルでの‘definiteness’（定性）と意味レベルの意味素性‘animate／inanimate’（生物性／非生物性）が、直接目的語に付く条件として考察する。

［目的語に付く例］

(22) aṃgrezoṃ ne phir gāṁdhī jī ko pakaṛ liyā.
大英帝国 能格 また ガンディー 尊称 後置詞 捕らえる－語幹 取る－過去
「イギリスは再びガンディーを捕らえた。」
［Mohan se Mahātmā 3 : 13］

---

[5] ‘ ko ’ の出自およびその時点の機能が元々与格であったのか今１つはっきりしないので、与格に付くとだけ述べておく。

[6] 現存の屈折形は、単数の ‘ mujhe ’, ‘ tujhe ’, ‘ ise, use ’、複数の ‘ hameṃ ’, ‘ tumheṃ ’, ‘ inheṃ, unheṃ ’ である。

(23) unhoṃne netāoṃ ko jel se choṛ diyā.
彼ら＋能格 指導者たち 後置詞 牢獄 から 放つ－語幹 与える－過去

「彼らは指導者たちを牢獄から解き放った。」

[Mohan se Mahātmā 3 : 18]

これらは、いずれも能格に目的語が後続する例である。先に述べた意味素性が［＋animate］（［＋rational being］と唱える学者もいる。9.3.1 を参照。）となっており、一番目の例文には「ガンディー」という固有人名に、二番目の文は「指導者たち」という人を表す名詞に付いている。

次は、［－animate］である具体名詞もしくは抽象名詞に後置詞 ‘ ko ’ が付いている例である。

(24) saṃsār ke sāre sukh, vaibhav in mahaloṃ ke khālīpan ko
世界 の 全ての 幸福 富 この 宮殿（複） の 空虚さ 後置詞
kabhī nahīṃ bhar sakte.
いつでも 否定辞 埋める－語幹 できる－未完了

「世のあらゆる幸福や富がこの宮殿の空虚さを埋めることはできない。」

[Rāmāyaṇ : 11]

(25) deś ko gulāmī meṃ aur jakaṛ diyā.
国 後置詞 隷属 に さらに 縛る－語幹 与える－過去

「国（インド）をさらなる隷属下に置いた。」

[Mohan se Mahātmā 3 : 6]

ここで挙げた最初の文は、物主構文である。日本語では物が動作主という役割を持った主語として立つことはあまりない。上記の訳は人工的な感を受けるので、文法関係と格標示を転換して自然な日本語に直せば「世のあらゆる幸福や富ではこの宮殿の空虚さは埋められない。」となる。

次の例文には主語がないが、話の中で ‘ aṃgrez ’「英国」が前述されているので、はっきりした叙述文にするならば ‘ aṃgrezoṃ ne ’（‘ ne ’ は能格マーカー）を補うこ

とになる。しかし、例文中には出てきていない。

また、他にも［−animate］の名詞に後置詞 ‘ ko ’ が付く例文を挙げる。

(26) unhoṃne apne prabandh kāvya kī kathā ko itihās kā rūp
彼ら＋能格 自分の 集めた 詩 の 物語 後置詞 歴史 の 形
pradān kiyā hai.
提示 する−完了 コピュラ−現在
「彼らは、自分の詩集を歴史として提示している。」

(27) ab kailāś par ek pal ṭhaharne ko jī nahīṃ cāhtā.
今 カイラーサ山 上に 1 瞬間 滞在する−不定（斜） 後置詞 心 否定辞 欲する−未完了
「もう一瞬たりともカイラース山に留まりたいとは思わない。」
［Rāmāyaṇ : 20］

ここに挙げた例は、すべて物質名詞または抽象名詞，さらには不定詞に ‘ ko ’ が付いている例である。ここで説明し得る要素は、談話文法の範疇内の‘definiteness’（定性）である。

9.3.2.4 主語に付く ‘ ko ’

ここでは統語上の主語に ‘ ko ’ が付く用例を挙げる。

［主語に付く例］

与格構文において統語上の主語に ‘ ko ’ の付いた例文を挙げる。

(28) us ko sunne ko aur bolne ko nahīṃ ātā.
彼 後置詞 聞く−不定 後置詞 そして 話す−不定 後置詞 否定辞 来る−未完了
「彼は耳が聞こえないし、口がきけないのです。」

(29) vahāṁ khāne ko miltā hai?
そこで 食べる−不定 後置詞 得られる−未完了 コピュラ−現在
「そこで食べることはできるの。」

与格構文では、主語が不定詞の時にしばしば ‘ ko ’ が付く。動詞の連続になるので、主語であることを際立たせるために ‘ ko ’ を付加すると考えることもできるが、これも ‘ ko ’ の付加なしでも成り立つ。以下に不定詞に ‘ ko ’ が付かない例文を挙げる。

(30) mujhe kār calānī nahīṃ ātī.
私に 車 動かす－不定 否定辞 来る－未完了
「私は車を運転できない。」

単に動詞の連続を回避し、この不定詞を主語として際立たせるためだけなら、この場合も付加されるはずである。なお、例文は動詞の連続に否定辞が挿入されているが、否定辞がなくても ‘ ko ’ なしで成立する。

次は、受動構文の主語に ‘ ko ’ が付いている例文である。

(31) kathā ko is prakār prastut kiyā gayā hai ki ....
話 後置詞 この 種類－斜 提示した－形 する－完了 行く－完了 コピュラ－現在 接続詞
「このことが以下のように提示された。」

(32) sacmuc pāṇḍavoṃ ke svāgat ke lie hī us kakṣ ko
本当に パーンダヴァたち の 歓待 の ため 小詞 その 部屋 後置詞
sajāyā gayā thā.
飾る－完了 行く－完了 コピュラ－過去
「本当にパーンダヴァたちを歓迎するためにこそ、その部屋は飾られていたのだった。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 57]

単なる与格後置詞であれば、受動構文の主語にまで付加されることはない。元は直接目的語であるから、その延長のものとして ‘ ko ’ が付加されているとも考えられるが、実際、受動構文の主語に ‘ ko ’ をつけない例は珍しくない。また、直接目的語のままであるとするならば、直接目的語へのこの後置詞の付加は定性を与えるとされている。そうすると、定性を持つということであれば、指示代名詞を伴った「その部屋」という場合

には、冗長的な機能になってしまう。これだけをとってみても、定性1つで説明がつく機能とは考えがたいのである。

9.3.2.5 斜格名詞句における ‘ ko ’

与格後置詞としての機能や直接目的語への付加がもっぱら取り上げられるが、実際、ヒンディー語では、名詞句が与格や対格の場合にのみ後置詞 ‘ ko ’ が付加されるわけではない。ヒンディー語で時を示す名詞「朝・昼・夕方（晩）・夜」の際、「昼・夕方（晩）・夜」に ‘ ko ’ が付くのがその例である。これらは慣用化した表現になっている場合が多い。

朝（に）	:	‘ subah φ ’	／	‘ savere φ’
昼（に）	:	‘ dopahar ko ’	／	‘ dopahar meṃ ’
晩（に）	:	‘ śām ko ’	／	‘ śām meṃ ’
夜（に）	:	‘ rāt ko ’	／	‘ rāt meṃ ’

「朝（に）」の場合、ヒンディー語では後置詞が付かない。しかし、直格 ‘ saverā ’ が ‘ savere ’ となっているように、ともに斜格名詞である。‘ ko ’ の付く「昼・夕方（晩）・夜」の場合、それぞれの名詞に位置を表す後置詞 ‘ meṃ ’ が付くこともある。すなわち、これは与格の後置詞が位置格の後置詞に置き換えられている例である。慣用化した表現[7]になっている以上、両者のニュアンスの差が意識されることはさほどないかもしれないが、後置詞の置換操作であるのは間違いない。

また、方向格を表す場合にも ‘ ko ’ が付くことがある。頻繁に見られるものではないが、‘ ko ’ が付く以上、看過するわけにはいかないので、以下に例文を挙げておく。

---

[7] 英語でも ‘in the morning’, ‘at noon’, ‘in the afternoon’, ‘at night’ のように、時の名詞により ‘in’ や ‘at’ を使用するが、その場合の前置詞は位置感覚の意識とはもはや遠縁になっており、慣用化している。

(33) jab dhartī se apne lok ko cale gae, to us ke paścāt
関係詞 地上 から 自分の 世界 後置詞 歩く－完了 行く－過去 小詞 それ の 後
bhī dhartī par un kā prabhāv banā rahā.
小詞 地上 に その の 影響 作られる－完了 いる－過去

「下界から自分の属する世界へ行った後も、下界にその影響が残った。」

[Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg2 : 57]

通常、「東京へ（に）」,「学校へ（に）」[8] など場所を表す名詞が方向性を伴う場合、名詞の斜格形のみで ‘ ko ’ や他の位置格の後置詞を付けることはないが、上の文では ‘ apne lok ko ’ となっている。実際、方向格の場合に ‘ ko ’ が付くことはあまりない。その例は枚挙にいとまがないが、２文ほど以下に挙げておく。

(34) vah agle sāl bhārat jā rahī hai.
彼女 次の 年 インド 行く－語幹 いる－完了 コピュラー現在

「彼女は来年インドに行く予定だ。」

(35) āj merī bahan skūl gaī.
今日 私の 姉／妹 学校 行く－過去

「今日、私の妹は学校に行った。」

通常の叙述文では、方向を表す時、後置詞による格マーカーなしで名詞自体を斜格にするだけなのである。もっともここで挙げた「インド」と「学校」は直格も斜格も形態上同形なので、見た目には変わらない。日本語でもゼロ格の「学校行く」,「へ」格の「学校へ行く」,「に」格の「学校に行く」の３通りの表現法がある。日本語の場合、ゼロ格標示は、文語ではなく話し言葉によく見られる。したがって、日本語のゼロ格は文語，口語ともに汎用性があるわけではないが、ヒンディー語の場合、このゼロ格（すなわち斜格名詞）が文語，口語にかかわらず、汎用性を持つ方向格なのである。

また、おおよそ「に」格に相当する位置格を兼ねた方向格 ‘ meṃ ’ をゼロ格に置換

[8] 現に日本語でも方向もしくは位置を表す場合「へ」格や「に」格をとるという二通りの言い方がある。「どこかに行く」という命題自体は同じであるが、「向けて」行くのと「その位置に存在しに」行くのとでは、自ずと違う。ヒンディー語でも格に対する意識の差は十分に考えられる。

することもある。

(36) ham log dūsre prifekcar meṃ gae haiṃ.
私たち 人々 別の 県 後置詞 行く－完了 コピュラ－現在
「私たち別の県に来ているの。」

この場合、「県」は単なる方向ではなく、位置をも表している。特に、最後のコピュラがその存在を表しているので、‘ meṃ ’を要求してきているものと考えられる。

次に、後置詞‘ se ’を付ける斜格名詞句に‘ ko ’を置換する例を挙げる。

(37) Kiśor tujh se pyār kartā hai.
キショール 君(斜) に対して 愛情 する－未完了 コピュラ－現在
「キショールは君のことが好きなんだよ。」

(38) Kiśor tujh ko pyār kartā hai.
キショール 君(斜) 後置詞 愛情 する－未完了 コピュラ－現在
「キショールは君のことが好きなんだよ。」

これは「人が誰かを愛する。」という日本語表現の場合に使われる。対象となる人は‘ se ’[9]をとるが、‘ ko ’を置換する文も（比較的新しい表現ではあろうが）出てきている。

また、複合後置詞‘ ke lie ’を付ける斜格名詞句に‘ ko ’を置換する例を挙げる。まずは、後続する述語が形容詞とコピュラ動詞の場合の例を挙げる。

(39) maiṃ vahāṁ jāne ke lie taiyār hūṁ.
私 あそこ 行く－不定 の ため 用意した－形 コピュラ－現在
「私、あそこに行く準備ができたわ。」

---

[9] この後置詞は、「から」（奪格）、「によって」（道具格）、「に対して」（方向格の一種とでも呼ぶか）等々、いくつかの格標示を兼ねている。

(40) maiṃ vahāṁ jāne ko taiyār hūṁ.
私 あそこ 行く－不定 後置詞 用意した－形 コピュラ－現在
「私、あそこに行く準備ができたわ。」

上の二文とも「私があそこに行く準備ができている。」という命題には変わりないが、この複合後置詞 ‘ ke lie ’ も ‘ ko ’ の置換が可能である。また、‘ ke lie ’ がゼロ格になることもある。以下に例を挙げるが、後続する述語は動詞となっている。

(41) maiṃ kal sāmān lene ke lie vahāṁ jā rahā
私 明日 荷物 取る－不定（斜） の ため あそこ 行く－語幹 いる－完了
hūṁ.
コピュラ－現在
「私、明日荷物を取るためにあそこに行きます。」

(42) maiṃ kal sāmān lene vahāṁ jā rahā hūṁ.
私 明日 荷物 取る－不定（斜） あそこ 行く－語幹 いる－完了 コピュラ－現在
「私、明日荷物を取るためにあそこに行きます。」

上の文では、複合後置詞 ‘ ke lie ’ があるが、下の文では、複合後置詞 ‘ ke lie ’ の部分が ‘ φ ’ になっている。これは、例えば日本語の「するために行く」と「しに行く」のように２通りの表現形態があるのと同じと考えられる。ヒンディー語の場合、どちらも不定詞の斜格形がくるが、日本語は「ため」に係る「する」の連体形と「し」という連用形がそれぞれの場合にくる。また、特に後者に関しては「*し［φ］行く」のように格助詞「に」を落とすと非文になる。

ところで、後続する要素が動詞の場合、‘ ko ’ が付かないかというとそうでもない。以下のような例もあるからである。

(43) nahāne ko calo.
沐浴する－不定（斜） 後置詞 行く－命令
「沐浴しに行け。」

この例文から分かるように、動詞が後続する場合は‘ ke lie ’, ‘ ko ’, ‘ φ ’の3パターンが存在する上、‘ ko ’は‘ ke lie ’のみならず‘ φ ’にも置換されるわけである。

では、最後に不定詞の斜格に‘ ko ’が付き、コピュラを定形動詞にする構文を挙げる。

(44) vah bāhar jāne ko thā.
彼 外（に） 行く－不定（斜） 後置詞 コピュラ－過去
「彼は（ちょうど）外に出るところだった。」

これはイディオム化した構文で、使用法として近未来を表す表現とされる。‘ ko ’の代わりに‘ vālā ’という接辞を置くことも可能である。「外に出る」という命題を同じくして、格標示の違う文を挙げる。先にも出てきた与格構文である。

(45) us ko bāhar jānā thā.
彼 後置詞 外（に） 行く－不定 コピュラ－過去
「彼は外に出ることになっていた。」

こうなると、命題が過去の時点において存在していたということになり、予定，近未来，願望等々、文脈もしくは使用上の場面によって、さまざまな意味が創造される。

意味の違いはさておき、２つの文を見比べた時、‘ ko ’が付いている要素が明らかに違う。前者は命題の「外に出る」の不定詞部分に付いており、後者は「彼」という主語（動作主）に付いている。後者だけならまだ与格後置詞の機能であると言い切れるであろうが、不定詞部分にも付き、異なる意味を創造するとなると、そうもいかないのである。前者のような‘ ko ’の標示による別機能も含めて、次節ではこれらの類型パターンへの‘ ko ’の付加もしくは置換による機能について考察する。

9.3.3 考察

前節で‘ ko ’の付く用例を観察したが、この後置詞が、与格の格マーカーのみなら

ず、直接目的語となる名詞や不定詞に付いたり、与格構文内の主語となる不定詞や受動構文の主語に付いたり、OPTION の斜格名詞に付いたりするとなると、このヒンディー語の後置詞 ‘ ko ’ は単に与格の機能のみを持った後置詞とは考え難い。

しかしながら、従来、純粋な与格の機能の他に説明されているのは、直接目的語への ‘ ko ’ の付加についてのみである。その際、生物性と定性が指標とされているのは、これまで述べたとおりであるが、ここで、まず、その指標に至った経緯を検討する。

先に引用した C.Masica（1999）によると、定冠詞という品詞に頼らず、格標示で定性を示す内的誘引が次のように挙げられている。

1）構造上の簡素化のもと、主語よりも目的語に定性を標示する必要があること。というのは、主語は同時に主題（topic）となるので定であると考えられるからである。もしそうでなければ、不定冠詞がそれを示すために発達しているはずである。

2）主語から目的語を弁別する必要性があること。特に動詞によって主語と目的語が分割されない SOV 型言語では、主語，目的語は格標示が同じであるから。

3）さらに特記すると、一致（agreement）が、ある時は動作主，またある時は受動者となる、半能格性（semi-ergativity）が発達しているヒンディー語では、なおさらその必要性がある。

4）ドラヴィダ諸語にも多少みられるが、現代インド・アーリア語の特徴といえる語彙化した名詞－動詞の複合（接続動詞）が広まったことで、複合に組み込まれている不定名詞を、特に「真の」（語用論／意味論的）非人間の目的語／受動者を潜在的かつ弁別的に標示することによって、それらから特に有効的に区別するため。

上記の 4 点についてヒンディー語の範囲内で議論したい。1）の主語がトピック化され同時に定性を付与される理由を不定冠詞の発達に求めるのは、いかにも不定冠詞・定冠詞を持つ言語のネイティブらしい発想であるが、実際、通言語的に見れば、不定性の機能を負わせるのは別に不定冠詞である必要はない。シンハラ語のように名詞に膠着させる不定語尾がある言語もあれば、ヒンディー語の場合、単独名詞自体不定であり、さらにいえば、不定代名詞（‘ koī ’「何らか」等）もしくは数量代名詞を形容詞的に名詞に修飾さ

せ、不定性を表す手段が別にある。また、トピック化と定性の関連性については、名詞は名詞でも人称代名詞なら前述の文脈において出てきたものを指し示しているのだから、トピックでありなおかつ定であるのは理解できるが、一般名詞（もしくは修飾語付きの名詞句）の場合、トピックとはなっても定である必要はない。

一概に不定冠詞が発達するということを主語がトピック化され、なおかつ定性を持つ理由にするには、不十分であるが、氏の言わんとするところは、『冠詞に頼らない言語なので、定・不定がはっきりしないが、名詞を無標のままで用いると、それは不定になる。その名詞が主語の場合は常にトピック化されるため、たとえ名詞が無標のままでも定性を持つはずである。しかし、目的語の場合は、名詞は無標のままでは不定になるので、それに定性を加える必要性がある場合、定冠詞もないことなので、与格・対格マーカーが使用される』ということであろう。

2），3）については、主語，目的語が同じ直格であるため区別がつかないから、ということだが、確かに SVO 言語の場合は動詞が両者に割って入るため主語と目的語が同形であっても曖昧性は回避できるが、たとえ SOV 言語であっても自然言語であれば、イントネーションやポーズで主語や目的語の分割は回避できる。文語はもちろんのこと自然言語でも ‘ ko ’ が付くので、原因は別にあると考えられる。特に3）については、一致の点でヒンディー語のような半能格性[10] を持つ言語での必要性があるというのは、いささか疑問点が残る。筆者が推測する限りでは、他動詞定形の場合、動詞の性・数の一致を動作主に合わすか対象に合わすかが時制によって変わるので、せめて目的語は明らかに格標示をさせおかなければ、能格後置詞を付与できないということではないか。しかし、もしそうならば、先の説明でも述べたように、文語はともかく自然言語ではイントネーションやポーズが主語，目的語の文法関係を明らかにするので、理由としては不十分である。また、修正可能な文語ならともかく自然言語ならば、通常、時間的に能格が先に明示されるので、そのために目的語に ‘ ko ’ を付加する必要はないのではないか。

4）の名詞－動詞の複合（接続動詞）は、名詞と動詞の合成語（氏の言葉では ‘conjunct verbs’。この場合は名詞編入動詞のことと推察される。）と考えられる。日本語では「山焼き」，「勉強する」、ヒンディー語では ‘ yād karnā ’「記憶＋する＝記憶する／覚える」もしくは ‘ pasaṃd karnā ’「好み＋する＝好む」のような例である。確かに、この場合、対象となる具体名詞と「記憶」，「好み」等の抽象名詞が連続することになる。これも書き

---

[10] 他動詞が過去時制の場合にのみ、動作主（現在形での主語）に能格後置詞（‘ ne ’）が付くこと。

言葉として記述すれば主語，目的語は直格となり同じ形になるが、これも先の理由から回避可能である。

上記の発達理由のうち、2），3），4）は SOV 言語で、なおかつ主語と目的語が直格のまま同形であるため、主語，目的語を弁別するのが機能発達の理由となっている。また、目的語に与格・対格マーカーが付く理由に議論が集中しているが、ヒンディー語に限っていえば、‘ ko ’が付加されるのは、目的語だけに限らない。別の格標示の後置詞[11] に置換されることもあるのは前述したとおりである。それらも加味すると、‘ ko ’は日本語の「は」のように格助詞の次元を超え、格の区別を駆逐して、その場所に収まるもので、それにより語彙を卓立させ、テーマ性を示すのではないか。

氏は、唯一1）で、談話文法の視点から目的語に定性を負わせる理由を説明している。主語にすでに定性が備わっているため、目的語の方に定性を付与する機能を負わせる必要があるというのが、氏の見解である。先にも少し述べたが、ヒンディー語でも、主語は定性を持つ、というよりもテーマ性（氏の言ではトピック化）を自動的に負う。日本語の助詞「は」に類似した機能を持つものと推測されるので、これを引き合いに出すが、会話など話のはじめに前置きもなしに、「私が今日学校に行きました。」とは普通言わない。「私は今日学校に行きました。」となり、「が」に「は」が置換され[12]、話のはじめにテーマを確立させるのが普通である。ヒンディー語も（日本語と違って無標示ではあるが）主語がその機能を負っているということについては、氏の言に異論はない。

では、目的語の場合はどうか。氏の言に従うと、南アジアの言語（ここではヒンディー語）の名詞は単独では不定になるので、定性を負わすため‘ ko ’を付けるとなる。実際、定性を示すだけであれば、指示代名詞等の形容詞的用法で回避できるが、その場合でも‘ ko ’が付たり付かなかったりするのである。ここで、これらを例証したい。

通常みられる意味素性の生物性・非生物性から考察する。まず、往々にして人に‘ ko ’が付く場合の例を挙げる。同時に、‘ ko ’が付かない例も挙げておく。

---

11 もちろんすべての後置詞に取って代わるわけではない。今のところ‘ meṃ／se／ ke lie ’である。

12 日本語の「は」は「が」と「を」の時のみ置換される。例として「あいつは僕にプレゼントはくれなかったよ。」を挙げておく。その他の格助詞の場合「には」，「では」，「とは」のように膠着する。

(46) mere bhāī ne ye laṛkiyāṁ dekhīṃ.
私の 兄（弟） 能格 これらの 少女たち 見る一過去

mere bhāī ne in laṛkiyoṃ ko dekhā.
私の 兄（弟） 能格 これらの 少女たち 後置詞 見る一過去

この文は２つとも文として成立する。目的語に‘ ko ’の付いていない前者が「私の弟はこの少女たちを見ました。」という中立・一般的な叙述文である。一方、‘ ko ’の付かない後者も、命題自体は「私の弟がこの少女たちを見た。」のままであるが、ニュアンスが前者とは違う。[13] 後者について、先に出てきた定性という概念で説明できそうであるが、目的語に指示代名詞が付いている以上、定性の‘ ko ’は冗長的機能になる。ということは、‘ ko ’の機能を定性一点に絞ることはできない。

次に、ものに‘ ko ’が付く場合の例を挙げる。上と同様に‘ ko ’が付かないものも挙げておく。

(47) us ne yah kitāb paṛhī.
彼 能格 この 本 読む一過去

us ne is kitāb ko paṛhā.
彼 能格 この 本 後置詞 読む一過去

命題は「彼（彼女）がこの本を読んだ。」になり、その一般叙述文は‘ ko ’の付いてない前者である。人の場合と同じように、指示代名詞が付いてある程度、定まったものであることを述べている以上、やはり定性だけに機能を求めることはできない。

このように、氏のいうところの定性という機能に絞るのは、ヒンディー語の‘ ko ’を考えた場合、たとえ直接目的語への付加であっても必ずしも適切とはいえないのである。

実際、ヒンディー語の‘ ko ’は、元は与格標示の後置詞だったのかもしれないが、他の後置詞に対し置換される（特にヒンディー語の与格構文と存在文の相関性において、動作主が人の場合‘ ko ’が付く）ことを考慮すると、すでに格マーカーの域を超え、格の区別を駆逐して格マーカーの場所に収まり、テーマ性を示すものと考える方が妥当で

---

[13] ヒンディー語話者によると、後者の目的語には『強調』がかかっているそうである。

ある。これは、日本語の助詞「は」に酷似したテーマ性を（平叙文では主語以外に）付与するために他の文要素から卓立させる要素（prominent element）になっているのではないか。

9.3.4 提言

ヒンディー語の与格後置詞 ‘ ko ’ は、与格標示機能のみならず、ある種の構文における主語、また、直接目的語や修飾語となる斜格名詞に付加もしくは置換される。これらを統語的にみた場合、斜格名詞では、他の後置詞（すなわち位置格）に置換され、主語，直接目的語では、後置詞のない直格（すなわちゼロ格）に置換されるのである。先のように、この後置詞を日本語の「は」の機能に酷似した語の卓立要素と仮定すると、小詞 ‘ to ’ との関連が出てくるが、これは、『A vs. B』のように対比される場合にのみ使用されるもので、漠然とテーマを表わすものではない。その他の ‘ hī ’ や ‘ tak ’ も 限定要素を持つもので、（間接的には関連があったとしても）漠然としたテーマを左右するものではない。したがって、この後置詞は、先の小詞の談話機能とは別次元で、テーマ性を付与するものとのものと考える方が妥当である。定説で議論されている直接目的語へのこの後置詞の付加も、定性の機能というより、文要素を他から卓立させ、テーマを付与する機能の中に含まれるものと考えれば、ヒンディー語では、説明がつくわけである。

第 10 章　ヒンディー語構造の重層性

本論文でみられる重層性は、統語構造にみられる文法関係の二重性についてである。

まず、名詞句の構造から改めて説明する。動詞が直接名詞を修飾する連体形を持つ日本語と違い、ヒンディー語では、文レベルつまり動詞述語文が名詞を修飾する場合、定形節の Type I と非定形節の Type II の二通りの統語構造を持つ。その場合の文法関係の移行は以下のようになる。

Type I	Type II
Noun(S)＋関係詞節(V,OV)	未完了分詞 (huā) ＋ Noun(S) 完了分詞 (huā) ＋ Noun(S)
Noun(O)＋関係詞節(SV)	PredN(Gen)(S)＋完了分詞 (huā)＋ Noun(O)
Noun(Ad)＋関係詞節(SV, SOV)	

Noun＋同格接続詞 ‘ ki ’ 節	PredN(Gen)(S) ＋ inf(Obl) ＋ kā ＋ Noun

ヒンディー語には関係詞があり、これが、ヘッドの名詞となり得る S, O, Ad すべての要素に対し汎用的な修飾構造である。しかし、Type II については、第 3 章で検証した通り、ヘッドの名詞が S もしくは O になる場合にのみ有効であり、Ad では非文になる。Type I の関係詞節はヘッドの名詞の後に置かれるが、Type II の非定形節はヘッドの名詞よりも前に置かれる。日本語では、連体形が名詞を修飾する。統語構造としてはヒンディー語の Type II と同じだが、日本語には文レベルのものが名詞を修飾する時、この構造しかなく、また、これが S, O, Ad すべての要素にかかることのできる唯一の構造となる。どの要素にもかかることのできる日本語の Type I 型の構造とヒンディー語の Type II 型の構造における違いは、ヒンディー語では Ad の要素に対しては使用できないという、文法関係の制約がかかる点である。その場合は、関係詞を使用するしかない。ただし、時を表わす節の場合のみ、関係詞のうち『時』を内包する異形 ‘ jab ’ を使用して定形節を導く Type I とともに、Type II の ‘ 未完了分詞（斜） ＋ samay ’ も存在する。

同格節についても同じで、同格接続詞を用いて同格節を後置する構造と、不定詞の斜格形と属格後置詞を用いて名詞を修飾する構造がみられる。先の関係詞と違い、同格節には完全な文がくる。日本語は定形の同格節を前置した「文 ＋ と・いう ＋ Noun」という Type I の構造になる。ヒンディー語の Type II の場合、「彼がはるばるやって来たという

知らせ」のような過去時制の文は、不定詞を使う以上、これを反映することはできない。

また、単文が名詞句になる場合に、Type II の文法関係の重層性が観察された。単文での定形動詞が、動詞派生名詞になり、名詞句内でヘッドとなる場合がそれである。

自動詞文	S	V
	↓	↓
完全名詞句	PredN(Gen)	Noun(Head)

他動詞文	S	O	V
	↓	↓	↓
不完全名詞句	ϕ	PredN(Gen)	Noun(Head)
完全名詞句	PredN(Gen)	PredN(Ad)	Noun(Head)

PredN の属格形が、単文での主語もしくは目的語になる。自動詞の場合は、V 以外の要素が S しかない。したがって、PredN(Gen)は自動的に S になる。他動詞の場合は、要素が S と O の2つあるので、2パターンに分かれる。S を文中で補える不完全名詞句の場合、O が PredN(Gen)になる。しかし、文要素をすべて名詞句内に含めた完全名詞句になると、S が PredN(Gen)になり、対象である O は、対格，与格以外の格標示を取る。ただし、SOOV の時、PredN(Ad)に与格が現われることがある。

以上のような単文が名詞句となった二重構造を成すものの他、動詞が動詞のまま機能するものもある。動詞が動詞であるということは、すなわち、文が文に埋め込まれるということである。その代表的な例は、複文にみられる。ここからは、第4章で複文として扱ったものに焦点を当てて、文を別の文に埋め込む場合に生じる文法関係の重層性を説明しよう。単文が2つ以上集まったものが複文になることは先の章でも述べたが、その統語構造には二通りあった。単文同士を接続詞でつなげる Type I と、単文のうち、片方を従属的な非定形にして半ば副詞的に修飾させる Type II である。相関性のあるこれらの構造の対応を、例を挙げてまとめてみる。

複文タイプ	Type I の例	Type II の例
順接	文1　aur　文2	語幹-kar　　文2 未完了分詞 (斜) (hue)　文2 完了分詞 (斜) (hue)　文2

逆接	文1 par 文2			語幹-kar 未完了分詞 (斜) hue	bhī bhī	文2 文2
従属	yadi/jab yadyapi kyoṃki	文1, 文1, 文1,	文2 文2 文2	S (ke) 不定詞 (斜) S (ke) 不定詞 (斜) S (ke) 不定詞 (斜)	par par bhī se	文2 文2 文2

定形節の単文1，2を、接続詞を使用し連続させる Type I に対し、Type II は、文1を非定形節に変え、主文となる文2に埋め込んでしまう構造である。文中の要素としては、日本語の「して／し・ながら」のような副詞句なので Ad となる。

副詞的要素の他の文法要素としては主語（S），目的語（O）があるが、これらの要素に文レベルのものが埋め込まれる例が、表面的に述語要素の名詞，形容詞，動詞が連続しているものになる。本論文では、第5章から第7章までの述語複合で取り上げた。一見、イディオムのごとく連続するようであるが、統語的原理からすれば、複文でありかつ片方の文の埋め込みから生じる文法関係の二重性に裏打ちされたものである。先の Type II の副詞的用法とは異なり、埋め込まれる文1が、主文の主語 S，目的語 O の働きをするのである。埋め込みされる側の母体となる文、すなわち、概して第一層になる命題に使用されている動詞が、元の意味を保持したものから本来の意味を失い漠然化した意味のみを持つ彩飾動詞，果てはヒンディー語に若干観察された拘束形式の助動詞という具合に、様々な段階の動詞に分類できるのは確かであるが、これはあくまで統語構造を基点とした下位分類なのである。これらについては、第5章から第7章に挙げた例文で説明済みのものとして、ここでは、Type II 的な統語構造をよびその文法関係の二重性を S→S，O→S，S→O，S→O の順に、代表例を挙げながらまとめてみよう。

その際、これまで通り表層を第一層，その下に位置する層を順に第二層，第三層とする。

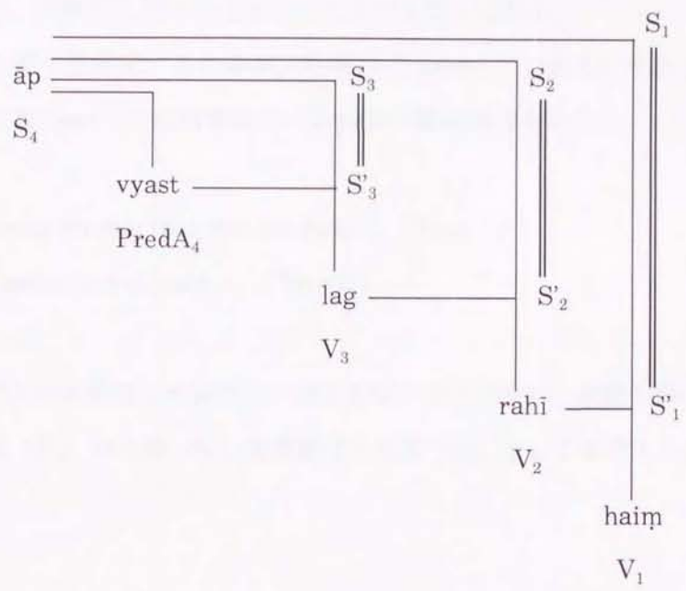
1. S→S

本論文で観察された第二層の命題が S であり、表層でも S の働きをするものは、名詞述語文，形容詞述語文そして動詞述語文のうちコピュラ動詞もしくは、別の自動詞を複合するものがそれに当たる。代表として、以下の例を挙げる。

(1) āp vyast lag rahī haiṃ.
あなた 忙しい 感じられる－語幹 いる－完了 コピュラ－現在

「あなたはとても忙しそうですね。」

「あなたはとても忙しい。」という命題が、「私にSが感じられる。」のSに代入される。



この文は、動詞複合による進行形が使われているので、全部で四層構造から成り立っていることになる。最下層の命題が、「あなたは忙しい」になり、この命題が、第三層の与格構文の S として埋め込まれた状態にある。実際、文中で主語として機能するのは、命題全体（S'_3）ではなく、命題中の S_3 のみである。第二層の V_2 の完了分詞は、第三層までの命題が続いていることを表わし、第一層は、第二層までの命題が今現在存在していることを指しているのである。無論、第二層，第一層ともに主語として機能するのは、S_4=S_3=S_2=S_1 である。

三項連続する動詞複合の部分は、進行を表わす原理を説くためのものであり、進行形という一体化したものとして捉えても差し支えはない。統語変形に関して問題になるのは、第四層の第三層への埋め込みである。ここでは Type II の統語構造を取っているが、以下のように Type I の統語構造も可能である。

(2)　aisā　lag　rahā　hai　ki　āp　vyast
このようなこと　感じられる－語幹　いる－完了　コピュラ－現在　同格詞　あなた　忙しい
haiṃ.
コピュラ－現在

「あなたはとても忙しそうですね。」

（2）は、Type I になるので、先の第三層は第三層で独立した文の形を取る。その場合、相関辞を、同格節を受ける主語として立てることになる。

この構造と同じ変形をするものが、英語の ‘ seem ’ である。これも、以下のように仮主語を立てた Type I の統語構造と、Type II の統語構造を取る。

(3) It seems (to me) that you are busy. ［Type I ］

You seem (to be) busy. ［Type II ］

語順が SVO の英語は、ヒンディー語と語順が逆になるが、命題の埋め込みであり、かつ下層の命題（S'_2）の主語（S_2）を表層でも主語（S_1）として使用するのは同じである。

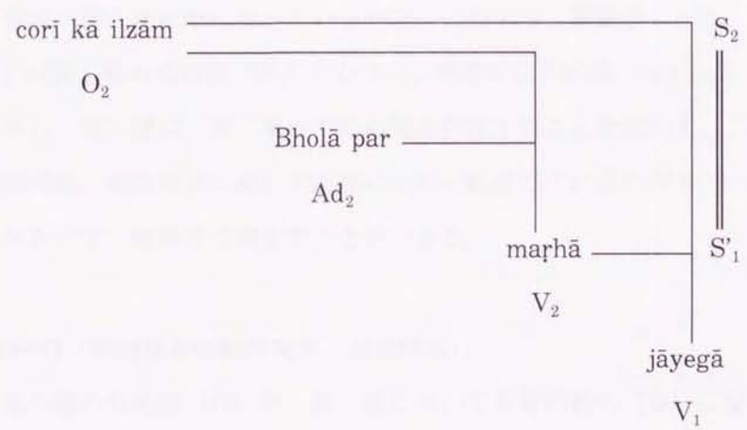
2. O→S

第二層で目的語（O）であるものが、第一層で主語（S）になるものには、受身構文がある。ヒンディー語の受身は動詞の複合形で表わされるので、基本的に二層構造になる。

(4) corī kā ilzām Bholā par maṛhā jāyegā.
盗み の 罪 ボーラー に 被せる－完了 行く－未来

「盗みの罪はボーラーに着せられよう。」

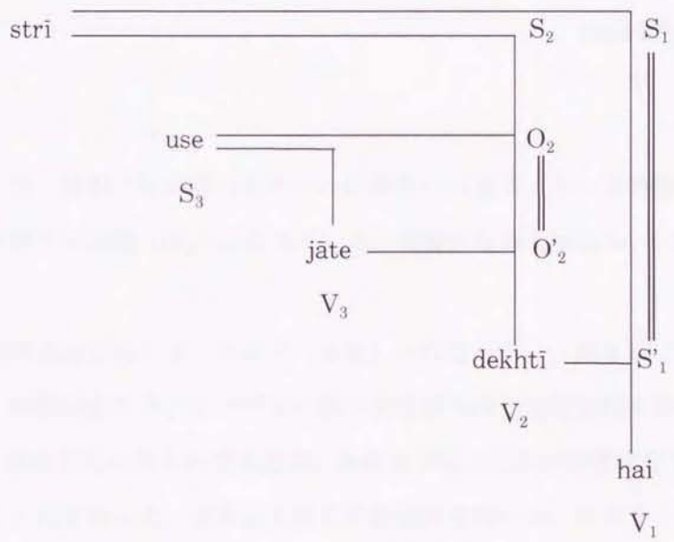
［Cācā Caudharī aur pāp śo : 36］



第二層の命題「罪を被せる」が第一層の主語として埋め込まれているが、目的語である「罪」のみが、第一層に引き上げられて主語になる。第二層と第一層を統合して考えると、論理的に、第二層の命題（S'_1）に、第一層の動詞で「至る」という具合に解釈できる。本動詞である‘ jānā ’「行く」を彩飾動詞の一種として捉えると、このように解釈できるのである。

3.S→O（認知構文）

第二層の主語（S）が、第一層において目的語（O）になる構造は、認知構文にみられる。第7章の（80）を構造図にして、文法関係を観察してみよう。

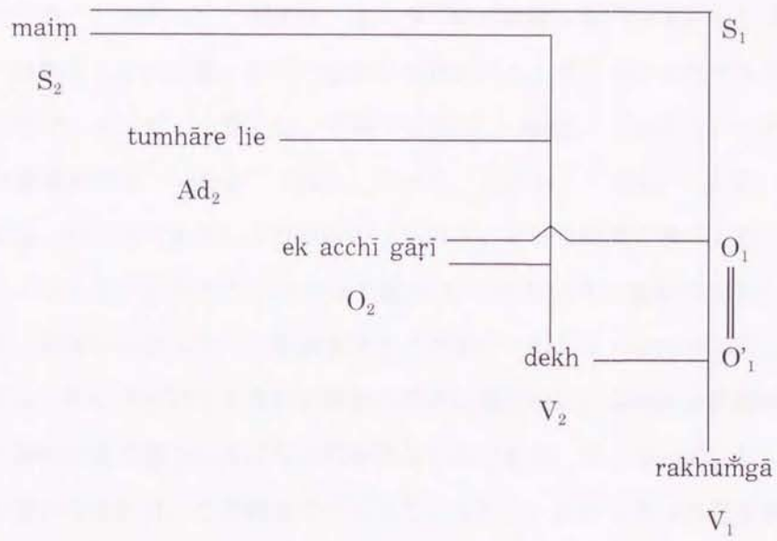


動詞が現在複合形になっているので、この文は三層構造になる。第三層の命題「彼が行く」が第二層の目的語（O'_2）になるが、実質的な目的語（O_2）は第三層の主語である「彼」である。第一層は、第二層までの命題が存在することを表わす。これも先の複合動詞の進行形同様、現在時制を表わす原理のために記述しているだけで、一体と捉えると埋め込みのみを示す二層構造で済ますことができる。

4.O→O（動詞複合他動詞使用，使役構文）

第二層の目的語（O）が、第一層においても目的語の（O）になる構造は、動詞複合の

他動詞を使用した場合に観察される。第７章の（56）を構造図にして、文法関係を観察してみよう。



この文は、第二層が「私が君のためにいい車を一台見る」という命題を成しており、その命題が第一層で目的語（O'_1）になっている。実質的な目的語はO_1である「いい車一台」である。

また、この構造図と同じマッピング（写像）となるものに、第８章で詳しく扱った使役構文がある。実際のところ、ヒンディー語の使役構文は、使役接辞を語幹に膠着させたものであり、一体化しているものであるが、本論文では、この使役接辞をV_1の位置に置き、独立したものとして扱った。日本語も同じ使役接辞を持つが、両者を対照させると、以下のようになる。

日本語	用法	ヒンディー語
を使役文（自動詞）	強制	se stem + vālā（もしくは語彙代替）
に使役文（自動詞・他動詞）	強制 容認・許可	se stem + vālā inf(Obl)　denā

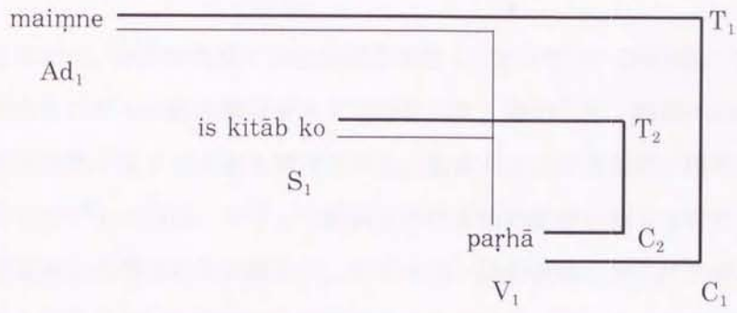
強制を表わす、「を」使役文,「に」使役文に対して、ヒンディー語の使役接辞を付加した形が使用される。それとは別に、日本語の容認もしくは許可を表わすものには、ヒンディー語は、斜格不定詞と動詞‘ denā ’「与える」の複合形を使用する。これも先の要領

で論理的に処理すると、強制を表わす方を SOV 型（本論文では「する」型），容認・許可を表わす方を SOOV 型（同様に、「与える」型）とし、前者には、目的語の位置に、中動態から成る文を、後者は、直接目的語の位置に通常の不定詞を代入したものと考えることができる。したがって、実体は、各々が「V の状態」を「する」もしくは「与える」となり、強制もしくは容認・許可の意味が生成されると考えられるのである。

ところで、ヒンディー語には、斜格不定詞に ‘ denā ’「与える」を複合するものによく似た構造を取る ‘ pānā ’「得る」がある。これも、‘ denā ’ 同様、許可を表わすものである。同じ許可を表わす日本語の「もらう」という動詞を複合したもので考えると、「して・もらう」になるが、日本語の場合は、「自分以外の誰かがする」ということになり、同じ意味にはならない。意訳すると「させて・もらう」とできるが、日本語の方の接辞使用は、あくまで許可を表わす部分の意訳に過ぎない。論理的な統語構造は同じであるが、行為者が全く違うものになる代表的なものである。したがって、ヒンディー語を母語とする者からすれば、この構造で「させて・もらう」という許可の意を表わすのに使役接辞を付加するのが分かり難いであろうし、「して・もらう」が示す「誰かがすることを自分がもらう」という論理的な発想が、ヒンディー語にないだけに理解し難いことになる。ただし、英語に精通している場合は、‘ I always get my friends to help me. ’ のように動詞 ‘ get ’ を使用して使役の意を表わすものが、同じ構造で同じ発想を出すので、まだ理解できるものと推察される。

以上が、述語が連続する際、文法関係が二重になる統語構造であるが、もう 1 つ、層を設けるとすれば、第 9 章で扱った談話構造の層がある。以下の例文に、談話の層を追加して構造図化しよう。

(5) maiṃne is kitāb ko paṛhā.
私+能格 この 本 与格 読む一過去
「私はこの本を読んだ。」



（5）は、目的語である語に強調を加える与格後置詞を付加した例である。談話層に注目すると、通常の文であれば、主題（Theme, T）と評言（Comment, C）は一層のみで、主語（ここは能格構文なので Ad）が T_1 になり動詞が C_1 になる。しかし、目的語にテーマ性を表わす与格後置詞が付加されており、主題（T_2）として機能するので、もう１つ談話の層が増えることになる。この与格後置詞が日本語の「は」に酷似した機能を持つことはすでに述べてあるが、それを加味すると、日本語は以下のようになる。

私はこの本を読んだ。（単層的な談話層）
（私は）この本は読んだ。（複合的な談話層）

日本語は同じ助詞を連続するのを標準的とはしないので、既存の主語「私は」の部分を切り取る。そうすると、「この本は読んだ。」となる。既知の旧情報をテーマ化させる機能としての与格後置詞使用であることが、ここから分かる。

このように、統語構造同様、談話層も下位でさらに層を分化させるのである。

結　論　まとめ

第１章では、分析の前提である品詞を分類し、ヒンディー語の語について概観した上で、基本的なヒンディー語の構造をメタ言語化した。語のうち、動詞については、特に日本語と対照させたパラダイム表も挙げてある。動詞とコピュラ動詞の複合により、現在時制を表わすヒンディー語は、コピュラ動詞以外にも別の動詞を複合させることがある。日本語の動詞連続との構造対比に鑑みて、時制・相・法の範疇にある付加要素と核を成す命題とを、核と演算子という構造概念で説明を加えている。これが、一次元的な動詞複合を、二次元，三次元的に観察するための構造分析の原理を提示する前段階となる。

第２章では、第１章でメタ言語化した基本文型に従い、単文の例を挙げて観察した。「私は走る。」，「彼はご飯を食べる。」のような SV もしくは SOV の構文もさることながら、ヒンディー語には、日本語の「私には、インドのことが分からない。」のような、主語を与格表示させる構造が多く観察された。特に、ヒンディー語は、日本語のように「に」格を取る与格専用の動詞（「分かる，できる」等）が存在するわけではなく、本来の自動詞を抽象名詞と複合させることで、様々な意味を創出することができる。

第３章では、名詞修飾構造を類型化し、構造に内在する文法関係を詳細に観察した。ヒンディー語には、関係詞，同格接続詞を伴った定形節による後置修飾型の構造と、非定形節を修飾させる前置修飾型とがあり、互いに相関的な構造になっている。この２つの構造以外に、動詞派生名詞をヘッドに持つ属格後置詞を使用した名詞修飾構造に、文法関係の二重性が看取できた。属格後置詞でつながれる名詞 PredN（Gen）に主語もしくは目的語という文法関係が内在するのである。文の名詞句化ともいえるこの構造は、動詞（V）に当たるのがヘッドであり、PredN（Gen）には、自動詞文であれば主語（S）、他動詞文であれば目的語（O）が内在する。この他動詞文の場合、文要素としての主語（S）が表示されていない状態にある、いわば不完全名詞句である。これが第５章の名詞と動詞の述語複合で目的語として使用されると、主語（S）は、文の方で自動的に補われる。また、名詞句で文要素を完全に補うこともできる。その場合には、主語（S）が PredN（Gen）に内在し、目的語であった対象は、後置詞を使用した斜格名詞句になる。

第４章では、単文が２つ以上から成る集合体を定形節型（Type Ⅰ），非定形節型（Type Ⅱ）に分け、例文を観察し分析を行った。前者には接続詞を使用したものであり、後者は従属側の単文を非定形節（斜格名詞句や副詞使用の斜格分詞）に変換したものである。こ

れらも互いに構造的な相関性があるものである。本論文では細かな区分けまではしていないが、これは今後の研究で扱う。

第５章から第７章までは、述語複合を扱った。まず、第５章では、名詞と動詞の述語複合を取り上げたが、名詞編入型として「数学の勉強をする」型と「数学を勉強する」型の２つの型が観察された。前者は、第３章の名詞修飾構造で観察した不完全名詞句が定形動詞の目的語として使用されるものであり、後者はその不完全名詞句が２つに分かれ、対象であるものを属格以外の格標示をし、抽象名詞に当たる動詞派生名詞を定形動詞側に編入するものである。それぞれ、半名詞編入型，名詞編入型として分類して分析を行ったが、ヒンディー語は半名詞編入型の表現をするものが多い。

また、名詞編入型以外に、「医者になる」，「馬鹿にする」のような「に＋なる／する」なるを述語複合型として扱った。これは、命題である名詞述語文を第一層の「なる／する」の主語もしくは目的語に埋め込んだ二層構造を成すものになる。奥行きの埋め込みではあるが、一次元的には述語が連続する型である。認知構文もこの型に入るが、埋め込み側の名詞述語文の主語（S）を第一層の目的語（O）にし、対格標示をした上で、述語名詞を失業者にしてしまうのが特徴である。

ヒンディー語では、名詞と動詞を複合する場合、構造が大きく異なり、文をあらかじめ属格による不完全名詞句にし、これを第一層で目的語にする構造と、名詞述語文を主語，目的語に埋め込む構造の２つが存在する。この異なる構造は、以下の形容詞，動詞との述語複合の基本的な論理構造となる。

第６章の形容詞と動詞を複合したものについては、「動詞＋形容詞」と「形容詞＋動詞」の２つに分けて、その構造を分析した。「動詞＋形容詞」になる型については、動詞の形態が斜格になり後置詞を伴うものと、後置詞をなくしたφ格の斜格形になるものが存在する。この述語形容詞の種類はさほど多くはなく、本論で挙げているもの以外にもあるではあろうが、もう１つの述語複合型ほど頻繁に使う構造とはいえないであろう。今述べた述語複合は、先の名詞複合と同様の統語構造を構えるものであり、第一層の主語，目的語に埋め込まれる命題が、形容詞述語文に変わるのである。埋め込み側の形容詞述語文の主語（S）を第一層の目的語（O）にし、対格標示をした上で、述語形容詞が失業者になる。

第７章の動詞と動詞を複合したものも、先の構造に従い、複合動詞と動詞複合の２つの型に分けた。複合動詞は、動詞の語幹と定形動詞の複合形式で、２つの動詞が揃ってはじめて意味を成すものである。これは、一次元的に動詞連続であると同時に、ほぼ一体とし

て V の機能を果たすことになる。一方、動詞述語複合は、動詞述語文が第一層の主語，目的語に埋め込まれた二層構造になる。先行動詞の形態は、語幹，不定詞，未完了分詞，完了分詞がある。語幹と定形動詞の複合は先の複合動詞にも観察されるが、動詞述語複合の場合、後続動詞が、本来の意味ではなく漠然化したものになる。ヒンディー語の代表的な後続動詞には、‘ jānā ’「行く」が挙げられる。これは、漠然化されると「行為に至る」というニュアンスを生むことになる。このような動詞がヒンディー語にはいくつかあるが、それぞれが、元の動詞に関連したニュアンスを生むものになるのである。不定詞の場合は、形態が直格であれば名詞性が強いものとなり、目的語そのものとして機能する。しかし、不定詞の斜格形を取る場合は、第一層の主語，目的語への埋め込みになる。特に目的語に埋め込まれる場合は、第二層の命題になる動詞述語文の主語（S）は、第一層で目的語（O）になり、不定詞斜格形は失業者になる。不定詞が斜格形になるのは、命題が埋め込まれた結果、文要素として機能しなくなったことを示すためである。この構造を取る代表的な動詞‘ denā ’「与える」は、許可を表わすものとされるが、一見、論理的な「彼に行くことを与える。」という一次元的な捉え方をすると、不定詞が直格でくるはずである。しかし、斜格になっているのは、埋め込み文の述語が失業者としての立場を取るからである。先行動詞の形態が未完了分詞，完了分詞になる場合も、形態が直格と斜格に分かれる。斜格側は未完了もしくは完了の状態であること保持した副詞的用法であり、文要素としては失業者である。しかし、同じ埋め込みではあるが、直格で主語に性・数一致するものもあり、後続動詞の意味が漠然化したものが多い。代表的なものは‘ rahnā ’「(ずっと）いる／ある，続く」，‘ jānā ’「行く」である。

また、もう１つ接続分詞‘ -kar ’を先行動詞の語幹に付加したものがあるが、日本語の「行って来る」のようにどちらの動詞も本来の意味を保っているものを表わす。

第８章では、第７章に例だけを挙げた使役接辞を語幹に複合（正確には膠着）したものを、同じ日本語の使役接辞と構造の対比し、共通性を看取した。ヒンディー語も日本語も、英語のような独立した動詞（‘ make, cause, get, have ’等）を用いるのではなく、接辞を用いるが、この接辞自体を動詞の機能を持つものと見立て、その目的語として、別の動詞述語文を埋め込んだものと考えると、ヒンディー語も日本語も「その状態にする／その状態を作り出す」という具合に解釈できる。実際の行為者の意を介さない強制性が生じるメカニズムになるもので、本論文では「する」型使役と呼んでいる。もう１つ、日本語には容認または強制を表わす「～に…させる」という使役接辞を使用した表現がある。この

場合、ヒンディー語では、第7章の許可を表わす不定詞斜格形と動詞‘ denā ’「与える」を複合する形式になる。これと同じ複合形式を持つものに動詞‘ pānā ’「得る」があるが、日本語の「させてもらう」に当たり、日本語に訳すと、ヒンディー語の不定詞には使役接辞が付いたものが使用されるわけではなく、埋め込みの命題が使役接辞を複合したものになる。ヒンディー語のこの構造は、「私は（私自身が）行くことを得た。」となり、日本語の自分以外がする行為を自分がもらう場合に使用する「してもらう」とは違う意味になることが、明らかになった。

第9章では、統語構造の範囲内にある談話文法要素を扱った。談話要素の語を使用した例を挙げ、さらにヒンディー語以外の南アジアの言語でも観察される与格後置詞の直接目的語への付加について論じるに至った。この直接目的語への付加の機能も含め、ヒンディー語では、与格後置詞が本来の与格標示機能以外のところで使用されることに着目して議論している。他の後置詞にも取って代わり得るこれが、日本語のテーマ性を付与するマーカー「は」と酷似した卓立機能を持つことが明らかになった。

第 10 章では、本論文の分析法で明らかになった統語構造および文法関係の重層性をまとめた。

これらを観察・分析した上でいえることについてもここでまとめておきたい。一番大きな点でいえば、一次元的な記述では理解し得なかったヒンディー語の構造は、文を名詞句にする場合であれ、文を埋め込む場合であれ、重層的に構築されていることである。

ドラヴィダ諸語の影響を受けたともいわれる非定形節（Type II）の名詞修飾構造について言及すると、論理の中できちんと位置付けされており、副詞的な斜格名詞句（「～する時」を除く）にはほとんど使用せず、主語，目的語の文法関係が成り立つものにのみ使用している。そして、実際多く用いられるのは、この名詞修飾構造よりもヘッドの名詞と定形節との文法関係をはっきり表示しやすい関係詞による構造が使用される。定形節内の文は OV もしくは SV のままであるが、ヘッドの名詞を後置修飾する構造は、インド・ヨーロッパ語族の諸語とよく似ている。これに対し、英語の影響を受けたものと一概に言うことはできない。実際、発想自体は日本語でもありえることは、本文中にも説明したとおりである。ただし、日本語の場合、この論理構造は、書き言葉ではなく、話し言葉にならばみられる語順である。

また、本論文で焦点を当てた述語複合、すなわち重層構造を成す命題の埋め込みも、ヒ

ンディー語内ではかなり頻繁に行っているということがいえよう。述語複合の部分をセットで覚えるのも１つだが、メカニズムに則れば、埋め込みの二層構造であること、第二層の命題の主語が目的語として表示され、非定形の動詞が失業者になるメカニズムが母体になっていることは、文生成の共通の公式として成り立つのである。それは、闇雲に格標示されるものでもなく、きちんと論理に則って文法関係に合った格標示をしている。

このように、ヒンディー語では常に文法関係と格標示がかなり厳密に意識される上に、動詞の形態にみられる未完了分詞，完了分詞も、それが指し示す未完了もしくは完了という相を意識もしている。日本語を母語とする者にとっては、この区別は方言レベルでしかみられず、標準語ではもはや『て』形がどちらをも表わすのでなかなか理解し難い。外国人のわれわれには意識しにくいところであり、ネイティブは無意識のうちの意識なので、はっきりわれわれに機能を伝えることはできない。よくインド人から質問されることの１つに、「は」と「が」の違いがある。われわれとしては用例を出せても、実際、インド人に機能を分かりやすく説明することができない。それと同じことである。

動詞の複合については、われわれの日本語をみれば、かなり頻繁に使用しているにもかかわらず、その意味が表現しにくいところから説明を回避する傾向にあるが、論理構造は埋め込み型二層構造であり、基本的に日本語のそれと同じである。醸し出すニュアンスにはずれもあり、同じ動詞を使用するものばかりではないが、これ自体、ヒンディー語にみられる特別な構造ではなく、日本語のそれを考えれば、理解しやすいものになるのである。

音声であれ文字であれ、言語を線的に捉えれば、単なる述語の複合であり、SOV のヒンディー語では、後続する動詞群が命題となる核への演算子として付加されるようであるが、論理形式からすれば、文を埋め込んだ重層構造を成すことが、視覚表示した統語構造図で明らかになっている。これが言語能力の統語スキーマともいえるわけで、これに則り、語を定位置に置くこと、そして相応の格標示をさせることが、原理的なメカニズムであり、外国語の場合は、外国語の統語スキーマと母語の統語スキーマと照らし合わせることにより、語を自由に使いこなせるようになるものと思われる。ここにこそ、本論文で示した重層的構造図の意義があると筆者は信ずるものである。

引用文献

小泉　浩一郎　編	1990	『鴎外論集』講談社。
Ludrā, Saṃyukt & Varmā, Satyendra	1988	*Bāl bhārtī bhāg 4.* Rāṣṭrīy Śaikṣik Anusandhān aur Praśikṣaṇ Pariṣad, Naī Dillī.
McGregor, R.S.	1995	*The Oxford Hindi-English Dictionary.* Oxford University Press, New Delhi.
Miśra, Manmohan Candra (ed.)	1991	*Bhāṣā Bhārtī.* Ṣṭīl Athāriṭī Āf Iṇḍiyā, Naī Dillī.
溝上　富夫	1990	『ラーマーヤナ（上巻）』大阪外国語大学。
————	1994	『ヒンディー語で歌う日本のうた 101 選』大阪外国語大学。
新村　出　編	1993	『広辞苑　第四版』岩波書店。
Prāṇ	19??	*Cācā Caudhrī-7.* Ḍāymaṃḍ Kāmiks Ḍāijesṭ, Naī Dillī.
————	19??	*Cācā Caudhrī eṃḍ pāp śo.* Ḍāymaṃḍ Kāmiks Ḍāijesṭ, Naī Dillī.
Rākeś, Mohan	1974	*Ādhe adhūre.* Rādhākṛṣṇa Prakāśan, Dillī.
Rāṃkā, Campālāl	1981	*Mohan se Mahātmā 1 : Ek thā Mohan.* Iṇḍiyan Buk Ḍipo, Dillī.
————	19??	*Mohan se Mahātmā 2 : Ban gayā Gāṃdhī.* Iṇḍiyan Buk Ḍipo, Dillī.
————	1991	*Mohan se Mahātmā 3 : Lāyā jo āzādī.* Iṇḍiyan Buk Ḍipo, Dillī.
Śrīvāstav, Ravīndrnāth (ed.)	1994	*Hindī bhāṣā kā samājśāstr.* Rādhākṛṣṇa Prakāśan, Naī Dillī.
田中　敏夫 & 町田　和彦	1986	『エクスプレスヒンディー』白水社，東京。
角田　太作	1990	『世界の言語と日本語』くろしお出版，東京。
Varmmā, Rāmcaṃḍ (ed.)	1990	*Mānak hindī koś pahalā khaṇḍ.* Hindī Sāhitya Sammelan, Prayāg.
Varmmā, Dayānand	1996	*Śrīmadbhagavadgītā : Ādhunik vyākhyā.* Māīṃḍ eṇḍ Baḍī Risarc Seṃṭar, Naī Dillī.
Vyathithṛday, Śrī	1990	*Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ bhāg-2.* Sāmayik Prakāśan, Naī Dillī.
Satyārthī, Kamal & Guptā, Raviprakāś	1995	*Sarasvatī mānak hiṃdī vyākaraṇ tathā racnā.* Educational Publishers, Dehli.

参考文献

Abbi, Anvita	1994	*Semantic Universals in Indian Languages.* Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
Bhaṭiyā, Kailāścaṃdr	1967	*Hindī meṃ aṃgrezī ke āgat śabdoṃ kā bhāṣā tāttvik adhyayan.* Hindustānī Academy, Ilāhābād.
Bhatia, Tej K.	1987	*A History of the Hindi Grammatical Tradition*, E.J. Brill, The Netherlands.
Brown, R. & Gilman, A.	1960	"The Pronoun of Power and Solidarity" in Sebeok, Th. (ed.), *Style in Language.* MIT Press, Cambridge, Mass, pp.253-76.
Central Hindi Directorate	1972	*A Basic Grammar of Modern Hindi.* New Delhi.
Chatterji, Suniti K.	1960	*Indo-Aryan and Hindi.* K.L.Mukhopadhyay, Calucutta.
Chomsky, Noam	1957	*Syntactic Structure.* The Hague, Mouton.
Comrie, Bernard	1981	*Language Universals and Linguistic Typology : Syntax and Morphology.* Basil Blackwell, Oxford.
Dahl, Östen	1985	*Tense and Aspect Systems.* Basil Blackwell, UK.
Dasgupta, Probal	1997	"The External Reality of Linguistic Descriptions " in Singh, Rajendra (ed.) *Grammar, Language, and Society.* Sage Publications, New Delhi.
Dik, Simon C.	1978	*Functional Grammar.* North-Holland Publishing Company, Amsterdam.
Fillmore, C.J.	1968	"The Case for Case" in Bach and Harmans (eds.) *Universals in Linguistic Theory.* New York.
Guru, Kamtāprasād	2018 (1961?)	*Madhya hiṃdī vyākaraṇ.* Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Kāśī.
———	2035 (1978?)	*Hiṃdī vyākaraṇ.* Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasī.
Halliday, M.A.K.	1967a	"Notes on transitivity and theme Part 1" in *Journal of Linguistics vol. 3.* Cambridge University Press, London.
———	1967b	"Notes on transitivity and theme Part 2" in *Journal of Linguistics vol. 3.* Cambridge University Press, London.
Hook, Peter E.	1974	*The compound verb in Hindi.* University of Michigan, Center for South and Southeast Asian Studies, US.
———	1980	*The Distribution of the function of the compound verbs in New Indo-Aryan.* II ISCALL, Hyderabad.
Hopper, Paul J. & Traugott, E. C.	1993	*Grammaticalization.* Cambridge University Press, Cambridge.
Hudson, R.A.	1999	「The Difficulty of (So-Called) Self-Embedded Struc-

tures」『現代言語学の射程』英宝社。

石綿　敏雄　1999　『現代言語理論と格』ひつじ書房，東京。

Jagannāthan, Vī. Rā.　1981　*Prayog aur prayog*. Oxford University Press, Naī Dillī.

Johannessen, Jane B.　1998　*Coordination*. Oxford University Press, New York.

Johnson, David E.　1977　"On Relational Constraints on Grammars" in Cole, P. and Sadock, J.M.(eds.), *Syntax and semantics*, vol. 8. Academic Press.

———　1979　"Toward a Theory of Relationally Based Grammar" in Jorge Hankamer (ed.) *Outstanding Dissertations in Linguistics*. Harvard University.

影山　太郎　1993　『文法と語形成』ひつじ書房。

Kācrū, Yamunā　1973　*Hindī rūpāṃtaraṇ vyākaraṇ ke kuch prakaraṇ*. Keṃdrīy Hiṃdī Saṃsthān, Āgrā.

Kachru, Yamuna　1980　*Aspects of Hindi grammar*. Manohar, India.

Kalrā, Aśok　1975　" Hiṃdī meṃ sarvnām-prayog kā sāmājik saṃdarbh " , *Bhāṣā*. Viśv Hiṃdī Sammelan aṃk, Naī Dillī.

———　1976　"Saṃbhāṣaṇ ke vibhinn pakṣoṃ kā samājbhāṣāvaijñānik adhyayan" , Śrīvāstav, Ra. and Sahāy, Ra. (eds.) *Hiṃdī kā sāmājik saṃdarbh*. Keṃdrīy Hiṃdī saṃ-sthān, Āgarā.

Karunatillake, W. S.　1992　*An Introduction to Spoken Sinhala*. M. D. Gunasena & Company, Colombo.

Kellogg, Samuel H.　1972　*A grammar of the Hindi language : in which are treated the High Hindi, Braj, and the Eastern Hindi of the Ramayan of Tulsi Das, also the colloquial dialects of Rajputana, Kumaon, Avadh, Riwa, Bhojpur, Magadha, Maithila, etc., with copious philological notes*. Munshiram Manoharlal, New Delhi. (Revised 1938 ed. , the original *Grammar of Hindi Language*. Kegan Paul, London, 1875.)

近藤　達夫　1976　「言語における統語構造の分析（1）－統語論的単純構造」『神戸外国語大学論叢』27 巻 4 号。

———　1977　「言語における統語構造の分析（2）－統語論的複合構造（その 1）」『神戸外国語大学論叢』29 巻 4 号。

———　1981　「言語における統語構造の分析（3）－統語論的複合構造（その 2）」『神戸外国語大学論叢』32 巻 1 号。

———　1984　「言語における統語構造の分析（4）－統語論的複合構造（その 3）」『神戸外国語大学論叢』35 巻 3 号。

———　1985　「言語における統語構造の分析（5）－統語論的複合構造（その 4）」『神戸外国語大学論叢』36 巻 5 号。

——— 1987 「日・英語のいわゆる受動文・使役文・難易文について ―いわゆる引き上げ(Raising)の一般化―」『言語の視界』大学書林。

Krishnamurti,Bh. & Gwynn, J.P.L. 1985 *A grammar of modern Telgu.* Oxford University Press, Delhi.

Lyons, John 1968 *Introduction to Theoretical Linguistics.* Cambridge University Press, Cambridge.

Malantz, Alec 1984 *On the Nature of Grammatical Relations.* The MIT Press, Cambridge.

Masica, Colin P. 1976 *Defining a Linguistic Area : South Asia.* University of Chicago Press, Chicago.

——— 1982 Identified object marking in Hindi and other languages, in Koul, Omkar N. (ed.) *Topics in Hindi Linguistics vol.2.*

——— 1986 Definiteness – marking in South Asian Languages, in Krishnamurti, Bh. (ed.) *South Asian Languages.* Motilal Banarsidass, Delhi.

——— 1991 *The Indo-Aryan Languages.* Cambridge Univ. Press, Cambridge.

——— 1999 "The Definition and Significance of Linguistic Areas : Methods, Pitfalls, and Possibilities (With Special Reference to the Validity of South Asia as a Linguistic Area)" , in *Working Papers International Symposium on South Asian Languages Contact, Convergence and Typology.* Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.

松本　克己 1988 「印欧語における能格性の問題」『東京大学言語学論集'88』東京大学文学部言語学研究室。

三上　章 1972 『現代語法序説』くろしお出版，東京。

Miśra, Nareś 1992 *Bhāṣāvijñān aur mānak hiṃdī.* Abhinav Prakāśan, Dillī.

Nāraṃg, Vaiśnā 1981 *Sāmāny bhāṣā vijñān.* Kṣitij Prakāśan, Naī Dillī.

Perlmutter, David M. (ed.) 1983 *Studies in relational grammar vol.1.* University of Chicago Press, Chicago.

——— (ed.) 1984 *Studies in relational grammar vol.2.* University of Chicago Press, Chicago.

Postal, Paul M. 1986 *Studies of passive clauses.* State University of New York Press. N. Y.

Sahāy, Caturbhuj 1970 *Hindī ke avyay vākyāṃś.* Keṃdrīy Hiṃdī Saṃsthān, Āgrā.

——— 1999 "Hindī kī sārvnāmik vyavsthā", *Gaveṣṇā 70/1997.* Keṃdrīy Hiṃdī Saṃsthān, Āgrā.

Seuren, A. M. 1969 *Operators and nucleus : a contribution to the theory of grammar*, Cambridge University Press, London.

Shapiro, Michael C. 1989 *A Primer of Modern Standard Hindi.* Motilal Banarsidass, Delhi.

柴谷　方良 1978 『日本語の分析』大修館，東京。

Siṃh, Kāśīnāth. 1975 *Hiṃdī meṃ saṃyukt kriyāeṁ.* Racnā Prakāśan, Ilāhābād.

Snell, Rupert 1991 *The Hindi Classical Tradition*, Heritage Publishers, New Delhi.

Spencer, Andrew 1991 *Morphological Theory.* Blackwell Publishers Ltd., Oxford, UK.

Śrīvāstava, Ravīndranāth 1976 "Bahubhāṣiktā, hiṃdī bhāṣā samāj aur hiṃdī śikṣaṇ", *Hiṃdī kā sāmājik saṃdarbh.* Keṃdrīy Hiṃdī Saṃsthān, Āgrā.

——— & Sahāy, Ramānāth (ed.) 1994 *Hindī bhāṣā kā samājśāstra.* Rādhākṛṣṇa, Naī Dillī.

鈴木　重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房，東京。

Tivārī, Bholānāth 1966 *Hindī bhāṣā.* Kitāb Mahal, Ilāhābād.

——— 1969 *Bhasha-vijñan.* Kitāb Mahal, Ilāhābād.

Vājpeyī, Kiśorīdās 1948 *Acchī hindī kā namūnā.*

——— 1957 *Rāṣṭrbhāṣā kā pratham vyākaraṇ.* Janvāṇī Prakāśān, Kalkattā.

——— 1968 *Acchī hindī.* Mīnākṣī Prakāśān, Meraṭh.

Varmā, Dhīrendr 1954 *Brajbhāṣā vyākaraṇ.* Rāmnārāyaṇ Lāl, Ilāhābād.

——— 1962 *Hiṃdībhāṣā kā itihās.* Hindustānī Ekeḍemī, Ilāhābād.

Varmā, Rāmcandr 1960 *Hindi prayog.* Lokbhārtī Prakāśan, Ilāhābād.

——— 1965 *Mānak hindī vyākaraṇ.* Caukhaṃbā Vidyabhavan, India.

博士論文

ヒンディー語の重層的統語構造

— 要旨 —

西岡　美樹

2000年12月

本論文では、従来のヒンディー語の伝統文法・規範文法では説明されることのなかった、語を操作する論理形式という層構造に焦点を当てて、ヒンディー語の統語構造および機能（文法関係）の重層性を解明していく。

第１章では、統語分析に当たり、ヒンディー語の品詞分類をし、ヒンディー語の構造的な特徴を捉えるため、基本的なヒンディー語の構造をメタ言語化している。特に動詞とコピュラ動詞の複合により現在時制を表わすヒンディー語は、コピュラ動詞以外にも別の動詞を複合させることがある。一見、線的にみえるこの動詞連続の層的な側面を概観するものとして、命題と時制・相・法が織り成す構造を、日本語の動詞連続との構造対比に照らし合わせて、核と演算子という構造概念で説明を加えている。参照のため、ヒンディー語と日本語の動詞のパラダイム表も挙げてある。

第２章では、第１章でメタ言語化した基本文型に従い、単文構造を、具体例を挙げながら観察している。ヒンディー語には、構文として普通の平叙文（名詞述語文，形容詞述語文，自動詞文，他動詞文，存在文）の他、与格構文，日本語では観察されない能格構文が存在する。能格構文は、ヒンディー語の場合、目的語を持つ他動詞文の他動詞が、完了分詞になる場合にのみ現われる構造である。与格構文は、行為者を与格にした構造であるが、これは、日本語のように与格専用の動詞を持つわけではなく、抽象名詞と一般的な自動詞により表わすものが多数である。

第３章では、名詞修飾構造を取り上げ、統語類型を列挙し、構造中に内在する文法関係を詳細に観察している。構造上の特徴として、ヒンディー語には修飾部をヘッド名詞の前に置く前置型と後に置く後置型がある。基本的にSOV語順なので、ほとんど修飾部が前置されるが、唯一修飾部が後置されるのは、定形節、すなわち関係詞，同格接続詞を用いる構造である。この構造と相関的なものが、この定形節を非定形節に変換した上で前置する構造である。しかしながら、この変換には、文法関係の制約がかかっている。

この２つの構造以外に、文法関係が二重になる構造として、動詞派生名詞をヘッドに持つ構造がある。文が句と化すこの構造は、動詞（V）に当たるのがヘッドであり、属格後置詞でつながれる名詞PredN（Gen）に主語（S）もしくは目的語（O）という文法関係が内在する。自動詞出自であれば主語、他動詞出自であれば目的語が内在する。前者は、斜格語節に使用され、後者は、文の目的語として使用される。また、他動詞出自の名詞の場合、主語（S）がPredN（Gen）に内在し、目的語であった対象は、後置詞を使用した斜格名詞句になる。

第４章では、複文構造と題し、単文が２つ以上から成る集合体を定形節型（Type Ⅰ），非定形節型（Type Ⅱ）に分け、例文を観察し分析を行った。前者は接続詞を使用したものであり、後者は従属側の単文を非定形節（斜格名詞句や副詞使用の斜格形分詞）に変換したものである。これらも互いに構造的な相関性があるものである。

第５章から第７章までは、複文の一種として、単文が別の単文に埋め込まれた述語複合を扱っている。まず、第５章では、名詞と動詞の述語複合を取り上げたが、名詞編入型として「数学の勉強をする」型と「数学を勉強する」型の二つの型が観察された。前者は、第３章の名詞修飾構造で観察した不完全名詞句が定形動詞の目的語として使用されるものであり、後者はその不完全名詞句が二つに分かれ、対象であるものを属格以外の格標示をし、抽象名詞に当たる動詞派生名詞を定形動詞側に編入するものである。それぞれ、半名詞編入型，名詞編入型として分類した上で分析を行ったが、ヒンディー語は半名詞編入型の表現をするものが多い。

また、名詞編入型以外に、「医者になる」,「馬鹿にする」のような「に＋なる／する」型の構文を述語複合型として扱っている。これは、命題である名詞述語文を第一層の「なる／する」の主語もしくは目的語に埋め込んだ二層構造を成すものになる。一次元的には述語が連続する型であるが、名詞述語文の埋め込みによる二層構造である。認知構文もこの型に入るが、これらは、埋め込み側の名詞述語文の主語（S）を第一層の目的語（O）にし、対格標示をした上で、述語名詞を失業者にしてしまうのが特徴である。

ヒンディー語では、名詞と動詞を複合する場合、構造が大きく異なり、文をあらかじめ属格による不完全名詞句にし、これを第一層で目的語にする構造と、名詞述語文を主語，目的語に埋め込む構造の二つが存在する。この異なる構造は、以下の形容詞，動詞との述語複合の基本的な論理構造となる。

第６章の形容詞と動詞を複合したものについては、「動詞＋形容詞」型と「形容詞＋動詞」型の二つに大きく分けて、その構造を分析している。前者については、動詞の形態が斜格になり後置詞を伴うものと、後置詞をなくしたφ格の斜格形になるものが存在する。後者の述語複合型は、先の名詞複合と同様の統語構造を構えるものであり、第一層の主語，目的語に埋め込まれる命題が、形容詞述語文に変わるのである。埋め込み側の形容詞述語文の主語（S）を第一層の目的語（O）にし、対格標示をした上で、述語形容詞が失業者になる。

第７章の動詞と動詞を複合したものも、先の構造に従い、複合動詞と動詞複合の２つの

型に分けた。複合動詞として扱ったものは、動詞の語幹と定形動詞の複合形式で、２つの動詞が揃ってはじめて意味を成すものである。つまり、これは、一次元的には動詞連続であっても、ほぼ一体としてＶの機能を果たすことになる。一方、動詞述語複合は、動詞述語文が第一層の主語，目的語に埋め込まれた二層構造になる。先行動詞の形態は、語幹，不定詞，未完了分詞，完了分詞がある。語幹と定形動詞の複合は先の複合動詞にも観察されるが、動詞述語複合の場合、後続動詞が、本来の意味ではなく漠然化したものになる。ヒンディー語の代表的な後続動詞には、‘ jānā ’「行く」が挙げられる。これは、漠然化されると「行為に至る」というニュアンスを生むことになる。このような動詞がヒンディー語にはいくつかあるが、それぞれが、元の動詞に関連したニュアンスを生むものになるのである。不定詞の場合は、形態が直格であれば名詞性が強いものとなり、目的語そのものとして機能する。しかし、不定詞の斜格形を取る場合は、第一層の主語，目的語への埋め込みになる。特に目的語に埋め込まれる場合は、第二層の命題になる動詞述語文の主語（S）は、第一層で目的語（O）になり、不定詞斜格形は失業者になる。不定詞が斜格形になるのは、命題が埋め込まれた結果、文要素として機能しなくなったことを示すためである。この構造を取る代表的な動詞‘ denā ’「与える」は、許可を表わすものとされるが、一見、論理的な「彼に水を飲むことを与える。」という一次元的な捉え方をすると、不定詞が直格でくるはずである。しかし、斜格になっているのは、埋め込み文の述語が失業者としての立場を取るからである。先行動詞の形態が未完了分詞，完了分詞になる場合も、形態が直格と斜格に分かれる。斜格形は未完了もしくは完了の状態であること保持した副詞的用法であり、文要素としては失業者である。同じ埋め込みにより、主語に性・数一致する直格形も同時に存在するが、両者の意味区別には、さしたる違いはないようである。これらの後続動詞の意味も漠然化したものが多い。代表的なものは‘ rahnā ’「(ずっと) いる／ある，続く」，‘ jānā ’「行く」である。

また、もう一つ接続分詞‘ -kar ’を先行動詞の語幹に付加したものがあるが、日本語の「行って来る」のようにどちらの動詞も本来の意味を保っているものを表わす。

第８章では、接辞を持つヒンディー語の使役と、同じく使役の接辞を持つ日本語の使役を、統語構造分析に基づき、論理展開の共通性を探る。ヒンディー語も日本語も、英語のような独立した動詞（‘ make, cause, get, have ’等）を用いるのではなく、接辞を用いるが、この接辞自体を動詞の機能を持つものと見立て、その目的語として、別の動詞述語文を埋め込んだものと考えると、ヒンディー語も日本語も「その状態にする／その状態を

作り出す」という具合に解釈できる。実際の行為者の意を介さない強制性が生じるメカニズムになる。本論文では「する」型使役と呼んでいる。もう一つ、日本語には容認もしくは強制を表わす「～に…させる」という使役接辞を使用した表現がある。この場合、ヒンディー語では、第7章の許可を表わす不定詞斜格形と動詞‘ denā ’「与える」を複合する表現になる。これと同じ複合形式を持つものに動詞‘ pānā ’「得る」があるが、日本語の「させてもらう」に当たり、埋め込みの命題が使役接辞を複合したものに訳される。ヒンディー語の不定詞には使役接辞が付いたものが使用されるわけではなく、これは日本語の使役接辞から生じる容認の意を利用した意訳である。ヒンディー語のこの構造は、「私は（私自身が）行くことを得た。」となり、日本語の自分以外がする行為を自分がもらう場合に使用する「してもらう」とは違う意味になることが、ここでは明らかになっている。

第9章では、統語構造の範囲内にある談話要素について、それらを使用した例を挙げ、さらにヒンディー語以外の南アジアの言語でも観察される与格後置詞の直接目的語への付加について論じた。他の後置詞にも取って代わり得るこの与格後置詞が、日本語のテーマ性を付与するマーカー「は」と酷似した機能を持つという仮説を立てるに至ることになる。

第10章では、本論文の分析法で明らかになった統語構造および文法関係の重層性をまとめた。また、第9章で論じた談話要素にまつわる層を試験的に統語構造図に含め提示している。

本論文の主眼は、言語運用を試みる際に必要となる語の配置による論理形式を統語構造図に示し、ヒンディー語における言語能力の規則を解明することにある。線的なストリングで捉えられがちな言葉も、実際は命題の複合から成る層構造を持つものであり、ヒンディー語の論理形式とわれわれの母語である日本語の論理形式の間にある共通点もしくは相違点を同時に明示することで、われわれが外国語としてヒンディー語を学ぶ上での手がかりにもなることを同時に期するものである。

शोध-निबंध

हिंदी के बहुस्तरीय वाक्यविन्यास और उन की संरचना

– सारांश –

मिकि निशिओका

दिसंबर, 2000.

हर मानव की अलग-अलग मातृभाषा है और इस मातृभाषा के व्याकरणिक नियमों की व्यवस्था के आधार पर मानव अपनी भाषा बोलता है, जैसे मैंने खाना खाया। जापानी में वाताशि-वा गोहन-ओ तबेता। तार्किक संरचना (Logical Structure) के आधार पर निरूपक भाषा (Metalanguage) से इस को बताया जाए, तो कर्ता-कर्म-क्रिया से यह वाक्य बना हुआ है। कारक की दृष्टि से देखें, तो साधक कारक (Ergative) निर्पेक्ष कारक (Absolutive) और क्रिया से बना हुआ है जबकि जापानी में कर्ता कारक, कर्म कारक और क्रिया से।

यह शब्द-क्रम अर्थात् व्याकरणिक संबंध और कारक चिह्नन (case-marking) के स्तर पर देखा गया है। ग्रीनबार्ग (१९६३) के अनुसार जापानी भाषा भी कर्ता-कर्म-क्रिया (SOV) समुदाय में एक है। ऊपर दिए गए हिंदी के उदाहरण को देखकर भी यह स्पष्ट बात है कि हिंदी भी उन में एक है। यद्यपि दोनों भाषाओं के भाषा-परिवारों का भेद है, तो भी हिंदी और जापानी एक समान शब्दक्रम के नियम के आधार पर चल रही हैं।

भाषाविज्ञान में यह सर्वविदित है कि एक भाषा में कई स्तरों के नियमों की व्यवस्था विद्यमान होती है। नियमों की इस व्यवस्था को भाषायी क्षमता (Language Competence) कहलाते हैं। शब्दक्रम भी उन नियमों में एक है। विदेशी भाषा सीखने पर मातृभाषा की व्यवस्था को दूसरी भाषा की व्यवस्था से समीकृत करके प्रयोग में लाया जा सकता है, चूँकि देखने में ऐसा प्रतीत होता है कि हिंदी और जापानी की व्यवस्था लगभग एक समान है। लेकिन इस बात पर ध्यान रखना चाहिए कि यह नियम सरल वाक्यों तक ही सीमित है। संयुक्त वाक्यों (Compound Sentences) या मिश्र वाक्यों (Complex Sentences) के स्तर पर संरचना भी जटिल हो जाती है। उस के साथ-साथ व्याकरणिक संबंध और कारक चिह्नन भी अपनी अपनी भाषा के नियमों के अनुसार बदल जाते हैं।

हिंदी जो उत्तर भारत में बोली जाती है, वह हमारे लिए विदेशी भाषा ही है। विदेशी भाषा के रूप में हिंदी सीखने पर यह समस्या हमारे सामने खड़ी हो जाती है कि किस स्तर पर कौन-सी संरचना आती है। हाँ, सरल वाक्यों के प्रतिरूप याद करना तो आसान ही है क्योंकि हर सरल वाक्य के भीतर नियमित रूप से एक ही तर्कवाक्य/वक्तव्य (Proposition) विद्यमान है जबकि वाक्यों का समूह अर्थात् संयुक्त तर्कवाक्यों के लिए कई तरह के नियम होते हैं।

इस शोध-निबंध में हिंदी भाषा की संरचना को जापानी संरचना से तुलना करके विश्लेषण किया गया है, विशेषकर सर्वभाषा व्याकरण के दृष्टिकोण को ध्यान में रखकर। हिंदी भाषा के वाक्यविन्यास की संरचना के विश्लेषण के साथ शब्द के प्रकार्यों को प्रकट करने का प्रयास भी किया है।

पहले अध्याय में हिंदी के शब्दों को संज्ञा, विशेषण, क्रिया, परसर्ग, संयोजक के वर्गों में बाँटकर संक्षिप्त रूप में हिंदी भाषा की चर्चा की गई है। उस के पश्चात् सरल वाक्य के बारे में बताया गया है। सरल वाक्यों को तीन प्रारूपों में विभक्त किया गया।

अधिकांश भाषाओं में संज्ञा विधेय वाक्य (Nominative Predicate sentence, PredN) , विशेषण विधेय वाक्य (Adjectival Predicate sentence, PredA) और क्रिया विधेय वाक्य (Verbal Predicate sentence, V) विद्यमान होते हैं। इन तीनों को निरूपक भाषा से तार्किक संरचनाओं के प्रतिरूप प्रस्तुत किया गया है।

दूसरे अध्याय में ऊपर दिए गए निरूपक भाषा के प्रतिरूपों के अनुसार हिंदी के सरल वाक्यों के उदाहरण दिए हैं। इस स्तर पर हिंदी में साधक कारक रचना (Eragative construction) मिलती है। फिर भी हिंदी में यह भूतकाल तक ही सीमित है। एक समानता भी प्रकट हो जाती है कि जापानी में सम्प्रदान रचना (Dative construction) है, वह हिंदी में बहुत मिलती हैं। परंतु शब्दों के स्तर पर उन दोनों का भेद भी मिल जाएगा।

अध्याय ३ में संज्ञा विशेषित संरचना को लेकर हिंदी और जापानी की तार्किक संरचनाओं का विश्लेषण किया है। इस पर हिंदी और जापानी में बड़ा अंतर मिलता है कि संबंधवाचक सर्वनाम सहित रचना जो हिंदी में मिलती है, वह जापानी में नहीं मिलती। इस के स्थान पर जापानी में दूसरी रचना है कि प्रधान संज्ञा के आगे परिमित विधेय उपवाक्य (finite clause) रख दिया जाता है।

उल्लेखनीय है कि सरल वाक्यों को दो से अधिक जोड़कर जो बनता है, उसे मिश्र वाक्य कहा जाता है। वाक्यविन्यास की दृष्टि से यह मिश्र वाक्य भी दो वर्गों में बाँटा जा सकता है। अध्याय ४ में इन मिश्र वाक्यों (Complex Sentences) को दो वर्गों में बाँटे हुए उदाहरण दिए गए हैं। वर्गों की इस प्रबंध में परिभाषा यह है कि वाक्य जिस में दो से अधिक परिमित विधेय या क्रिया शामिल है, वह टाइप १ (Type I) के वर्ग का है और जिस वाक्य में एक परिमित विधेय आता है और उस के साथ कम से कम एक अपरिमित विधेय या क्रिया शामिल है, वह टाइप २ (Type II) के वर्ग का है। जैसे ——

जब मैं यहाँ आऊँगा, तब वह भी आएगा। (Type I)

मेरे आने के समय वह भी आएगा। (Type II)

या

उस के आने के समय मैं भी आऊँगा। (Type II)

टाइप १ में अधीन उपवाक्य के रूप में दिए जाने वाला अंश टाइप २ में अपरिमित विधेय उपवाक्य या वाक्यांश में आता है और इस को मुख्य वाक्य के क्रियाविशेषणात्मक उपवाक्य (Adverbial Phrase) के स्थान में सन्निविष्ट किया गया है। इस को सन्निविष्ट वाक्य (embedded sentence) कहते हैं। इन दोनों संरचनाओं में क्रिया से संबंधित परिमित उपवाक्य और अपरिमित उपवाक्य का सहसंबंध है। इस तरह का वाक्य देखने में सरल वाक्य जैसा दिखाई देता है।

अध्याय ५, ६, ७ में संयुक्त विधेय का विश्लेषण और वर्णन किया गया है। अध्याय ५ में संज्ञा + विधेय, अध्याय ६ में विशेषण + विधेय, अध्याय ७ में किर्या +

विधेय। इन संयुक्त विधेयों में से प्रायः क्रिया + विधेय को संयुक्त क्रियाएँ माना जाता है। उस का कारण यह है कि देखने में (यानी बाह्य रचना के स्तर पर) यह भी विधेयों की शृंखला जैसी लगता है। वाक्यविन्यास की दृष्टि से देखें, तो यह भी उपर्युक्त टाइप २ की संरचना के आधार पर चलता है। इस पर आधारित तर्कवाक्य दूसरे वाक्य के कर्ता या कर्म के स्थान में सन्निविष्ट किया जाता है। कभी-कभी तर्कवाक्यों के सन्निवेशन (embedding) होने के कारण कारक चिह्नन का परिवर्तन भी होता है।

यहाँ तक कि हम कह चुके हैं, वह तार्किक संरचना है। उस के पश्चात् क्रिया विधेयों की शृंखला के बारे में बात करते हैं। हिंदी की अपेक्षाकृत जापानी में बहुत-सी संयुक्त क्रियाएँ मिलती हैं। इन संयुक्त क्रियाओं को भी कई वर्गों में बाँटा जा सकता है। जैसे, पहला वर्ग कि क्रिया जो बाह्य रचना में पीछे से आती है, उस के मूल अर्थ का लोप नहीं हुआ है, दूसरा कि जो क्रिया उस में पीछे से आती है, उस के मूल अर्थ का लोप हो रहा है। यह व्याकरणिकीकरण (grammaticalization) की प्रक्रिया के बीच में है। इस का प्रमाण इन दोनों भाषाओं में भी मिलता है।

अध्याय ८ में हिंदी के प्रेरणार्थक क्रिया सहित वाक्यों का विश्लेषण किया गया है। हिंदी की तरह जापानी प्रेरणार्थक क्रिया भी क्रिया के मूल के साथ प्रेरणार्थक प्रत्यय लगाकर बनाया जाता है। इन संरचनाओं के तुलनात्मक अध्ययन से दोनों भाषाओं की प्रेरणार्थकता की समानता स्पष्ट हो जाती है।

अध्याय ९ में प्रोक्ति व्याकरण (discourse grammar) के दृष्टिकोण को जोड़कर संरचना का विश्लेषण किया गया है। शब्द जो वाक्य बनाने के समय आवश्यक होते हैं, इन शब्दों के अतिरिक्त वाक्य में कभी-कभी इस तरह के शब्द भी आते हैं जो कथन के स्तर पर प्रयुक्त होते हैं, जैसे ही, भी, तो, तक इत्यादि। ये सब मुख्यतः वार्तालाप अर्थात् प्राकृतिक भाषा (Natural Language) में अधिक मिलते हैं।

इस के साथ इस अध्याय में सम्प्रदान कारक का कर्म के साथ प्रयोग का भी विश्लेषण किया गया है। प्रायः इस की यह मान्यता है कि सम्प्रदान कारक के इस तरह का प्रयोग निश्चयात्मकता (definiteness) की युक्ति है। हमारी भाषा में 'व' अक्षरशः '/ha/' आजकल कथ्यगत चिह्नक (thematic marker) माना जाता है जो पहले परंपरागत व्याकरण में कर्ता कारक चिह्नक ही माना जाता था। कारण यह है कि यह कर्ता के साथ ही नहीं, अपितु कर्म या विकारी कारक संज्ञा (Oblique Noun) के साथ भी आता है। हिंदी के कर्मवाच्य वाक्य में यह कारक चिह्नक कभी-कभी कर्ता के साथ आता है। हो सकता है कि इस कारक चिह्नक का प्रकार्य भी वाक्यविन्यास की दृष्टि से जापानी 'व' जैसा हो। इस को प्रमाणित करने का प्रयास हम ने इस अध्याय में किया है।

अध्याय १० में जो वाक्यविन्यास-संबंधी स्तरीय संरचना हम ने यहाँ तक किए अध्ययन से पाई है, उस का संक्षिप्त रूप प्रदान किया गया है।

इस प्रबंध में मुख्यतः तार्किक संरचना को केंद्र मानकर विश्लेषण किया गया है। वाक्य जो होते हैं, बहुत जटिल नियमों की व्यवस्था के आधार पर चलते हैं। उन नियमों को प्रकट करने से यह भी संभव है कि सर्वभाषा व्याकरण में कुछ योगदान हो और फिर दोनों भाषाओं को विदेशी भाषा के रूप में सीखने या सिखाने पर सहायता मिलें।